
カードキャプタープリキュア

大川勇輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードキャプタープリキュア

【Nコード】

N9596E

【作者名】

大川勇輝

【あらすじ】

この物語は『魔法』という力を持った少女が異世界で出会った少女達と共に繰り広げるものである。

設定資料1・プロローグ（前書き）

本作は第1シリーズ・第2シリーズに分けて描きます。なお、これは自分なりの『カードキャプターさくら』の続きと『プリキュア5』のクロスオーバー小説です。

ただし、原作と違い第2シリーズは『5』の続きの『GOGO』とは、違う話の流れになる事をご了承ください。

設定資料1・プロローグ

カードキャプタープリキュア 資料設定

>傾向< 桜『無敵』。友情物・シリアス物あり。

>主要登場人物<

木之本さくら（14歳）

：本作主人公。元々いた世界の御神木の力により、プリキュア達のいる世界に次元移動した。

本来は明るく素直な性格であるのだが、2年前に最後の『ク
ロウカード』の『無^{ナッシング}』を

封印した事により、実質上『無敵の魔術師』になった事と彼女しか持たぬ極レア魔力『星』の力の為にその力を

狙われるようになり、その連中との戦いの中で多くの人々を巻き込んだ事で心に傷を負っている為か、

『本当の笑顔』をすっかり失ってしまったている。『プリキュア』であるのぞみ達とは仲が良く、

中でものぞみとかれんと仲が一番いい。特にかれんとは、自宅に一緒に住んでいる事もあり、

本当の姉妹のように仲がいい。初めの内はあくまでも『魔術師』として、プリキュアのサポートに徹している。

（第23話から、プリキュアになり、のぞみ達と共に戦っている）

学業成績は元の世界で2年間、一生懸命勉強した事もあつてか、かれんには負けるが、かなりの上位に位置する。

又、運動神経も抜群であり、りんさえも圧倒するほどである。他にも拳法や体術にも優れている。

唯一の欠点であった幽霊関係も完全に克服している。

ただし、誰かのために又は何かをやり遂げるために無茶をし

てしまう性格は相変わらずである。

身長157cm 血液型A

夢原のぞみ(14歳)

：さくら同様主人公の一人。『大いなる希望の力』を持つ『キュアドリーム』に変身する。

学業成績・運動は苦手だが、性格は凄く明るく、人付き合いも大変良い。さくらの異世界での初めての『友達』。

幼じみのりんや初めて出会ったさくらとも仲が良く、プリキュアのリーダーを務めている。

よく成績の事でかれんやりに叱られるが、さくらにその度に助けられている。

無論さくらからもわずかながらお説教をくらう事もある。

さくらの魔法を見るたびにその凄さに対して、いつも感動している。

身長152cm

夏木りん(14歳)

：主人公の一人。『情熱の赤い炎』の『キュアルージュ』に変身する。

のぞみの幼なじみであり、大切な親友。スポーツ万能であるが、さくらには劣る。

のぞみを常にかばうさくらに対しては、甘いと思っても、彼女らしいとそれ程は気にしていない。

幽霊関係は苦手だが、さくらの魔法に対しては驚きながらも受け入れている。

身長159cm

春日野うらら(13歳)

：主人公の一人。『弾けるレモンの香り』の『キュアレモネード』

に変身する。

最年少ではあるが、のぞみやさくら達と大変仲が良い。幼い頃から芸能活動をしているアイドルである。

幼い頃母親を失っている事で、さくらとは共通の思いを持つものとして、よく相談に乗ってもらっている事が多い。

さくらの魔法を受け入れており、芸能活動・プリキュアの活動が重なった時に助けてもらっている。

当初は歌手としての仕事に疑問を持っていたが、さくらの助言・知世との出会いで考えを変えた。

身長145cm

秋元こまち（15歳）

：主人公の一人。『安らぎの緑の大地』の『キュアミント』に変身する。

同じ年のかれんとは大親友であり、好奇心旺盛のおっとりした性格をしている。小説家志望でもある。

真顔でとんでもないことを言ったり、おばけにも強く、意外と肝が据わっている。

さくらの魔法を最も受け入れており、その魔法に対する妄想の凄まじさに誰もが引いてしまう。

それでもさくらの考え・想いを最も早く理解できる優しい少女でもある。

身長163cm

水無月かれん（15歳）

：主人公の一人。『知性の青き泉』の『キュアアクア』に変身する。

大富豪の令嬢であり、両親が不在の為、じいやと二人暮らしであったが、異世界から来たさくらも住む事になった。

生徒会長であり、容姿端麗・頭脳明晰な少女である。又、こま

ちとは大親友である。

プリキユアではリーダーをのぞみに譲っているが、参謀的な役割をこなしている。

さくらの魔法を最初は驚きながらも、受け入れ、その上でさくらの『力』・『心の強さ』に心から敬服している。

同時にさくらを『妹』の様に可愛がっており、5人の中で一番さくらの事を心配している。

月・知世・歌帆にのぞみと共にさくらにとって最も大切な存在であると評価されている。

身長165cm

本編一プロローグ

『カードキャプター』こと木之本さくらが最後の『クロウカード』である『無』^{ナッシング}を封印してから2年の年月が過ぎた。

本来ならば、さくらは中学2年生として生活を過しているはずであった。

しかし彼女の持つ超希少な「『星』の魔力」を狙う輩が1年前から次々と現れ、その物達との戦いの中で多くの人々が

巻き込まれ・傷ついてしまった。その事にひどく心に傷を負ったさくらは一部の関係者を除く全ての人間から

自分の記憶を消し、己の身がある場所へ隔離する事を決めた。

「ごめんね、知世ちゃん。知世ちゃんまで私のせいでこんなことに巻き込んでしまって・・・」

「さくらちゃんは何も悪くありませんわ。それにこれは私自らが決めた『道』です。ですから、そんなお悲しい顔をしないでください」
知世は自分のせいだと謝るさくらをなぐさめていた。

さくらは小学生時代の恩師である観月歌帆の実家「月峰神社」にその身を隠すことにした。本来は、もっと別の場所にしようとしたさくらは考えていたのだが歌帆とエリオルが安全性を保障してくれたので、

そこにしたのであった。

さくらと知世が話しているとエリオル達がやって来た。

「結界の最終強化が終わりました。これで例え何者が来ても、私やさくらさん以上の魔力の持ち主でなければ破られることはありません」

「さくらちゃん。しばらくの間は窮屈な思いをさせるかもしれないけれど、私もそばにいるから頑張ろうね」

エリオルが説明をし、歌帆がさくらを励ましの言葉をかけた。

「エリオル君、ありがとう。 観月先生もすみません。私のためにさくらは2人に感謝の言葉を言いながらも、心では申し訳なさで一杯だった。

しかし歌帆は言った。「謝らないで、さくらちゃん。私にとってもさくらちゃんは『大切な友達』なのだから」

「姉ちゃんの言う通りやで、さくら」「そうよ、さくらちゃん」「だから、気にするな」「我々にお任せください」

ケルベロス・奈久留・ユエ・スピネルも同じ気持ちだった。そして最後にさくらにとってこの世で最も大切な存在である小狼がさくらを抱きながら

「さくら・・・俺にもっと力があれば、お前にこんな思いをさせなかつたかもしれない。でも必ずお前がまた元通りの生活を送れるようにして

見せるから、俺達を信じて待っていてくれ」と言った。さくらはその言葉に涙を流しながら「有難う、小狼君。それに皆。私は皆を信じて待ってるよ」

と言った。「おう、さくらを狙う奴らを皆退治したるさかいな!!」ケルベロスのその言葉に誰もが賛同していた。

それから8ヶ月が過ぎたが、事態は小狼や知世達の奮闘も空しく、中々片付きそうに無かった。それでもさくらは皆を信頼していた。そんなある夜、さくらは不思議な夢を見た。それはさくらがそれぞ

れ違った個性のある5人の歳のほとんど変わらない少女達と共に学校へ

行ったり、遊んだり、そして共に戦うと言う夢であった。そこまで見るとさくらは目が覚めた。「ほえ、今のは？ それにあの娘達は一体？」

さくらはすぐに歌帆にその事を話した。歌帆は「そう、不思議な夢ね。でも、その夢が本当になると良いわね」と優しく言った。

その後、2人はその夢が本当になった場合に備えて、あるものを用意した。そしてその作業が終わり、再び休もうとしたその時

「この気配は！！ 観月先生！！」 「ええ！！」 凄い力の気配がした2人は着替えるとすぐにその気配がする所へと向かった。

2人の予想通り、その気配は御神木からのものであった。御神木は物凄い輝きを放っていた。

「凄い魔力。さくらちゃん、気をつけて」「はい！！ 観月先生！！」

さくらが歌帆に答えた瞬間、御神木からの光がさくらを飲み込んでしまったのだ。

「ケロちゃん・・・ユエさん・・・知世ちゃん・・・小狼君・・・」大切な仲間・友達の名を呟いた後、さくらは光の中で気を失ってしまった。

そして次の瞬間、さくらは消えてしまった。その後には取り残された歌帆が「さくらちゃんああーん！！！」と言う悲痛の声が響いていた。

その日の放課後、のぞみ達5人は雨が降るなか、下校中であった。

「はあー。梅雨とはいえ、ほんとよく降るよね」のぞみは梅雨のうつうつしさに、そっぽやいていた。

「だったら、皆でうちでお茶会でもしない？」かれんはそんなのぞみのぼやきに自分家に来ないかと誘った。

もちらんのぞみは「もちろん行きまーす！」と大喜びであった。こ

まちも「こういう時はかれんの家でお茶会が一番ね」と賛同していた。

「のぞみが大人しくしていればね」とりんがぼやいていた。そんなりに「むうー！私は大人しくしているもん！！」とのぞみはふくれていた。

「まあまあ、御二人とも。早くかれんさん家に行きましょう」とうららが仲介しながら言った。

その後「よーし！！ かれんさん家でお茶会に決定ー！！」とのぞみが叫んだでいた。その時だった。

眩い光がのぞみ達の前に現れた。「な、何！？」「これは一体！？」突然の事に驚くのぞみ達。しばらくすると光は消えた。

その代わり、その光が放たれていた場所に一人の少女がいた。それは御神木に吸い込まれたさくらであった。

「誰かが倒れている！！」「助けなくちゃ！！」のぞみ達はさくらの下に駆け寄った。

りん・うらら・のぞみがさくらの近くにあつた本とカード達を拾い、かれん・こまちはさくらの様子を見た。

「大丈夫でしょうか？」「うららが心配そうに聞くと、「特に怪我をしている様子は無いわ」とこまちが答えた。そしてかれんが

「でも、気を失っているわ。とりあえず家に連れて行きましょう。今、じいやを呼ぶから！」とじいやに連絡し始めた。

だがこの時、のぞみ達はまだ気づいてなかった。目の前にいる少女が自分達と共に戦うことになると言っことを。

設定資料1・プロローグ(後書き)

次回から本格的に物語が始まります。

第1話・さくらの新たなる戦い（前書き）

元の世界の御神木の力により、異世界に来たさくら。そのさくらを救ったその世界の住人であるのぞみ達。彼女達の出会いは新たなる物語の幕開けであった。

第1話・さくらの新たなる戦い

第1話：さくらの異世界での新たなる戦い

倒れていたさくらはのぞみ達とかれんに呼ばれたじいやによって、その後すぐにかれんの家へと運ばれ、すぐに寝かされた。

ちなみにさくらの服は濡れていた事もあり、かれんのパジャマを借りていた。そしてさくらが運び込まれてから1時間が過ぎた。

「ごめんね、じいや。急に呼び出してしまって」かれんがじいやに突然呼び出した事を詫びるが、じいやは

「いいえ、私は全く構いませんよ。ここに皆さんの紅茶を置いときますので、何かあったらお呼びになつてください。」

では、みなさんもごゆっくり」と言つて立ち去つて行つた。のぞみ達はじいやの気遣いに「「「「はい」「」」」と元気に答えていた。

じいやが去つた後、のぞみ達はさくらの周りに集まりながら、さくらのことについて話し合つていた。

「それにしてもこの娘、どうしてあんなところに倒れていたのかな？」のぞみが不思議がつて言つた。

りんも「確かにそうよね。それにこの娘、この辺では見かけない娘よね」と言つた。

こまちも「そうね。手がかりはこの娘の近くに落ちていたこの本とたくさんのカードと彼女の持っていた鍵みたいなものよね」と首を捻りながら言つた。

うららはそのこまちの言葉に「それら全部に星や太陽それに月のシンボルが着いていましたよね」と気づいた事を言つた。

かれんはそんな中、さくらが現れる前に出現した光を思い出していた。（あの光が消えた後、この娘が現れたわ。だとしたらまさかこ

の娘は)

「う、うーん。ほえ？ここは？」のぞみ達がそうしている内によくさくらが目覚めて起き上がり、周りをきよるきよると見ていた。「あ、目が覚めたのね」のぞみがそう言うと、さくらは「あのすみません、ここは一体？」と戸惑いながら聞いた。

「ここは私の家よ。道に倒れていたあなたをここに運んだの」とかれんがさくらに説明した。

「あ、ありがとうございます」さくらは助けてくれた礼をかれんにした。

その後すぐのぞみがさくらに「ねえねえ！あなたもお茶会に参加しない？」とお茶会に誘おうとした。

「え？でも・・・」と戸惑うさくら。そんなさくらを見て、りんは「ちよつと、のぞみ！！」とのぞみを注意した。

しかしのぞみは別に気にせず「だって、その方が話しやすいじゃん！」と誘ったわけを言った。するとかれんも

「そうね。その方がこの子も話しやすいだろうし、悪くないわね」とのぞみの考えに賛成していた。こまち・うららも頷いていた。

それを見て、りんも仕方がないと納得した様子であった。その後のぞみは「よーし！！皆でお茶会に決定ー！！」と叫んだ。

「ほえー！？」さくらはそんなのぞみ達のペースに困惑状態であった。

その頃、プリキュアの敵であるナイトメアの本社では、カワリーノがブンビー・アラクネア・ギリンマ・ガマオにプリキュアに対する作戦を

命令していた。「では、皆さん。よろしくお願いしますよ」カワリーノがそう言うと、「」「ははっ！！」「」「おう！！」とブンビー達が言い、

作戦を行うために瞬時にその場を去った。だが彼らはせっかくの作戦がたった1人の少女に潰される事になるのを知る由もなかった。

一方、かれんの家では、さくらとのぞみ達が雨がおさまった庭でお茶会をしていた。ちなみにさくらはかれんの私服を借りていた。

「それじゃー、自己紹介といきましょうかー!!!」のぞみがそう言うのと、まず自分から始めた。

「私は夢原のぞみ!!! サンクルミエール学園の中学2年生ですー!!!」元氣よく自己紹介をした。

次にりんが「私は夏木りん。のぞみと同じクラスの中学2年よ」と自己紹介した。

そしてうららが「私は春日野うらら、のぞみさん達の後輩で1年生です。後、アイドルをしまーす!!!」

と、のぞみに負けない元氣な紹介をした。

さらにこまちが「私は秋元こまち、中学3年生よ。よろしくね」にこつとしながら自己紹介をした。

そして最後にかれんが自己紹介をした。「私は水無月かれん、こまちと同じ中学3年よ。よろしくね」

のぞみ達の自己紹介が終わると、さくらは名前ぐらいは言わなくてはいけないだろうと思ひ、わずかながら自己紹介をした。

「えと、私は、木之本さくら。14歳です」さくらがそう言い終えると、のぞみ達の質問が始まった。

「さくらちゃんって言うんだ! 可愛いね!!!」「ねえ、貴女はこの学校に通っているの?」「ここから遠いのですか?」「はうう。」

のぞみ・りん・うららの質問攻撃にさくらはどう答えるべきか困っていた。その様子を察したこまち・かれんがさくらに助け舟を出した。

「ちよつと皆。そんなにいっぺんに質問しても、彼女は答えられないわよ」「そうよ。少しは落ち着いて」「」「はい」「」

かれん・こまちの注意にのぞみ・りん・うららは反省し、静かになった。さくらは心の中でかれん達に感謝していた。

のぞみ達が静かになったのを確認した後、かれんはさくらの方をむき「さてと、木之本さくらさん」と声をかけた。

「あ、はい。」とさくらは答えた。するとかれんはさくらに質問した。「いきなりで悪いけれど、あなたに質問があるの。」

何故あなたはあそこに倒れていたのか、そしてあなたはどこから来たのかについてね」

かれんのその質問にさくらはどう答えるべきか、深刻に迷っていた。もし真実を話せば、この人達までも巻き込んでしまうかもしれない、さくらはそう考えずにはいらなかった。

でもこの人達がもしあの時、自分が夢で見た娘達ならという考えもあって、さくらは話す事を決意した。

「分かりました、お話しします。でも、それには1つだけ条件があります」「条件?」さくらの言葉にかれんは思わず聞き返した。

「今から私が話す事はここにいる人以外にはだれもしゃべってはいけないと言う事です」さくらは真剣な顔で言った。

のぞみ達は少し戸惑っていたが、さくらの今までとは違う真剣な顔つきに何かを感じ、全員がその条件に頷いた。

「ありがとうございます。まず、驚かないで欲しいのですが私はこの世界の人間ではありません」「え?」「それはどういう意味?」さくらの言ったことにのぞみ・りんが思わず聞き返した。しかしかれん・こまちは理解ができ、「つまりあなたは別世界の人間と言うことね」

とかれんがさくらに言った。さくらがそれに頷くと、今度はこまちが「じゃあ、どうしてこの世界に来たの?」と質問をした。

それに対し、さくらは「私には異世界を渡る『力』があるからです」と答えた。

その言葉にのぞみが「すごい!!! その力って、一体何?」と聞いた。

「それは・・・!!!」言おうとしたさくらは突然何かを感じ、思わず立ち上がった。

さくらのその行動に驚いたかれんが「どうしたの?」と聞くと、「今、何か変な気配が・・・」とさくらが言った。

そのさくらの言葉にのぞみ達が首をかしげていると、じいやが手紙を持ってやって来た。ついさっき渡すように言われたという。

手紙の中身をかれんがまず見て、その内容に驚愕すると、のぞみ達にも見せてそしてすぐに行動を開始した。

「あの、どうかしたのですか?」と聞くさくらに「ちょっと、用ができたから出てくるわ。じいや、さくらさんをお願い」かれんがそう言い、

のぞみ達も「さくらちゃん! また後でね!」と言って去って行った。

しかしそののぞみ達の行動に不吉な予感を覚えたさくらは(じいやさん、ごめんなさい)と心の中で謝罪しながらも『眠』^{スリープ}を

使用し、じいやを眠らせた。そしてじいやを安全な所へ移動させた後、気配を基にのぞみ達の後を追った。

その頃のぞみ達はプリキュアに変身していたが、大ピンチに陥っていた。ココとナッツを人質にとられ、ドリームコレットを要求されたのだ。

「渡しちゃだめココ!」「そうナッツ!」とココ・ナッツが叫ぶが、「黙れ!!」とギリンマに黙らされた。

ドリームは「ココ達の命には代えられない」とコレットを渡すことにした。他の皆も同意見だった。そして同時交換と言うことで取引が行われたその時、ドリーム達はブンビー達の罠にかかり、アラクネアの糸によって全員捕らえられてしまったのだ。

そして人質として必要がなくなったココ・ナッツが今消されようとしていた。

「卑怯よ!」とののしるドリーム達を鼻で笑いながら、ブンビーがココ達を始末しようとした。

ドリーム・ルージュ・レモネード・ミント・アクアは必死に脱出し

ようとするが、どうにもならず、悔し涙を流していた。

その様子を近くで隠れながら見ていたさくらは遂に正体を明かす覚悟でドリーム達を助ける事を決意した。

そしてブンビーが攻撃を放った瞬間、『奇跡』が起きた。

さくらは咄嗟にココ・ナッツを抱えて、ブンビーの攻撃をかわしたのであった。

誰もがその光景に驚いていた。「え、さくらちゃん？」ドリームが呟いた。ブンビーも「誰だね、お嬢さんは？」とさくらに質問した。さくらはココ・ナッツを下ろし、彼らの頭に手を置く事でこれまでにあったこと全てを知り、そして彼らの頭を撫でながら

「安心して、私が何とかするから。絶対に大丈夫だよ」と笑顔で言った。そのさくらの笑顔と言葉にココ達は呆然と聞き入っていた。

一方ブンビー達は笑っていた。その後すぐさくらは立ち上がり、ブンビー達を睨みつけていた。

その顔を見ながら、「君に何ができるのかね、お嬢さん？」とブンビーがからかいながら聞いた。それに対しさくらは

「あなた方ナイトメアをこの場から追い払い、そして彼女達プリキユアを助ける事ができますよ、ブンビーさん」と答えた。

そのさくらの言葉に誰もが驚愕していた。何故自分たちの事を知っているのだと。

その後すぐ、さくらが「今からお見せします。私の『力』を！」と叫ぶと、その場にいる誰もが異変を感じ始めた。

「な、何だ！？ この力は！？」「一体、何！？」その周囲の言葉をよそにさくらは自らの『魔力』を開放した。そして

『星の力を秘めし鍵よ、真の姿を我の前に示せ！ 契約の下、さくらが命じる！ レリーズ！！』

呪文の言葉と同時にさくらの鍵が杖へと変化し、そしてさくらの服が変わった。

突然の事に驚く一同。ブンビーが「何者だ！？」と聞くと、さくらは「私の名はさくら！ 『カードキャプターさくら』！」「と答え

た。
さくらの新たなる戦いが今始まった。

第1話・さくらの新たなる戦い（後書き）

次回、前半はさくらのバトルメインで後半はさくらとのもみ達の交流となります。

第2話・さくらの秘密とプリキュア達の決意（前書き）

プリキュア達の危機に遂に「力」を使う事を決意したさくら。
今、さくらの新しい戦いが始まる。

第2話：さくらの秘密とプリキュア達の決意

第2話：さくらの秘密とプリキュア達の決意

「『カードキャプターさくら』!?」「『ブンビー達は戸惑いながら、その名を呟いた。』」

プリキュア達もさくらの突然の変身に驚いていた。そんな彼女達をよそに、さくらはカードを使用し始めた。

「盾よ！ 彼の者達を守れ！！」^{シールド}「盾」!!! さくらの詠唱の後すぐに、ココ達の周りに防御結界が張られた。

戸惑うココ達に「その中にいる限り、絶対大丈夫だから」とさくらが優しく言くと、ココ達も一応の信頼をした。

ココ達は目の前の少女から邪悪な物を感じず、何か暖かい物を感じたからだった。

さくらはその後一歩ずつブンビー達に近づいた。そのさくらの動きに恐れを感じたギリムアがアラクネアが攻撃を仕掛けたが、

さくらは瞬時にそれらをかまし、それぞれをたった1撃でノックアウトした。その光景にブンビーは真つ青になっていた。

その後今度はガマオが舌で攻撃をしてきたが、それもさくらは難なく攻撃を受け止め、倒してしまったのであった。

そして「我が翼となり、我を空に羽ばたかせ！」^{フライ}「翔」!!! さくらは2枚目のカードを使用した。

するとそれまでさくらの後ろにあったマントの代わりに美しい大きな白い翼が現れた。

その光景にプリキュア達は危機的状況にもかかわらず、思わず「綺麗」と言った。

さくらは飛翔し、プリキュア達が捕われている場所に近づくと「『剣』!!!」と3枚目のさくらカードを使用した。

すると今までさくらが持っていた杖が剣に変わった。誰もがこの

事に驚く中で、すぐにさくらは目にも止まらぬ速さでプリキュア達を拘束していた糸のみを切った。

突然自由になった事でプリキュア達はバランスを取れず「うわあぁー！！！」と言いながら落下しかけたが、

「風よ！ 彼の者達を救え！！」ウインディー「風！！！」とさくらが4枚目のさくらカードを使用した事で地面に直接激突を免れた。

ドリーム達は助けてくれたウインディー「風」に驚きながらも、助けてくれた事に礼を言った。

その後さくらはブンビーの一瞬の隙をついて、『ドリームコレット』を取り戻した。そしてさくらはそれをドリームに手渡した。

「はい、これ」優しくそう言いながら渡してくれたさくらに、ドリームは暖かい物を感じていた。

その後ろで叩きのめされたいたギリンマ達とブンビーがさくらを攻撃しようとしていた。さくらは不安になっている

ドリーム達に「大丈夫。私に任せて」とニッコリ顔で言うと、今も使用中の『翔』・『剣』の他に2枚のカードを使用した。

「フライト闘！！」パワー「力！！」2枚のカードを更に使用状態にしたさくらの体は赤く輝いていた。

そしてその後全員で襲い掛かってきたブンビー達を30秒足らずで撃破してしまったのであった。

さくらにこてんぱんにやられたブンビー達は逃げようとする瞬間「ドリームコレットを奪いたければ、

この『カードキャプターさくら』を倒してからにしない！」と言われながらも、「覚えてるよー！！」と負け台詞を言う他は無かった。

全てが終結した後、さくらは『盾』を解除した。そして変身を解くと、同じく変身を解いていたのぞみ達と正面から向き合っていた。

「お分かりになったと思いますが、私は『魔術師』と呼ばれる『魔法使い』なのです」さくらは悲しそうに言った。

そんなさくらの悲しそうな顔に何かを感じたかれんは「でもあなたは『魔術師』の前に一人の人間よ」と微笑みながら言った。

のぞみ・りん・うらら・こまちも感謝・感激の言葉を言った。

「さくらちゃん、凄かったよ!!」 「大したもんだよ!!」 「助けてくれてありがとうございます!!」 「凄かったわ」

さくらはそんなのぞみ達の言葉に戸惑いながら「でも、私がいても迷惑なだけ・・・」と言いかけたが、

「いいから、いいから!!」 という訳でさくらちゃんの仲間入りに決定ー!!」とののぞみの言葉に遮られてしまったのであった。

「ほええー!?!」 さくらはのぞみの強引さにパニツク寸前であった。

その後さくら達はかれんの家に戻った。初め、じいやが寝ている事にのぞみ達は驚いていたが、それはさくらがじいや

を巻き込みたくないという善意でやった事を知ると納得がいった様子であった。

それからさくらはのぞみ達に自分が何故『魔法』という力を得たのかについての過去を話し始めた。

それを聞き終えた時、のぞみ達は、驚くことばかりだったが、受け入れていた。

「つまり、あなたは10歳の時に『クロウリード』の残した『クローカード』が納められた本に出会った」

「そして、その本を開けた事からあなたの魔術師としての日々が始まったのね」

かれん・こまちがさくらに言った。さくらはそれに頷いた。

その後、さくらから聞かされたさくらの持つ幻の『星』の力に関する出来事を聞かされた時、のぞみ・うららは大泣きをしており、かれん・こまち・りんも危うく泣きかけていた。彼女達はさくらの苦しい戦いにとても同情していたのだ。

「何故、貴女と私達が会えたのかは分からないけれど、出会ったからには貴女に協力するわ。 そうよね、皆!!」

かれんの言葉に、のぞみ達は強く頷いていた。そして「よし！！」
さくらちゃんのために協力する事に決定ー！！」

とのぞみが決定した。
ここにさくらとのぞみ達との新たな『友情』が生まれたのであつた。

第2話・さくらの秘密とプリキュア達の決意（後書き）

今回はさくらがサンクルミエール学園に転校するまでのお話です。
そしてさくらによるのぞみ達に対する『さくらカード』の説明があります。

第3話・おくらと始まる新たなる生活（前書き）

おくらにやる『おくらカード』の説明と転校までの話が始まる。

第3話：さくらと始まる新たな生活

第3話：さくらと始まる新たな生活

さくらとのぞみ達が共に協力を約束した翌日、さくら達は今後のさくらの生活に関する話し合いと『さくらカード』に関する

説明を聞くためにナッツハウスに集合した。

人間体になっていたココとナッツにさくらは普通に「今日は。ココさんとナッツさんですね」と普通に挨拶した事に

挨拶されたココ達ものぞみ達も「……ええー!? 何で分かった(んだ)(の)!?」「……」

と驚愕状態であった。そんなのぞみ達にさくらは冷静に「2人の気配とかですぐに分かりましたよ」と冷静に言った。

その事で納得がいったのぞみ達であったが、同時に改めてさくらの『力』の凄さに驚愕していた。

その後、話し合いが行われた結果、さくらはココが小々田コージとして教師を勤めているのぞみ達の学校

サンクルミエール学園への転校生徒として行かせる事が決定した。学費に関しては、ココ達が責任をとる事にした。

そして次にさくらの下宿先が問題となったが、一番に誘おうとしたのぞみを差し置いて、かれんがそれを受け入れた。

かれんの家ならば、さくらの秘密をそれほど詮索されなくて済み、しかもかれんの両親がほとんど海外生活でいない事が

決定条件であった。無論、海外にいる両親とじいやの許可も必要不可欠のため、万が一の場合はナッツハウスにと決まった。

りん・うらら・こまちはこの事に不満は無かったが、のぞみだけは「いいなー、いいなー」と不満そうであった。

さくらの今後が一応決まった後、さくらによる『さくらカード』の説明が始まった。

さくらは53枚全ての『さくらカード』をテーブルの上に広げると「では、まず説明しますと『さくらカード』はここにある53枚全てで、これらのカードは『クロウリード』さんの作った『クロウカード』を基に私の魔力で新しく作ったカードさん達です。皆それぞれ意思を持っており、

主である私以外の命令は聞きません」説明しだした。

ここでカードの並べ方疑問を持ったのぞみが一番最初に質問した。

「はい！質問があります！」

「何かな？のぞみちゃん」「どうしてその1枚だけ他の52枚のカードと分けてあるの？」

のぞみの質問には誰もが同じ疑問を持った。その質問にもさくらは丁寧に答えた。

「それはね、このカードが残りの52枚全部と同等の力を持っているからなんだよ」

そのさくらの答えにのぞみ達が驚愕した。この1枚のカードが残りの全てのカード全部をあわせたのと同等の力を持っているかと。さくらはその理由も説明した。

「初めにクロウさんは52枚のクロウカードを作りました。でも、それだと『プラス』の力が強すぎて、

全ての原理のバランスを崩してしまいかねなかった。だから中国で言う『陰』と『陽』の関係のように『プラス』

の力に匹敵する『マイナス』の力を生む必要があったのです。ですが余りにも強すぎた為、私がカードさん達を

さくらカードに変えるまでは、封印されていました。さくらカードに代わる時、私が自分で生み出した

『ハート』のカードと合わせる事でそれまでの『無^{ナッシング}』から『希望^{ホープ}』に生まれ変わったのです」

そのさくらの説明に誰もが驚愕し、同時に納得が言った。その後、今度は52枚の方でかれんが質問した。

「一番上にある2枚とその更に下にある4枚のカードは52枚の中

でかなりの力を持っているの？」

「はい、一番上の2枚のカードはそれぞれ『太陽』の力と『月』の力の属性の第1カードで『光』さん、

『闇』さんと言います。その下の4枚のカードは中国の五行説に沿った力を持ち、自然の四大原素に

当たります。風の力を持つ『風』・地の力を持つ『地』・水の力を
持ち、

攻撃力の高い『水』そしてその『水』と同等の力を持つ『火』です。
さらにここからは外れていますが、『地』の力を押さえ込む事ができる『樹』があります」

そのさくらの説明にのぞみ・りん・うらはは何とか分かったような分かっていないような感じであったが

普段から本を読んだりしていたかれんやこまち・ココ・ナッツは完全に理解ができていた。

その後「ちよつとだけ、皆さんを驚かせてあげますね」とややいたずら顔をしながら、さくらは言った。

誰もがその言葉に首を傾げていたが、のぞみは「何？ 何か魔法を見せてくれるの!？」と浮き浮き状態であった。

そんなのぞみに対してにつこりすると、さくらは1枚のカードを手に持ち、鍵を発動させた。そして

「我が姿を写し取れ! 『鏡』! !」と詠唱した。するとさくらの身長並みの鏡がさくらの前に現れ、その鏡の中に

いた少女がさくらの姿に変わり、鏡の中から出てきたのだ。突然この光景にのぞみ達はただ驚いていた。

「初めまして。私はミラーと申します」「しゃ、しゃべっている! ?」「ていうか、どうなってんの! ?」「分身ですか! ?」

ミラーが普通に挨拶した事にのぞみ達はパニックしていた。その光景にさくらは笑いながら説明した。

「この子は『鏡』さんと言って、鏡に映った人の姿や声をコピーでき、魔法を跳ね返すこともできるんです」

その説明を聞き、更に驚くのぞみ達であったが、すぐに慣れたのか数分後にはミラーと仲良く話していた。

その夜、かれんはじいやと両親にさくらを下宿させても良い許可をもらった。じいやはさくらを歓迎しており、

両親もさくらとは電話のみの会話であったが、さくらに好感度を持つたのか、さくらに「かれんと

仲良くしてあげてね」とだけお願い事をした。無論さくらに断る理由などは無かった。

そしてその数日後、さくらのサンクルミール学園への転校手続きがすみ、しかもそのぞみ達と同じクラスに

なる事が決まった。それから3日後、のぞみ達は翌日さくらの転校初日の前祝として、かれんの屋敷に

来ていた。先に出てきたかれんとじいやはさくらはどうしたのかとの質問に苦笑いをしていた。

その理由はすぐに明らかになった。「みんなー！！ いらっしやーい！！」と言いながら来るさくらの格好は

なんとメイド服だったのだ。無論その後で、かれんは着替えさせたのは言うまでも無い。

何故さくらがそんな格好をしていたのかと言うと、ただ泊めて貰うだけでは悪いからと、手伝う事を

さくらが言い始めたのだ。その後じいやとかれんがどんなにいつて言っても、譲らず最後はかれん達が

折れる形で決まったのだった。実際、さくらの家事の腕は中々のものであり、評判が良かった。

ただかれんは「さくらがあんなに頑固だとは思わなかったわ」と苦笑して呆れていたそうだ。

そして前祝が終わり、眠る前の夜にさくらはかれんの部屋を訪れた。さくらが不安がっている事を理解したかれんは「大丈夫よ。貴女のクラスにはのぞみ・りんがいるし、

学校にいれは、こまちやうららにも合えるわ。だから何も心配しないで」と優しく言った。

それに安堵したさくらはほっとした様子であった。

翌日さくらはココの先導の下、のぞみ達のクラスの前にいた。呼ばれるまで待っている間、さくらは

（この先、どんなことがあってもものぞみちゃんやかれんさん達が一緒なら絶対に大丈夫。）と想っていた。

そして「転校生、入って来て下さい」と呼ばれると、「はい!！」と元気よく答え、中に入った。

そして教壇の近くに立つと、元気よく挨拶した。

「転校してきた木之本さくらです!! よろしくお願ひします!!」さくらの新しい学校生活の始まりであった。

第3話・さくらと始まる新たな生活（後書き）

今回は原作でのぞみがテスト勉強に苦戦していたのをさくらが助けます

第4話・さくらとのぞみとコロコの熱気球（前書き）

さくらの転校後の初テスト勉強が行われる。

第4話：さくらとのぞみとココの熱気球

第4話：さくらとのぞみとココの熱気球

さくらが転校して来てから数日経ったある日の事、いつもと少し違う事が起ころうとしていた。

「ううーん！ りんちゃん、放してー！！」「無駄な抵抗はやめなさい！！」「もう！ りんちゃんの意地悪ー！！」

「はいはい！ 意地悪で結構！！」「さくらちゃん！ 助けてー！！」「えーと。とりあえず、カフェに

着きましたし。これ以上騒ぐのは他の皆さんの迷惑になるでしょうから、りんさん、のぞみちゃんを

放してあげてください」いやがるのぞみを無理やり引きずりながら、カフェへ連れてきたりんを

のぞみから助けを求められたさくらが一応りんを落ち着かせようと何とか微力なフォローをしていた。

それでもさくらに言われたおかげでか、りんも「まあ、もうのぞみが逃げる事は無いか」と少しは落ち着いた

様子であった。解放されたのぞみはさくらに礼を言ったのは言うまでもない。

一方それまでテーブルで様子を見ていたこまち・かれん・うららはさくら達に質問し始めた。

「どうしたんですか？ 2人とも「うららがそう聞くと」「もう、どうしたもこうしたもないよ！」「とりんが

怒りを顕わにし、「のぞみ！ 数学の小テストを皆に見せてー！！」とのぞみに命令した。

のぞみは「はい」と渋々テストをかれん達に見せた。その点数はなんとたったの18点。

これにはさすがのかれんやこまちも「あはっ。18点」「まあ。可愛い数字」と苦笑いしながら言った。

うららが「難しいテストだったんですね?」と聞き、さくらは「えと、それが・・・」と口籠っている

「とーんでもない! 平均点80点のテストだよ!」とりんが言い放った。その後りんは、

「ねえ、何とか言っちゃってください」とかれん・こまちに頼んでいた。それに対し、のぞみは

「別に勉強ができなくなっちゃっていいもん!」と投げやりに言っていた。それを聞いたりんは

「のぞみ!! 開き直るんじゃないの!!」と烈火のごとく怒り、のぞみの頭をぐりぐりし始めた。

「だって、だってー!!」と言うのぞみに「あんたねー!!」と更に怒りかけたりん。

その時、さくらが「ちょっと待ってください、りんさん。私に少しのぞみちゃんと話させてください」

と切り出したのであった。誰もが驚いていたが、りんはそれを許した。「有難うございます」

とさくらは言う、のぞみに言った。「のぞみちゃん。出来が悪かったからって、すぐに開き直ったり、

諦めたりするのはよくないよ。私も数学は苦手だけれど、やる以上はがんばらなきゃと思うから」

そのさくらの話にりん・うらら・こまち・かれんは大変感心していた。特にかれんは「さすがね、さくら」

と言ったほどだった。さくらはそれに照れながら「かくいう私もちょっと平均以下だったけれどね」

と付け加えるように言った。それに対し、のぞみは「それでも78点で私なんかより全然いいじゃない」

と膨れながら言った。そう平均以下と言ってもたった2点下なだけで、のぞみとはえらい違いだった。

そう文句を言うのぞみに対し、「それはさくらちゃんがちゃんと勉強をした成果じゃないのかい」

とおタカさんが注文したものを持ってきながら言った。更に「勉強ばかりじゃ駄目だけれど、努力もしなきゃ駄目だよ。」

この学校のモットーは楽しく学び、楽しく遊べ、だよ」と言った。その言葉にのぞみは「ええ〜？ 勉強はすきじゃないよ〜」と不満を言っていた。それに対しおタカは

「今から勉強しておけば、絶対将来に役立つよ」と笑いながら言うのと去っていった。

「本当に将来に役に立つのかな？」と言うのぞみに対し、「役に立つよ。絶対」さくらが強く言った。

その後、うららが「のぞみさん。もうすぐ中間テストですけど、大丈夫なんですか？」とのぞみに聞くと

「なんとかなるなる！大丈夫！」とのぞみがお気軽に答えた。これに危機感を持ったかれん・こまちが

全員で今日から試験に向けて勉強しようと言いだした。それを聞いたのぞみは危機感を感じ

「それじゃー、皆。頑張つて」と言つて逃げようとしたが、「のぞみ。逃げるんじゃないよ」

りんにあっけなくつかまってしまったのであった。そんなのぞみにさくらは

「のぞみちゃん、試験が終わるまで一緒に勉強して頑張ろう。終わったら皆でどこかに遊びに行こう、ね」

と優しく言った。これにはさすがのぞみも「うん・・・分かったよ」と言つて他は無かった。

のぞみをここまで優しくながら説得したさくらにかれん達はさすがだと思わずには、いられなかった。

そして放課後、さつそく共同による試験勉強が始まった。漢字に苦戦しているうららをこまちが教え、

りん・さくらも互いに苦手な所をチェックしながら、勉強していた。かれんは本を読んでいたが、いつでものぞみの勉強を見れる準備は

していた。

最もりんが「勉強しなくていいのですか？」と聞くと「ええ」とさりりと答え、更にこまちが

「かれんは授業中に習った事を全部授業中に覚えてしまうの。それでずっと学年トップなのよ」

と説明されても「要は集中力の問題よ」とさりりと答えてしまい、りんはそのヒントを教えて

納得させてしまう所に凄いとさくらは思っていた。

そのさくらもりんやこまち・かれん・うららに勉強の仕方の良さを褒められていた。これはさくらが

身を隠していた間も恩師歌帆の下、勉強を教わり、必死に学んでいた成果であった。

一方、のぞみはと言うと、ノートは完全に白紙状態。かれんが「どこが分からないの？」と聞いても

「分からない所がわからないんですー」と嘆くさま。結局ココがおよつを差し入れてくれて、

休み時間になっても、のぞみだけは休み無しとかれんに言われ、時々勉強を続ける羽目になった。

さすがにやりすぎではと思い、かれんに何かを言おうとしたさくらであったが、りに

「のぞみはあれぐらいがちょうどいいのよ」と止められ、心の中で（ごめんね。のぞみちゃん）

と謝罪した。それでも優しいさくらは休憩中もやはりのぞみの事が気になり、かれんの許可を得て、

のぞみに紅茶をあげたのであった。このさくらの行動にのぞみは大変感謝し、かれん達はと言えば、

甘いなと思いつながら、それもさくらの性格なら仕方ないかと言う気持ちであった。

その頃ナイトメア本社では、アラクネアがブンビーにプリキヤアの

成績が上昇している事で、お説教を

くらっていた。「精一杯努力をしているのですが」と言うアラクネアに対し、ブンビーは

「努力より、結果の方が大事なんだよ」とはねた。そこで次こそはと言いかけたアラクネアは

「1つだけ大きな問題があるのです」と言った。ブンビーは「例のカードキャプターさくらと言う少女だね」

とすぐに理解した。実際あの戦闘後、ナイトメアではプリキュア以上にさくらを警戒するようになった。

さくらの力をその身で受けたブンビー達は尚更だった。そこで彼らは今回の計画として、さくらとプリキュアを

できるだけ遠くで分断する事にした。それなら時間稼ぎもできるし、その間にプリキュアを倒せると踏んでいた。

しかしこの時の彼らには自分達がさくらの力をみくびってしまい、大誤算になるとは予想もしていなかった。

そしてナッツハウスでは、相変わらずのぞみの勉強は進んでいなかった。その遅さにとうとうかれん達は

「こんなにはできないなら、プリキュアとしての行動は控えた方がいいんじゃないかしら?」

「のぞみはその方がいいよ」「勉強も大事だし」「しばらくは4人で行動をする事に」

と言いはじめってしまったのであった。これにはさくらも「皆、それは言いすぎじゃ・・・」と言い、

のぞみも「ちよっと、皆!!」と大声を出す、それでもかれん達は言い続け、とうとうのぞみは

「私は、プリキュアやるもん!」と怒鳴り、かれんが「まだ、問題全部解いていないわよ」と言われると

駆け出していった。「のぞみちゃん!」追いかけてよとさくらに「来ないで!」とのぞみは怒鳴って

ナッツハウスから出て行ってしまった。ココが後を追おうとするさくらに後を追うからと言って、

自分に任せさせた。それを見届けたさくらは複雑な気持ちであった。

その後、さくらが上に上がると、こまちとつらは「追いかけていいのでしょうか?」、「、

「少し言い過ぎたかも」と少し反省しながら言っていたが、かれん・りんは違った。

「あのくらい言わないと、本人の為にはならないわ。」「頭を冷やせばすぐに戻ってくるでしょう」

その言い方に遂にさくらは怒った。「あんな言い方のどこが本人の為なんですか!? 頭を冷やさなきゃ

いけないのは皆さんの方でしょうか!」「テーブルをたたきながら、さくらはそう怒鳴った。

突然さくらが怒鳴った事にかれん達は驚いていた。かれんが「何を怒っているの?」と聞くと

「確かにのぞみちゃんは勉強のときは決して良くなかった。かれんさんやりんさんはのぞみちゃんに

テストを頑張つて欲しいから、あんな言い方をしたのかもしれない。でも、本人を傷つけて、無理やり

覚えさせても、本人はやる気何か出ないし、例え覚えたとしてもそれは一時的なものに過ぎません!!

へたをしたら、一生残る心の傷になるかもしれないですよ!! のぞみちゃんには勉強が嫌いな理由が

何かあるのかもしれない。なのにそれを聞こうともせず、あんな言い方をするなんて、ひどすぎます!!」

さくらは怒りを抑えながら、そう言った。さくらの言葉に特にかれん・りんは考えさせられた。

ナッツも「さくらの言う通りだ。さっきのお前達のあの言い方はよくなかった」と言った。

その後、さくらはりんの記憶から、のぞみの過去を少し知ると、急いで後を追っていたのであった。その素早さにかれん達とナッツは呆然としていた。

その頃、のぞみは追ってきたココに「来ないで！！」と叫びながら、近づけさせなかった。自分を

連れ戻す為に追ってきたのだと、のぞみは警戒していたのだ。

のぞみにそう言われ、下手に近づけず、ココはどうすべきか困っていた。その時だった。

「のぞみちゃん！！」さくらの声がしたのだ。

思わずその声がした方角を見るのぞみとココ。何とさくらが全力で走って来ていたのだ。

さくらはのぞみの近くまで来ると止まった。のぞみは「さくらちゃんも、連れ戻しに来たの？」

と警戒しながら聞いた。しかしさくらは「別に連れ戻したりしないよ」と答えた。

「え？」と言うのぞみに対し、「今ののぞみちゃんの気持ち、少し分かるから」とさくらは

にっこりしながら言った。ココはそのさくらの様子に何かを感じていた。

しばらくして、さくら・のぞみ・ココは熱気球に乗っていた。その中でのぞみは自分が小学校の頃から

人よりも覚えが遅かった事から、すっかり周りに劣等感を抱き、勉強が嫌いになった事を告げた。

そんなのぞみにさくらは「でも私は、周りに心配してくれる人がいるのぞみちゃんがうらやましい」

と言った。その言葉にはつととなるのぞみとココ。そう、さくらは異世界から1人で来ていたのだ。

それを思い出したのぞみはさくらに何かを言いかけたその時異変が

起きた。

さくらは突然現れたブンビーに別の場所へ連れ去られ、アラクネアに対して変身していて戦っていた

ドリームは糸に縛られ、黒い雲の中に捕らえられてしまったのだ。

その頃やはりのぞみの事が気になって、かれん達は手分けしながら探していた。かれんは言い過ぎた

と反省していた。そこで全員、黒い雲を発見し、通常のジャンプでは届かないと判断し、ルーージュと

レモネードが先行した。しかし2人もドリームを助けようとした一瞬の隙をつかれ、縛られ、捕獲

されてしまったのだった。

一方さくらはブンビーにより、異空間に連れ込まれ、集中攻撃を受けていた。

ブンビーは「さすがの君もこれではどうしようもあるまい!!」と勝ち誇っていたが、それは一時的

にすぎなかった。さくらは「あなたにかまっているひまはないんです!!」と怒鳴ると、『闘』を使用し、

一発でブンビーをノックアウトすると、瞬時にその場からテレポトした。

それに気づかないアラクネアは地上に降り、ミント・アクアに雲の上で捕らえているドリーム達の

姿を見せ、コレットの引渡しを要求していた。さすがの2人もさくらがいないこの状況では仕方が無い

とあきらめかけた時、「その必要はありません!!」とのさくらの声が響いた。

さくらはすぐにドリーム達を解放すると、「お仕置きです!!」『大』
+ 『撃』^{アタック}「!!」

アラクネアに重い一撃をくらわせたのであった。その一撃でアラクネアは吹っ飛ばされていった。

全てが終わった後、のぞみとかれん達はお互いに謝罪した。そして

のぞみはさくらに「私、勉強を頑張ってみるよ」と言った。その言葉にさくらは微笑んでいた。

それからしばらくの後、中間試験が無事終了した。のぞみは勉強のかがあつてか赤点は一つも無く、最高で50点を越えているものもあった。かれんは少々不満げであったが、また今度と言う事で

納得した様子であった。その数日後、さくら達は当初の約束どおり、全員で遊びに行ったのであった。

ちなみに言うと、さくらの成績は学年10位以内で、クラスでは3位の平均85点と言うものであり、

転校したばかりとしては、見事なものであった。

第4話・さくらのぞみとコロコの熱気球（後書き）

次回はさくらの意外な活躍が見れます。

第5話…おむすびのストーリー（前書き）

おむすびの謎（？）ストーリーの話。

第5話…さくらとつららのステージデビュー

第5話…さくらとつららのステージデビュー

中間テスト終了から1週間が過ぎた。

その日の昼休み、カフェでお昼を食べていたつららはいつもよりはるかに速く、大量に食べていた。

その余りの光景にさくら・こまち・かれん・りんは絶句し、のぞみも「おお〜」と驚いていた。

つららの食べるスピードが少し遅くなった所で、話始めた。

「つらら、いつも異常に凄いね」とりんが言うと、つららは食べながら

「実は一つお仕事が決まりました。体力を付けようと思いましたが」と言った。

こまちが「どんなお仕事?」と聞くと、つららは食べるのを一旦やめ、にやりとしながら

「よくぞ聞いてくれました!」と胸を張って言った。そこでさくら達はつららの話を聞き入る事にした。

「春日野つらら! 司会者デビューに決定いたしましたー!」つららがそう発表すると、さくら達は思わず

「「「「「司会者デビュー!?!」「」「」と聞き返した。

つららは「はい! 今度、遊園地のステージショーで司会をするんです!」春日野つらら、頑張ります!」

子供達のハートをゲットしちゃうぞ!」と意気込みを語りながら、最後にはウィンクをしていた。

最後の行動に、思わずりんが「って・・・誰に言っただよ・・・」と突っ込んだ。

さくらは「つららちゃん、頑張つてね。応援に行く・・・から・・・」とつららの応援に行くと言い掛けた所で

かれんの方を向いた。その理由を瞬時に理解したかれんは微笑み

ながら言った。

「心配ないわ、さくら。じいやはさくらが出かける事に別に文句を言わないし、皆で見に行きましょう」

その言葉にほっとするさくらであった。無論その後、のぞみが

「よし！！うららの司会者デビューの応援に行く事に決定ー！！」
と言ったのは言うまでもない。

そして日曜日、さくら達はうららの応援の為、遊園地に来た。ついでにココ・ナッツも着いて来た。

最も二人はピンキーがいた場合も考慮してきたそうだが。

それは当たった。さくらがピンキーの気配をいち早く察知し、のぞみがそのピンキーをキャッチした。

しばらくすると、「うららちゃん！！」と男が叫んで重い荷物を持ちながら、こちらへ向かっていた。

うららは思わず「マネージャーさん！？」と言い、さくら達はそのうららの言葉に「くくくえ？」「くく」と言った。

男はよほど疲れていたのか、うららの所まで着くと、呼吸を落ち着けていた。

うららは男の抱えていた荷物が気になったのか「それは何なのか？」「と聞くと、男は

「何って、今日必要なものだよ」とさらりといい、荷物を次々と出した。

「まだ寒いからね。手袋にセーターそれからお守り、お守り、山盛り」そのマネージャーに圧倒されながら、

うららは「いつも、有難うございます」と苦笑いしながら、礼を言った。一方、さくら達は

「交通安全・学問成就・安産祈願？」お守りを見て、呆れていた。そんな彼女達に男は挨拶した。

「初めまして、春日野うららの担当マネージャー鷺尾浩太です！！
よろしく！！」その後、名刺を渡した。

それを見たのぞみは「うらら、芸能人みたい！」と言って、りんに「芸能人でしょうが」と突っ込まれていた。

すると今度は「おほほほ!!」と女性の高笑いの声が出た。さくら達はそれにいやな予感がして、

その声が出た方をみると、予想通りそこにはサンクルミエール新聞部部長の増子美香がそこにいた。

「今日は春日野さんの司会姿をばっちり取材するわよ！ うん？」と増子が言いかけていると、

さくらに気づいた。それを察知したさくらはすぐさまかれんの後ろに隠れた。

「おー！ 転校してきた『謎の美少女木之本さくら』さんじゃない！ 今日はどういう・・・」と言い掛けた所で

増子は言うのをやめた。かれんやのぞみ達がさくらを庇い、睨んでいたからだった。と言うのも、

さくらが転校してきた初日から数日間、増子はさくらが何故のぞみ達といつも一緒なのか、何故かれんと

一緒に帰るのかとか、昼休み中もあげくの果てには授業中までに付きまとうようになっていた。

付きまとわれたさくらはとうとう泣き出してしまった為、増子は先生達から厳重注意を受け、のぞみ達にも

厳しく叱られたのであった。しかしそれでもこりていなかったっらしく、それ以後はさくらの側に必ず

のぞみ達の内一人は着いてやるようになり、増子を牽制したのであった。

その増子は今は鷲尾とうららの将来について、勝手に話を膨らませて話していた。

そんな2人にさくら達は呆れていたのは言うまでもない。

それから数時間後、舞台での練習中にトラブルが発生した。何とメインのうさぎのぬいぐるみスタッフの1人が

こられなくなってしまうのだ。一時は中止にするかと言う話も出た。

そんな中、のぞみが立候補したが、りんに「あんた、演劇部をたった3日で首になったでしょう」

と言われるとあえなく撃沈したのであった。すると今度はさくらが「私にやらせてもらえませんか？」

と立候補した。驚く一同に「こういったステージなら、昔何回か経験した事がありますから」

とさくらが説明した。監督も中止するのはおしいと、まずリハールでやらせてみる事にした。

すると予想以上にさくらの動きは素晴らしく、周りの評判も良かった。これで問題は無くなったかに見えた。

しかしその頃ギリンマが遊園地に既に潜入しているとはその時は誰も予想していなかった。

ステージが始まってしばらくして、ギリンマが行動を開始した。

のぞみ達は変身しようとしたが、

観衆の前では変身できず、困っていた。するとさくらが念話で

（私に考えがあります。）と説明し始めた。

その考えはうらが観客全員に上を見るように言い、その間に『鏡』^{ミラー}にうららとなってもらい、

のぞみ達が変身すると言うものであった。『眠』を使うという手もあったが、この際ヒーローアクション

みたいにすべきだと言う事になり、そうなった。その作戦は実際にうまくいった。

そして観客に対する被害も、アクア・ミントの活躍もあって、0であった。そしてギリンマ・コワイナーも

「よくもうららとさくらちゃんのステージを台無しにしたわね！」「と怒り心頭だったドリーム・ルージュ

の2人によって、コワイナーは撃破され、ギリンマも逃げていった。

その後、会場は満場の拍手・大歓声に包まれていた。　　が、増子は「特ダネだー!!!」と写真をとり、大急ぎで去っていた事はドリーム達には計算外であった。「どうしよう。今度こそ言っちゃうかも」不安そうに言うアクアにさくらは（記憶を消去しますか？）と聞いた。それを聞いたドリーム達は、さすがにそれはやりすぎだと、駄目だしをした。　するとさくらは（だったら、ナッツさんに任せます）とナッツに頼んだ。その頼みを理解したナッツは仕方がないと思い、行動を開始した。

翌日、掲載された新聞にはステージの事は小さく書かれたのみで、ナッツと増子の再会が大きくのつていた。

これこそがさくらの作戦であった。「まあ、結果オーライと言う事で」「こまちは苦笑いしながらそう言った。のぞみは「でも、さくらちゃんとうららの初舞台が駄目になったね」と言うと、さくらは

「私はともかくうららちゃんは・・・」とうららの方を向くと、うららは元氣良く、

「大丈夫です!!!　またチャンスがあれば、また頑張ります!!!」　　と言い放った。

りんも「その意気だね」と誉めていた。

だがその後現れた鷺尾にもう一度あの時と同じ展開で行こうという話を聞いた時、さくら達は思わず

「げっ」と言い、鷺尾に手を掴まれていたうらら以外は全員「無理無理。」と手を振りながら言っていた。

第5話・なぐらとじつらのステージデビュー（後書き）

次回はさくらとりんのスポーツ対決が見られます。

第6話・さくらちゃんとりんちゃんの部活決定ー！！（前書き）

この話ではさくらとりんによるスポーツ対戦があります。

第6話：さくらちゃんとりんちゃんの部活決定ー！！

第6話：さくらちゃんとりんちゃんの部活決定ー！！

中間テスト期間から数週間後のある日の放課後、さくらはかれんとともにりんの実家である花屋に向かっていた。

「りんさんの実家って、お花屋さんなんですね。私、楽しみです」
さくらがかれんにそう言うと、かれんも

「私もよ」と笑顔で答えていた。それと 同時にかれんはさくらを誘ってよかつたと心の中で思っていた。

さくらは本当は先に家に戻り、じいやのお手伝いをしようとしていたのだ。しかしかれんはこの機会にさくらを

もつと外に連れ出そうと考えて行動したのであった。その行動は成功だった。

しばらくして、さくら達はりんの実家の花屋に着いた。 中に入ってみると、りん以外にのぞみもいた。

さくらとかれんは「今日は」「とのぞみ達に挨拶した。 のぞみ達も「あつ、さくらちゃんにかれんさん。」

「いらつしゃい、かれんさん、さくら」とさくら達に気づいて、言葉を発した。

その後すぐのぞみは「ねえねえ、さくらちゃん・かれんさん、一緒にりんちゃん、ホットサルに行かない？

りんちゃん、ホットサルに出るんだって！」とかれん・さくらを誘った。

「ホットサル？」さくらはその言葉の意味が分からず、首をかしげていた。かれんも同様であった。

そこへりんが「フットサル！」と突っ込みを入れたことにより、さくら達も理解ができた。

「ほえ」。りんさん、フットサル部に入っていたんですか？」さ

くらがそう聞くと、りんは

「まあ、まだ同好会だけどね。それに掛け持ちで結構大会も忙しいけどね」とぼやきながら答えた。

そのりんの話に「あら、掛け持ちは無理よ」とかれんがさらりと言った。その言葉に思わずさくら達3人は

「……え?」「」と呟いた。かれんはその理由を伝えた。「生徒会で聞いたんだけど、今年の大会は同時開催

になると言ってたわ。だから掛け持ちは絶対無理だと思うわ」「それを聞いたりんは目を丸くして「えー!?」と叫んでいた。

翌日の昼休み、カフェでりんは渡された大会日程を見て、頭をひねっていた。「うーん。確かに見事に時間が重なっているな」

「どう考えても、全部に出るのは不可能に近いわね」「こまちが駄目出しをした。それを聞いたりんは落ち込み、のぞみも「りんちゃん。去年は大活躍だったのにねえ」と少しがっかりしていた。

それを聞いたうらがが「そんなに凄かったですか?」と聞いた。さくらも聞きたがっていた。

のぞみが言うには、陸上・柔道・バスケットボール・バレーボール・テニスで圧倒的強さを誇り、優勝を独占したとの

事であった。それを聞いたさくらは「りんさんはまさに『スポーツ部の申し子』ですね」とりんに言った。

その言葉にりんは「いや、それ程でもないよ」と少し照れていた。その後、どうすべきかは結局決まらなかった。話の最中、りんの危機を感じたさくらが全員で慌ててその場から

離れると、あつという間にりんの勧誘のために多くの部員がカフェに突入してきたのであった。

幸いにも見つかる前にうまく隠れられ、いないことが分かると、部員達もいなくなったので助かったのであった。

この騒動の後、りんが「ありがとう、さくら。助かったよ」とさくらに礼を言ったのはいうまでも無い。

その翌日も朝から、各部活の部員達や増子の押し寄せがりんを待ち構えていた。最もそれを先に読んでいた

さくらのおかげもあり、静かに警戒しながらも、何とかうまく回避しつつ、教室に入ったのであった。

「ふー！！ 何とか回避できましたね」さくらがそう言うと、のぞみ・りんは「さくら（ちゃん）。

あなたは正に救いの『天使』です」とさくらの危機に対する対策や行動力に感服していた。

しかし2人は翌日、さくらの更なる凄さを知る事になるうとはこの時はまだ知る由も無かった。

翌日の昼休み、何とさくらは「りんさん。私とフットサルで一對一の勝負をしませんか？」とりに勝負を

申し込んできたのだ。このさくらの言葉と行動に誰もが驚いていた。無論りんは、戸惑いながらもそれを受けた。

そして放課後、公園でフットサル同好会のキャプテンである今野香織の許可を得て、一對一の勝負が行われる事になった。

のぞみ達はもちろん、フットサル部員達全員が見守る事になった。

勝負内容は先に10ゴールをあげた方が勝ちというものであった。

さくらもりんもこれに異存は無かった。

「うーん。さくらちゃん、大丈夫かな？」のぞみが不安そうに言った。こまち・うららも同じ気持ちであった。

しかし、かれんだけは違った。「大丈夫よ。さくらも結構運動神経は良いみたいだから」

一方のさくらとりんは勝負前に少し話をしていた。

「さくら。あんた、フットサルをやったことがあるの？」とりん

が聞くと、さくらは「実際にやったことはあまりありませんが、ルールはちゃんと知っています」とはっきり答えた。更に「それに」と区切って言う

「『今のりんさん』になら、決して負ける事はないと思っています」とさくらは、はっきり言った。

その言葉は誰が聞いても、挑発としか思えない言葉であり、りんも内心少しムツとしていた。

ただ、かれん・こまち・香織の3人だけは、さくらのその言葉に何か意味があるのではと感じていた。

そして遂に始まった勝負。誰もがりんの圧倒的な勝利或いはそれとも互角の勝負が見られるのかと、思っていた。

しかし、結果は誰もの予想を大きく裏切ったものとなった。

さくらが先にボールを持ち、攻め始めた。りんは（さくら。悪いけど、本気で行かして貰うよ！！）と心の中で思いながら、ボールを奪いに行った。しかし、りんの『本気』はさくらにかなわなかった。

りんがボールを奪おうとすると、さくらは鮮やかにかわし、あっという間にゴールを決めてしまったのだ。

逆にりんがボールを持って攻めても、さくらに動きを完全に読まれ、あっさりボールを奪われてしまったのであった。

（どうして？ 何でこんな簡単に抜かれたり、とめられるの？）りんは完全に動揺していた。

一瞬りんは（まさか、魔法を？）と考えたが、すぐにその考えを捨てた。さくらはそんなずるをする娘じゃない事は

りんもよく知っていたからだ。結局、勝負開始から15分足らずで勝負は決まった。しかも10対0。

まさに、さくらの圧勝、りんの完敗であった。この結果にはのぞみ達も驚愕していた。

そんな中、さくらはがっくりとなっっているりに近づくと、こう言

った。

「りんさん。何故私がこんな圧倒的な差で勝てたか分かりますか？ 答えは簡単です。私は初めからこの勝負のみに集中していました。それに対し、りんさんはどの部に入るべきかとか、他にも何か迷いをお持ちで、勝負に本当の意味では集中していませんでした。だから私はりんさんのプレイや動きなどを読みきることができたのです。もし、りんさんにその迷いがなければ、違う結果になっていたでしょう」

さくらの言葉にりんはもちろんのぞみ達も驚愕していた。あの僅かな時間の中でここまで読んでいたのかと。

そしてさくらは去る前にりんに言った。「りんさん。あなたには家庭の事情や他の人の期待を裏切れないという

プレッシャーがあるのを知っていますが、それでも一度くらい、自分が本当にやりたいことをやっても誰も文句は

言いませんよ」そのさくらの言葉の意味を本当に理解していたのは、かれん・こまち・香織だけであった。

りんはさくらの言葉を聞いていたが、完全に負けたショックの方が大きかったようであった。

その夜、さくらは「少し、やりすぎたでしょうか？」とかれんに聞いた。しかしかれんは笑顔で優しく言った。

「大丈夫よ。りんはあれで駄目になる娘じゃないわ。それに貴女には貴女の考えがあつたのでしょ」

それを聞いたさくらは少しほっとした様子であった。

翌日の放課後、りんが帰る前にさくらとのぞみ達でりんの母親の手伝いをしていた。

りんの帰宅後、さくら以外はりんの双子の兄妹であるゆうとあいと一緒に公園に遊びに行ったのであった。

そこでりんはかれんとこまちに全ての事情を話した。自分が正式

に部活に入れば、家の仕事で両親に迷惑がかかるし、今まで掛け持ちしていた他の部にも悪いと思っていたのだと。

それを全て聞いた後、かれんはりんに言った。「りん。さくらはね、それを全部知った上で、貴女に勝負を

申し込んだのよ」その言葉にりんは驚愕し、こまちも少し驚いていた。

実は前の夜、かれんはさくらに何故あのような形で勝負を挑んだのか、訳を聞いていたのだ。

さくらはりんの部活・実家の様子や香織の言葉など、全てを聞いて見ていたのだ。それで敢えて

勝負と言う形でりんにもっと自由にやってもいいんだよと伝えようとしたのだ。

それを知ったりんはさくらの凄さに改めて驚くと同時に、勝負に負けた事だけに頭がいつていた自分を恥じていた。

その後すぐ、ガマオが攻めてきたが、すぐに駆けつけたさくらの援護もあり、すぐに追い払うことができた。

その後、さくらの『眠』で眠らされていたのからおきたゆうとあいの説得もあり、りんは正式にフットサルに入ることを決めたのであった。

ただし、「さくら。あんたもフットサルに入ろう！」とりんはさくらも誘った。

これに戸惑うさくらであったが、かれん達も押したことで部に入ることが決定した。

無論、家の手伝いもちゃんとするという点において、さくらは頑固にゆずらなかつたが。

最ものぞみが「じゃあー！ 私が2人のお手伝いをするよー！」と言う意見はあっさり却下されたの言うまでもない。

その後、正式にフットサル部に入部したさくらとりんはいいコンビ

ブレーを行えるようになっ
ていった。

第6話・さくらちゃんとりんちゃんの部活決定ー！！（後書き）

今回は部の予算をめぐる話で、さくらの行動が解決の道を示します。

第7話・さくらと悩める生徒会長かれん（前書き）

今回はさくらの意外な活躍が生徒会長として苦しむかれんを助けま
す。

第7話：さくらと悩める生徒会長かれん

さくらとりんがフットサル部に入部してから数日が経った。その日のお昼、カフェでさくら達を待っていたのぞみ達の前にさくらとりんがスクラップ寸前のフットサル用のボールを10個程持って、現れた。その光景にのぞみ達は驚いていた。

「ど、どうしたの、さくらちゃん・りんちゃん？ そのぼろぼろボールを持ってきて」 のぞみが質問し始めた。

「あ、うん。本当は今日まで全部使えるように直す予定だったんだけど、間に合いそうにないから、今日のお昼の内に少しでも直しとこうと思って・・・」 さくらがボールの傷口を縫いながら、のぞみに答えた。その後りんがさくらを手伝いながらも、やや呆れ口で言った。「本当、さくらにはまいったよ。使い物にならないボールをもう一度使えるように直すんだと言った時にはさすがの私も啞然としたよ」 しかし「それでもまあ。たった3日間で直す予定にしていたボール

20以上のボールの内、10個近くも直してしまう当たりが、さくらの凄い所だけだね」と実際にさくらが直したボールの1つを見せながら、さくらの凄さも伝えた。これにはのぞみ達も驚きながらも凄いと思い、それぞれさくらに対し、賞賛の言葉を伝えていた。

「凄いーい！！ さくらちゃんって、器用なんだね！！」「本当に使えるように直しちゃうなんて、凄いですね！！」

「本当に偉いわ、さくらさん」「そうね、立派だね。でもさくら、どうして家でやろうとはしなかったの？」

かれんだけはどうして家でやらなかったのかと聞いた。持って帰ってきて、言ってくれば手伝ったのにも思っていたのだ。

それに対しさくらは「だって、かれんさんは生徒会長のお仕事とかで忙しいのに手伝ってもらうなんて、悪いかと思うたん

です。それにもし頼むにしても、やれるだけやって、それでも無理があつた場合には頼んだかもしれませんがね」
最後にてへつとしながら言った。そのさくらの言葉にかれんはため息をつきながらも、「本当にさくららしいわね」
と微笑みながら言った。そのかれんの言葉にはのぞみ達も同感であつた。

しばらくすると、突然、大勢の他の部の部員達が生徒会長であるかれんに部の予算を増やしてくれるように訴えに来た。

さくらは幾らなんでも、こんな大勢でかれんに部の予算を増やせと言いに来るのは間違いだと思い、それを言う為に立ち上がろうとしたその時、こまちに肩を掴まれ、止められた。驚くさくらにこまちは小声で（ここはかれんに任せておけば、大丈夫よ）とにつこりしながら伝えた。こまちにはさくらのかれんに対する思いやりや気持ちを理解できていたのだ。

そしてこまちの言うとおり、かれんが「それぞれの部に割り当てられる部費は決められているの！生徒会が決めた部費で各部はやりくりしてください！」と厳しくはつきり言い放つた。

そのかれんの言葉に他の部員達は何も言えなくなつていた。ただその中でさくらはかれんの表情が一瞬悲しくなつたのを見逃さなかつた。思わずかれんに、大丈夫かと聞こうとした所をこまちにまた止められた。

「今はそつととしてあげるのが一番よ」「こまちのその言葉にさくらはかれんを信じて、了承した。

2日後、かれんは思い切つて、教頭室に行き、各部の予算を上げてもらえないだろうかと何度も頭を下げながら、お願いしていた。教頭もそんなかれんの行動に同情したのか、難しいとは思つが、一応理事長に頼んでみる事を約束してくれたのであつた。

その後、教頭室から出て来たかれんをさくらとこまちが待つていた。

2人とも、かれんの事を心配していたのだ。

かれんはさくら達に一応、理事長に頼んでくれるように教頭にお願
いした事を伝えた。その後かれんはやや疲れたように呟き始め
た。「こうなったら、昨日のぞみが言っていたように家のお金を
部費に当ててみようかしら？」

かれんの言っていた事は実は1日前、のぞみが突然言い出したとん
でもない事であった。その時はのぞみはさくら・りんになん
考えは駄目だと否定され、却下された。しかし今かれんは本気で
それを実行しようとするような発言をしていたのだ。

そんなかれんに「駄目ですよ、かれんさん！」「そうよ、かれん！
それでは本当の解決にはならないわよ。」「さくら・こまちが
言い放った。そんなさくら達の言葉にかれんは、はっとしながら
も「でも、皆の為にも何とかしてあげたいし・・・」と呟いていた。
かれんのその様子にこまちはくすりとしながら、かれんに言った。

「かれん。あなたは変わったわ」
そのこまちの言葉にさくらもかれんも思わず「「え？」」と聞き返
した。こまちはそう言った訳を説明し始めた。

「昔の貴女なら、絶対こまちはやらずに、そんなことなどと放棄
していたわ。でものぞみさんやさくらさんそれにりんさん達に
出会って、貴女は変わったのよ」

その言葉にかれんは「そうね」と笑顔で答えた。のぞみやさくら
達に出会ったからこそ、自分は変わったのだと実感したのだった。
そしてそんなかれんに手を差し伸べるこまちとその手を掴むかれん
を見ていたさくらはこの2人の強い絆に深い感銘を覚えた。

それと同時に自分がいた元の世界の親友である知世の事を思い出し
てもいた。

その頃、教頭が理事長に各部の予算を何とか上げてもらえないだろ
うかと、頼んでいた。すると理事長はこう言った。

「お話は理解できました。ですがその前にそれぞれの部でできる
事があるはずですよ。私はそれを理解し、行える生徒を1人だけ

知っています。その少女の名は・・・」そう話している理事長の左胸には銀色のブレスレットがされてあった。

その日の昼休み、又しても大勢の部員がカフェにいるかれんの前に押し寄せてきたのであった。そんな部員達の行動に堪忍袋が切れたさくらが立ち上がるうとした時、こまちが「私に任せて」とさくらを止めて、立ち上がった。そして

「皆！！おかしくない！？生徒会の決めた部の予算は皆も同意して決めたはずよ！！それなのにかれん1人だけを責めるなんておかしいわ！！」いつものこまちとは思えないほどのはつきりとした厳しい指摘を部員達に言い放った。

そして更に「ここにいるさくらさんは自分でできる事は可能な限りしていたわ！使えなくなりかけているボールを使えるように直したり

、トレーニングに必要な道具を別物を使う事で工夫したり！皆はそういう努力をしたの！？」さくらの行動を言い、部員達はそういう努力をしたのかと、聞いた。実際さくらはボールの修理だけでなく、鉄アレイ代わりに砂などを入れた重りで練習できるように用意した

のであった。しかもこれはフットサル各部員に好評であったのだ。それを聞いた部員達は、すっかり沈黙した状態であった。そんな中、教頭が現れ、理事長の話を伝えた。

「理事長がおっしゃるには、予算を増やす事を検討するが、その前に皆さんにはやれることがあるはずとおっしゃっていました。そして

・・・」そこまで言いかけると、さくらの方を見て、「それを既に実行し、更に全ての部が協力して行える事やその方法を知っているのは

、そこにおられる木之本さくらさんだと、おっしゃっていました」そう話した。

教頭の言葉にこまち以外の誰もが思わず、さくらを見ていた。さくら自身もその状況に少し驚いていたが、理事長の考えを瞬時に理解し、

その方法を全員に伝え始めた。「互いに欠けているものをそれぞれに補うもので補助しあう事が一番大切なんです。でもこれは、

今まで皆さんが予算をただ増やしてって言っていた状況では無理な事でした。互いに協力し合う姿勢ができた今だからこそ、できた事を

忘れないでください」さくらのその言葉はその場にいる全員に深く刻まれたのであった。

その後は各部が互いに不足しているものをお互いにあるものや必要のないもので補える事がすぐにできたので、かなりスムーズに行われた。

ただし、演劇部が『源氏物語』を演じようとしている事には、さすがのさくらも一時的に呆然状態となってしまうていた様子であった。

その後、さくらはりん達と共に、柔道部からもらった鉄アレイを半分に分けながら持っていた。最も、のぞみ・うらはは全く持てない事

もあって、5人がかりで半分を持っていたのに対して、さくらは1人で半分を運んでいた。無論これも過去の修行の成果とも言える。しばらくするとさくらは、邪悪な気配を察知し、「皆、気をつけて！！近くにナイトメアのブンビーさんの気配がします！！」とのぞみ達に警告を発した。そのさくらの言葉に全員警戒態勢に入った。するとさくらの言うとおり、ブンビーが出てきた。

「さすがはカードキャプターさくらだ。そこにいるプリキュア達とは偉い違いだ」と皮肉気味に言った。

その言葉にのぞみ達はむっとしながらも、変身し、戦いを挑もうとしたが、ブンビーの使用した新型仮面をつけたコワイナーは予想上に

手ごわく、さくら以外はたちまち大ダメージを負ってしまったのだ。しかしさくらの「初めから強い者はどこにもいない！！」そしてかれんが「勝手に不要と切り裂く、その考えでは私達には勝てない！！」

との言葉を契機に一気に大逆転し、ブンビーもさくらによって、吹き飛ばされ、お星様になったのであった。

さくらは戦闘後、また助けられたと詫びるドリーム達に「私はあくまでも最小限の手伝いをしただけ。今日皆さんが勝てたのは、皆さんの

チームワークのおかげですよ」とにつこりしながら言った。そのさくらの言葉と笑顔にドリーム達も笑顔になっていた。

翌日、おタカさんから理事長からの予算問題解決の褒美として大量のパンがさくら達の前に出された。しかし思わず飛びつこうとしたのぞみはその後から来たたくさん部の部員達により、あっさり跳ね除けられてしまったのであった。

ちなみにのぞみ以外はさくらが瞬時に気配を察知した事もあって、被害は0。しかも、さくらがすぐに人数分のパンを手に入れていたので

問題は無く、パンを手に入れ損ねたと泣いていたのぞみもすぐに笑顔となったのであった。

そしてその中で、さくらはおタカさんの胸についているブレスレットを見て、ある事に気づいたが、今は言う時ではないとすぐに理解し、

当分はのぞみ達にも秘密にしとく事決めたのであった。

第7話・さくらと悩める生徒会長かれん（後書き）

今回はさくらののぞみ家での家事手伝いとさくらの家庭の話がメインになると思います。

第8話・さくらとハッスルのぞみのお手伝い！（前書き）

今回はさくらの家事手伝いがメインです。

第8話：さくらとハッスルのぞみのお手伝い！

第8話：さくらとハッスルのぞみのお手伝い！

部活の予算問題解決から数日経った休日の日、さくらはりんとりんの母親である『夏木和代』と共にのぞみの母親『夢原恵』が働いている

美容店『Espoir』に向かっていた。これはかれんがさくらにもっと周りの人間との付き合いを広げるためにりに頼んだからである。

りんもかれんの考えをすぐに理解したため、母親の和代に頼んで、許可をもらった。和代も快くその事を了承し、初めて出会った時と同様に

さくらの容姿やその礼儀正しさに大変感心をしていた。ちなみにその後りに「あんたもさくらちゃんを少し見習ったら？」

とからかうように言い、そう言われたりんは「余計なお世話！」と少しすねていた。が、さくらの困った顔を見て、二人ともその辺で話をやめた。

そしてお店に着いて、入ったさくら達はそこで恵が具合を悪そうにしているのを見かけた。しかし恵はさくら達の姿を確認するとすぐに何事も無いような顔をして「いらっしやい、和代ちゃん、りんちゃん。」と挨拶をした。そしてそこでさくらの姿を見た後「ねえ、りんちゃん。その娘がのぞみの言っていた・・・。」とりに聞いた。その問いにりんは

「はい、私達のクラスに転校してきた『木之本さくら』さんです」とさくらを紹介した。そのりんの説明の後、さくらは恵に

「初めまして、木之本さくらです」と元気よく挨拶をした。そのさくらの挨拶に恵も「初めまして、のぞみの母の恵です」と言った後、

「さくらちゃんって、話に聞いていた以上に可愛いわね。それといつものぞみがお世話になっっているみたいでごめんなさいね」
とさくらの容姿を褒めながら、のぞみの事で詫びていた。さくらは「いいえ、そんな事はありませんよ」と笑顔で答えた。

その後、和代が恵に体調が悪いのではと聞いたが、本人が一応大丈夫と言ったので、それ以上追求はしなかった。

そして話を変えて、恵が「和ちゃんもりんちゃんぐらいの時から、そうやってお花を活けていたのよ」と話すと、

りんが「へえー、お母さんも私ぐらいの時があっただ。ずいぶん前の話だろうけど」と言っ

和代を「りん！ずいぶん昔じゃないわ！ついこの前の事よ！！」と怒らせてしまったのであった。

この和代の言葉にはりんもさくらも苦笑いをしていた。

そこでりんは恵に「そういえば、のぞみは？」と恵に聞くと、笑いながら「ああ、のぞみは今頃・・・」と教えてくれた。

それを聞いたりんは、呆れたようにため息をついていたが、さくらは「のぞみちゃんらしいですね」と笑いながら言った。

その頃のぞみはと言うと、恵の言った通り、ベッドで眠りながら「おいしそうなクリームパン・・・いただきまーす！」と枕を口に入れていた。

数時間後、ようやくのぞみは目を覚ました。するとさくらに抱えられながら恵が帰ってきたので、のぞみは驚いていた。

「さくらちゃん！お母さん、どうしたの！？」のぞみが慌てて聞くと、さくらが「のぞみちゃんのお母さん、かなり具合が悪いみたいなの」

と説明し、恵が「それで、店を早退して帰ってきたの。さくらちゃんにてつだつてもらってね。」と説明を付け足した。

それを聞いたのぞみは「今日はお父さんもないし・・・よし！

私がお母さんの看病をする事に決定ー！！」と宣言した。

そのぞみの言葉にさくらと恵は思わず「「え？」」とやや不安そうに呟いたのは言うまでもない。果たして大丈夫なのだろうか。案の定のぞみは恵の為に濡れタオルを用意しようとして、転んでしまい、水びだしになり、更に同じ所でまた転んでしまったのである。しかもまだいてくれたさくらの助力もあり、濡れた所の掃除や濡れタオルは何とか恵の頭に乗せることができたが、今度は食器を洗おうとして、

逆に割りまくってしまったのだ。（幸い、さくらの素晴らしい瞬発力のおかげで割れたのは半分ですんだのだが）

そして最後には洗濯機に洗濯物を入れすぎて、洗濯機を停止状態にしてしまったのである。この光景に恵はもちろんさくらも啞然となっていた。

結局その後、さくらが食器洗いを全てしてくれて、洗濯も分割的に回す様にしてくれたのであった。その後さくらは今日のはぞみはナッツハウスに

いけない事を伝える為に去って行った。去る前にのぞみはさくらに「ごめんね、さくらちゃん。私がドジばかりしちゃって、迷惑をかけちゃって」

と泣きそうになりながら謝っていた。更に「お母さんの具合を余計悪くさせちゃったかな？」とすっかり弱気になっている発言をしていた。

それに対し、さくらは「のぞみちゃん、確かにのぞみちゃんの今日の行いは決しているものとは言えなかったけれど、お母さんの為に頑張ろうと思う

事は決して悪い事じゃないし、お母さんは嬉しかったと思うよ。だから元気を出して」と笑顔で優しくのぞみの肩を叩きながら言った。

そのさくらの言葉にのぞみも「有難う、さくらちゃん。私、もう一度頑張ってみるよ」と笑顔になって答えたのであった。

その様子を影でこっそり見ていた恵は心の中で（有難う、さくらち

ちゃん」と呟いていた。

それから1時間後、さくらはナッツハウスに到着した。ちょうど
うららがピンキーをゲットして、コレットに入れていた時であった。
その後、さくらがのぞみの事を伝えようとした時、大急ぎでりんが
ナッツハウスに現れてきたのだ。

さくらが「りんさん、どうしたのですか？」と聞くと、「あ、さく
ら！ のぞみのお母さんは！？」とりんが聞き返し、さくらは「の
ぞみちゃんのお母さん

なら、今お家でお休みなっていますよ、のぞみちゃんが看病してま
すし。」と伝えた。するとさくらを除いた全員が慄き始めた。

さくらが「どうしたんですか？」と聞くと、全員が一人一人説明し
始めた。まずかれんが「さくらが来る前なんだけれど、のぞみが
生徒会の手伝いを

してくるって言うから、頼んだの・・・そうしたら、転んで見事
に資料をばら撒いたの！」と当時を思い出しながら説明をし、次に
うららが

「のぞみさんが勉強をみてくれるから、そうしてもらったんですが、
逆に私が教える事になってしまったんです！」と説明をし、次にこ
まちが

「図書委員の仕事を手伝ってくれると言ってくれたから頼んだら・
・本の題名を読んだだけで寝てしまったの」と説明をし、最後にナ
ッツが

「店の掃除の手伝いをしてくれると言うから頼んだら、店中水浸し
にってしまったんだ！」と汗をかきながら説明をした。ココも
「そうココ！ 後でココも手伝ったココ！！」と付け足した。そ
れを聞いてりんは「でしょうでしょう！ 私はのぞみと付き合いが
長いから分かるの！！」

と一旦区切り、そして「のぞみのお母さんが危ない！！」とはつき
り言った。それを聞いたさくらは一瞬ムツとなった。

しかしそれに構うことなく、りん達は「のぞみのお母さんを助けに行こう！！」とさくらを除いて満場一致で決定し、出勤しようとした。

が、その時、「待つてください！！」とのさくらの一声に全員動きを止めた。その後さくらはりん達全員が腰を抜かすような大声でしゃべった。

「さつきから聞いていたら、皆さんはのぞみちゃんの事を悪く言います！確かにのぞみちゃんの行動は今日も私がここに来る前に見ても分かり

ましたが、決して褒められる事ではありませんでした！でも！！のぞみちゃんはいたずらかふざけた気持ちでやったわけではありません！！

ただ手伝おうと言う気持ちがあ回りして、結果的に騒動を起こしてしまっただけです！！今日だって、のぞみちゃんは私や恵さんに迷惑をかけてしまったって、泣きそうになっていたくらいだったんですよ！！

皆さんののぞみさんに対する理解や信頼はその事が分からないほどのものなんですか！？」

それを聞いたりん達は少し浅はかだったと反省をしていた。その後、一応様子見と言う事でスーパーに行った後、全員のぞみの家に行くことが決定した。

それから約1時間後、手伝いに来てくれた和代にお使いを頼まれたのぞみはスーパーに来ていた。その最中、のぞみは和代がさくらの様に「お母さんの

為に一生懸命、頑張ろうとした事はいい事だよ」と褒めてくれた事を思い出していた。一方、のぞみの家では、恵と和代が談話をしていた。

「ごめんね、和ちゃん、迷惑をかけて」と恵が詫びると、和代は「心配しないで」と答えた。「のぞみが迷惑をかけなかった？」と

恵が聞くと、

「全然。」と和代は言い、「いい子じゃない、のぞみちゃんは」と言った。ただ恵が「そりゃ、私の自慢の娘ですもの!!」と笑顔で言うつと、

「のぞみちゃんを見ていたら、昔の恵ちゃんを思い出したわ! まあ、のぞみちゃんの方がまだましだけどね! 誰かさんは汚れた食器を洗濯機で

洗おうとしたくらいだから、あれには驚いたわ!!」と笑いながら和代が言った。無論、恵が「その事はのぞみには内緒よ!!」と頼んだのは

言うまでもない。その後、2人はのぞみを手伝い、励ましていたさくらの事についても、話していたのは言うまでもない。

それから更に1時間後、のぞみはさくら達と共に家に帰ってきたのである。スーパーでガマオに襲われたが、さくらの協力もあり、難なく追い返す事が

できたのである。帰ってきたのぞみ達はさっそくおかゆを作る準備を始めたのであったが、それはさくら・恵や和代を啞然とさせる幕開けに過ぎなかった。

うららは家事に慣れていないせいか、コップを割ってしまい、のぞみやかれんは卵の割り方が全く下手でりんはそれに突っ込みをいれ、こまちは何と

あるつことか、「体調が悪い時は甘いものがないんじゃないかと思つて。おかゆに入れてみるといいんじゃないかしら?」とようか

んを切っていたのだ。その後も惨事がひどくなりかけた時、さくらがメイド服に着替えて、行動を開始したのであった。

素早く、のぞみ達のやったもの後片付けをし、素晴らしい手際でおいしい卵おかゆを作ったのであった。誰もがその味を絶賛していた。

その食事中、さくらは「私は3歳の時にお母さんが亡くなったんです。お兄ちゃんやお父さんも忙しかったんで、その頃から家の手伝いや料理を少しずつしていたんです」

と説明をした。そのさくらの説明にのぞみ達の誰もが驚き納得していた様子であった。

最もその後、さくらに「のぞみちゃん達皆に今後問題が起こらないよう徹底的に家事について教えますね」と笑顔で言われた後、のぞみ達5人はその

笑顔に恐怖しながら、暗くなるまで家事の訓練をさせられていたのは別のお話である。

第8話・さくらとハッスルのぞみのお手伝い！（後書き）

次回はさくらとこまちがらみのお話です！

第9話・さくらとこまちの小説家断念！？（前書き）

さくらが挫折しかけているこまちのピンチを救うのがメインです。

第9話：さくらとこまちの小説家断念！？

のぞみ家での家事騒動から幾日か経ったある日の事、さくら達は学校の帰りにいつものようにナッツハウスに寄っていた。

今日はこまちの書いた小説『海賊ハリケーン』を聞かせてもらっていた。それを聞き終わった時、のぞみ・うらら・りんはすっかり感動しており、かれん・さくらも好感を持っていたようであった。それを聞いたこまちも喜んでいた。

しかしココが「ナッツにも読んでもらうと言いココ」と言い出した事が波乱の始まりとなった。

こまちはナッツに頼み、ナッツも「分かった」と了承した。

それから数十分後、小説を読み終えたナッツに対し、「どうだった？」とこまちが聞いた。ナッツが答える前に

のぞみ達が「面白かったよね！？」などとナッツに聞いていたが、さくらだけはナッツの様子の違いに気づき、嫌な予感を感じていた。その予感通り、ナッツは「何が言いたいのか分からない」と言い、さくらやココ以外の周りの空気を凍らせてしまった。

それでもと、こまちが説明しようとしても「本人が説明しなければ、分からないようなものであれば、読む意味はない」と遠慮なく言ってしまう、更には、のぞみ達の感想には「鼻屑目がある」、そして「決して良い作品とはいえない」と躊躇無く言った。

何とか自制心を保っていたこまちもとうとう耐え切れず、逃げ帰ってしまった。それをかれんは、すぐさま追った。

さくらも追うつもりであったが、その前にナッツに言うておくべき事があった。さくらがそれを言う前にのぞみ・りん・うららは「何であんなことを言ったの！？」「あんな言い方はないでしょう！？」「ひどすぎます！！」とナッツを責めていた。

それに対し、ナッツは「本当の事を言ったただけだ。間違った事は

していない」と冷静に答えた。

「でも、ナッツさん。あなたのあの言い方は良くなかったと私は思います」とさくらが切り出した。

突然切り出したさくらを見るナッツ・のぞみ達。「どついう意味だ？」とナッツがさくらに問うと、さくらは冷静に言った。

「確かにナッツさんのおっしやる通り、のぞみちゃん達の見方には鼻窟目があったのは事実でしょう」

さくらのその言葉に「さくら（ちゃん）（さん）！？」とのぞみ達は反論しかけたが、「でも」とさくらが言うと、静まった。

そしてさくらはナッツをキツと睨みつけながら「何が言いたいのか分からない」という言い方はこまちさんの立場からすれば

『自分には小説を書くセンスがない、辞めるべきなんだ。』と言われたも同然の『心』を傷つけられた最低の言葉です』と言った。

ナッツは「お、俺は別に、そんなつもりでは・・・」と言葉を濁しながら言っていたが、さくらは構わずに話を続けた。

「ナッツさんからして見れば、あくまでもあの小説を批判しただけで、こまちさんを傷つけるつもりで言った訳ではないのでしょうか。」

しかし、どこが悪いのか言わず、ただ読む価値がないと言うような言い方をされては、プロの小説家でもない限り、傷つくものです。

そしてこれはナッツさんや、のぞみちゃん達にも覚えていて欲しい事ですが、『言葉は時にはどんな刃物よりも危険な凶器となる』

のです。さくらの話に誰も何も言えずにいた。話し終わると、さくらはこまちを追いかけるべく去ろうとしたが、最後に

ナッツを向いて「もし、こまちさんが小説を書く事を否定してないのであれば、明日、こまちさんにあの小説の何が悪かったのか、ちゃんと説明してあげてくださいね、ナッツさん。後逃げないでくださいね」と言ってから、去った。

ナッツは何も言えずにいたが、それまでさくらに怯えていたのぞみ達から批判の声を浴びせられると、いつものように冷静にかわしていたが、

ココにはさくらの言葉が相当効いているように見えた。

それから30分後、さくらは気配を下にかれんとこまちに公園で合流した。こまちは多少は落ち着いてはいたものの、やはり落ち込んでいた

様子であったのか、「私、小説を書くのを辞めるべきなのかな？」とすっかり弱気な発言をしていた。

その言葉に対し、かれんは「こまち、駄目よ！ それにあの小説がナッツの好みじゃなかったただけだったのよ。私は貴女の小説は好きよ！」

とこまちを慰めながら、励ましていた。しかしこまちは「有難う、かれん。でも・・・」とまだ弱気であった。

その様子を見かねたさくらは「こまちさん。貴女にとって小説を書く事はナッツさんにちよつと駄目墮しをされただけで諦めてしま

う、そんな弱いものだったのですか！？」と言い放った。そのさくらの言葉にかれんは「さくら！」と注意しようとしたが、その前にはつとまった

こまちが「違うわ！ でも・・・」と言ったので、中断した。結局その後、さくらはこまちに明日ナッツハウスに来るように伝え、かれんと

一緒に送って行った。

「私、ちゃんと帰れるから、大丈夫よ。」とこまちは言ったが、さくらが「いえ、近くにナイトメアさんの気配がしますから、万が一に備えて

お送りします。」と説明した。そのさくらの言葉にこまち・かれんは周りを見たが、さくらに「大丈夫ですよ、唯の様子見みたいですから。」

と言われると、ほっとすると同時にさくらの『力』の凄さに改めて驚き、感心するのであった。

一方感づかれ、攻撃するのをやめたアラクネアは「ちっ！ 気づかれたか！ さすがは『カードキャプターさくら』、プリキュア以上にやっかいな存在だな！！」と愚痴っていた。それでも、こまちからわずかに絶望の匂いを感じたのを忘れていなかった。

その夜、こまちはナッツとさくらのそれぞれの言葉にどうするべきなのか、答えを出せずにいた。

一方、ナッツもさくらに言われた事を気にしており、どうすべきなのか迷っていた。ココに「自分で考えてみるよ。まあ、それでもさくらが言っ

たようにちゃんと理由を説明した方がいいと思っぜ。」と言われると、悩みながら考えていた。

翌日の放課後、こまちはすぐさま、用事があるからと帰っていつてしまい、さくら達だけでナッツハウスに向かった。

ナッツハウスに着くと、ナッツは本で解決策を練っていたが、さくらに「本に解決策を頼るようでは、例え解決したとしても、『本当の解決』には

なりませんよ。」といわれ、余計困っていた。すると、突然店前から、うるさい音がした。

表に出ると、どこかのライダーがバイクを鳴らしていたのだ。ナ

ッツが「うるさいぞ！」と言っても、「私、客なんだけど！」とライダーは

返すのみであったが、「人と話すのに顔を見せない奴に礼儀は必要ない！！」とナッツが言い、さくらが「確かに貴女はお客さんなのかもしれない

が、それでも唯バイクに乗って、音をたてられいるだけでは他のお客さんにも迷惑です。どうか、顔を見せてお話をさっしてくれませんか？」

と言われると、そのライダーも「なるほどね」と言いながら、バイ

クから降りて、ヘルメットを脱いだ。その顔を見た時、さくら以外の誰も

驚いていた。「あんた達の言う通りね、悪かったわ。」そう言った女性ライダーの顔はなんとこまちにそっくりだったのだ。

「こ、こまちさん!？」「用事があつて帰ったんじゃない?」「てか、本人!？」のぞみ・うらら・りんはパニックしていた。

しかしかれんは「まどかさん・・・ですよ?」と聞くと、「久しぶりね、かれんちゃん。」とまどかと呼ばれた女性も挨拶した。

そしてまどかはかれんと一緒に近づいて来たさくらを見て、かれんに「ねえ、かれんちゃん。この娘がこまちの言っていた・・・」と聞いた。

かれんはその問いに「はい、私の家で一緒に暮らしている『木之本さくら』さんです。」と紹介した。紹介されたさくらも前に出て

「初めまして。木之本さくらです。こまちさんのお姉さんのまどかさんですね?」と挨拶しながら、まどかがこまちの姉か聞いたのぞみ達は驚いていたが、まどかも多少驚愕な表情をしており、「さすがね。こまちが言っていたように貴女には『不思議ちゃん』

みたいな力を
持っているようね」と笑いながら言った。さくらは「そんな事は無いと思いますよ」と笑顔で答えた。

その後、まどかはのぞみ達に「こまちの姉、『秋元まどか』よ!よろしく!!」とウィンクしながら挨拶した。

のぞみ達もその明るさに感染されながら「よろしくお願いします!!」と笑顔で答えていた。

ちょうど同時刻、自分の部屋にいたこまちはピンクーを見つけたので、捕まえるべく一瞬部屋を出た。

その一瞬の間にアラクネアの放ったクモの影が原稿に取り付いた事にはこまちにも分からなかった。

それから数十分後、ナッツハウスではまどかがこまちの代わりにナ

ツツの為に豆大福を届けに来たのだと話していた。

そのこまちの優しさにさくらやのぞみ達は、感心していたが、ナツツはりんに「こまちさんを見習ったら？」と言われても、相変わらずの反省の色が

なく、かれんが「正直に言えば、傷つけてもいいの!？」と問い詰めていた。その様子を見ていたまどかは、のぞみ達の行動に参加していなかった

さくらにこっそりと全ての事情を聞き、合点がいった様子であった。

そこでさくらに（後は私に任せて）と小声で告げると、

「ナツツさん、気にする事無いよ」とナツツに言った。その言葉に驚いたのぞみ達に対しても、冷静にぶっきらぼうに言った。

「だって、こんな事であきらめるくらいなら、作家になんて・・・なれる訳無いじゃない」その言葉にかれん・ナツツは、はっとした。

特にかれんは、昨日さくらがこまちに対して言った言葉に似ていただけに衝撃があったようであった。それでものぞみ達と共に

「そんな事はありません!」とまどかに抗議し始めた。こまちの為に応援すると言うのぞみ達の様子を見た後、まどかは参加していなかった

さくらの方を見て、「あんたは、どう思っているの?」と聞いた。

まどかの突然のさくらへの質問に、のぞみ達は今度はさくらの方を見た。

それに対しさくらは、「そうですね。私も、のぞみちゃんやかれんさん達の様に、こまちさんを信じていますし、応援したいと思いません。

でも、まどかさんが言うようにナツツさんに『読む価値がない』と言われただけで、自分に才能がないんだと思ひ込んで、書くのを辞めるのならば、

すぐに小説家の夢を諦めるべきだと思います」 と冷静に言った。

のぞみ達はそんなさくらの意見に反論しかけるが、その前に

「最も」とさくらが言うと、又しても静まった。そして「ナッツさんがこまちさんには書く才能が無いと言ったのでないならば、どこが悪かったのか
ちゃんと言う責任があると思います」とさくらは告げた。その言葉にナッツものぞみ達も何も言えなかった。

ただ、まどかだけはさくらに近づくと「全く、本当にたいした子だね!! あんたは! その歳でそこまで理解して考えているなんてね!!!」と

さくらの頭をくしゃくしゃにしながら、誉めていた。その後、まどかは帰ろうとしたが、ナッツが呼び止めた。

その後、全員がこまちの家に到着した。最もさくら以外はこまちとナッツの会っている様子が気になっているのか、そっちへ行ってしまったのであった。

さくらはそれからしばらくの間、まどかと一緒に離れた所で様子見をしていたが、邪悪な気配を察すると、『^{スリープ}眠』を使用し、まどかを寝かせ、こまちの部屋へ急いだ。さくらの予感どおり、誰も部屋にはいず、邪悪な気配のした原稿のみがあった。

一方、原稿の物語の中に閉じ込められたのぞみ達は現れたアラクネアとコワイナー相手にプリキュアに変身して戦っていたが、今回のコワイナーの実力を

前に圧倒的な苦戦を強いられていた。コワイナーのロープ攻撃の前にとつとつミント以外のプリキュア達が捕縛され、空中に吊り下げられた状態に

されてしまったのだ。自分のせいだと、謝るミントにナッツ・ドリームが「ミントが悪くないナッツ! 何度も挑戦するナッツ! 夢を諦めるなナッツ!」

「失敗したら、また、チャレンジすればいいんだよ!」「チャレンジは何度でもできるんだから!!」と激励した。その言葉でミントは立ち上がるうと

したが、「そうはさせん！」と叫ぶアラクネアがミント・ココ・ナツを自らの糸でぐるぐる巻きにしてしまったのだ。

これにはさすがのミントもどうすることもできず、アラクネアが「これでおしまいね！　いかに『カードキャプターさくら』といえども、物語の中にまでは

助けに来られぬはず！　アハハハ！」と言いながら、海賊の剣を持ち、ミントの前に立った。ミントは全てを覚悟し、下を向いていた。

ドリーム達も助けようとするが、身動きができずにいた。そしてアラクネアが遂にミントの首をはねるべく、剣を振り落とした。

「これで、あなたの物語も終わりよ！」アラクネアがそう叫びながら。だがその時、『奇跡』が起きた。

「終わりなんかじゃない！」誰かの叫び声がしたと同時に、アラクネアは剣を弾かれ、吹き飛ばされていた。自分を吹き飛ばした者の姿を見た

アラクネアは愕然としていた。同時に目を閉じていたミント・ドリーム達もその声の主の姿に驚愕していた。

「……」（カードキャプター）さくら（ちゃん）（さん）
「……？」「……」　そうミントの危機を救ったのはさくらだったのだ。

さくらはその後すぐ、ミントを拘束していた糸を切ると、コワイナを『凍^{フリーズ}』を使用して、一時的に行動不能にし、ドリーム達を救出した。

そして津に立ち直ったミントの「これは私の物語よ！　勝手に終わらせたりはしないわ！！」との叫びと共に、反撃が始まった。

ドリーム・レモネード・ルージュの連携攻撃のあと、「ミントの物語を土足で踏み荒らした事！　反省なさい！！」と叫んだ怒りのアラクアの必殺技により、

コワイナは倒されたのであった。アラクネアは「おぼえているー！！」と捨て台詞を吐きながら去っていた。

現実の世界に帰還後、ナッツはこまちに悪い所を注意しながらも、良い所もあると、誉めていた。これで一件落着に思えたが、「ほえええー！」とさくらが叫んだ。「ど、どうしたの、さくらちゃん？」のぞみが聞くと、「私、まどかさんを眠らせたままだった！」とさくらが言い、

慌ててまどかを起こしに行った。すぐにまどかは起きたが、幸いにも、何も聞かれずにすみ、ほっとするさくらであった。

その後、帰る前にさくらはこまちに「さくらさん、本当にありがとう」と礼を言われ、「どういたしまして」と笑顔で答えていた。

最も、後日、さくらを題材にした魔法使いの作品を書きたいとこまちに協力をせがまれ、さくらは困り果てていた。

「さくらさん、待って〜」「いやですー!!」「そう言いながら追いかけてっことをしている2人をのぞみ達は笑って見ていた。

第9話・さくらとこまちの小説家断念！？（後書き）

次回はりんをさくらが励まし、過去の自分の事を少しだけ話します。

第10話・さくらと純情乙女の恋物語（前書き）

今回のお話の中でさくらは自分の過去の一部を明かします。

第10話：さくらと純情乙女の恋物語

第10話：さくらと純情乙女の恋物語

先日の事件から数日経ったある日の放課後、まだ明るかったが、賞品が売り切れた為、ナッツハウスは早くに閉店となった。

この状態に「もう閉めなければならなかったのですか?」「全部売り切れちゃったの?」「凄いですね」「どうするの、お店?」

「このままお休みを続ける訳には行かないわよね?」「さくら・のぞみ・うらら・かれん・こまちが質問や感想をナッツ達に言った。

それに対し、ココが「ああ。今日はナッツと一緒に新商品を用意しようと思ったんだけど、りんが・・・」とナッツと共に2階を

見ながら言葉を濁した。その言葉を聞いて、さくら達が2階に上がってみるとそこで見た光景は一心不乱にアクセサリーを作っているりんの姿であった。「りんちゃん、何してるの? おくい」とのぞみが聞いても、全くの返答なし。

「ずっと話しかけても返事をしてくれなくて、ずっとあの調子なんだ」とナッツが諦めたように言った。するとそのぞみは驚いたように「りんちゃんがアクセサリーを作っているの!?」と叫んだ。セサリーをつけないりんちゃんが!?!と叫んだ。

「ああ」「何を作っているんだか」「ココ・ナッツは訳が分からないので、そう呟くしかなかった。ちょうどその時

「できた!」「りんがアクセサリーを作り終えたようであった。その出来にのぞみは思わず「かわいい!」と感想を言った。

しかしそれから数分間りんはアクセサリーを身につけながら鏡の前で一人芝居をしていた。その光景にさくら以外は啞然としており、のぞみは「りんちゃん、こわい」、うららは「楽しそうですね」、かれんは「きつと忙しいのよ。部活も大変だし、お家の手伝いもあるしね」、こまちは「私でよければいつでも力になるわ」と芝居

をやめたりんに対しそれぞれ思った事や気遣いをしてあげた。

さすがのりんも「いや、そんなんじゃないから！たまにはプレスレットを付けてみるのもいいかなって思ってた！」と笑いながら言った。その後ナッツに新デザインを見せたりしている内に鐘が鳴るとりんは家族が出かけるから、店番をしなければならぬと言って、

去っていった。のぞみはそんなりんの様子に「そういえば前にも似たような事があったんだけど、あれは確か・・・」と思い出そうとしていた。その時、うららがりんのバッグが置き忘れたままだに気づいた。これにはこまち・かれんも「あのりんさんが・・・」

「部活の道具の入っているバッグを忘れるなんて。確かにおかしいわね」とりんを心配していた。そこでかれんはずっと黙っているさくらの方を見ると、余りにも真剣な顔をしていたので「どうしたの、さくら？」と聞くと、「これはあくまでも私の考えなんですけれど」

・・・と一旦区切ってその後に「りんさん、ひよつとして『恋』をしているんじゃないでしょうか？」とさくらが言った。

そのさくらの言葉にのぞみ達は「」「」「ええっ！！？」「」「」と叫んだ。

その後、忘れたバッグを届ける事を理由にさくら達はりんの実家である花屋に寄った。ココ達も気になって後をついてきた。

お店近くに着くと、ちょうどりんが男性客と話し込んでいた所であった。その後、男性の家にお花を届けることになり、男性が去るとりんは頬が真っ赤になり、頭から蒸気を出していた。その様子を見て、さくらはりんが恋をしている事を確信した。

男性が完全に去った後、「りんちゃん、忘れ物！」のぞみはりにバッグを渡し、「そういえばりんちゃんがアクセサリをしていたのって

確か好きな人が出来た時・・・」と思い出しながら言うと、りに「余計な事は言わなくていいの！！」と口を塞がれていた。

その後、りんはのぞみ達（さくら以外）に進められ、着替えて配達に行くことになった。店番はのぞみ達がするという事になったので行く時、ナッツが男性用にと、アクセサリーを渡した。しかしさくらは一瞬感じたりんに関する『予知』のビジョンが気になっていた。結局その数分後、「やっぱり、気になる〜！」とのぞみが言い出したのを皮切りにかれんまでもが「生徒会長として」などと言い出したので、

ココ・ナッツそしてさくらがカードで呼び出した『ミラー』が店番と言う事になった。さくらまでもが行こうとする事に疑問を持ったココ達に

対し、「何だか悪い予感がするんです」とのぞみ達に聞かれないようにさくらが小さい声で言った。

さくらによつてりんの気配を探し出し、その場所へ行つて見ると、りんは男性の住んでいるアパートの前でうろろろしていた。

そんな様子を見ていたさくら達とは別に離れた場所から見ていたギリンマもりんから、大きな期待が裏切られた時の絶望の匂いを感じていた。

数分後、男性が窓を開けて花に水をやるうとしていたので、りんはそのチャンスを逃すまいと一気に窓まで近づいた。

しかしりんが「あの！プレゼントが・・・」と言い掛けた時「どなた？」と男性の側に恋人と思われる女性が近づいてきた。

男性が彼女にりんがいつも花を買いに行く店の娘と知り「まあ、可愛らしい！素敵なお花をありがとう！！」と彼女はお礼を言った。

「あ、はい」とりんが戸惑いながら答えると、男性が「彼女が喜ぶ顔が見たくて・・・それでよく君の家の花屋で買ってたんだ」と説明した。

その説明を聞いたりんは知った事実ショックを受けながらも着けていたアクセサリーと持っていたアクセサリーの両方を外し、「これ、プレゼントです！！」と2人に手渡した。男性は「いいの

？」と聞くと、「いつもお花を買ってくれる御礼です！！」とりんは気丈に答えた。「お2人に良く似合うと思って！！なかなかいいデザインでしょう！」と笑顔で説明した。

その説明に女性は「まあ、ほんと。素敵ね」と答え、男性も「本当だね」と答えた。そこで男性は「でも、何で彼女の事を？」と聞く

と、
りんは「乙女の感です！」と誤魔化し「それじゃまたいらしてください！」と言うや否や駆け足で去った。

そのりんに対し、男性は「有難う！！大切にするよ！！」と答えた。りんはさくらやのぞみ達に全く気づかず、そのまま駆けて行った。

「りんちゃん！！」のぞみは慌てて後を追うとするが、かれんに止められた。

「今はそつとしておくべきよ」かれんのその言葉にこまち・うららはもちろん、さすがのぞみも今はそれしかないと思っていた。

そこでうららはあることに気づいた。「あれ？さくらさんは？」こまちも「本当。いないわ」と言った。

慌てて周囲を探すのぞみ達だったが、どこにもいなかった。「まさか！？」かれんは考えられるたった1つの場所に気づいた。

夕暮れ。りんは公園で1人でベンチに座りながら、男性との出会いやアクセサリー作りの事を思い返していた。思い返している内にだんだん涙が

落ちて着てしまい「またやつちやった・・・ ばかみたい・・・」と勝手な夢を見て舞い上がっていた自分を情けなく思い、そこへ

すると顔を俯かせていたりんの目の前にハンカチを持った片手が現れた。思わず顔を上げたりんが見たのは追いかけてきたさくらであった。

りんはハンカチを成り行き上受け取りはしたものの、素直に礼を言えず「何しに来たの？」とそっけなくしか言えなかった。

それに対しさくらは「励ましに来た、と言っただらどうしますか？」
とりんの言い方を気にせず、隣に座りながら普通に言った。

その言葉にりんは「ほつといてよ!!」とハンカチをさくらに押し返しながら、顔を背けた。そんなりにさくらは冷静に対応しながら言った。

「ほつとくなんて・・・できません・・・」そして「今のりんさんは昔の・・・私の知っている娘と同じ悲しい顔をしていますから・・・」

と言った。りんはその言葉に驚き、思わずさくらの方を見ながら聞き返した。「どういう事!？」それに対しさくらは語りだした。

「その娘は今では私やりんさんと同じ歳なんですが・・・その娘はその娘のお兄さんの同級生に恋をしていました・・・年齢の差は7歳でした・・・」

・ 初めの頃は単なる憧れでしたが、11歳の時に本当の『恋』と自覚しました・・・そしてその娘はその年のその人の高校の文化祭に呼ばれた時、

ふたりつきりになって・・・思い切って告白しました・・・でも・・・その娘の想いは届きませんでした・・・」

さくらはそこで言葉を区切り、キツとしながら立ち上がった。その様子にりんは「どうしたの?」と聞くと、さくらは「お話の続きは後でします。」

どうやら、ナイトメアさんのお出ましみたいですから」と答えた。それを聞いたりんも立ち上がった。そしてさくらの言う通りにナイトメアの

ギリンマが現れた。ギリンマはりんを見ながら「惨めだな」と吐き捨てた。その言葉にりんは思わず顔を背けたが、「人が落ち込んでいる時に」と

叫びながら睨みつけた。しかしそんなりんにお構いなく、ギリンマは言葉を続けた。「何を舞い上がっていたのかは知らんが・・・全部・・・」

無駄に終わったな!!」「無駄じゃない!!」のぞみが叫びながら、かれん達と共にさくらやりんの側に駆け寄った。そして

「無駄な事じゃない!!人が人の事を一途に想うって事は、とつても大切な事なんだよ!!全然無駄なんかじゃない!!」とのぞみは叫んだ。

その言葉にさくらは思わず微笑んでいた。(やっぱり凄いね・・・のぞみちゃんは・・・)のぞみの言葉はそれだけ素晴らしかったのだ。

「みんな!行くよ!!」「Yes!!」「」のぞみ達はプリキュアに変身した。そしてさくらも杖の封印を解除した。

それに対しギリムは噴水をコワイナー化させた。今回のコワイナーは胸から水流を出して攻撃してくるだけでなく、どんどん大きくなっていくので

ある。さすがのドリーム達も苦戦を避けられなかった。そんな中全く動きを見せないさくらに対しギリムは「ずいぶん冷たい奴だな!お仲間が

危ないと言うのに!」と嘲り笑っていた。しかしさくらは凜とした声で言った。「私は信じています・・・」「何!?」ギリムは思わず聞き返した。

ドリーム達もさくらの方を向いた。「私はドリーム達を信じています・・・彼女達は現実の厳しさに屈せず・・・希望を失わずに立ち向かえるの

だと!!だから今はまだ助けません!!」さくらは主にルージュを見ながらそう叫んだ。その言葉を聞いたルージュは何かを感じていた。

ギリムは「戯言を!!」と叫びながら、さくらを攻撃したがその攻撃はルージュによって阻止された。驚くギリムとは裏腹にルージュは言った。

「ありがとう、さくら・・・おかげで吹っ切れたよ・・・」「どんな現実が目の前に立ち塞がっても・・・私は前向きでいてみせる!

！」
そのルージユの言葉と共にドリーム達の反撃が始まった。ドリーム達をしばいしてやってきたココ・ナッツによって水道栓を閉められ、弱体化。

ココ達を攻撃しようとしたギリンマもレモネード・さくらの連携攻撃で阻止され、さくら達に攻撃しようとしても、ミントに阻止されてしまったのだ。

そしてコワイナーはアクア・ルージユ・ドリームの必殺技の連続攻撃により倒された。ギリンマは悪態をつきながらも退散した。

戦いが終わり、帰る途中にのぞみ達はりん映画に行かないかとか、ケーキを食べないか。お茶を飲まないか、和菓子を食べないかと、励まそうと

していたがりんにそれぞれ突っ込まれ、全部却下されてしまい、がつくり来ていた。そんなのぞみ達を尻目にりんはさくらに聞いた。

「さくら・・・あの話の続きを聞いていい？」のぞみ達は何の事という顔をしていたが、それに構わずさくらは「はい」言って話を続けた。

「その娘は告白を断られた時にその相手にこう言われたのです。『僕も君の事が好きだよ・・・でも、僕は君の一番好きな人じゃないから』」

その言葉の意味をりんはもちろんの事だが、のぞみ達にも分からなかった。さくらはそれを説明しながら話を続けた。

「その人はこう言いました。『君が僕を好きな気持ちと君のお父さんを好きな気持ち・・・似てない？』と。彼女はそこで気づかされたのです・・・」

自分のその人を好きな気持ちは『愛している』事よりも『憧れ』の方が強かったのだと言う事を・・・」

そのさくらの言葉にりんやのぞみ達は何も言えなかった。そしてさくらの話は続いた。「そこで2人はある『約束』をしました。もし

互いに一番

好きな人ができて、その人が彼又は彼女にひどい事をした場合、懲らしめてやる、と。笑顔で分かれました・・・でも・・・帰りに一緒に来ていた

男の子と公園で話している内に好きだった人の前では我慢していた涙を流さずに入られませんでした・・・その男の子に対し、『本当にその人の

気持ちも分かっているよ！本当だよ！！』と泣きながら言いました。
・ そうしたらその男の子はただ静かにその娘を受け止めました・

そして『分かっている！ちゃんと・・・分かっているよ』と優しく声をかけ、ハンカチを差し出しました」

そこまで聞いて、りんはさくらの顔とその男の行動とさくらの自分に対する行動が似ている事からある事に気づいたが、今は敢えて続きを聞いていた。

「そしてその女の子が『いつか、私の前に一番好きな人が現れたら、必ずその人にその想いが届くって！教えてくれたよ！』と男の子の肩の中で

泣きながら言うとその男の子ははつきり言いました『大丈夫だ・・・』
『絶対見つかる』よ』とその言葉に少女は救われました。それからしばらくして

彼女は本当に『一番愛している』人がその男の子だったと言う事に気づいたので・・・その後幾つか問題はありましたが、2人は両想いになりました

・・・「そこでさくらは話を終えた。それを聞いていたのぞみ・うらら・こまちは「凄くいい話だね！！」「感激しました！！」「その女の子も

男の子も両想いになれてよかったわ！」と笑顔で感想を述べていた。しかしりん・かれんは違った。凄く悲しいような怒っているような顔をしていた。

それに気づいたのぞみは「どうしたの？りんちゃん、かれんさん」と聞くと、2人ともそれには答えずさくらに聞いた。「さくら、その女の子は

あんたじゃないの？」「私も今の話をしていた貴女の顔とかからそう感じたわ」とりん・かれんはそう言った。のぞみ達はその言葉に驚いて、

さくらの方を見るとさくらは悲しい笑顔をしながら言った。「ばれてしまいましたね・・・その通りです・・・でも私がそうだったと知れば、余計に

りんさん達を気遣わせるかなと、思ってしまったんです」その言葉に誰もそれ以上は追及せず、何も言わなかった。皆、さくらの気持ちを理解して

いたからだ。そこでさくらはりんを抱かれているココ・ナッツに目を向けながら質問した。「と・こ・ろ・で、ココさん・ナッツさん。店番はどうした

のですか？」その質問にびくつとするココ達。さくらは笑顔で更に追求する。「ま・さ・か、ミラーさんだけに任せてきたという事は無いですよー」

その言葉でのぞみ達もココ達が店をミラーだけに押し付けてきた事が分かった。その後すぐさくらの「では、りんさんのお店に急ぎましよう!!」との

掛け声と共に全員店へ急いだ。その前に「後、ココさん・ナッツさんは3日間おやつ抜きですからね。」と笑顔でさくらに言われ、自分達を気遣い、

ミラーと一緒にいさせてくれたさくらに文句を言えないココ達は「トホホ・・・」と嘆くしかなかった。その様子をのぞみ達は苦笑いしながら

見るしかなかった。また店へ向かう道中、りんはさくらに「有難うさくら」と礼を言い、さくらも「どういたしまして」と笑顔で答えた。

その後店の近くでさくらは店の裏に回り、いそがしくて、てんてこまいだったミラーと何とか入れ替わり、りんやのぞみ達と店の手伝いをしていた。

ココ・ナッツは翌日もう一度実体化したミラーに必死に土下座して謝った事で3日間のおやつ抜きを1日だけにしてもらったそうだった。

第10話・さくらと純情乙女の恋物語（後書き）

今回はさくらはもちろんのことながら、かれんを話のメインとします。

第11話・さくらとかれんの私生活取材(前書き)

この話ではさくらの怖い(?)部分が見れるかもしれません。

第11話：さくらとかれんの私生活取材

第11話：さくらとかれんの私生活取材

サンクルミエール学園の制服が夏服に変わったある日の昼休みの事。新聞部の増子が大量の紙の束を持って、カフェに現れた。

そしてテーブルにいるかれんの前にどさつと置いた。「え、これは？」かれんは何事かと思つて、増子に聞いた。すると増子が

説明した。「水無月会長。これらは全て水無月会長の日常生活を知りたいと言つ生徒達からの要望ですよ！」

その余りの量に「こんなに！？」「凄い量ね！」「羨ましいです！」「凄いわ！！」のぞみ・りん・うらら・こまちはそれぞれの感想を述べていた。しかし当事者であるかれんとそのかれんの家で暮らしているさくらは複雑な気持ちであつた。

そんな2人にお構いなしに増子は「そこで！我がサンクルミエール通信が満を維持して企画した特別企画！！憧れの水無月かれん会長に密着取材！普段はクールな生徒会長の日常生活が今明かされる！！」などとぺらぺらと話していた。

結局その後、おタカさんが取材の申し入れに返答を渋るかれんの秘密を話すと言い出したりなどのトラブルがあつたが、最後には

正々堂々と取材したいという増子の言葉とその場にいた生徒達の懇願そしてこまちの「みんなの希望だし、こうして正式に取材を

申し込んでいるんだから、受けてあげてもいいんじゃない？」とどめの言葉を言われた事でかれんはさくらを一度見て、さくらが頷いたのを確認した後、「分かつたわ。今度の日曜日に取材を受ける事にするわ」とため息をつきながら返答した。

それを聞いた増子は「ありがとうございます」と言つと「それから一つお願いがあるのですが・・・」とかれんに頼みをしていた。

その様子を見ていたさくらは悪い事ではないと理解していたのか、聞かない振りをしていた。

そして日曜日当日。増子は水無月邸のその大きさに驚かされたのか「凄い……果てしなく大きな家……」とこぼしていた。

その後すぐ門が自動的に開き、「お待ち申し上げておりました……どうぞお入りください……」と執事である坂本が音声で

案内をし、増子も「あっ！はい！」と慌てて中に入った。そして玄関まで進むと、そこで待っていたのはかれんと坂本とメイド服を着ていたさくらであった。増子はさくらのメイド姿に思わず「き、木之本さん！どうしたんですか！？その格好は！？」と叫びながら質問をした。苦笑いをするかれんとは対照的に当のさくらは冷静に「私は親などの事情があつて、かれんさんのお屋敷に住まわせてもらっているのですが、ただ住まわせてもらうだけでは悪いなと思ひまして……じいやさんの手伝いをさせてもらっています。

最も私がメイドとして働くのはあくまでも学校に行く前と帰宅後の短い間だけですけれどね……」とてへつとしながら説明した。

その説明を聞いて納得したのか増子のかれんとじいやに挨拶をした。

「今日はよろしく願ひします！」それに対し、じいや・かれんは

「おはようございます」「いらっしやい」と挨拶をした。その後増子のかれん達の案内の下についていった。

案内されている最中に増子は「あの会長……今日は……」と言いかけたのに対し、かれんは承知しているように「分かっていきますよ……今日は他の誰にも邪魔されず……きちんと取材をしたいという事だったわね？」と確認で聞くと、増子も「はい！」と答えた。そう増子の頼み事とは「誰にも邪魔されずにきちんと取材をしたい」という事だったのだ。

しかしそれはあっという間に崩される事になるとは怪しげな気配を感じていたさくら以外はかれんも増子も気づいてはいなかった。

かれんが増子にテラスで取材を受けていた時、タキシード服を着ていた不審者達が次々と現れた。

「お嬢様、お茶の用意が出来ました。どうぞ、ごゆっくり」「砂糖とミルクでございます！」「甘いものでもいいかが？」

かつらをしながらウエイターの格好であったのだが、増子はその正体に気づいていなかった。

逆にその正体を見抜いていたかれんはその一人一人が来るたびにびつくりしたり、飛び跳ねていたが、何とか質問に答え、

「ちよっ・・・ちよつとごめんなさい」と増子に言いながら、駆けつけてくれたさくらと共に不審者達をある一室に移動させた。

そして4人の不審者達と共にある一室に入ると「貴方達！ここで一体何をしているの!?」とかれんが問い詰め始めた。

そんなかれんに対し、変装を解いたのぞみ達は飄々とした態度で答えた。かれんはその答えに対し、一々突っ込みを入れていた。

「だって！心配だったんだもん!!」「そんな事言つて!どうせ面白半分で来ただけでしょ!!」

「あっ・・・ばれちゃったか」「いやいやいや・・・かれんさん正直だからプリキュアの事、しゃべっちゃうかと思って・・・」

「言う訳無いでしょう!!」「取材つてどういうものか一度見てみたかったんですー!!」「私よりたくさん取材受けてるじゃない!!」

「演劇部で借りてきたの!なかなか面白いでしょう!」「全然面白くない!!」「大きな声で話すなココ!」「うるさいナッツ!」

「貴方達まで!!」のぞみ達と一緒に来ていたココ・ナッツに対しても突っ込むのを忘れないかれんであった。

その後「いい!これも生徒会長の仕事の一つなんだから、邪魔しないで頂戴!!」とのぞみ達に注意した。その注意が終わるや否や

さくらが「かれんさん!」とかれんに声をかけた。さすがにさくらには怒つていなかったものの「何!？」と怒った顔で振り向いた。

さくらは一瞬怯みながらも「あ、あの。増子さんの気配がこの部屋に近づいて来てますけど、どうします?」と感知した事を知らせた。

そのさくらの言葉に少し落ち着きを取り戻したのか少し慌てながら

も「そ、そうね・・・私は増子さんを温室に案内するから、さくらはこの子達を見張っててくれる？」とさくらにのぞみ達の見張りを頼んだ。もちろんさくらは了承した。それに対し、のぞみ達はかなり不満げであったが、「今度・・・かれんさんの・・・いえ、お嬢様の邪魔をなさるといふならば・・・私も皆さんに対し・・・相応の対応をさせてもらいますからね・・・」とさくらに笑顔で言われると「・・・は、はい（ココ）（ナッツ）」「・・・」と怯えながら

文句を言わなくなった。それで安心したさくらはじいやに呼ばれ、お手伝いをしに少しのぞみ達から目を離れた。しかしそれが甘かった。

温室ではかれんが増子の質問に答えていた。増子がかれんの植物の世話をしているのを聞き「さすがは会長。会長をやっているだけあって

世話好きなんですね？」と聞くと、「そうじゃないの・・・初めは『本当は世話なんか焼きたくない、でも何とかしないと』って思っていたの・・・」とかれんは答えた。その答えに増子は「えっ？それはどういう意味ですか？」と聞いた。それに対しかれんは「ううん！今の言葉は忘れて！」と笑顔で答えた。その後、又してものぞみ達がかれんをもてあそばうとしていたので、かれんは急ぎ足で移動した。

しかし、東屋に移動した後も、のぞみ達のもてあそびは続いた。インタビューを受けているかれんに対し、のぞみ達はスケッチブックで「ファイト！」「落ち着いて！」「素敵〜！」「おなかすいた！」と好き勝手な事を書いて、からかっていた。

さすがのかれんも表情を固まらせたままがつくりとなっていた。そんなかれんにじいやより先に来たさくらがテレパシーを送った。

（かれんさん！）（！さくら！？）（ごめんなさい！私がちよつと目を離れた隙に！後は任せてください！！）（そ、そう？頼んだわ）かれんは突然のさくらのテレパシーに驚きながらも増子にばれない

ように対応した。そしてかれんとのテレパシーを終えた後、さくらはのぞみ達の後ろにレポートした。咄嗟に現れたさくらにのぞみ達はパニックになりかけたが、声を出す前にさくらにレポートで別の場所に移動させられた。そして移動した部屋でさくらは遂にきれた。「私・・・言いましたよね？・・・お嬢様の邪魔をしたら・・・どうなるかって・・・」背中に怒りのオーラを纏いながら言うさくらに対し、のぞみ達は「「「「「ひっひいっ！ご、ごめんなさい！！！」

」と恐怖に怯えて、悲鳴をあげていた。それから30分後、かれんやじいや・増子がさくらと共に現れたのぞみ達の姿を見た時は、のぞみ達のあまりにも青ざめた顔とさくらの怖いぐらいの笑顔であった。しかし数分後には又してもかれんを弄び、とうとうかれんを怒らせたのぞみ達であった。そんな騒ぎを起こしているのぞみやかれん達そしてそれをなだめようとするさくらを見ながら、増子は呟いた。「いつもの生徒会長とは違うような気がする・・・」それに対し、じいやが答えた。「お嬢様は昔は感情を表にあまり出さない方でした。

しかしのぞみさん達と出会ってから、それも変わりました・・・特にさくらさんが一緒に住むようになってからは本当の『姉妹』のように仲良くしておられます」そのじいやの言葉に増子は納得をしていた様子であった。

それからしばらくしてさくらとかれんがのぞみ達を追い返している間にアクラネアの襲撃もあったが、さくらの『動』^{ムネ}・『浮』(フロート)の魔法による援護とアクアの見事な戦術によって、ドリーム達を沼地の罠から救出し、アクラネアを追い払う事ができた。

この戦いで増子に正体がばれたのではと心配するかれん達に対し、さくらはにっこりしながら「大丈夫ですよ。正体はばれてはいいませ

んし、

記事に載ることは無いと思いますよ」と言った。かれんは「どうして分かるの?」と聞くと、「それは記事が張られる当日になったらわかりますよ」とさくらは明確な理由を言わなかった。

翌日、さくらの言葉通り、記事にはプリキュアの事は特に書いておらず、かれんの私生活で埋まっていた。書かれている事にかれんは恥ずかしがっていたが、そのことはさておいてさくらに何故載らないのかと分かっていたのかと聞いた。それに対し、さくらは

「まずあの戦いで増子さんは実際に自分の『目』でプリキュアを見た訳ではないからです。次に撮ったであろう写真にもはっきり写っていないかった事・・・そして多分おタカさんに言われたんだと思うんですけれど、『プリキュアに対する取材の許可』を撮っていないかった事が

決定打となったんです」冷静に説明した。まさにさくらの言う通り、増子は記事にする前におタカさんに出会い、その事を注意されたのだ。

改めてかれんやのぞみ達はさくらの考えや『予知』の力の凄さに驚かされていた。

最も増子がプリキュアに対して取材を申し込む予定と書かれているの見て、はしゃいでいるのぞみやうららを横目で見ながら、さくらとかれん

が「前途多難ですかね?」「かもね」と苦笑いしながら言っていた。

第11話：さくらとかれんの私生活取材（後書き）

今回はさくらとつらら互いに母親を幼い頃失った者同士の交流がメインとなります。

第12話・おくらとじいらの秘密（前書き）

おくらとじいらの共通な寂しさを持つ者の交流がメインです。

第12話：さくらとうららの秘密

第12話：さくらとうららの秘密

ある日の放課後、ナッツハウスにて、うらはは1人であるノートを見ながら小さな声で何かを口にしていた。そしてその後、

手早くノートを鞆に入れ「それでは、先に失礼します」と言って帰ろうとした。その様子を不思議に思ったりんは

「早いなー。今日もレッスンの？」と聞いた。それに対しうらがが「あつ・・・いいえ・・・今日はちよつと・・・」と

言いかけた時、のぞみとココが慌てて駆け込んで来た。さくらがその様子に「どうかしたの、のぞみちゃん？」と聞くと、

「大変！大変！外に怪しい人がいる！！」「ココも見たココー！」のぞみ・ココが怪しい人間が店の外にいと説明した。

その説明を聞いた後、かれんは素早くさくらを連れて身を隠し様子を見、こまちも四つんばいになって外を見、りんも戦闘態勢に入っていた。のぞみも外からは見えにくい所に隠れ、外を見ていた。

そしてさくらやうらら以外はのぞみの言う通り、外に2人のサングラスをかけた者達を見た。「確かに怪しい」とりんはその2

人組を見て言った。しかしさくらはその2人の姿を見なくても気配を感知する事で何者なのかを見抜き、理解した。（外にいる人

達のこの気配は・・・そうか・・・なるほどね・・・）

ナッツが「面倒だ」と言つて、読んでいた本を閉じると、扉の方へ向かって行った。こまちが「ナッツさん・・・」と心配しながら

呟いた。するとさくらが自分を守るかのように強く手を握っていたかれんの手をそつと離し、「さくら？」と驚くかれんにも

「大丈夫・・・」と言い、そして「ナッツさん、外にいる人達を注意したら、後は私に任せてくれませんか？」とナッツに聞いた。

のぞみ達はその言葉に驚き、ナッツも「いいのか？」と聞くと、さくらは笑顔で「はい。少なくとも外にいる人達はナイトメアの

方々ではないですから」と言った。それを聞き、ナッツも「分かった」と言った後、扉を開け「おい！その2人！！」と2人組に向かつて怒鳴った。2人組は見つかって驚いたのか「いいー！？」と叫びながら慌てて逃げだそとしたが転んでしまった。そしてその2人の前にナッツとさくらが立った。まずナッツが「この店に・・・何か用でもあるのか？」と質問するとサングラスが取れた男性と老人は「ああ・・・いや・・・僕は！」

「唯の通りすぎりじゃ！」と誤魔化そうとした。そんな2人を追及しようとするナッツをテレパシーで（さつき言ったようにここは私に・・・）伝えると、ナッツも分かったと頷き一歩引いた。そして今度はさくらが2人に挨拶しながら聞いた。「初めまして。御二人はうららちゃんのお父さんとお祖父さんでいらっしやいますね？」「ええー！？」と2人は何故知っているんだと言う顔をしていた。すると店から出てきたうららも「ああー！お父さん！？おじいちゃん！？」と2人を見て叫んだ。うららに見つかって観念したのか「や、やあ」「うららー！」と2人はうららに声をかけた。その様子を見ていたのぞみ達も目の前の出来事に「」「ええー！？」と驚いていた。

しばらくして店に入った後、2人は自己紹介した。「うららの父のミツチエルです。皆さんどうぞよろしく」「うららの祖父の平蔵です。いや、今日は素敵なお嬢様方と会えて幸せですわい！」わしがもう20年若ければアタクシしていたのじゃが！」平蔵のナンパにはさすがのさくらやのぞみ達も呆れていた。ミツチエルに対し、のぞみは下手な英語を使おうとしたが、りんに「日本語で挨拶されたでしょう」と突っ込まれ、後でフランス人だという事も聞かされた。その後、ミツチエル達はさくらに「そういえば、君はなぜ私達がうららの親関係である事を知ったんだい？」「わしらは何も言っていないのに」と質問した。それに対しさくらには微笑みながら「御二人の気配がうららちゃんに

凄く似ていたのを感じたからです。後、うららちゃんを心配して様子を伺っているのも・・・」と説明した。これには平蔵達は勿論の事だが、のぞみ達も久々にさくらの凄さを見せられて驚いていた。その後2人はすぐに帰ろうとしたが、「待って！」とうららに止められ、びくつとしていた。そんな2人にお構い無しにうららによる尋問が始まった。「お父さん達！何をしに来たの！？」「ああ・・・いや・・・」「たまたま通りがかっただけじゃ・・・」

「誤魔化さないで！！さくらの言ったように私の様子を探りに来たんでしょう！？」「あ、いや・・・それは・・・その」「その最中にうららのマネージャー・鷲尾がやってきたが、鷲尾が何故平蔵達がここにいいのかと聞いてもうららの時と同じ答えを言い、「さつきと同じだし」とりに突っ込まれ、鷲尾がうららの様子がおかしいと平蔵達に言い、さり気無く探りをいれるつもりだったと大声で話しているとりんに「あの一・・・聞こえてますけど・・・」と突っ込まれると、余計に慌ててしまい、うららに

「私！変なんかじゃありません！！」と怒鳴られると即座に退散して行った。「もう！」と頬を膨らませて怒っているうららにさくら達は苦笑いをする他はなかった。

その後、うららの家族の事をさくら達は聞いていた。うららが小さい頃からあんな調子で撮影の時も応援に来ていたそうだった。それを聞いたのぞみが「本当にうららの事が大好きなんだね！！」と言うと、うららは顔を少し赤くしながら「でも・・・ちよつと恥ずかしいです」と言った。そんなうららにこまち・かれんが「恥ずかしかる事無いわ」「そうよ。いいお父さん達じゃない」と行った。そこでりんが「そういや・・・この前の遊園地には来てたの？」と聞くと、「あの時は2人ともどうしても来れなくて・・・すごくがっかりしていました」とうららが説明した。ココ・ナッツも「うららの名司会見たかったココ」「まあ、次の機会があるナッツ」と平蔵達にうららの司会ぶりを見せてあげたかったように言い、その場は和んでいた。

しかしのぞみの次の言葉でその場が少し沈んだ雰囲気になった。「
そういえばお母さんは？うららの仕事を見に来ないの？」

「のぞみちゃん！！」さくららがのぞみを止めようとして叫んだ。そのさくらの行動に「え？私、何か悪い事言っただの？」と質問するとうららが「やっぱり・・・さくらは気づいてましたね・・・」

「と言つとさくらは「ごめんなさい・・・以前私のお母さんの話をした時、一瞬だけうららちゃんの顔が悲しそうな顔をしていたから」と謝りながら説明した。そんなさくらにうららは

「さくらさんは何も悪くありませんよ。」と言つとのぞみ達に「うちのお母さんは・・・私が小さい時に病気で亡くなつたんです」と説明した。それを聞いたかれん達は驚いており、のぞみも「ごめんなさい・・・悪い事を聞いちゃった」としよんぼりしていた。

それに対しうららは「いいえ！気にしないでください！！小さい頃の事であまり覚えていないし・・・お父さん達があの調子で騒がしいから・・・全然淋しくないんです！！」と笑顔で言った。しかしさくらだけはうららのその笑顔から見えたかすかな寂しさを感じていた。

うららが去る前にさくらがテレパシーで（うららちゃん・・・鞆の中にあるあのノートって）と聞くと、うららも（はい、さくらさんの大体考えてる通りですよ）と返答した。その後、うららはナッツハウスのぞみの「明日も頑張ろう！」に笑顔で答えて去って行った。去るうららの姿を見ながらかれん・こまちは「まさかうららにそんな事情があつたなんて・・・」「でもいつもあんなに元気で偉いわ」と呟いた。そんな重い雰囲気を打ち破ろうとさくらがかれんに言った。「そういえばかれんさん、さっきは有難うございました。」
「え？何が？」と突然礼を言われた事に戸惑うかれん。さくらはずっとしながら「店の外に怪しい人間がいると聞いた後すぐ・・・私を守るうとしてくれた事ですよ・・・」と説明した。そうあの時、かれんはさくらを守るうと咄嗟にさくらを自らの背に隠したのだ。その事を思い出したかれんは顔を赤くして「あ、それは当然の事じ

やない！私達は貴方の力になるって言ったんだから！」と照れながら言った。のぞみ・りん・こまちはそんなかれんの様子がおかしかったのか「かれんさん、照れてるー！」「確かにあの時は気にしなかった

けどねー」「かれんは意外と照れ屋さんなのよね」とにやにやしながらからかっていた。かれんは「そんな事ない！！」と反発していたが、

ばればれであった。その後、うららの様子がやっぱりいつもと比べておかしいと思ったと言うのぞみに対し、さくらは「じゃあ、ちょっと

だけ・・・うららちゃんを尾行しようか・・・」と提案した。驚くのぞみ達に「実際に尾行するのはのぞみちゃん・かれんさん・こまちさん

・りんさんだけです。私は・・・うららちゃんとの約束で他に見張らなきゃいけない人達がいるし・・・」とさくらが目を閉じ少々呆れ顔になりながら言った。初めは分からなかったのぞみ達だったがりんはすぐに気づいた。「なるほどね。私達の他にも心配しているけれど、少々過保護すぎる人達をつて訳ね」とある方向を見て言った。のぞみ達もその方向を見ると、納得が行った。

その方向にはしょこりもなく、うららの後を追うとする鷺尾・ミツチエル・平蔵の3人組がいたのだ。しかもさくら達に見られている事に

気づいてもない。だからのぞみに「あの〜」と声を掛けられると、ひどく驚きそして笑い誤魔化そうとしていた。

結局その後、鷺尾達はさくらとナッツ（保護者として）に連れられ、うららの家で待つように連れ戻されたのであった。3人は最初は反発していたが、うららの約束でと言われると反論を渋り、さくらが最後に「うららちゃんを可愛がっているなら・・・もう少し話してくれるまで信じて待つてあげてください」と言われ、折れ倒れたのであった。そして予定通り、のぞみ達が尾行する事になった。

それから1時間後、さくらは平蔵達と共にうららの家で待っていた。途中鷺尾が事務所へ戻る事を口実に逃げようとしていたが、嘘だと思えばれだつたので無理だった。しばらくしてさくらはうららの身に何かが起こつた事を察知し、表向きは平静さを装い「うららちゃんを

迎えに行つてきますね。あ、それと。今日のぞみちゃんやかれんさん達と一緒に夕食を頂くかもしれません」と言つて出かけた。

それはどういふ事と聞こうとした平蔵達に「後で事情を説明いたします」と付け足しの説明をしておいた。そして出た後すぐにじいやに携帯で連絡をし今夜は2人ともうららの家で夕食をとり、遅くなる」と説明し了解を得ると、大急ぎでうらら達の気配がする所へ向かった。

レポートで行きたかつたのだが、万が一その場で全く無関係の人間に見られるとまずいと思つたのと日がまだ出ていたので走つて向かう事にした。「無事でいてうららちゃん!!皆!!」「さくらはうらら達を心配し、叫んでいた。

その頃さくらの予想通り、町で買い物をしていたうららは途中でノートをギリンマに奪われ、自分も捕まつてしまつていた。

そんなうららを救助すべく、のぞみ達はプリキュアに変身し、ギリンマが逃げ込んだ工場の中に入つていった。ギリンマは人質がいる事で

余裕があるせいか「ドリームコレットを出さなきゃ……こいつがどうなるか分かつてるだろうな!」と縛つて自分の腕でしめているうらら

にもう片方の腕の鎌を突きつけながら、ドリーム達を脅迫していた。「卑怯よ!」とアクアに罵られても「卑怯で結構!」と気にせずだった。

そしてうららの持つていたノートをコワイナー化させた。するとうららは悲鳴を上げて告白をした。「そのノートは……お母さんの・

うららの家に着く前にうららが買おうとしていた材料を買い、その後家へと向かった。

家では何とかナッツが鷲尾達を抑えてくれており、うららの姿を大喜びで抱きついた。そんな祖父達の行動をうららは黙って受け入れた。

実は着く前にさくらに「お父さんやお祖父さんもお母さんがなくなって淋しかったと思うの。でもうららちゃんがいたからいつまでも悲しまないでいたのと思うの・・・だから今日だけはどんな行動も許してあげてね」と言われ、「そうですね」と了承したのだった。さくらも自分と似た境遇だったのだと悟ったうららは素直にさくらの言葉を受け入れる事ができたのだ。

そしてうららはさくらの協力の下、ノートに書いてあったレシピを見て、お母さんのカレーを作ったのであった。

全員いただいた時の感想はもちろん「おいしい！」であった。うらが望んでいた食卓を笑いと幸福が満たしていた。

うららはこっそりと「さくらさん、今日は本当に有難うございました」と言い、さくらも「どういたしまして」と笑顔で言った。

第12話・さくらとつららの秘密（後書き）

次回もさくらとつららの交流がメインです。そして過去話ですが、さくらサイドの彼女も出ます。お楽しみに。

第13話…おくらとプリキュア5歌手デビュー!? (前書き)

おくらとプリキュア5の知世がメインとなるお話です。

第13話：さくらとプリキュア5歌手デビュー！？

第13話：さくらとプリキュア5歌手デビュー！？

ある日の放課後の学校において、うらはらは発声練習をしており、それをさくら・りん・のぞみが聞いていた。

うららの発声音は淀みが無く綺麗な物でさくら達もすっかり感心していた。「凄い！！」「さすがだね、うららちゃん」

「よく口が鳴るね」そんな3人にうらはらは「これでも役者ですからとてへつとしながら笑顔で答えた。

のぞみが真似しようとして発声練習を試みたが、途中で囁んでしまい失敗。りんにも「演劇部を3日でクビになった

あなたには無理だつて」と駄目出しされた。昔の事を持ち出され恥ずかしくなったのか「もう！それは言わないでつて、

言ってるでしょう！！」とのぞみが文句を言ったが、りんは「はいはい、ごめんなさい」とからかい、のぞみは

「りんちゃんの意地悪！！」と叫んでいた。そんな2人にさくらとうらはらは苦笑いしていた。その時

「うららちゃん！！」鷺尾が大声を出しながらやって来た。「どうしたんですか？鷺尾さん」とうらがが尋ねると

鷺尾は笑顔で説明始めた。「それが大変なんだよ！うららちゃん、前にイベントの司会をやった事があつたでしょう？」

その鷺尾の質問に「はい、しましたけど」とうらはらが答えると、「レコード会社のプロデューサーさんがたまたま見てた

らしくてね！うららちゃんの事、気に入ったみたいなんだよ！それで・・・歌手デビューしないかって！！」と続きの

説明をした。それを聞いていたのぞみ・りんも「凄～い！！」「と驚きを口にし、さくらも少し驚いている様子だった。

当のうらはらは「歌手・・・デビュー？・・・」とだけ呟き、複雑な顔をしていた。さくらはそんなうららを心配していた。

それから数日後ナッツハウスにて、うらはらは歌詞を考えていたが全然進んでいなかった。実はうらはらは歌手デビューの話に

喜ぶどころか逆に悩んでいたのだ。うららの目標はあくまでも女優であり歌手ではないのだ。歌手になる事は女優になる事の

妨げになるのではと言う考えがうららの歌詞を考える事を妨げていたのだ。「本当に歌手デビューしていいのかな？・・・

演技の勉強だつて頑張らなきゃいけないのに・・・寄り道をしている余裕なんて！・・・私には・・・頼まれたデビュー曲の

歌詞だつて・・・全然浮かんでこないし・・・」と白紙のノートを見て溜息をつきながら、うらはらは呟いていた。

そんなうららを見て心配していたかれんとこまちであったが、なんと言ってあげればいいのか分からずに困っていた。

ちようどそこへさくらが2階へ上がってきた。そして「はい、うららちゃん。ミルクティーだよ。悩み疲れている時はこれが

一番だよ」と笑顔でミルクティーの入ったティーカップをうららの側においてあげた。うらはらは突然の事に驚いたものの、

さくらの気遣いが嬉しかったのか「有難うございます」と笑顔で受け取った。その答えに「どういたしまして！」と笑顔で

さくらに答えると、かれん・こまちの方を向き、「かれんさん・こまちさんもいかがですか？」と聞いた。もちろん2人は

笑顔で「そうね」「頂こうかしら」とさくらの誘いを受けた。その中で2人はさくらのうららに対する気遣いに感心していた。

その後4人で談笑していたが、うららが又しても悩んで切る顔をしていたので、さくらが言った。「うららちゃん・・・

悩み事があるなら私やかれんさん・こまちさんに言ってみなよ・・・1人で悩むよりもずっといいし、解決策があるかも

しれないよ・・・」それを聞いたうららは思い切つて悩みを言おうとした。「実は・・・」と言い掛けた時だった。

「うららっ！！うららいるっ！！」のぞみが大声を出しながら、巻

物を抱えながらりんと共に入ってきたのだ。

「どうしたの？のぞみ」かれんが聞くと「いいもの持ってきたんだー！！」とえへへとしながら2階へ上がってきた。

のぞみが持つてきたのはうららの歌手デビューを祝した応援旗であったが、最初にそれを見たさくらは思わず派手にずっこけてしまっていた。「さくらさん！大丈夫ですか！？」慌ててうららが

さくらに声を掛けると「だ、大丈夫だよ、うららちゃん」

「ちょっと驚いただけだから」と苦笑いをしながら立ち直った。それを聞いてほっとするうららであったが、のぞみは「ねえ、

さくらちゃん。このデザインいけてるでしょう！？」とずっこけさせた原因の張本人は全く理解していなかった。

「あのーのぞみちゃん・・・文字はともかく・・・そのデザインはどう見ても大漁旗にしか見えないよ・・・」と苦笑いしながら

さくらは言った。そんなさくらの言葉に同意するかのように「私もそう思うわ。はつきり言つて問題外よ！」とあっさりデザインを

否定した。のぞみが「ええ〜！？」と言うのを無視して、かれんは「りんもそう思うでしょう？」と聞くと意外な事にりんは

デザインはともかく大きさが小さすぎると言った。そのりんの答えにさくらとかれんは目を点にして呆れていた。

その後のぞみ達がかれんの家で大きな応援旗を作るんだとか騒いでいる間、さくらはうららと共に少し離れた所で話をしていた。

「うららちゃん、悩み事の事を今なら私が聞いてもいい？」とさくらが聞くと、うららは頷き「実は・・・その・・・」と言いかけた

その時「どーもー！」と又しても誰かが入って来た為、「あらら」とさくら・うららはあまりのタイミングの悪さにこけかけた。

やってきたのは増子であった。増子はうららを見つけると「おめでとございますー！！どこでデビューするんですか！？」と写真を

撮りながらインタビューを始めた。すぐに答えないうららの代わりにいつの間にかやって来ていた鷲尾が「会場は『アイドルデビューの

聖地』と言われている場所なんだ！そんな場所でうららちゃんがデ

ビューするなんて!!」と感激しながら説明していた。

その後も応援の練習をしよう、応援歌が必要だ、衣装が必要だ、誰がその衣装を作るんだとさくらとつらら以外はわいわいしていたが、

肝心の歌の話になって、ようやくつららが話せる状態になったかに見えた。しかし「まだ歌詞が出来ていないんです」とつららが言う

と、
つららが歌詞を作っている事に驚いているかれんやこまち、難しいんじゃないと言つりんとは裏腹にのぞみだけが「チツチツ!そんなのつららならあつという間に出来るって!」と安請け合いで答えてしまったのだ。これにはさくらも「のぞみちゃん!調子に乗りすぎだよー!

つららちゃんの今の状態を見て何も感じないの!?!」と注意したが一足遅かった。さくらに怒鳴られてしーんとなる一同を無視して、つららは去ろうとした。「つらら?」と聞くのぞみに一度キツと顔を向けると「そんな・・・簡単に出来るみたいに言わないでください!」

と言うと、走りながらナツツハウスを去っていった。呆然とする一同にさくらは溜息をつきながらも言った。

「私がつららちゃんを追います・・・とりあえず鷺尾さんと増子さんは今日の所はこれ以上つららちゃんを刺激しないよう・・・お引き取り

ください・・・それとのぞみちゃんやかれんさん達はここに残ってください・・・話があります」誰も特に文句を言わずその通りにした。

先に帰る鷺尾と増子にさくらは「当日までにはつららちゃんは絶対歌手デビューをしたいと思います・・・だから楽しみにしててください」

と言うと、2人はさくらの言葉と表情にとりあえず任せる事にした。そして2人が去った後、さくらはかれん達(特にのぞみに対して)

話を始めた。「皆さんの今日の行動ははつきり言って・・・軽率そのものでした・・・うららちゃんを応援したい気持ちは分かりますけれど

・・・本人の気持ちを全く無視して応援しても・・・本人にはただプレッシャーになるし・・・苦しめるだけですよ・・・」

誰も文句は言えなかった。実際にさくらの言う通りだったからだ。その後さくらはのぞみの方を向いて言った。「のぞみちゃん・・・どうしてうららちゃんのがぞみちゃんに対してあんな怒った言い方をしたか分かる？」答えられないのぞみを無視し「それはうららちゃんはやんは

のぞみちゃんが自分の夢を一番よく理解してくれる人だと思っただからだよ・・・なのにその人が勝手にデビューだと決め付けて騒がれたら

シヨックは大きいと思うよ・・・」さくらはそこまで話を続けた。話を終えるとさくらはうららを探しに言った。一方残されていたのぞみは

俯いたまま考え込んでいたがしばらくして顔を上げ、「私・・・うららに謝らなきゃ・・・」と言って、外に出た。かれん達もそんなのぞみの行動に刺激されたのか、後を着いて行った。

のぞみ達がナッツハウスを出た頃、さくらは気配を下にうららを探し出し、大きな橋の上で話していた。うららはさくらに自分の思っていた事を

全て打ち明けていた。最後に「皆で勝手にデビューと決めて・・・私は女優になる夢があるから・・・そんな寄り道なんてしてられないのに」

とうららが言い終わるとさくらが質問し始めた。「うららちゃんは どうして女優さんになりたいの？」「皆に夢を分け与えたいからです」

迷わず答えるうらら。しかし「じゃあ・・・どうして歌手だと皆に夢を分け与えられないの？」と言う質問にははっきり答えられなかった。

そんなうららにさくらは言った。「今は離れ離れだけど私のいた元の世界にはね・・・すぐつく歌うの上手な親友がいたんだ・・・その娘はね

私がクロウカードを集めていた時にその歌声の素晴らしさから捕獲前の『ボイス声』のカードに『声』を奪われてしまったの・・・」

それを聞いたうららは思わず「そんな！」と声を出した。そんなうららにお構いなくさくらは話を続けた。「でもその娘は私に何も文句を言わな

かったし・・・落ち込んでいた私を声が無くても励ましてくれた・・・そしてその娘の歌をコピーしていた『ソング歌』を使って、声を

取り戻した後にその娘は歌のコンクールで私に感謝の意味を込めて歌ってくれたんだ・・・」それを聞いたうららは何を言っているかわからなかった。そんなうららにさくらは「うららちゃん・・・その娘の歌・・・聴いて見ない？」と聞いた。「え・・・でも・・・どうやって？」と聞くうららに「限りなく本物に近いその娘の歌を聞かせてあげる！魔法で！」とウィンクしながら言った。

その後合流したのぞみはうららと互いに謝って許しあった。そしてナッツハウスに戻った後、さくらはナッツハウス周囲に結界を張って、準備を

した。「かのものの姿とそのものの歌声を写し取れ！『ミラー鏡』！『ソング歌』！」さくらの魔法により現れたのはさくらの元の

世界で一番頼りにしていた親友であった大道寺知世であった。「この子はあくまでもミラーさんとソングで知世ちゃんの歌う状態を維持している

ただだけど、どうか聴いてください。」誰もがその言葉に頷くと、さくらはミラーに合図し、ミラーも頷いて歌い始めた。

その歌はとても棲んでいて明るく優しい歌であった。歌い終え役目

を果たし元のカードに戻った後、拍手が起こった。

そんな中でうららだけは泣いていた。「ど、どうしたの、うらら！？」のぞみが聞くと、「いいえ・・・私・・・歌を聴いて・・・こんなに

感動したのは初めてでした・・・」と涙を流しながらも笑顔で言った。そして「私も頑張って素晴らしい歌を作ってみます！！」とさくらに言った。

そんなうららにさくらは「頑張ってね」と微笑みながら言った。

コンサート当日、ガマオの襲撃があり、うららの衣装が破かれるというハプニングが起こったが、さくらとのコンビネーションでガマオを追い払い、

衣装もさくらがココ・ナッツと共に用意したのぞみ達のも加えたり自分の衣装を渡され、問題なくコンサートが行われた。

コンサートは大成功に終わり、うららやのぞみ達はもちろんの事、さくらも大満足であった。帰り道にうららがさくらに「さくらさん・・・

大切な事を教えてくれて・・・有難うございました！！」と笑顔で礼を言い、さくらも「うん！！」と笑顔で返事を返した。

その中でさくらは（いつか・・・また知世ちゃんに会えたら・・・お礼を言わなくちゃね・・・）と心の中で思っていた。

第13話・さくらとプリキュア5歌手デビュー!? (後書き)

次回はミルクとの出会いですが、さくらはいつも以上に厳しい態度に出ます。

第14話・なぐらとお世話役見習いミルクとの出会い（前書き）

ミルクファンはあまり見ない事をおすすめします。

第14話：さくらとお世話役見習いミルクとの出会い

第14話：さくらとお世話役見習いミルクとの出会い

さくらはある夢を見ていた。それはナッツハウスにてのぞみやかれん達と談笑していると言うごく普通のものではあったが、

一つだけ違った事はその中にまだ出会った事がないココやナッツに似た白い生き物という事だった。(ほえ?この子は?)

さくらがそう思った所で目が覚めてしまった為、分ならずじまいだった。さくらはこの事をかれんに話す前にその生き物が

ココやナッツと同じパルミエ王国の人間ではないかどうかを聞こうと思い、放課後ナッツハウスに着くまではその事は置いといた。

それから数十分経った町のある裏の路地において、さくらが夢で見た白い生き物がキャリーバッグを持ちながらふらふらと歩いていた。「はあ……おなかすいたミルク……」空腹みたいであった。そ

こへ登校中ののぞみが来るのを見たその生き物は「ちょうど

いいのが来たミルク」とにやりとしながら何かを企んでいるようだった。その生き物はのぞみが自分の所を通る前にわざと倒れ、人形の

ふりをしてのぞみに拾ってもらおうと考えたのだ。案の定のぞみはその生き物を人形と思って拾い「かわいい〜!」と言い、ちょうど

バスに乗る時間でもあったので、その生き物をバッグの中に入れてやった。のぞみのバッグに入ったその生き物はお弁当箱を見ながら

「ミルク……計画通りミルク……」と黒い笑いをしていた。しかしこれがさくらと出会った時にその生き物ののぞみに対して

やった事がさくらの逆鱗に触れる事になるとはまだ知る由も無かった。

学校に着き、1時間目が始まった時からのぞみは「早くお昼にならないかな〜」と浮き浮き状態であった。そんなのぞみにりんは

あきれ果てており、さくらは苦笑いをしていた。しかしそんな中で

さくらはのぞみのバッグの中からあの白い生き物の気配を感じていた。それでもナイトメアのような悪でない事と授業中と言う事もあり（放課後のぞみちゃんにたしかめさせてもらおう）と考えた。しかしそれが甘かったと、さくらは後で痛感させられる。そのぬいぐるみがのぞみの弁当を食べてしまっている事にはさすがのさくらも気づけなかったのだ。その生き物は弁当を食べ終えると、外から聞こえるココの声を聞いてなつかしがっていた。

お昼時、食べる前に前回のうららのコンサートの話で盛り上がった。見て見て！こんなに大きく記事に出てるよ！」のぞみが記事を見せながらそう言うと、それを見たりんは「へえー。増子美香もたまにはまともな記事を書くんだ」と言うとさくらが苦笑いしながら「りんさん。それは増子さんに失礼ですよ」と注意した。

こまちがうららに「お父さんもお祖父さんも喜んでくれたんじゃない？」と聞くと「はい！とっても！家ではずっとCDを付けっ放しですー！！」とうららは明るく答えた。

かれんが「頑張った甲斐があつたわね」と誉めると、うららは「有難うございますー！！本当に皆様のおかげです！！」と全員にお礼を言った。その後にのぞみが「いやあ、嬉しい事があるとお弁当がおいしく食べられるってもんだよ！」と浮き浮きで言うと、りんに「って！いつもばくばくおいしそうに食べているでしょう！！」と突っ込まれた。しかしそんな事は気にせずのぞみは

「ふんわり甘い卵焼き〜！」と歌いながらお弁当箱を開けた、が、中身を見て「ええ〜！！」と悲鳴をあげた。そんなのぞみの様子に「何？」「どうしたの？」とさくら・りんが聞くと、「お、お弁当が空っぽ！？」とのぞみが叫びながら状況を説明した。

「……ええ〜！？」「……さくら達は慌ててのぞみの弁当箱の中身を見た。するとそのぞみの言うとおりであった。

「本当だ。空っぽ」りんが呟いた。「の、のぞみさん？」うららはのぞみに声をかけた。しかしショックで固まっていたのぞみには全く聞こえなかった。「ショックで固まっている」とりんがうらら

に説明した。さくらはその状況を見て、弁当を食べた犯人が誰なのか
すぐ理解し、その者がいる場所を探った。場所はすぐに分かり、そ
の者の状態を頭のヴィジョンで見ると、何とのんきに寝ていたのだ。
これを見たさくらは周りに感づかれないようにしながらもその生き
物に対する怒りを覚え、（放課後ナッツハウスに行ったら、問い詰め
なきゃ！！）と決心した。そして放心状態ののぞみに対し「のぞみ
ちゃん！私のはサンドイッチだから半分分けてあげるよ！！」
と自分の弁当を分け与えてあげた。分けてもらったのぞみは「さく
らちゃん！有難う！！」と泣いてサンドイッチにぱくつきながら
何度もお礼を言った。かれん達はそんなさくらの慈悲深さに大変感
銘を受けていた。

そして放課後ナッツハウスに寄ると、事情を聞いたナッツが「腹が
減っているのか？豆大福でよければあるが・・・」と言うと、
のぞみは「えっ！？いいの！？」とガス欠状態から復活し2階に上
がり、バッグを放り出して、豆大福を食べようとした。その時りんが
「のぞみ！慌てて食べてのどをつまらせるといけないから、これ！」
と飲み物をトスした。それをのぞみがキャッチするまでの間に
バッグの中にいた生き物が「チャンスミル！」と豆大福に目をつけ
た。そして「有難う！りんちゃん！」とりに礼を言い振り返った
のぞみの前で勝ち誇ったかのように食べまくり最後に残っていた豆
大福を食べたのであった。

豆大福がたべられてしまったのぞみは「きゃああ〜！」と悲鳴を上
げた。それを聞き、さくら達5人は2階へ上がった。

「ぬいぐるみみたいなのが豆大福を全部食べたの！」と説明するの
ぞみにかれん達は上がってきたココ・ナッツを見て「ぬいぐるみが」
「豆大福を食べて」「しゃべるなんて」「普通じゃない」と驚きも
しなかった。しかし全ての事情を理解したさくらはのぞみとテー
ブルにいた

生き物の所へ向かい、テーブルの上にいる生き物の前に立つと「い

いかげん正体を明かしてもらいましょうか？盗み食いのお人形さん？」

とその生き物に対して言った。それでも何も言わない生き物に対し「まだしらをきるおつもりでしたら・・・氷漬けにしてあげますよ？」

と鍵を取り出し、『凍^{フリーズ}』のカードを用意した。さくらが本気だと察知したかれんは「さくら、誰に話しているの？」と

聞くと、「学校でのぞみちゃんのお弁当を盗み食いし、今ここで豆大福を盗み食いした」そこまで言うとその生き物を掴み、「この人形さんにですよ！」と皆にその生き物を見せた。その生き物はココ・ナッツを見ると「ココ様！ナッツ様！」と声を出した。

「君は！」「パルミエ王国にいたミルク！」「ココ・ナッツも思い出した様子であった。ミルクと呼ばれた生き物はココ・ナッツに挨拶しようとしたが、掴まれているさくらの手から逃げられなかった。

「放すミルク！！」とさくらにミルクは文句を言ったが、さくらには「パルミエ王国の王子様であるココさん・ナッツさんに再会の挨拶をする前に貴方にはしなければならぬ事があるでしょう」と

言われた。そのさくらの威圧感に押しつぶされかけながらも「ど、どうしてココ様とナッツ様が王子だという事を！？」とミルクは聞いた。

それに対しさくらは「ココさん達に初めて会った時にその過去を『見て』知っていたわ。お二人は話すつもりはなかったみたいだから、黙っていたけどね」と冷静に言った。その言葉にはミルクだけでなくのぞみ達も驚愕していた。特にのぞみ達はココ・ナッツが王子である事と

それを知っていたさくらの凄さに驚いていた。その後ココ・ナッツがさくらにミルクを放してあげるように頼むと、さくらはとりあえず放してやった。ただしココ・ナッツがミルクに豆大福・シュークリームを食べさせてあげようとする、「あんなに盗み食いた者に食べる資格はありません！」と止められてしまい、ミルクは不満で

はあつたが、さくらの前では怖くて何も言えなかった。

その後もミルクはココ・ナッツが店で働いていて、他人に「有難うございました」と頭を下げている事にショックを受けたものの、のぞみの事をちよろいだの、プリキュアの話になっても「はああ！？」と言いながら馬鹿にし、お弁当を盗み食いした事にも

「まあ、あの卵焼きはもう少し甘さを抑えた方がいいミルク！」と全然反省している様子が無かった。これに対するのぞみは完全に頭にきていたが、うまくかわされてしまい余計に腹を立てていた。しかしそんなのぞみの代わりにさくらがミルクを問いただした。

「お腹がすいていたからって、他人のお弁当を無断で食べる事が許されると思うの？」「拾ってくれたのぞみちゃんに対して、ちよろいなんて言う資格は貴方にあると思うの！？」「ココさんやナッツさんの為にと言つて、悪さをしていい訳ないでしょう！？」

それに対しミルクはたじたりながらも「う、うるさいミルク！貴方には関係ないミルク！」「さつさと帰るミルク！」と言い返した。それを聞いたさくらはこれ以上は無駄と分かり、「のぞみちゃん、かれんさん、皆、帰りましょう。じゃあナッツさん・ココさん、失礼します」とのぞみ達と共に去り、去る前にココ・ナッツに挨拶をした。（もちろんミルクは無視したのは言うまでもない）

その後ミルクが「夕食の買い物に行つてきますミルク！」と言つて、ココ・ナッツの静止も聞かずに勝手に出て行つた。

ココ・ナッツは慌てて人間になつて追いかけたが見失い「人間の姿になれないのどこへいったんだ？」「お世話役見習いなのに全く世話がやける」と2人を心配させ呆れさせていた。

一方さくらとのぞみ達は帰り道であつたが、のぞみはまだミルクの事でご立腹であつた。「もう！何なのよ！あの子！」

そんなのぞみを「まあまあ落ち着きなさい、のぞみ」とりんがなだめたが、「落ち着けないよ！私のお腹も落ち着いてないのに！」と言つて怒っていた。それに呼応するかのようなのぞみのお腹がグ

ーと鳴いた。

「でも、ミルクずっとお1人だったんですね」とうららが言うと、「今まで1人で心細かったんでしょね・・・」「よく知らないこっちの

世界で姿を隠したりして1人で大変だったんだよ・・・」「のぞみさん・・・許してあげてよ・・・」とのぞみにかれん・りん・こまちが

ミルクを許すように説得をしていた。それを聞いたのぞみは「分かったよ・・・ずっと1人でつらかっただろうし・・・」と言いかけたが、

さくらが「のぞみちゃん！そんな必要はないよ！」とのぞみにミルクを許す必要はないと言った。「どうしてなの、さくら？」とかれんが

いつもとさくらが違うように感じて聞き返した。のぞみ達もかれんと同じ気持ちだった。そんなのぞみ達に冷めた目をしながらさくらは説明した。「確かにあの子の境遇には私も同情します・・・しかし・・・それで他人の食べ物を盗み食いしたり・・・だましたりする事がそれで許されるわけではありません・・・」そんなさくらの言葉に誰も文句を言えなかった。そんな重い雰囲気を打ち破るかのように「のぞみちゃん！私がスペシャルホットケーキを作っただけよ！？」とさくらはのぞみに聞いた。それを聞いたのぞみは

「え！？いいの！？」と聞くと「うん！かれんさん！いいですよね！？」とさくらはのぞみに返事をしながら、かれんにいいかと聞いた。

かれんは「え、ええ。いいわよ」と許すと、「じゃあのぞみちゃん！行こう！」とさくらはのぞみの手を取りながら一緒に駆け出した。その様子を見ていたかれんは「もしかしたら・・・」と呟いた。その呟きを聞いたりん達は「かれんさん？」「どうしたの？」

「なにかあったんですか？」と尋ねた。かれんは説明した。「もしかしたら・・・さくらは元の世界にいた時の自分の境遇の事を思い

出して

、ミルクの事で厳しい態度を示しているんじゃないかしら？」その言葉の意味をすぐには理解できなかったりん達だったが、次のかれんの

言葉で納得が行った。「前にミラーと話す機会があった時にあの子が言っていたの……さくらは自分のせいで多くの罪のない人々を巻き込んで傷つけたと嘆いていたって……そしていつの間にか『本当の笑顔』を失ってしまっていたって……私達と出会ってからは少しずつ元気を取り戻して……心を開いてはいるけれど……今度は元の世界で自分の為に戦ってくれている皆に申し訳ない気持ちでいるって……でもそれを私達に話したら余計につらくなるから言わないって言ってたわ……」

それを聞いたりん達は愕然としていた。いつも笑顔で自分達に接してくれている少女の『心』がそんなにも苦しんでいたのかと。

そう思うとミルクの行動はやはり許せるものではなかった。4人は改めて、絶対にさくらの力になってあげる事をこの時誓った。

その後さくらがギリンマに襲われているココ・ナッツ・ミルクの危機を感知し、すぐ全員でその場に急行した。

コワイナーはさくらが『凍^{フリーズ}』で凍らせた後、ドリーム・ルージュ・レモネードが連続攻撃で倒し、ギリンマもアクア・ミントが

撤退させた。戦いが終わった後、ミルクはのぞみ達がプリキュアである事にも驚いていたが、それ以上にさくらの実力そして『魔法』の存在、さくらの過去を聞いて驚くと同時に何故さくらが自分に厳しい態度でいたのか理解し反省していた。

それでものぞみの事を口では「まだまだミル」と馬鹿にしていたが、すっかり安心して緊張の糸が切れたのかすやすやと眠っていた。

さくら達はそんなミルクをそのまま寝かしてやった。

第14話・おくらとお世話役見習いミルクとの出会い（後書き）

次回もミルクに厳しいおくらです。

第15話：さくらとミルクの家出騒動（前書き）

かなりミルクに厳しいので、ミルクファンは読むのをお控えに鳴った方がいいと思います。

第15話：さくらとミルクの家出騒動

第15話：さくらとミルクの家出騒動

ミルクが来てから数日経ったある日の朝、さくらとのぞみ達はナッツハウスの特売日の手伝いをすべくやって来た。

「おはよう！お手伝いに来たよ！」のぞみが元気良くココ・ナッツに挨拶をした。さくらやかれん達もちろん挨拶した。

ココはそんなさくら達に「有難う」と礼を言ったが、「手伝いなんでいらないミルク！」とミルクの声が響いた。誰もがその声のした方を向くと、ピンキー達を従えたミルクが箒を片手に（もう片方の手にはキャリアーを持っていたが）現れた。そして

「ココ様とナッツ様のお手伝いはミルク達で充分ミルク！」と言った。「どういう事？」とかれんが聞くと、ミルクは

「のぞみ達がプリキュアだと分かった以上、ミルクがしつかりしなきゃならないミルク！」と言った。その言葉の真意を誰もか

分からずにいると、「のぞみみたいなドジな娘がプリキュアだなんて！今世紀最大のショックミルク！」とミルクはのぞみを馬鹿にする発言をした。その発言にのぞみは「ちよつとどういう意味！？」

とのぞみが問い詰めても「はいはい！邪魔ミルク！」と

のぞみを無視して掃除をするミルク。しかもわざとのぞみに箒をぶつけてきたので、余計にのぞみはミルクに腹が立って来た。

しかしそんなのぞみの怒りをさくらが止めた。のぞみは一步自分の後ろに引かせ、自分はミルクの前に立ったのだ。

さすがのミルクもさくらが出て来ておそれていたのか一步引き下がった。そんなミルクにさくらは容赦のない質問をし始めた。

「ミルクちゃんのお掃除と言うのはピンキーちゃん達に頼ったり、人に箒をわざと当てる事なの？」「それにお店が開いた後、

人間に変身できないミルクちゃんがどうやって手伝うと言うの？」

「それともう一つ・・・のぞみちゃんは普段は明るすぎる所も

あるけれど、かれんさん達のようにプリキュアの際は立派に戦っているわ。そんなのぞみちゃんもプリキュアなのがショックだと、恩をあだで売り、盗み食いをした貴方が言えるのかしら？」ミルクはそれらの質問に何も答えられず「す、すみませんミルク」としか言えなかった。一方その現場を目撃していたかれん達はさくらのミルクに対する尋問にすっかり驚いており、怒っていたのぞみでさえもが、目を点にし、口をぽかんと開けながら「さくらちゃん・・・怖い・・・」と呟いていた。かれん達も同じ気持ちであった。

その後開店時間前近くになると、店の前には多くのお客さんが並んでいた。その様子を見て、りんは「うわあ、凄い！もう行列ができているよ」と外の様子に驚きの感想を言った。さくらも「そうですね。これは売り上げとか結構期待できますね」と言った。その時、2人は後ろで何かが落ちた音がした。2人はその音のした方を見ると、ミルクが商品をテーブルから落としてしまっていた。それをこまちが拾い「大丈夫・・・ここは私に任せて・・・」とミルクに言うところ、ミルクは今度はうららの掃除をやるうとしたが、バケツの中に落ちてしまい、うららに助けられ「大丈夫？」と聞かれると「全然大丈夫ミルク」と答えたが、もう終わっていると聞かれたら落ち込んでしまっていた。しかし今度はテーブルを持ってきたココ・ナッツの手伝いをしようとしたが、そのテーブルの上に乗ってしまい、ナッツに「ミルクが乗っていると余計重いよ」と言われショックを受けるが、すぐ立ち直り今度は「ミルクも手伝いますミルク！」と言ってすぐにテーブルの下に周りテーブルの足に耳を巻きつけたが、重さが違いすぎるためびくともしなかった。

結局そのテーブルはりとさくらが運んだ。その様子を見てミルクは「悔しいミルク！」と悔しがっていたが、ココに「ミルク」と呼ばれると「はいミルク！」とこころっと明るい顔になって返事をした。しかしココに呼ばれたのは「もうじきお客さんが入ってくるから、

ミルクは上で休んでいた方がいいよ」というミルクにとってはシヨックを受けるものであった。「どうしてミルク？」とミルクが聞くと「見つかったらまずいからだ」とナッツが指摘した。その指摘を聞いたミルクは「は、はい。分かりましたミルク」と渋々従った。

その後開店時間になり、さくらが店のドアを開ける同時にうららがお客に開店を知らせた。それを聞いたお客達は次々と中に入ってきて、そんなお客達に「いらっしやいませ！全てお安くなっていますよ！」とのぞみが説明したりしていた。無論さくらやかれん達も手伝っていたのは言うまでもない。そんな様子を2階から隠れて見ていたミルクは「ちつともお役に立てないミルク・・・」とこぼしていた。

それからしばらくの間ミルクは「ミルクも何か手伝いたいミルク・・・」と呟きながら下を見ていただけだったが、何かを思いついたのか行動を開始した。しかしその行動は後でココやナッツだけでなく、さくらを今まで以上に怒らせてしまうものでもないのであった。ちようどそこへ増子がやって来た。お客がいる中でいつものように口上をつけようとしたが、さくらに「今は営業中です。他のお客様の迷惑になる行動は慎んでください・・・」と丁寧に言われると「は、はい・・・申し訳ありません・・・」と増子はミルクのようにさくらの威圧感に気圧されそう、答えるしかなかった。がさくらだけでなくのぞみ達5人がナッツハウスで手伝っている事を疑問に思うと

しよこりもなく「皆さんはナッツさんとどう関係なんですか？何ですか？」と質問をし、のぞみ達5人を困らせていた。

だがそれもさくらの「ナッツさんとは私やのぞみちゃん・りんさんのクラスの担任である小々田先生が親友である関係から私達もお手伝い

しております。無論これはあくまでも『お手伝い』であるため、アルバイトと違って、お金などもらっていません。この説明では不足

でしょうか？」と説明後に増子に聞くと「い、いいえ・・・充分です・・・あ、有難うございます・・・」と増子は震えながら答えた。自分達ではどうする事もできなかった増子を退けたさくらにのぞみ達は改めて畏怖を感じていた。これで何も問題がなくなったと思われた。

しかしその後すぐ、問題が発生した。ミルクが勝手に自分に値札を貼って、商品棚にいたのだ。しかもミルクを見た増子が気に入って買おうとしたものだから、大変。慌ててココが「やあ、ごめん。これ、僕が間違ってお店に出しちゃったんだ」とうまく誤魔化した。ココに抱かれ赤くなっているミルクを増子は不審がったが、のぞみ達が「き、気のせいじゃない？」と言って何とかごまかす事ができた。

しかしさくらだけは表向きでは笑っていたが、心の中ではミルクに対する怒りでいっぱいであった。

その後お昼休みを取るため、一時的に店を閉めたナッツハウスにおいてミルクに対するココ・ナッツ（+さくら達）による尋問が始まった。

まずココが「どうして値札を持って座っていたんだ？」と聞くと、ミルクは「お役に立ちたかったミルク・・・」と呟きながら答えた。するとそこでのぞみ・りんが「どういう事？」「あんな所で値札を持って座っていたら、さつきみたいに誰かに買われてしまうじゃない」「

と疑問と意見を言った。それに対しミルクは「それでいいミルク」と答えた。その答えにこまち・かれんが「それでいいって・・・」

「どういう意味？」と質問すると、ミルクは「ミルクが買われていけば、ココ様とナッツ様にお金が入るミルク」と説明した。その説明にのぞみが「でも買われていったミルクはどうするの？」「そうだよ。他の家で暮らすつもりだったの？」とのぞみ・りんが質問した。

するとミルクは「そんな訳ないミルク。夜になったら戻ってくるミルク」

と最後は黒い笑みをしながら言った。これにはのぞみ達（さくら以外）
は思わず「「「「ええ〜!?!」「」「」と叫ばずにはいられなかつた。それを気にせずミルクは「それを繰り返せば、ココ様とナッツ様は

大金持ちミル!」と笑顔で言った。その時だった。「何よ・・・そのふざけた考えは・・・」さくらが俯いた状態で低い声で言った。誰もがその声を聞いて、さくらを見た。「さくらちゃん?」「一番近くにいたのぞみはさくらの顔を見ようと覗き込むと「ひい〜!?!」と叫び声を出して後ずさりしてしまった。「どうしたの、のぞみ?」「りんが聞くと、のぞみは震えながら「さ、さくらちゃんのか、顔が・・・」と言った。「さくらの顔がどうしたの?」とかれんがのぞみに聞いたが、それに答える前にさくらが話を切り出した。

「ミルクちゃん・・・貴方・・・本当にそんなふうにも人を欺いてお金を稼いで、ココさん・ナッツさんが喜ぶと思っているの?」

さくらはまた静かに低い声でミルクに聞いた。それに対しさくらの様子に異変を感知していないミルクは「もちろんミル!」とさくらをぶちきれさせてしまう場違いの言葉を発してしまった。そして遂にその一言で、さくらは完全に切れてしまった。

「ふざけないで!!!」「さくらは顔を上げながら、今までで一番大きな声で怒鳴った。誰もがその怒鳴り声に恐れをなし後ずさりしたが、

それ以上に誰もが恐ろしかったのは上げられたさくらの顔であった。その顔はギリシマがうららを傷つけた事に対して怒っていた時と同様あるいはそれ以上の怒っていた顔であった。すっかり怯えているミルクにさくらは「貴方の事を可愛いと思って買った人達を騙してお金を

取る事をココさんとナッツさんが喜ぶ訳ないでしょう!!!そんなやり方はナイトメアのやっている事と何も変わらないわ!!!」と怒鳴

った。

ミルクは「それでもお役に立ちたかったミルク……」と余計な事を言っ
てしまい、それを聞いたさくらは頭に血が上り「許さない!!」
と

言っ
てミルクを掴んだ。「……さくら(ちゃん)(さん)

!!」「……」慌てて全員でさくらとミルクを切り離れた。

かれん・りんは両肩を抑えられ、少しは落ち着いたのか、さくらは
冷静に話し始めた。「昔……まだ私がクロウカードを集めていた頃
……1つの事件があったよ……ぬいぐるみが夜中になくなる事
件だった……その事件は窃盗事件として扱われていたんだけど、
ある日……私の同級生でたくさんのぬいぐるみを持っていて大事
にする娘の家でその事件が起きたの……それは新しくできたばか
りの

雑貨屋さんで買ったパンダのぬいぐるみを買った日の夜だったの……
・翌日それがそのお店にいつの間にか戻っているのを見て、その
店を経営していた真樹さんというお姉さんは愕然としていたわ……
前にもこんな事が何度もあったって……そしてもう店をやるのを
やめたほうがいいのかなくてぬいぐるみを盗まれて泣いていた私の
お友達のように泣いていたわ……」そこでさくらは話を区切った。
そして一息つくともた話を続けた。「結局は『跳ジャンプ』のおこした事件
で、後でそのカードを封印して、事件そのものは解決した

わ……真樹さんもその娘も笑顔を取り戻したしね。でも……ミ
ルクちゃんはそういう風に人々が悲しむと言う事を一切考えずに、
ただ

ココさん・ナツツさんの役に立ちたいからって、お金を稼ごうとし
て何の悪意も感じないのは許されない最低の事なんだよ……」
さくらがそこで話し終えた後も、しばらくは誰も何も言わずにいた。
いや、何も言えずにいたのだ。そんな雰囲気を感じ取ったさくらは
責任を感じ「かっとなって……騒ぎを起こしてすみません……
かれんさん……私……先に戻って反省しています……」と言

って

帰ろうとしていたが、それをココ・ナッツが止めた。「いや、さくらが反省する事はないよ・・・」「ああ・・・悪いのは全てミルクだから

な・・・」その後2人はミルクに「そんな事をしてまで役に立って欲しくないよ」「これからはパルミエ王国の者としてもっと自覚を持って欲しいな」と注意した。ミルクはその後すっかり落ち込んでいる状態であった。

その後お店を再び再開した後、のぞみがこっそりココに「ミルク、大丈夫かな・・・落ち込んでるんじゃない・・・」と聞いても、ココは

「きちんと言わなければならぬ時もあるんだよ」と毅然とした態度でいた。それを聞いて一旦黙るのぞみであったがすぐに「さくらちゃん

の方は・・・大丈夫なのかな？・・・あの後相当思いつめているみたいだし・・・」と聞くと、これにはココも「確かに不安はあるよ・・・でも・・・気を遣いすぎると余計に彼女を苦しめるかもしれないから・・・今はそつととしてあげよう・・・」と優しく言った。

その後すぐミルクは誰にも気づかれないようにそつとナッツハウスを出た。そんな失意状態のミルクをアラクネアが発見し尾行した。

日が暮れても帰らないミルクを心配し、搜索をしていたのぞみ達はさくらのミルクの気配を感知する能力を頼りに探していた。

その時、さくらは2つの邪悪な気配を感じた。1つはアラクネアだったが、もう1つは今まで感じたナイトメアの連中とは比べ物にならない

程に巨大な『悪』の力を感じた。(ミルクちゃんの救出を確実に行うには・・・私がより大きな邪悪な気配をする方を抑えるしかない！)

そう感じたさくらはのぞみ達にミルクがアラクネアに捕まっている事とのその場所を伝え、先に行くように言った。

「さくらは何故行かないの？」とかれんが聞くと、さくらは「もう1つ・・・これまでとは比べ物にならない巨大なナイトメア関係の人と

思われる気配がするんです。その人はどうも私に用事があるみたいなので私が相手をします！かれんさん達はその間にミルクちゃんを！」

と状況を説明した。さくらの真剣な表情を見たのぞみ達は頷き、先に言った。かれんはさくらに「無理しないでね」と行く前に声を掛けた。

のぞみ達の姿が見えなくなった後、「出てきたらどうですか？」とさくらは姿を隠している敵に言った。「やはりばれていましたか・

・さすがは噂に高い『カードキャプターさくら』さん・・・見事です・・・」その者はさくらを賞賛すると「お初にお目にかかりますね。

私はカワリーノと申します・・・以後よろしく・・・」と挨拶した。その後一瞬の間を置いて、カワリーノがさくらを試すかのように攻撃をした。さくらも瞬時にリリースし、対処した。その一連の動きでさくらの実力が完全に自分を上回っていると悟ったカワリーノは心理戦で追い込もうとした。しかし「私はのぞみちゃん達がミルクちゃんを確実に救うために貴方を相手する事を決めました・・・

だから迷いはありません！」と少しも動揺を見せなかつたので今度は「どんな『光』もいつかは消え行くものですよ」と言つて動揺を誘い込もうとしたが「私の『力』の源は『星』の魔力！！例えばどんな暗闇の中にも光り輝き続けて見せます！！」と返され、更に重い蹴りの一撃をくらい、「今日の所は撤退します・・・またお目にかかりましょう・・・」と言つて消えた。さくらの勝利であった。その後さくらはドリーム達がピンチだと知り、大至急その場にテレポートした。

ドリーム達はアラクネアの罠にかかり、クラゲ型のコワイナーの触手で捕らえられ、その電撃に苦しめられていた。

「ふはは！もつと苦しむがいい！！」とアクラネアは勝利を確信していたが、その時「そこまでです！」との声と共にさくらが現れた。さくらは『剣』^{ソード}でプリキュア達を救うと、ピラニアに包囲され、クラゲで縛られていたミルクを救出、解放した。

コワイナーもプリキュアの連携攻撃の前に倒され、アラクネアも「覚えていろ！」と捨て台詞を吐いて去って行った。

翌日、ナッツハウスにて商品が全て売り切れたのを確認し終えた後、ミルクは素直に昨日の事を反省し謝罪したが、サンクルミエール通信で自分の事が評価されている事を知ると、また調子にのりかけた。しかしさくらが一回だけせきをする、すぐにやめた。

ただその後又してもものぞみの豆大福を横取りし、のぞみと追いかけてっこしていると「2人とも、いいかげんにしなさい！反省！！」と2人してさくらに叱られ、正座させられていた。それを2階で見ていたかれん達はココにミルクはのぞみとほとんど同い年だと聞かされ

た事を思い出し、「たしかにあの2人・・・同レベルだね・・・」「そつくりです・・・」「それにひきかえ・・・さくらさんの方が」「そうね・・・」と各自言った後、「・・・大人だね」「・・・」と声を合わせて言った。

第15話・さくらとミルクの家出騒動（後書き）

今回はプリキュアのピンチ時にさくらも異変が発生し、簡単に解決はしません。

第16話：さくらとプリキュア5大ピンチ！悪夢の招待状（前書き）

今回はアニメ同様2話に分けて書きます。

第16話：さくらとプリキュア5大ピンチ！悪夢の招待状

第16話：さくらとプリキュア5大ピンチ！悪夢の招待状

さくらはまた夢を見ていた。しかしこの前見た夢と違って今度のは『悪夢』だった。のぞみ達が喧嘩してばらばらになつて

いる所へナイトメアが現れ、変身したプリキュア達を次々と倒して行つた。倒されたプリキュア達の体が『闇』に飲まれていくのを見たさくらは「駄目だよ！皆！！目を覚まして！！」と叫んだ。その時だった。ドリーム達が完全に『闇』に取り込まれる寸前に眩い光と共に何かが現れた。「これは・・・何？・・・」さくらはそれが何かすぐに分からずいたが、そこで夢から覚めた。

「さくら様！さくら様！」「あつ・・・じいやさん！」「大丈夫でございますか？相当うなされていたみたいですが・・・」

さくらがいつもの時間に目覚めてこない事を不思議に思ったじいやがさくらを起こしに来たのだ。そしてうなされているさくらを見て慌てながらもさくらに呼びかけ起こしてくれたのだ。さくらはじいやに「ごめんなさい・・・寝坊して・・・」と謝つたが、じいやはそんな事は気にしておらず「いいえ、それは構いません。

それよりも、本当に大丈夫ですか？お顔の色もお悪いですし、汗もずいぶんかいておられるようですが・・・」とさくらの今の状態を心配して聞いたが、さくらは「大丈夫です！ちよつとシャワーを浴びてきますね！」と大慌てで浴場へ向かった。その後

さくらはじいやの朝食準備を手伝い、かれんと朝食を食べた後、学校へ向かった。さくらはかれんに朝の挨拶をする前にじいやに今朝の事を口止めをしておいた。さくらの必死さにじいやはやむなく了承した。さくらがかれんに必要以上に心配をかけたくないという気持ちはじいやにもよく分かつていたのだ。

その日の放課後、さくらは店の飾りとしてビーズで5色に彩られ蝶

を模したオブジェをつくっているかれん達の為に何か差し入れをあげようと思い、一旦ナッツハウスから出ていた。本当はさくらも一緒に作るうとかれん達は誘ってくれたのだが、そのオブジェにはプリキュアの5色をメインにしているという事もあり、さくらは丁寧に辞退したのだ。また外に出たのは、ほんの一瞬だけだったが軽い目眩を感じたので、それに気づかれる前に外へ出ようとの考えもあった。だがこのさくらがない間に事件が起こった。

ミルクが作業がうまく行かず遅れているのぞみから作っているビーズを勝手に持ち出し、そのビーズを取り返そうとしたのぞみが追いかけてこをし、何とかテーブルの下で捕まえたがミルクが抵抗してビーズを落としてしまい、それに驚いたのぞみがテーブルに頭をぶつけてしまい、運悪くそのテーブルの上には完成間近のオブジェがあり、のぞみが頭をぶつけた反動で倒れてしまい、ビーズが散乱してしまったのだ。その事でりん・かれんがのぞみをきつく叱ると、うららが「いくらなんでも、のぞみさんが可愛そうです!」と反論し、こまちも「わざとやったんじゃないだし、許してあげましょうよ」と仲裁の言葉を掛けたが、それは逆効果だった。

今度はかれんがこまちに「こまちは甘いよ。優柔不断だわ」と言っていてしまい、こまちが「かれん・・・そういう風に思っていたの?」とシヨックを受けながら聞くと、かれんはすぐに言いすぎたと思いが、「あ、そんなつもりじゃ・・・」と言いかけたが、りんが

「そんな事より!」とかれん・こまちの事よりものぞみを叱る事を優先しようとする。「そんな事って、何よ!」とそんな扱いされたかれんが今度はりんに突っかかり、それを仲裁しようとしたのぞみもりんに「何言ってるの!?元はと言えば!のぞみが悪いんでしょうが!」と叱られ、そのりんの言葉にうららが「りんさん!その言葉が!」と反論しかけた。その時だった。

「やめてー!」さくらの叫び声が店内に響いた。その叫び声に一旦喧騒が止み、のぞみ達はさくらの声が見た方を見た。

さくらは差し入れの飲み物やおやつを買った後戻ってきたのだが、

帰ってみるとかれん達が言い争いをしている事に気づき、見るに見かね

て叫んだのだ。叫んだ後、さくらはのぞみ達に近づき、事情を聞くとした。「何があったんですか？」とさくらが穏やかに聞くと、りんが

「何がって、のぞみのせいでせつかくのオブジェが台無しになったんだよ！」とりんがのぞみを指差しながら言うと、さくらが「何でのぞみ

ちゃんのせいで台無しになったんですか？」と冷静に聞き返した。

その冷静さが腹立ったのか「のぞみがオブジェが置いてあったテーブル

の下に入ってから、オブジェが倒れたからに決まってるでしょう！」と苛立ちながら答えた。するとさくらは「じゃあどうしてのぞみちゃん

はそのテーブルの下にいたんですか？」と聞くと、りんは「なっ！？それは・・・」と答えられなかった。答えられないりんの代わりに今度は

かれんが「そんな事、どうでもいいでしょう！」「とさくらに言うと「でものぞみちゃんがテーブルの下にいる理由がなければ、オブジェ

も
壊れなかったかもしれないのではないですか？」と冷静にさくらに言葉を返され、「それは・・・」と口籠ってしまった。

口籠る2人にさくらは言った。「確かに結果的にはのぞみちゃんのせいでオブジェは壊れたかもしれませんが、そうなった原因もろくに調べずただのぞみちゃんを叱るのは論外です！」その言葉にうららも「そうですね！」と賛同した。

しかしこの後りんがとんでもない言葉をさくらに言ってしまった。

「何よ！さくらはその時この場にいなかったくせに偉そうな事を

言わないでよ！」「それを言った時、さくらは一瞬ショックを受けた顔をした。「」「」「りん(さん)(ちゃん)！」「」「」「」

のぞみ達がりに怒鳴った。怒鳴られたりんも自分の言葉にシヨックを受けて悲しそうな顔をしているさくらの顔を見て、言い過ぎたと思った。

しかしさくらはそれでもまだ冷静だった。そして「そうですね・・・だったらちよつとだけ『過去』を見てきて、どうしてこうなったのか調べてきます」と言つて、鍵を杖に変え、『^{リターン}戻』のカードを使用しようとした。それを見たかれんは顔を青ざめ、さくらの動きをとめようと、さくらの所へ走った。そして「やめなさい！さくら！と言いなながら、さくらの腕を押さえこんだ。さくらはかれんの腕を放そうとしながら「放してください！これが今問題を解決するの一番いい方法なんです！」と叫んだ。それに対しかれんは掴んでいる手の力を

強くしながら「駄目よ！そのカードは貴方の元にいた世界の『御神木』という木の魔力の補助があつて、何とか制御できるものなんですよー！！」

もし今ここでそれを使つたら、貴方は！！」と叫んだ。そのかれんの言葉を聞いたのぞみ達もただごとではないと思ひ、さくらを止めようとした。

が、その前に異変が起きた。さくらが急に苦しみ出したのだ。掴んでいたかれんの腕を振り切ると、両手で頭を抱え「うああ！！」と悲鳴を

あげていた。その状態が数分ほど続くとさくらは倒れこんだ。かれん達がそんなさくらに駆け寄ると、さくらは今にも事切れそうな声で「みんな・・・絶対にばらばらになつちや駄目・・・もしなればナイトメアの思う壺に・・・」とまで言い、意識を完全に失ってしまった。

その後結局のぞみ達は気まずい状態のままばらばらに帰って行った。そしてその夜ナッツハウスでは、ココとナッツが落ちていたピースを拾い

集めていた。その途中でココはこっさり様子を見ていた元気のないミルクに「自分が悪い事をしたり、迷惑を掛けたら謝らないといけないよ」

と忠告したが、「ミルクは悪くないミルク！のぞみが！」とミルクは反発した。しかしナッツが「さくらの事も・・・自分が悪くないと思っ

ているのか？」と聞くと、今度は何も言い返せなかった。のぞみ達の事ももちろんだが、さくらが倒れた事にもミルクは自分に原因があると自覚は

していた。しかしすぐにそれを認めたり、謝る事はできず「ピースを集めてくるミルク！」と言ってその場から逃げた。そんなミルクにココとナッツは「やれやれ、しょうがないな・・・」「すぐには受け入れられないだろう・・・」と溜息をつきながら言った。

その頃水無月邸ではかれんがさくらが使っている部屋でベッドに横になってゐるさくらを看病していた。かれんは意識が戻らないさくらの顔を

見ながら、先程じいやから聞いた事を思い出していた。じいやはさくらが倒れた事をかれんから聞くと大急ぎでナッツハウスに向かいに来たのだ。

そしてその帰り道に車内でじいやはかれんにさくらの朝の出来事を話した。かれんは初めにそれを聞いた時は「どうしてすぐ教えてくれなかった

の!？」と怒鳴ったが、じいやが「申し訳ありません・・・でもさくら様

に絶対にお嬢様に話さないで欲しいと強く頼まれましたもので・・・」

と聞くと「さくらが・・・」と自分の膝に横にさせてゐるさくらの顔を一度見ながら呟いた。「お嬢様に余計な心配をかけたくない・・・」

甘えてはいけません・・・とおっしゃってました」じいやのその後の説明にかれんはもはや何も言えなかった。言えなかったのだ。

そして思い出し終わるとかれんは人前では決して見せない涙を流しながら「さくら・・・私はまだ・・・貴方の力になれていないのね・・・」と

呟いた。その後もじいやに寝るように言われても聞かず、結局かれんは徹夜で眠らずにさくらの看病をしていた。それでもさくらが目を覚ます事

はなかった。やむなくかれんはさくらをじいやに任せ、登校した。本当は休んでもさくらの側にしようとしたが、それではさくらに余計に

気遣わせると思ったからだ。そしてその日、かれんやのぞみ達5人は一度も揃う事はなかった。昨日の事が特にさくらの事で気まずかったのだ。

しかしそんな中、のぞみはココから自分の作りかけのビーズをキーホルダーとして手渡され、その中央にある星型を見てさくらの事を考え、

決意した。「さくらちゃんの為にも仲直りをする事を頑張る事に決定ー!!」だがその決意はすぐにも崩されようとしていた。

下校時、かれんとこまちは一緒に帰っていた。かれんはこまちに「ごめんなさい!昨日の事・・・」と謝ったが、こまちは「いいのよ・・・別に

・・・」としか答えなかった。さすがに気まずい状態であった。しかしそれでもさくらの事が気になったのか、こまちは「その・・・さくらさん

の様子はどうなの?」と聞いた。かれんは顔を少し背けながらも「まだ・・・目が覚めないの・・・」と言った。それを聞き「そう・・・なの

・・・」とこまちは俯きながら呟いた。その後かれんは「私・・・頭にきてるの!」と突然叫び始めた。その様子に驚くこまちは「私に?」と

聞いたが、かれんは首を振りそして「私自身によ」と答えた。その答えに驚くこまちが聞こうとした時、「今日は」との声で遮られた。驚いて振り向くとそこにはカワリーノとギリンマがいた。そのギリンマがカワリーノから渡されていた黒い仮面を装着すると、自我のない巨大な

怪物に変身してしまった。かれんとこまちは変身して立ち向かうものの、一撃で倒され、カワリーノの放った黒い波動の中に閉じ込められて

しまった。その歪んだ空間の中で2人は精神的な攻撃をくらい、意識を失った。意識を失う寸前にアクアはさくらの最後の言葉をようやく理解し

たが、既に遅かった事も悟り、「さくら……ごめんなさい……」
と言って意識を失った。だがその言葉は意識のないさくらに届いて
いた。

さくらは目を覚まし、じいやが近くにいない事を確認すると「眠スリープ」
を発動し、じいやが眠った事を確認した後、屋敷をふらついた

状態で出た。その時と同じ頃、りんとうららも怪物化したギリンマ
に倒され、カワリーノに捕獲されていた。

それから数十分後、さくらはのぞみがナッツハウスにいる事を確認
し、ふらついた足で何とかナッツハウスまでたどり着いた。

中に入ると、のぞみが「さくらちゃん!?目が覚めたの!?!」と駆け
寄り、まだふらついているさくらに肩を貸したが、さくらは「大
変だよ

のぞみちゃん!かれんさん達は皆捕まっちゃってしまっている!?!」とや
って来た理由を説明した。それを聞いたのぞみとココ達は驚きなが
らも

さくらから詳しい事情を聞いていた。その後どうすべきか議論中に
さくらはカワリーノの気配が近づいている事を察知し、のぞみ達に
「皆、気をつけて!!!前に話したカワリーノさんの気配が近づいて
来ている!!!」と警告した。慌てて身構えるのぞみ達。そして遂に

「さすがですね、カードキャプターさくらさん。体調がお優れない状態でもそこまで私の気配を察知できるとは……」と言いながら、カワリーノが現れた。その後カワリーノがかれん達4人の身柄を返して欲しくば、ドリームコレットを渡すように脅迫したが、さくらとのぞみが

自分達を本部へ案内しろと言った。そして「仲間を傷つけたら!」「コレットを破壊します!!」とのぞみ・さくらははっきり言った。さすがに予想外だったのか、カワリーノは目を見開き、その後了承した。そしてカワリーノの案内の下、ナイトメア本社に着いた。

そのまま会議室に行くと、さくら・のぞみが現れた事に驚いたブンビーはお茶を吹きながら「何でここに!？」とカワリーノに質問したが、

連れてきたとしか答えなかった。その後のぞみが「私達の友達を返して!!」と叫ぶと「お前達の友達など……いない……」と言いながら

デスパライアが後ろに何かを連れて、さくら・のぞみの目の前に現れた。そのデスパライアの力を察知したさくらは（今までの相手とは桁違い!）

と感じた。そしてデスパライアは後ろにいる4人を前に出した。その姿を見たのぞみは愕然とし、さくらもやはりと思いながらも苦々しく

思っていた。そうその4人とは絶望の仮面をつけられていたアクア達だったのだ。

第16話・さくらとプリキュア5大ピンチ！悪夢の招待状（後書き）

次回はアニメで起こる奇跡以外のもう一つの奇跡が起こります。お楽しみに！

第17話・さくらとプリキュア5の新たな力（前書き）

今回のさくらは後半余り活躍しません。

第17話：さくらとプリキュア5の新たな力

第17話：さくらとプリキュア5の新たな力

仲間を救うべくナイトメア本社に向かったさくらとのぞみ達の前に現れたのは絶望の仮面をつけたアクア達4人だった。

その光景に敵であるブンビーでさえ、「な、何と？あいつらはプリキュアなのか？」と言いながら驚いていたが、のぞみや

ココ達のシヨックはそれ以上だった。「皆！どうしたの！？返事をして！！」「あれはナイトメアの仮面ココ・・・」

「そうナッツ・・・」隠れて着いてきたミルクも目の前の光景に愕然としていた。のぞみは再び「りんちゃん！こまちさん！

うらら！かれんさん！皆！返事をして！！」と叫んだが、4人とも無反応だった。そこへ「無駄だ。お前の声はその者達には

決して届かない・・・」とデスパライアの声が響いた。それを聞いたのぞみは「この仮面さえ取れば！！」とアクアの仮面を

まず取るうとしたが取れず、カワリーノに「無駄です。それは一度つけたら決して取れない『絶望の仮面』ですから・・・」と

のぞみに教えた。「絶望の・・・仮面？・・・」のぞみはその言葉をすぐには受け入れられなかった。

だがその時「確かにそれはその名の通り絶望した者がかぶる『絶望の仮面』なのでしょう・・・」とそれまで黙っていたさくらが

話し始めた。「さくらちゃん！？」のぞみはさくらの言葉が信じられなかった。が、「そしてそれは確かに力づくでもはがす事は

出来ないでしょう・・・けど・・・決してはがせない訳ではありません！！」とのさくらの言葉に『希望』を取り戻した。

その言葉にカワリーノは一瞬顔を歪めた。（やはりこの少女は気づいていますね・・・絶望の仮面を取る事のできる唯一の方法を）

一方さくらの言葉を聞いて方法がある事を知ったのぞみはドリームに変身し、攻撃しようとしたが「あっ！こら！君！やめなさい！

ここでドリームアタックなんか放つたら、本部が壊れちゃうぞ！」とブンビーが叫んで止めようとした。がカワリーノが

「ブンビーさん・・・貴方の手を煩わせるまでもありません・・・」
と言いながら制した。そう言い終わるや否や、アクア達4人が

ドリームを取り押さえた。「きゃっ!? なっ、何を!?」ドリームは突然の事に理解できず、身動きが取れなくなつた。

「キュアドリーム!!」さくらがドリームを助けようとした時、「
させん!!」との声と共にさくらを『闇』の力が覆い包んだ。

「くっ!これは!」さくらは闇の力の塊の中で苦しみながら抵抗していた。「さくらちゃん!」ドリームはさくらを助けようとして必死にアクア達を振りほどこうとするができていない。そんなドリームに「無駄ですよ」とカワリーノが仮面を持ちながら近づいて来た。

そして仮面を顔につけようとしたが、ドリームがまだ希望を持っている為につけられずにいた。そこでカワリーノは絶望を与えるべく、ドリームに事実を教えた。「1人で何が出来るのですか? 貴方のお仲間ももういないですよ?」その言葉にドリームは希望が揺らめき始めていた。そしてカワリーノはとどめの言葉を刺した。「それにあの少女・・・カードキャプターさくらが本調子でないそもその原因を作ったのは貴方なのではないですか?」その言葉を聞いた瞬間、ドリームは仮面を受け入れてしまった。

その光景を見たデスパライアは「心地よい絶望だ」と満足し、カワリーノが「彼女達をどうします?」と聞くと「カードキャプター以外には用はない」と言った。その言葉を聞いたカワリーノは落とし穴を開き、プリキュア達を次々とその穴に落とさせていった。

「皆ー!!」「目を覚ますナッツ!」とココ・ナッツがドリーム達の下へ行こうとしたが、ブンビーに捕まりそれはかなわなかった。

だが落とし穴の床が閉まるうとしたその時さくらが「絶対に最後まで・・・あきらめない!!」と叫ぶと同時に眩いばかりの『光』を
発し、

それと同時に自分の動きを封じていた『闇』の力を消滅し、超スピ
ードで落とし穴の中に入って行った。その後床は完全に閉まった。
その一瞬の事にココ・ナッツ・ブンビーはもちろんカワリーノやデ
スパライアでさえ啞然としていた。

「何だ？・・・今のカードキャプターさくらのあの力は・・・」デ
スパライアはさくらが見せた『力』にそう呟いていた。

一方さくらは床の下で無限に広がる闇の中でドリーム達を探してい
た。そしてわずかに感じたキーホルダーの音と気配を頼りに漂って
いる

ドリームを見つけた。そしてドリームに近づくと「今助けてあげる
から」と言いながら仮面に自らの手を出し、自分の魔力を送り込ん
だ。

すると次の瞬間ドリームについてた仮面が消滅した。「さくらちゃ
ん！」「ドリーム、いえのぞみちゃん！よかった！何とか間に合っ
て！」

ドリームは助けしてくれたさくらに感謝し、さくらもドリームを救え
て少しだけほっとしていた。その後すぐ「かれんさん達も助けなき
ゃ！」

とのさくらの言葉に「うん！」とドリームも答え、アクア達を探し
始めた。そしてすぐに漂っている4人を見つけた。

アクア達に近づくとさくらはドリームに仮面を消滅させる方法を教
えた。「のぞみちゃん。この仮面を消滅させられる方法はたった1
つだけ

・・・それはね、『希望』の『光』だけなんだよ・・・」「希望の
光？」「ドリームはその意味をすぐ理解できず、聞き返した。

「そう・・・さっき私はのぞみちゃんを助ける為に使った私が持つ
『星』の魔力がその1つなんだよ。でもかれんさん達を確実に助け
る為には

のぞみちゃんの皆を想う『心』も必要なんだ・・・だから力を貸し

てくれる？」とさくらは説明しながら頼んだ。もちろんドリームは「うん！当たり前だよ！！」と笑顔で言った。がその時ドリームはさくらがナッツハウスにいた時よりも苦しそうにしている事に気づいた。

「さくらちゃん、大丈夫なの！？」と思わず聞いたが、さくらは「大丈夫・・・」と笑顔で言うと、真顔になりドリームに言った。

「のぞみちゃん、よく聞いて。もしここから全員で出ても多分かれんさん達を捕らえた怪獣みたいなのとあのカワリーノって人との戦いは

避けられないと思うんだ・・・それに私はかれんさん達を助ける為に力を使ったら、多分またしばらくの間意識を失ってしまうと思う・・・」

「そんな！？」ドリームはさくらの言葉をすぐには受け入れられなかった。しかしその後「でもね・・・例えば私が戦えなくても、のぞみちゃん

達が力を合わせて、ミルクちゃんも自分の気持ちに素直になれば・・・『奇跡』を起こすもの呼び出す事ができると思うの・・・だから何があっても決して最後まで諦めずに戦って・・・」と言われると、さくらを信じて「うん！」と答えた。

その後さくらとドリームは手を合わせるとアクア達にそれぞれの残された手を向け、彼女達の精神とコンタクトを取り始めた。

そして「ごめん、私帰れないよ」「私、怖いんです」「自信がないの」「もう無理だと思っ」「と呟くりん・うらら・かれん・こまちにさくらと

ドリームはもう一度呼びかけた。「皆！現実に目を背けなければ、必ず立ち向かえるはずですよ！！」「そうだよ！できるよ！私達が皆揃えば、

どんな事も乗り越えられるよ！！」その言葉を聞いた4人は立ち上がり、さくらとドリームの差し出す手を握った。そして遂に絶望していた

4人の心にさくらの『星』の魔力とのぞみの友を想う『心』の温かさが届き、希望が蘇った。その瞬間4人の仮面は消滅し、そしてさくらも

微笑みながら、意識を失った。そんなさくらを肩で抱えながらドリームはアクア達に言った。「さくらちゃんの為にも・・・そして私達自身

の為に一緒に夢を追いかけよう!!」そのドリームの言葉に「「Yes!!」「」とアクア達は答えた。そして全員の気持ちが一つとなった時、光がドリーム達を包みこみ、上昇した。更に上場した光はナイトメアの落とし穴の壁を突き破った。

その光を見たデスパライアは「これは・・・『希望の光だ』・・・」と呟いた。光が収まるとその場にはさくらを抱えたドリーム達5人がいた。

ドリーム達の帰還に喜んだココ・ナッツ・ミルクはドリーム達の側に駆け寄った。その瞬間カワリーノは本気で力を発揮しようとしたが、

ブンビーに「ここで本気を出して、ここを壊したりでもしたら、デスパライア様がお怒りになりますよ!」と言われ、冷静さを取り戻した後、

ドリーム達全員を闘技場のある別の空間へと移した。そこでギリンマだった怪物を引き連れて、プリキュア達との戦いを始めた。

意識を失っているさくらをミントとココ達に任せて、ドリーム達は戦い始めたが、圧倒的な力の前に苦戦を強いられた。それでも

カワリーノのそれぞれの精神を揺さぶる言葉に対し、ルージュは「どんな目にあったっていい!私はこのぞみと・・・さくらと・・・皆と一緒にいたいのだよ!」と跳ね返し、レモネードも「私はさくらさんに大切な事を教わった!だから私は仲間を絶対に見捨てないし、夢を諦めたり

はしない!」と答え、アクアもミントを助けつつ「それがこまちの

優しさよ！その事を私が一番良く知っているって、さくらを通してわかったわ！」

と答え、そのアクアの言葉を正当化するかのように「かれんは1人なんかじゃない！私もさくらさんも皆いるわ！1人になんか絶対にさせない！」

と跳ね返した。その5人に苛立ちを覚えたのか、カワリーノは怪物に更に力を与え、「これで最後です！！」と特大な攻撃を放たせた。その攻撃の凄まじさにドリーム達は目を閉じ諦めかけていた。だがその時『奇跡』が起きた。

その攻撃がドリーム達に当たり爆発したと思ったカワリーノはその煙が消えかけた時に見た信じられない光景に眼を見開いた。

一方のドリーム達もいつまでたつても衝撃が来ない事を不思議に思い、閉じていた目を開けるとそこに映ったのは自分達を守るように囲んでくれて

いるサクラカード達であった。驚いてさくらを見たが意識を失ったままであった。不思議に思ったドリーム達に『光』・『闇』

そして『希望』のカードが実体化しながら答えた。「貴方達は我が主にとってこの世界で最も大切な人達です」「そして私達にとつても貴方達は主の『心』を救ってくれた恩人です」「だから力を貸してあげる」そう言い終わるとカードに戻り、全てのカードはドリームの手

に収まった。ドリームは「有難う」とカード達に礼を言うと、さくら

の手にカード達をそつとおいた。この時、カード達の行動を見ていたミルクも今までの事を謝り、「皆と一緒に蝶の飾りを作りたいミルク！」と自分の気持ちを素直に言った。

その瞬間、第2の『奇跡』が起きた。ミルクのキャリーの中にあつた新商品が巨大な蝶になって、プリキュア達の目の前に現れたのだ。その蝶を

見て、ドリームは「もしかしてこれが・・・さくらちゃんの言うって

いた『奇跡』を起こすもの!!」と叫ぶとアクア達に「やってみよう!」と言い、

全員の手を合わせドリームの「夢と希望の力と共に!」掛け声と共に今度は「コ」コ」コ」コ」5つの光を今ここに!!」「コ」コ」コ」5人で叫んだ。

そして巨大な蝶の上に立つとその蝶の羽を広げ新しい必殺技「プリキュアファイブエクスプロージョン!!!」を怪物に炸裂させた。怪物は消滅し、

カワリーノも攻撃を受ける前に消えた。ドリーム達はその勢いでさくらやココ達を連れて脱出し、元の空間に戻った。

戻った途端、その巨大な蝶は5つに分かれ、ドリーム達1人1人の胸のペンダントの中に入っていた。その光景を見ていたデスパライアは

「プリキュアの・・・そしてカードキャプターの・・・それぞれの力は危険だな・・・」とドリーム達とさくらを警戒していた。

それから2日後、再び意識をうしなっていたさくらも意識を取り戻し、ナッツハウスにやってきていた。ちょうど蝶が完成しており、それを見た

さくらは「綺麗・・・」と呟いた。そこでふと星も作られている事に気づき、「この星は?」と聞くと。「これはさくらちゃんの分!」
だっ

さくらちゃんも仲間だもん!」とのぞみが笑顔で答え、かれん達も頷いていた。そんなのぞみ達の気持ちをさくらは嬉しく思っていた。

第17話：さくらとプリキュア5の新たな力（後書き）

次回はアニメ同様夏休み編スタートです！

第18話：さくらとプリキュア合宿大作戦！（前書き）

今回の前半はのぞみをメインに話をすすめます。

第18話：さくらとプリキュア合宿大作戦！

第18話：さくらとプリキュア合宿大作戦！

学校が夏休みとなったある日、太陽がさんと輝き、蝉がミンミンと鳴く中で、のぞみは前回の出来事を思い出しながら歩いていた。

（私達の事をばらばらにしようとしたナイトメアの連中・・・でも・・・そんな事になんか絶対負けられないんだから！さくらちゃんの協力と

皆の気持ちを一つにして乗り越えたけど・・・もう二度とあんな想いはしたくない！これからもずっと皆と一緒になんだもん！）その後（そしてさくらちゃんに協力する為にも、もっとさくらちゃんと仲良くなって、魔法の事とかカード達の事を良く知らなくちゃいけない！！）

とさくらが2度も倒れた事がショックだったのか、そのような事が決して起こらないようにさくらの事をもっと知らなければと思っていた。

その為の計画なのか、のぞみの腕にはノートがあつた。そしてナッツハウスに着くと「おはよう！！」と元気良く挨拶した。

しかしそこにはココがシュークリームを頬張りながら、ナッツは読書をしながらくつろいでおり、店番をミルクに任せていた。

その光景を見たのぞみは「ああ！！ココ、ナッツまたミルクに店番を任しちゃって！さくらちゃんにばれたらまたおやつ抜きだよ！！」と

ココ・ナッツに忠告した。それを聞いたココ・ナッツは確かにこの事がさくらにばれたらまずいと思ったのか「た、確かにそうだな」

「あ、ああ。俺が店番するよ」と慌しく動いた。が、その前にのぞみは2人に聞いて欲しい事があると言ったので、まずそちらを聞く事に

した。その後のぞみは説明し出した。「せつかくの夏休みだからさ、ある事を計画してね。それを見てもらおうと思っただけだ！」
そして「ジャジャーン!!!」と言いながら持っていたノートをココ達に見せた。そのノートの題名を見た2人はそれに驚いたのか
「第1回プリキユア合宿!?!」と叫んだ。そんな2人にのぞみは「うん! そうだよ!」と言うと「後で皆にも集まってもらっけていて

もらっただ!?!」と説明した。それを聞いたココは「けど・・・皆、今日は予定があるんじゃないのか?」と尋ねると、のぞみは

「大丈夫! 確かにりんちゃんとさくらちゃんはフットサル部の練習、うちらはコンサート、こまちさんは小説の執筆中でかれんさんは生徒会のお仕事があるけれど、ちゃ〜んと皆が来てくれるよう連絡してくれる事をさくらちゃんに頼んだんだ!?!」と説明した。

「さくらちゃんにしかできない連絡法だよ!?!」とウインクしながら言った。

「合宿?」「はい、今朝のぞみちゃんから携帯に連絡があつて、私に『テレパシー』でその事をりんさん達にも知らせたいと頼まれたんです」

練習の休憩中、さくらとりんは他人から少し離れた所で話していた。のぞみが言っていたさくらにしかできない連絡法とはこの事だったのである。

それを聞いたさくらには特に断る理由もなく、部で直接会うりん以外には話していい状況を確認して、テレパシーを送り連絡したのであった。

「しかしのぞみもちやつかりしてるね。さくらに連絡を頼むだなんて!」とりんはのぞみに呆れながらそう言った。それに対しさくらは苦笑いを

しながら「まあ仕方ないですよ。皆、ちょうど都合よく連絡できる

とは限らないんですから」と説明した。するとりんも「ま、それもそうだね」

と少しは納得をした様子であった。その後すぐ休憩時間が終わり、さくらとりんは練習に戻った。（練習終了後ナッツハウスに向かう事を確認して）

そして夕方、さくらとりんはもちろんの事、さくらから連絡を受けていたかれん・こまち・うららもナッツハウスに集合した。そして「と言う訳で！第1回プリキュア合宿の会議を始めます！！」とのぞみが会議を開き始めた。しかし「ではまず最初の議題、おやつについて」と

のぞみが言つと同時にさくらは思いつきずっこけた。ずっこけたさくらに「ど、どうしたの、さくらちゃん!？」とのぞみが聞くと、さくらは

苦笑いしながら「あ、あのね、のぞみちゃん。普通、合宿って言ったら・・・」と言いかけると「まずは場所でしょ!」とりんが突っ込んだ。

そして「まずどこへ行くか、行き先を決めない!」とりんが言っている、うららが「でも、おやつも大事ですよね!」と言い出したので、

今度はさくらだけでなくりんもこけた。かれんがのぞみ・うららに「だからそういう問題じゃないでしょう?」と言つても、2人は全く分かつて

いない様子であった。そんな中りんは「大体合宿っていつたらさ・・・」と言いながら、体育会系の合宿のイメージをしていた。そのイメージとは

自分達を大きく引き離しながら悠々と前を走っているさくらとその後をココ・ナッツ・ミルクに頭の上からはっぱをかけられながら走っていて、

最後には1人がつまずいた事で全員が倒れ、それに気づいた全く疲れていないさくらが心配して様子を見に来るような物だった。

りんのイメージを見たさくらは「想像しただけでもたくさん！」と言ったりんに「大丈夫ですよ、りんさん。りんさんの想像している様な合宿じゃない」

と思いますよ」と心配する事はないように言った。それを聞いたりは「そう？」とさくらに聞くと、さくらはのぞみの方を向きながら「毎日体力トレーニングばかりする合宿じゃないんだよね、のぞみちゃん？」と聞いた。そのさくらの質問に「うん！そうだよ！別の目的があるの！」

とのぞみは答えた。その目的は秘密だとのぞみは言わなかった。それはさて置いておく事にし、次は旅費と皆の都合が合うかが問題となった。

のぞみは「何とかなる、なる！」と言ったが、さくら・りんは当然部活があり、うららも仕事がいくつがあるため、簡単には解決しないと思われた。

しかしこまちがかれんに「かれん、生徒会は？」と聞き、かれんが「特に予定はないけど・・・あ、そう言えばさくらにはまだ言っていなかったけど、

別荘に行く予定があるだけよ・・・」と言つと、かれん・こまち以外の誰もが「「「「えっ！？別荘！？」」「」と驚き叫んだ事で状況が変わり始めた。

さくらが「かれんさん、別荘って？」と聞くとかれんは慌てて「あつ、ごめんねさくら。言つてなくて。」とさくらに謝ると、今度は全員に

説明し始めた。「別荘と言っても大した物じゃないのよ」とかれんは説明したが、りに「いや、かれんさん。そういえば、このナッツハウスも小さな

小屋だと言つてましたよね？」と突っ込まれ、うららにも「言う事は！実はとっても広い別荘なのでは！？」と質問された。それに對してかれんは

「広くなっていよいよ・・・ほんの小さな島なんだから・・・」と

謙虚に言ったが、さくらに「あのかれんさん・・・小さいってどのくらい小さいん

ですか？」と聞かれると「え？それはそのホテルが1つあって、周りに少し大きな森があるくらいだけど？」と答えた後にまたさくらに「かれんさん

・・・それを小さな島と言ったら・・・世界中の別荘を欲しがっている人達に怒られますよ・・・」と言われ、「そ、そういうもの？」とさくらの

言葉にびくつきながら聞き返すと、さくらはうんうんと首を縦に振りながら認めた。そんな2人を無視してのぞみ達は勝手な想像をしていたが、意識が

戻ったのか「す、凄い！」「桁違いだ！」とのぞみ・りんは言い、うららも頷いていた。こまちでさえ、「かれんには本当にいつも驚かされるわ」

と呟いていた程だった。しかしその後、のぞみ達による誘導言葉攻撃にかれんはまんまとはまり、「それでは第1回プリキュア合宿はかれんさんの

別荘に！決定ー！」とのぞみの高らかな宣言と共に別荘を合宿場にさせられたのであった。その様子を見ていたさくらはこっそり溜息をついてた。

そして翌日に買い物をする事を決定し、解散になった後で一度先に帰ったのぞみ以外で少しだけのぞみに対する感謝などの話し合いをし、合宿を

楽しもうと5人でハイタッチした後で皆自宅に帰っていった。その帰り道にかれんはさくらに「さくら。貴方も別荘にいる間はじいやのお手伝いは

いいから、思いつきり楽しみなさい」と言った。さくらは「でも・・・」と言いかけたが、かれんはその前に「私は少しでも貴方の力になっ

てあげたいし
・・・少しでも貴方が何も気にせずに安らげればと思っているの・・・

・ね?」とさくらの両手を握りながら言うと、黙っていたさくらも笑顔で「はい!」
有難うございます、かれんさん!」と答えた。かれんはそんなさくらの笑顔にほっとしながら(良かった・・・)と心の中で思っていた。

翌日のぞみ以外のさくら達5人はデパートの前で待ち合わせをしていた。待ち時間になっても来ないのぞみに「遅いなあ、のぞみは!」とりんが
文句を言っていたが、さくらが「大丈夫・・・後3分ほどでこちらへやってきますよ。何か大きな買い物リストを持っているみたいですよ」

とのぞみの気配がこっちに向かっていている事を告げると、少しは落ち着いた様子であった。そのさくらの言葉通り、3分ほどしてのぞみはやって来た。

しかもさくらの言っていた通り、大きなリストを持っていた。「じゃじゃーん!」と言いながらのぞみはリストを見せたが、その中身はお菓子ばかり。

これにはうらら以外あきれ果てていたが、とりあえず全員集合したので買い物をするべく、デパートの中に入っていった。

だがこの時、さくらは近くにアラクネアの気配がある事を感じ、いつ襲ってきてても対処できるように警戒していた。(無論かれんにも分らないように)

その後食品売り場でのぞみ達は買い物始めた。が、「ポテトチップス発見ー!」「あー、待って!カレー味も追加です!」など言いながら、のぞみ・

うららは次々とお菓子を籠に入れ、ぎゅうぎゅうになったのを注意したりんも「じゃあ、りんちゃんもチョコいらない?」とのぞみに自分の入れた

チョコを出されると、慌てふためくさま、そのチョコをミルクが籠

へ戻し、そのどさくさに紛れて、うらはは別のお菓子をちゃっかり入れていた。

そんな様子をさくらはこまち・かれんと共に呆れながら見ていた。こまちは「皆、楽しそうね」と言ったが、かれんは「子供なんだから。必要なものだけ

買えばいいのに」と呆れていた。さくらはその言葉に苦笑いをしていたが、この後かれんも自身が買おうと思ってグレープ味のジュースに手を伸ばした

ちょうど同じ時、隣でりんがオレンジジュースに手を取った事により、その場に一種の緊張を走らせた。最ものぞみ・うらははそんな事にお構いなく

走っていたが。そしてかれん達と言うと、まずりんが「私はオレンジがいいと思うんですけど！」と言うと、かれんは「それは貴方の好みでしょ！

グレープが好きなんだってわよ」と言い、その言葉にりんは「はいはい。かれんさんはグレープが好きなんだ。正直に言えば言いのに」と言うつと、

かれんはやや凶星をつかれたのか少し慌てたがすぐ冷静になり「そうじゃなくて！皆の好みを考えて、選ぶべきでしょ！」と反発した。互いに譲らないそんな2人にこまちは「あ、あの。どちらも買いましようよ、ね」と仲裁に入ったが、聞く耳持たずといった感じであった。

これに業を煮やしたさくらはこまちを後ろにひかせて、2人の前に立つとすぐに2人からオレンジとグレープジュースのペットボトルを取り上げ、

元の場所へ返した。これにりんとかれんが「何するの！！」「とさくらに文句を言おうと、さくらの方を向いたがその顔を見て2人もぞつとした。

さくらは怒っている顔であった。すこしひいている2人にさくらは「お二人が喧嘩をするくらいなら買わない方がましです。もし喧嘩

しないならと

約束するなら買いますが、どうします？」と注意した後、聞こくと、2人は即座に「ご、ごめんなさい」と小さくなりながらさくらに謝った。

こまちはそんな光景を苦笑いしながら見ていた。しかし2人はすぐに立ち直ったのか、店内を走っているぞみ・うららに「走らない！！」と

大声で同時に注意した。注意されたのぞみ達はすぐに止まった。その後も買い物を終えたと言ってレジに向かおうとするのぞみをりんが止め、

次々と入れていた品物に駄目出しをした。だが、ラジカセになった時、のぞみが「これだけは絶対買うの！」と反発した。その様子を不思議に思った

りんは「ラジカセなんかどうすんの？」と聞くとのぞみは「だって！これは合宿の目的にかかせないんだもん！」と言った。

その意味を誰も分からずにいると、突然周りが暗くなった。それがアクラネアの仕業だと分かったさくらは「皆！気をつけて！ナイトメアさんが

現れたよ！」とのぞみ達に警戒するように言った。その言葉に全員身構えた。そしてさくらの言葉通り、アラクネアが現れた。

アラクネアはラジカセをコワイナー化させ、変身したドリーム達とさくらを襲った。初めにプリキュアとさくらの攻撃をわざとコワイナーに受けさせた

アクラネアはその後すぐコワイナーを糸で包み、パワーアップさせた。次にドリーム達が攻撃した時にはさくら以外の攻撃は皆通用しなかった。

さくらの攻撃がまだ通じる事にアクラネアはくやしがついていたが、それでもドリーム達に「お前達はカードキャプターさくらがいなければ本当に

何もできないんだな！」と嘲り笑っていた。そんなアクラネアにドリームは「そんな事ない！ラジカセを・・・さくらちゃんや皆との思い出を残すための

ラジカセを返して！」と叫んだ。これを聞いたさくらとアクア達は驚いていた。のぞみの目的はそこにあつたのだ。前回の事が堪えたドリームは

少しでも皆の声を取ったときたかつたのだ。特にさくらにはいつも自分達の為に苦しめてしまったから、合宿の時に少しでも思っていた。

そんなドリームの気持ちにさくら達全員は「・・・」心の中に刻んだから、絶対に忘れる訳がない！！だから大丈夫！！」と答えた。そして皆の気持ちを知ったドリームは「もつともつと心の中に皆の声を刻みたい！」と叫んだ。するとそのドリームの強い『心』に反応したのか、前回

現れた蝶の小型版がドリームの胸から出現した。そしてそれから発せられたドリームの新必殺技『プリキュアクリスタルシユート』により、コワイナーは

粉碎された。そしてアクラネアは悪態をつきながら逃げていった。戦いが終わった後、ドリームは自分の胸に戻った新しい装備とその力を疑問に

思っていたが、それにはさくらが答えた。「それはのぞみちゃんの『心』が成長した結果生まれた新しい『力』なんだよ」そのさくらの言葉にドリームは

照れていた。戦いが終わった後のぞみはラジカセはもう必要ないと返した。心の中に皆の言葉を刻めばいいと分かったからだ。

そして今度こそレジへと思われたが、りんがさらに駄目出しを連発、かれんはグレイプジュースも駄目だしされそうになり、子供のように駄々をこねる

有様、こまちも好きな物を買っちゃおうかなと言い、うらははどさくさに紛れてまたお菓子を入れようとし、ココ・ナッツ・ミルクも

好物である

シュークリーム・豆大福・チョコを大量に入れる有様。そんな中、とうとうさくらはプツンという音と共に切れた。誰もが今の音は何だろうと思って、

その音がした方を向くと、そこには修羅となっていたさくらが立っていた。そのさくらが「い・い・い・か・げ・ん・に・．．．」と言っている内に何とか

逃げようとしたのぞみ達であったが、時既に遅く「しなさいー！！！」と大声で叫んださくらの声をまともにくらったのであった。

結局その後、品がある程度減らして買物物は終了した。帰り道にさくらが普通の笑顔で話してくれるまで、誰もが恐怖の余り夏なのに震えていた。

第18話・さくらとプリキュア合宿大作戦！（後書き）

次回もアニメ同様にかれんの別荘での話を進めます！

第19話・さくらとロマンス全開リゾートライフ！（前書き）

今回はさくらの運動の神経のよさが少し目立ちます。

第19話：さくらとロマンス全開リゾートライフ！

第19話：さくらとロマンス全開リゾートライフ！

鳥が飛び、太陽が出て晴れている最高の青空の下で、さくら達の乗っているクルーザーがかれんの別荘に向かっていた。

クルーザーの外で風に当たっていたこまちはその風の気持ち良さから「わあ・・・風が気持ちいい・・・」と言い、りんもクルーザーから見た

景色が気に入ったのか「うわあー！すごい！！」と感動していた。さくらもいつもとは違った広々しい感覚にうれしそうにしていた。

が、そんなさくら達とは対照的に「本当にすごい！！凄くおいしいー！！」「とのぞみ・うらはははくばくと船内で食べていた。

そんな2人にりんは「凄いのはそっちかい・・・」と呆れており、さくらも「まあ、のぞみちゃんもうららちゃんも花より団子・・・いえ、

景色より食べ物なんだと思いますよ」と苦笑いしながら言った。そのさくらの言葉に「そうね」「さくらさんの言う通りかも」とかれん・

こまちは笑っており、それを聞いていたりんも笑っていた。その時操縦していたじいやが「お嬢様ー！！」とかれんを呼んだ。かれんがじいやが

顔の見える所に顔を出すとじいやは「今年はよろしゅうございましてね！賑やかになりそうで！」と声をかけた。そのじいやの言葉にかれんも

「そうね！賑やか過ぎる気もするけど・・・まあたまにはいいかしら・・・」とじいやに賛同し、さくらに振り向きながら言うと、

「いいと思いますよ」とさくらは笑顔で答えた。すると今度はのぞみが「ねえねえ！」と言いながらさくらとかれんの側にやってくる

「別荘に着いたら、何して遊ぶ!?」と浮き浮き状態で聞いてきた。その問いにさくら達が答える前にのぞみの持っていたバッグの中から「ちよつと何とかならないミル! ココ様とナツツ様を早くここからお出しするミル!」とミルクが叫びながら騒ぎ始めた。慌ててのぞみが

「しいー! じいやさんに見つかつちやうつてば!」と注意しても「こんな窮屈な所にいつまでも!」とまた文句を言い暴れ始めたので今度は

さくらが「ミルクさん・・・島に着くまで我慢できず、そんなに暴れるなら・・・今すぐここから泳いで帰ってもらいますがどうします?」と

コールドボイスで聞くとミルクは暑いはずなのに寒気を感じ「すいませんミル・・・」と黙った。のぞみとかれんもその光景に苦笑いをしていた。

そんな時、うららが「あー! のぞみさん! さくらさん! あれ!」と声を出しながら何かを指差していた。さくら達もその方向を見ると「・・・わああー!! 見えてきた!」と叫んだ。そう島まるごと1つのかれんの別荘が見えてきたのである。

別荘に着いた時のさくらやのぞみ達の驚きは更に大きかった。どう見ても豪華なホテルそのものだったからだ。その光景に

のぞみ・りんは「「凄い!」」と呟き、うららも「まるで映画のセットみたいですよ」と素直に感想を述べていた。さくらも元の世界で大金持ちの

事にはある程度なれていたものの今回は「ほえ・・・凄く大きくて・・・綺麗・・・」と驚いていた。かれん・こまちはそんなさくらの

普通に驚く様子に滅多にないことからか、微笑みながら見ていた。

その後じいやがのぞみ達の各部屋を紹介し、「この別荘にはゲストルームが

断らなかつた。そして残されたさくらはかれんに「いつものアレをやるんだけど、さくらも一緒にやらない？」と誘われ、どんな事だろうと

いうわくわく感を持ちながら、さくらは「はい！」と答えて、かれん達についていった。

それから数十分後、さくらはかれんと共に水上スキーを楽しんでいた。さくらにとっては初めてだったが、持ち前の運動神経もあつてかすぐに

慣れたらしく、かれんのように砂浜から見ているのぞみ達に片手を振る余裕があつたらしい。それを見ていたのぞみ達はかれんにも驚かされた

が、それ以上に柔軟に対応していたさくらに「「す、凄い!!」「」と驚きの声をあげていた。

水上スキーの後、さくらとかれんはジューズを作り、プールサイドの椅子に座りながら談笑していた。「私、少し動きが鈍っていたみたい・・・

生徒会でデスクワークばかりやっていたからかしら？」とかれんが言ったのに対し、さくらは「そんな事はありませんよ。だってかれんさん、

凄く上手でしたから！」とかれんが鈍っているはずがないと言つた。そんなさくらに微笑みながらかれんは「有難う、さくら。でもさくらも

凄かつたわ。とても始めたばかりとは思えない程よ・・・さすがに運動神経が抜群ね・・・」と誉めていた。さくらはその言葉に照れていた。

しばらくしてミルクがやって来た。「ココ様・ナッツ様はどこミル？」と聞いてきたので2人はばらばらに行動しているとさくらは説明した。

するとミルクは「ミルクは1人だけ取り残されたミル！」と駄々をこね始めたが、さくら・かれんに「そんな事ないよ!」「そうよ・・・

ココとナッツはミルクが気持ちよく寝ていたから起こさなかったのよ」と言われると少しは落ち着いた様子であった。そしてその後かれんに

「それにここは『バカンスの地』。仕事の事は忘れてゆつくりしましょう」と言われて、ジューズも渡されたのでミルクはそれを

「有難うミル」と素直に受け取った。かれんも「どういたしまして」と微笑みながら言った。その後さくらが「かれんさん。私・・・

少しプールで泳いで来てもいいでしょうか？」と聞くと、かれんは「ええ、構わないわよ」と許可をしてくれたので、さくらは喜んで泳ぎに

行った。その後かれんとミルクはさくらの見せる泳ぎのセンスに「凄いわね・・・」「さすがさくらミル・・・」と呟いていた。

もつとも泳ぎ疲れたさくらがプールサイドの椅子に座りながら寝ている姿を見た時は2人とも「可愛い(ミル)」「とさくらの寝顔が可愛らしかったのか、微笑みながらそう言っていた。無論さくらが起きている間にそんな事を言えば、どうなるかは2人とも分かっていた。

夕方にじいや特製のバーベキューをさくら達は楽しんでいたが、その中でさくらはこまちの様子が気になっていた。護衛につけていたミラーの

話ではナッツとのお話中に顔を真っ赤にして逃げ出したと言うから、余計心配だった。案の定、火傷をし、さくらに応急手当をもらうこまちであった。それでもさくらはかれんにこまちは大丈夫だと伝え、少し悩んでいるだけだから心配しない方がいいと伝えた。

その夜、夜空の景色を楽しんでいるさくら達の前にどこから流れてきたのかガマオが現れた。ガマオは海に仮面を投げ込み、海水をコワイナー

化させた。海水がもとただけに広範囲で攻撃力が高く、さくらとド

リーム達は攻撃できずにいた。が、「水は凍らせれば、動きが止まるもの」

と言ったさくらに『凍^{フリーズ}』で固められると、島の自然を壊される事に怒りを覚えたミントが「島の自然を壊すなんて許さない!!」

と叫ぶと、ミントの胸から新しい装備が出た。そしてミントは新たな技『プリキュアミントシールド』を使用し、コワイナーを破壊した。ガマオはそのまま逃走し、島の周りの海水もコワイナーが倒された事で元に戻った。

そしてその後さくらが「気分を変えるためにいい物を見せてあげますね」とにつこりしながら言うと、『かの者達にすばらしき景色を見せよ!』

『幻^{イリュージョン}!』『灯^{グロウ}!』と詠唱した。すると今まで以上に美しい光景にのぞみ達は「綺麗」綺麗「綺麗」

と言い、大満足していた。その後、のぞみ達はさくらにお礼を言った。

その夜、結局ばらばらで寝る事に落ち着きを感じなかったさくら達は全員で一室に寝ていた。しかしさくらは皆が寝る中、1人で窓の外から

夜空を眺めていた。そして心の中で（本当に私はこの世界にいていいのか・・・今頃みんなは・・・）とこの世界でのんびりしている自分を

責める気持ちと元の世界の仲間を心配する気持ちに悩まされていた。しかし翌朝にはそれを顔に出さないように作り笑いをしていた。

だが、かれんだけはさくらの笑顔に何か悲しみを感じずにはいられなかった。

第19話・さくらとロマンス全開リゾートライフ！（後書き）

次回からさくらとプリキュア達の間には溝が生まれます。

第20話・おくらとりんのイケメン幽霊とのデート（前書き）

今回おくらには自分の過去を少し話します。そしてかれんはそんなおくらの変遷に気づき始めます。

第20話：さくらとりんのイケメン幽霊とのデート

第20話：さくらとりんのイケメン幽霊とのデート

かれんの別荘から戻ってから数日後のある日、さくら達は学校に集まっていた。今日はこまちによる怪談のお話がなされる事になっていたのだ。

日が暮れる中、カーテンを閉めた暗い部屋の中であらゆる本を灯しながら、こまちは怪談の話をはじめた。

「ほら・・・学校にもう使われていない古い校舎があるでしょう・・・そこにね・・・でるのよ・・・」「あわわ」「で、でるって・・・」

「何が？」語り始めたがでると言ったのに対し、うららは震えており、のぞみも震えながら声を出し、かれんは呆れた口調で何が出るのだと聞いた。

そんな中でさくらは元の世界で慣れているのか特に怖がる様子もなく普通に聞いており、対照的にりんは怖いのか顔を引きつらせていた。

かれんの問いにこまちはライトを顔の下から当てながら「それは・・・幽霊が！」と答えた。するとさくら・かれん・ナッツ以外の誰もが「・・・ぎゃああー!?!」「・・・」と悲鳴をあげていた。そんなのぞみ達を無視してこまちは話を続けた。

「昔、ローゼット伯爵のお屋敷があつたの・・・ローゼット伯爵には素敵な恋人がいたらしいわ・・・けどある日・・・彼女は不慮の事故で

亡くなってしまったの・・・失意の伯爵は彼女の死を受け入れられず・・・彼女の帰りを待ち続けた・・・けれどそんな伯爵もやがて病に倒れ・・・

亡くなってしまったの・・・」そこでこまちが一旦話を終えると、のぞみが「かわいそうな伯爵・・・」と伯爵に同情していた。

その後再び「それから毎年・・・伯爵の霊は恋人の彼女を探そうとあの校舎をさ迷うの・・・そしてその彼女と同じくらいの女の人の見つけると」

と一旦区切ると、さくらやかれん以外が怯える中でぬうと手を伸ばし「こうやって・・・捕まえに来るのー!!」と言った。それを聞いた途端

「きゃああー!？」と叫びながらりんは椅子から転がり気絶していた。そんなりに誰もが不思議そうに彼女を見つめ、のぞみでさえも

「りんちゃん？」と呆れるように声をかけていた。そんなりんをさくらは介抱しながらも旧校舎がある方を見つめていた。

そして完全に真つ暗になった夜中にさくら達は旧校舎の前にいた。

りんは既に恐怖を感じていたのか「ちよっ!? 何で旧校舎に行く事になるのよ!？」

と文句を言っていた。それに対し、のぞみは「だって!今日は伯爵の幽霊が出る日なんだよ!」と言った。こまちはその場の不気味さに感動していた。

のぞみは「う、うちの学校にこんな所があつたなんて!」と引き攣りながら言った。「さすがにちよつと怖いわね・・・」とかれんはミルクを

抱きながら言った。その言葉に無反応だったこまちに「こまち?」「とかれんが聞くとこまちは振り向きながら「わくわくするわね!」と物凄く

ノリノリの発言をしていた。そのこまちの言葉にかれん・さくらは苦笑いをしており、りんも「全然しない」と突っ込みを入れていた。その時、カラス達が鳴き声を出しながら飛んだ。その音にりんはさくらの肩をつかみ、のぞみ・うららも怖かったのか抱き合って震えていた。

カラス達が行った後もいまだに自分の肩をつかんで震えているりん

にさくらは「りんさん、大丈夫ですよ。今はカラスですから・・・」
となだめると、

りんも少しは落ち着いた様子であった。そんなりんを見て、うららが「りんさんって、本当に怖がりなんですね」と言うと、のぞみも苦笑いしながら

「そうそう！りんちゃんは昔からおばけとかそういうのが苦手なんだよ！」と説明した。その説明を聞いたさくらは幼い頃の自分を思い出していた。

「おばけなんかいる分けないうツツ・・・」と呆れ口調で言うナツツにココは怯えながら苦笑いをしていた。ミルクも怯えながらもりに強い口調で

「怖いなら一緒に来なくていいミル！」と言った。その時、さすがにナツツの発言が聞き捨てならなかったのか又はこのままではりんが可哀想だと

思ったのかさくらは全員に話し始めた。「ナツツさんには申し訳ありませんが、おばけは私の世界でも存在しておりますし、こちらの世界でも存在

しておりますよ・・・」そのさくらの言葉にこまち以外は驚いていた。唯一驚いていないこまちが目を輝かせながら「どうして分かるの？」と聞いた。

さくらはそんなこまちの視線にわずかに身を引きながら説明を続けた。「以前にもお話したように私の世界では魔術や陰陽術が存在する事から霊が

存在する事が判明しております。それに・・・私自身が3歳の頃から周りに霊がいるの感じ取れるようになっていました・・・」その説明を聞いたのぞみ達は驚いていた。その後更に話を続け「最もまだ小さかった私は『感じる』だけで『見る』事はできませんで

した・・・

それをいい事に私の兄が怖いイメージを調子に乗って話して、私を怖がらせた。それで私は12歳までおばけの話や霊を感じると

恐怖を感じて

しまっていました・・・」そこでさくらは一旦話を区切った。するとそのぞみが疑問に思った事を口にした。「はい！質問がありません！」

それに対しさくらは「何、のぞみちゃん？」と質問を受け付けた。のぞみは遠慮なく思った事を質問した。

「ここへ来る前にこまちさんが怪談をした時にはさくらちゃん、全然怖がっていなかったよね・・・どうして怖くなかったの？」

その質問にさくらは顔を少し背けながら説明した。「それはね・・・私が全ての『クロウカード』を『サクラカード』に変えて、実質上『最高の魔力』

を持つようになった後にね・・・その力を狙う人達との戦いをしてる内にね・・・怖がってなんかいられなかったのよ・・・怖がる事は甘えている事

に変わりが無いって分かったの・・・おかげでそれ以来おぼけとかの話には恐怖は感じなくなっただけだね・・・」最後は開き直ったように言った。

さくらの最後の説明を聞いたのぞみは「ごめんなさい・・・私ひどい事を聞いちゃった・・・」としょんぼりしながら、さくらに謝った。

さくらは「気にしないで」とのぞみを許した。だがかれんはそんなさくらの顔に過去をひきずっているのを感じた。その後しばらくの間、その場に

暗く重い雰囲気が漂っていたが、こまちが場の空気を空気を切り替えようと「そ、そう言えば、さくらさん！今はこの旧校舎から何か霊を感じるの！？」

とさくらに聞いた。それに対しさくらは「そうですね・・・まず霊ではありませんが後ろのかなり離れた所に増子さんがいて、さらに近くの木には

ナイトメアのアラクネアさんの気配を・・・そしてあの旧校舎の中

からは確かに・・・こまちさんのお話どおり・・・伯爵の霊がありますね・・・」と

冷静に言った。そのさくらの説明に誰もが周りを警戒したり、怯えているものもいたが、さくらが「まあ、増子さんは私なんかしますし、

アラクネアさんは仕掛けてきたら、後で追い返せばいい訳ですし、伯爵の霊は別に悪霊ではありませんよ・・・むしろ成就しようとしているけれど

できなくて困っている・・・と言った感じですね・・・」と状況や対策を説明するとほとんど落ち着いた様子であった。

その後増子はさくらが気絶させた後、ミラーに任せて別の場へ避難させた。そしてアラクネアは自分達にひきつけさせるべく、旧校舎に入っていた。

アラクネアもさくら達をターゲットにしたのか、後をつけていった。そして旧校舎に入った後、さくら達は手に手飾りを持ったローゼット伯爵の像と

りんそつくりの女性の肖像画を美術室で発見した。それらを見て、さくらは「そうか・・・そういう訳だったんだ・・・」と1人納得していた。

のぞみ達はこういう事だと聞くと「伯爵は恋人に手飾りをプレゼントしようとしたんです・・・でも・・・それが永久に叶わなくなっただ・・・そして

今でもそれが心残りとなっていて、成就できないのです・・・」と説明した。その後さくらは更に解決法として「私が伯爵の霊とコンタクトを取ります

・・・しかし後はあの画の女性に似たりんさんにしか伯爵を成就させる事ができません・・・」と説明した。その方法にりんは最初は反発していたが、

押すのぞみ達や「それしか方法がないんです・・・私を信じて下さ

い……」とのさくらの言葉に止めを刺され、その役割をする事にした。

その後、伯爵の霊とコンタクトを取ったさくらの力で伯爵の恋人を想う気持ちで作った『世界』に入ったりん達は途中でアラクネアの妨害を受けたが、

さくらの魔法・ドリーム達の援護そしてりんが「気持ちを通じれば・・・怖いものなんかない!!」と言った事で現れたりんの『心』の成長した証である

新装備による新必殺技『ルージュ・バーニング』でコワイナーを倒し、アラクネアを退散させた。そしてりんは一度は手飾りを受け取る事を断ったが、

伯爵に「私の為に頑張ってくれて……有難う……これはそのお礼です……」と礼を言われてそれを手に握らされると今度は快く受け取った。

その後伯爵は一度さくらの方を向き、一礼をした。さくらもそれに頷いて返した。そして伯爵は安らかな表情をしながら消えていき、その影響で伯爵の

作った空間は消滅していった。ここにローゼット伯爵は成就したのであった。

帰り道、りんは「さくら、有難う。もう私はおばけも幽霊も怖くないよ」とさくらに礼を言った。さくらは微笑みながら「どういたしまして」と答えた。

しかしそんな風に話しながら自分の前を歩いてるさくら達とは裏腹に後ろを歩いていたかれんは厳しい顔をしながらさくらを見ていた。そんなかれんの

様子にこまちは「かれん……どうかしたの?」と聞いたが、かれんは慌てて「何でもないわ!」と答えた。しかしその言葉とは裏腹にかれんは心の中で

悟り始めていた。(やっぱり……さくらは元の世界にいる仲間達

に対して申し訳ない気持ちを持っていてそして今この世界で暮らしている自分を

責め始めている・・・このままではさくらは・・・何とかしなくちゃ・・・かれんは心の中でさくらの為にも何とかしなければと決意していた。

だがこのかれんの考えが後にさくらとかれん達との間に深い溝を生み出してしまふ事になるとはこの時のかれんには知る由もなかった。

第20話・おくらとじんのイケメン幽霊とのデート（後書き）

次回はこまちもおくらの変に気づきます。

第21話・さくらとこまちの夏祭り奮闘記（前書き）

今回はさくら達の夏祭りへの準備に対する頑張りが見所です。

第21話：さくらとこまちの夏祭り奮闘記

第21話：さくらとこまちの夏祭り奮闘記

夏休みのある日、さくら達はこまちの実家である和菓子屋小町に集まっていた。そこでこまちに今年の夏祭りでの出店の話を聞かされていた。

「スペシャルカキ氷？」のぞみが和菓子を食べながら、こまちに聞き返した。それに対しこまちは

「そう！うちの和菓子をトッピングに使って、ちょっと一風変わったカキ氷を作ってみようと思って・・・」と説明した。

それを聞いたさくら・かれんは「素晴らしいアイデアですね！こまちさん！」「そうね、いいんじゃない！夏祭りの出店にぴったり！！」

とこまちに賛同した。そしてのぞみ達も大賛成であった。しかしそのカキ氷のアイデアを考える事になると

まずのぞみが「賛成ー！！豆大福をどっさり乗せてみようよー！！」
と言うと、ナッツも「それはいいナッツー！！」と喜びながら賛同していた。

次にうらが「私はようかんを七切れ乗せまーす！！」と言い出し、りに「うらら、張り合わなくていいって・・・」と突っ込まれた。最後にココ・ミルクが「ココはシュークリームがいいココ！」「ミルクはチョコレートがいいミルク！」と意見を出し、そこで終わった。さくらが「そこまで！全部却下！！」と全てに駄目出しをした為であった。その言葉にのぞみ達アイデアを出した者達が不満をぶつける

「まずのぞみちゃん・ナッツさん！豆大福を1・2個乗せるならまだしも・・・どっさり乗せたらカキ氷を食べる前にお腹いっぱいになるから

駄目！！次にうららちゃん！ようかんをわざわざ七切れ乗せるくら

いなら、カキ氷と分けてまるまるようかん1本を出した方がまし！最後にココさんとミルクちゃん！シュークリームとチョコレートは洋菓子だからその時点で論外！！」とさくらが理由を説明した。最後に「何か文句がある人は？」とさくらが聞くと、のぞみ達は「……ありません……」「……」「……」としよぼくれながら答えた。そんな光景にりん・かれん・こまちは苦笑いをしながら見ていた。最ものもみはすぐに立ち直ったのか「よし！夏休みの出店を出す事に決定ー！！」と高らかに宣言していた。最もさくらは今度はのぞみに賛同していたので、何も言わなかった。

その後、料理センスが6人の中で最も優れているさくらがこまちと共にカキ氷の試作品作りを手伝う事になり、その間にのぞみ達は夏祭りの準備を

していた。そして厨房において、さくらとこまちはさっそく試作品用のカキ氷を作っていた。その最中にこまちの姉であるまどかが「どう？うまくいきそう？」と声をかけてきた。それに対しこまちは「うん！何とか」と答え、さくらも「頑張ります！！」と答えた。そこでこまちは念の為にと思ったのか「お父さんに味見してもらった方がいいかしら？」とまどかに聴くと、まどかは「気遣いは無用だよ！

毎年夏祭りの出店は私達に任されているんだから……今年はこまちの好きなようにやって見たら？」とアドバイスした。それを聞いたこまちは

去年まどかがやっていた事を思い出し、「お姉ちゃん……去年は大変だった？」と聴いてみるとまどかは「そりゃあ簡単には行かなかったけど」

と一旦言葉を区切った後、「だからこそ、乗り切った時にはうれしんだよ！」とその時の気持ちを述べ、さらにさくらを見ながら「それにこまちは手伝ってくれる友達がたくさんいるんだから・

・協力して頑張ればいい！」と言った。こまちも「うん！」と答えた。

無論その後でさくらに「という訳で、さくらちゃん、お願いね」と付け加えるように言い、さくらも「はい！任せてください！」と張り切って答えた。

が、そう答えるさくらの顔に一瞬だけだが、こまちは何らかの違和感を感じていたが、気のせいだろうと思うことにした。

そしてまどかは去る前に「あっ、そうそう。またお婆ちゃんからたくさん夏みかんが届いたから、後で皆で一緒に食べたら？」と差し入れてくれた。

それから約1時間後、カキ氷の試作品が完成し、こまち・さくらはそれをかれん達に試食してもらおう事にした。試食してもらった結果は「○○○○おいし〜い！！」「○○○○」と大好評であった。かれんも「あんこの量・蜂蜜の量・ようかんの大きさ、どれも完璧ね！」と賞賛していた。

後は明日を待つだけとなり、こまちは一緒に作る事になっているさくらに少し早めに来てもらう事を告げ、さくらも了解した。

が、その夜にさくらはこまちが用意していた氷が全てなくなってしまう光景を一瞬『予知』で見つてしまい、万が一それが当たってしまった場合に備えて、

じいやに頼んで幾分かの水を用意する準備をしていた。そんなさくらの様子をこっそり見ていたかれんは心配そうにさくらを見ていた。

そして当日、さくらの『予知』通りにこまちが業者に頼んでいた氷が全て無くなってしまっていた。犯人はたまたま通りがかつた空腹のガマオであった。

そのガマオは氷を食べ物と思い、全部食べてしまったのであった。そこへさくらがかれんと共に浴衣姿で昨晚準備して用意した氷をクーラーボックスに

入れて、予定時間より前に現れた。うなだれているこまちから事情

を聞いたさくらは「ごめんなさい、こまちさん。私が昨夜の内に知らせとけば・・・」

と昨夜に見た『予知』を知らせなかった事を詫びたが、かれんは「さくらのせいじゃないわ！だから気にしちゃ駄目！」とさくらに言った。

こまちも「そうよ。それにさくらさんは万が一に備えて、わざわざ氷を用意してくれたんだから、私は感謝しているわ」とさくらを励ました。

そのおかげで少しは立ち直ったさくらであったが、まだ問題は完全に解決したわけではなかった。確かにさくらは予備の氷を用意していたのだが、

その量はこまちが業者に依頼していた量の7割がやっとであった。予定した分の3割をどうすべきかで問題になった。3人で各業者に当たってみたが、

全て売り切れ。それに夏祭りは夕方辺りから始まる為、夕方に氷が届いてもはつきり言って間に合わない。どうする事もできない現状にこまちは

「仕方がないわ・・・あきらめるしか・・・」と諦めかけていたが、かれんが「諦めては駄目よ、こまち！2年前、私に納得がいくまで行動しないと必ず

後悔するって言ったのはあなたよ！」と励ました。そこでさくらが「2年前に何かあったのですか？」と聴いた。それに対し、かれんこまちは語った。

2年前、当時クラス委員だったかれんは社会科見学の指揮を取っていたのだが、行き先の工場がトラブルで休業となり、中止も仕方ないとかれんは

自分の無力さに歯がゆさを感じていた。そんなかれんに声をかけたのが当時はまだそれほど親しくなかったこまちであった。こまちはかれんに、

「納得が行くまで行動しなければ、後悔するわ・・・だから私も手

伝う！」と言って、手伝ってくれたのだ。その後、各地を歩き回り、中々良い返事を

もらえなかったが、最後には許可をもらう事に成功したのであった。その夜、かれんの家で社会科見学のパンフレットを完成させ、2人は喜びながら、

初めて互いの名を呼び合った。そして社会科見学も大成功に終わったのであった。それを聞いたさくらは改めて、2人の絆の強さを知った。

こまちもその事を思い出してか、もう一度頑張ってみようと立ち直った。その後に見れたのぞみ・りん・うららと共に全員で試行錯誤をする事になった。

その途中でさくらは何かを思い出したのか「こまちさん！ありますよ！甘さを中和できる酸味を持った果物が！」とこまちに言った。それを聞いて最初は何の事か分からなかったこまちであったが、すぐに思い出し、「そうか！夏みかんね！？」とさくらに聴くと、さくらも

「はい！そうです！」と答えた。その後で駆けつけてくれたココ・ナッツと共に全員で作業を分担しながら、夏祭りへの準備を急いだ。

そして夏祭りが開催した時にはこまちも無事店を出せるようになっていた。和菓子を作るのはさくらとこまちとかれん。客引きはのぞみ・りん・うららが
当たった。店の出す商品メニューは2つで、カキ氷の方は『和風力キ氷』・夏みかんを使用したほうは『こまちアラモード』であった。2つとも大当たりで、たちまち行列が出来、さくら達は大忙しであった。これで何も問題なく、めでたしめでたしになったと思われる

が、そうは行かなかった。お店の目印となる標識飾りを止める為のガムテープを買う為に人気のない場所を通ったのぞみはそこで仮面を売っている

ガマオに出くわしてしまい、攻撃してきたのだ。のぞみの危機を感じ取ったさくらはココ・ナッツに店を任せると、かれん達と共にその場へ急行した。

そして変身したドリーム達とさくらがガマオと仮面のコワイナーを迎え撃った。相変わらずさくら以外はどうしてもコワイナーに苦戦を強いられたが、

ガマオが氷を盗み食いした犯人だと分かると、全員の怒りが爆発し、反撃が始まった。そして遂にコワイナーはアクアの新装備による新必殺技

『アクアトルネード』によって撃退され、ガマオも「お祭りを馬鹿にして、台無しにする人は！ここから出て行きなさい！」とさくらに怒鳴られながら

吹き飛ばされたのであった。戦いが終わった後、さくら達は大急ぎでそれぞれの仕事に戻った。その後は問題もなくお店は大成功に終わった。

夏祭りが終わり、その帰り道。前を歩くさくら・のぞみ・りん・うららとは別に、後ろでかれんとこまちが話し合っていた。

かれんは「2年前、あの時の貴方の言葉で私は生徒会長になる事を決めたの・・・やっとその時の恩返しが出来たわ」と言った。それに対しこまちは

「そんな・・・恩返しだ何て・・・」と照れていた。しかしその後にかれんがさくらの事で話し始めると、こまちも「じゃあ・・・私がああの時に感じた

のは・・・」と前日の事で納得していた。そしてかれんが「ええ、間違いないわ・・・さくらは自分の事で必要以上に責めている・・・」
「と言い、

こまちは「だから、私達が何とかしなくちゃいけない・・・という事ね」と言うと、かれんは頷いた。2人はさくらの為に何か解決策を建てる事にした。

だが、かれん達はまだそれがさくらと自分達の間には、大きな溝を生み出す要因になるとは気づいていなかった。

第21話・なぐらとじまちの夏祭り奮闘記（後書き）

次回ではりん・うららもなぐらの異変に気づきます。

第22話・さくらとのぞみの1日マネージャー（前書き）

今回、さくらの意外な活躍がみられます。

第22話：さくらとのぞみの1日マネージャー

第22話：さくらとのぞみの1日マネージャー

夏休みも終わりに近づいたある日、ナッツハウスにて「えっ!? 皆、夏休みの宿題もう終わってるの!？」と、のぞみの抜けた声が響いていた。

そんなのぞみの質問に対し、りんは「当然!」と当たり前のように言い、かれんは「のぞみ、大丈夫なの?」と呆れたように聞き、こまちも

「もうすぐ夏休みも終わっちゃうわよ・・・」とこまちが現状を述べた。そんな3人(特にこまちの言葉に)のぞみは頭を抱えながら「そうなんだよ! 宿題はまだいっぱい残っているし! 自由研究のテーマもまだ決めていないし、あー! どうすればいいの!？」とパニックでた。

そんなのぞみにさくらは「大丈夫だよ、のぞみちゃん! 私も小学校の頃に色々あってやばかったけど、2年連続でたった1日で夏休みの宿題を

全部終わらせたからさ! のぞみちゃんも最後の3日間徹夜で頑張れば終わるんじゃない?」と笑顔ながらさりごとんでもない提案を言った。

そんなさくらのとんでもない経歴にかれん・こまち・りん・うらはは目を点にし、「さくら・・・本当なの? それ・・・」

「本当だとしたら・・・凄いわね・・・」「て言うか・・・マジで?・・・」「凄すぎです・・・さくらさん・・・」と呟いていた。

対照的にさくらの提案を聞いたのぞみは「む、無理無理! さくらちゃん! 絶対無理だよ、そんな事!」と顔を青ざめながら不可能だと言った。

結局、自由研究以外はさくらが手伝うという事にあり、何とか解決した。甘いと思ったかれんとりんであったが、もしのぞみが少しで

もさぼる

のであれば、さくらは今後一切手伝わないと言ったのを聞いて、言うのを止めたのであった。そして自由研究の方もうららがのぞみを自分の

仕事に誘い、その中でテーマを探す事が決定した。のぞみが「ねえ、皆も一緒に行こうよ！」とさくら達も誘ったが、りんは

「行きたいけど・・・私、店の手伝いがあるから」と断り、かれん・こまちも「ピアノのレッスンがあるから」「着物の着付教室があるから」

と断った。だがさくらも断ろうとした時、「さくらはぜひ行くべきよ！じいちゃんには私から話をしとくから！」「そうね！その方がいいと思うわ！」

とかれん・こまちが言い、半ば強制的にさくらはうらら・のぞみに着いていく事が決定した。そしてココ・ナッツ・ミルクも行く事が決定した。

だがさくらはかれんとこまちが何故自分を強制的にうららやのぞみと一緒に行かせたのだろうと、不審に思っていた。

翌日。うららに着いて行つたさくら・のぞみはマネージャーである鷲尾に「よろしくお願いいたします！！」と挨拶をした。

そんな2人に鷲尾は「よく来たね！ゆっくり見学するといいよ！」と快く対応をしてくれた。ちなみにココ・ナッツ・ミルクはのぞみのバッグに

隠れてついてきていた。ちょうどその時、鷲尾の携帯が鳴り、電話に出るとそのまま出て行ってしまい、うららも着替える為に部屋を出た。

その後、ココ達も遊ぶ為に外へ出たので、楽屋にはさくらとのぞみだけが取り残されていた。そんな中でものぞみはテーマを探そうとしていた。

すると突然部屋の壁に備え付けられていた電話が鳴った。電話に出

たのぞみに相手は仕事の内容の変更を伝え、のぞみはそれをメモした。

そしてそれを監督に伝えに2人で行くと、今度はコンサートのバンドに欠員が出るという事態が起こり、監督が「カラオケを用意しておけと

言ったる！」という中、さくら・のぞみはテレパシーで（どうする、のぞみちゃん？）（うーん・・・あっ、そうだ！任せて！）と話し合い、

「あ・・・」と監督に切り出した。振り向いた監督にのぞみは「音楽が大得意なお友達がいるんですけれど、彼女なら！」と笑顔で伝えた。

その後、代役も来て、コンサートは無事に行われ、大成功を収めた。そしてのぞみが呼んだキーボードの代役とはかれんであった。

そして次の場所へ鷺尾の車で移動した。その移動の最中にのぞみ・うらははかれんに「忙しいのすみませんでした」「ご迷惑をおかけしました」

と謝ったが、かれんは「いいのよ、気にしないで」と許した。そんなかれんにさくらが「かれんさん、よく来ましたね」と言うと、かれんは

「ちょうど時間的にあいていたしね」と答え、「次はどこでお仕事なの？」と聞いてきたが、それにはのぞみが書いたメモを見ながら話をした。

そんなのぞみをさくらは微笑みながら見つめていた。そうこうしている内にさくら達は次の仕事場である時代村に着いたのであった。しかしその楽屋に着くと、またしても鷺尾は仕事の電話でいなくなり、しかも今度は着物着付け担当係が出払っていたり、監督が花を全部

取り替えたいと言い出すなどのトラブルが発生した。それでものぞみ・さくらがこまち・りんそれぞれ連絡をとり、事なきを得た。最後に来たりんがのぞみに「のぞみ、自由研究の方は進んでいる？」

と聞くとのぞみは「それがまだ」としか答えられなかった。その時すっかりマネージャーと思われるのぞみ・さくらが監督に呼ばれたのであった。何事だろうとさくら・のぞみは監督の所へ出向いた。

その数十分後、時代劇の撮影現場にさくら・のぞみ以外の全員（ココ・ナッツ・ミルクを含め）が時代劇ファッションに着替えさせられていた。

のぞみが「スケジュールが立て込んでいて、時間がないから、いきなりリハーサル無しで始めるから」と説明すると、りんが一度「あ、はい」

と答えたがすぐに「って！どうしてあたし達が着替えなきゃいけない訳！？」と突っ込んだ。それに対しさくらが申し訳なさそうな顔をしながら

「すみません・・・でも監督さんにエキストラとして出演してくれる人がいないかと言われまして・・・」と説明すると、かれんが「いる、と言った訳ね・・・」と溜息をつきながら言った。「すみません」と謝るさくらに「さくらが謝る事ないわ」とかれんが許した。

そこへこまちが「そういえば、さくらさんとのぞみさんは着替えなの？」とさくら達に聴くと、「私達はうららちゃんと監督さん達スタッフの

方々との間の連絡係という事なので・・・」とさくらが説明し、こまちも納得した様子であった。そうこうしている内に本番が始まった。

だが出演者の中に紛れ込んでいたブンビーの策略でかれん達は他人のいない逃げ道のない場に追い込まれ、絶体絶命に追い込まれてしまった。

持っていた刀で戦おうとしたココ・ナッツもあっさりとやられてしまったのだ。特にナッツはココの弾き飛ばされた刀を頭に喰らった

だけで

気絶したので、りんに「あんたら、弱すぎ・・・」と呆れ顔で突っ込まれていた。一時大きな自転車で駆けつけたのぞみによって、形勢逆転かと

思われたが、そののぞみもその自転車にブレーキがないのに猛スピードを出し、川へ落ちてしまった。そんなのぞみを助けようとするりん達に

「これまででござるな！覚悟！」とブンビーが刀を振り上げて突っ込んできた。これまでと、のぞみ達の誰もが思ったその時だった。2つの手裏剣がブンビーの足元に突き刺さったのだ。思わず動きを止めたブンビーが手裏剣がやって来た方向に顔をあげ、「何奴!？」と叫んだ。

のぞみ達もその方向を見ると、そこには店の屋根の上にくノ一姿をした覆面者がいた。その者は屋根から飛び跳ねると、素早い動きでブンビーに近づき、持っていた刀を抜き、刃を裏返しながら攻撃した。そのくノ一の鋭く正確な攻撃の前にブンビーは後退りをせざるを得なかった。

そして改めて「お主！何者でござるか!？」と聴くと、その者は「ふっふっふっ・・・」と笑った後、「ある時は中学生、ある時は忍、だが

その真の姿は『カードキャプターさくら』!』と覆面を取って名乗り出た。そうくノ一の正体はさくらだったのだ。これには誰もが驚いていた。

その後形勢不利をと見たブンビーは近くの倉庫にあった鎧兜をコワイナー化させた。それに対し、プリキュアに変身するのぞみ達。そしてさくらも巨大な鎧武者のコワイナーに対し、「では、こちらも！巨大化の術!！」と言って、『大^{ビッグ}』のカードで巨大化した。

その光景にブンビーは「それはないでござるよ!！」と文句を言ったが、無意味だった。

結局コワイナーは巨大化したさくらに動きを抑えられると、レモネードの新たな必殺技『レモネードシャイニング』によって、粉碎されてしまい、ブンビーも「てやんでえー！今日はこの辺でひいてやる！！」とせりふを残しながら、逃げて行ったのであった。

全てが終わった後の帰り道、車中で鷺尾は「いや〜、のぞみちゃん！今日は凄かったね！マネージャーとして働いていけるんじゃないかい！」と
のぞみを誉めていた。のぞみは照れていたが、その後鷺尾はうららに「もう鷺尾さん！のぞみさんばかりに頼らないでください！」と怒られていた。

そして鷺尾以外の一同はナッツハウスに着いた。ナッツハウスに着くなり、のぞみは「ああ〜。結局テーマを見つけれなかったなー」と落ち込んでいた。そんなのぞみをかれんは「仕方ないわ・・・のぞみだって、遊んでいた訳じゃないから」と励ました。そしてさくらが

「そうだよ、のぞみちゃん。それにテーマなら今日、のぞみちゃんが書いたメモの中にちゃんとおあるよ」とアドバイスした。そのアドバイスに

誰もが驚き、のぞみにメモを見せてもらうと更に驚いた。ちゃんと丁寧にびっしりと今日のスケジュールやその内容が書かれていたのだ。

これを皆は賞賛し、のぞみに自由研究にすべきと勧めた。それを聞いて喜ぶのぞみを淋しそうに見つめるさくらをかれん・こまちはやや厳しい視線で

見つめており、その事をりん・うららも気づいていた。そしてのぞみの手伝いをすべく、のぞみと一緒にさくらが去ると、かれん・こまちは

りん・うららに全てを話した。それを聞いたりん・うららも初めは

愕然としていたが、すぐにかれん・こまちの言うように何か対策を取る事に賛同

していた。だが、この時4人は気づいていなかった。かれん達の子がおかしい事に気づいていたさくらがのぞみを先に行かせ、話を全て聞いて

いたのだ。話を聞いたさくらは（そろそろかれんさんやのぞみちゃん達とお別れする時なのかな）と思っていたが、

今はのぞみとの約束を守ろうとのぞみの家へ急いで行った。

第22話：さくらとのぞみの1日マナージャー（後書き）

今回はさくらとのぞみ達の間にとつとつ溝が生まれます。
しかし最後に新たな伝説が誕生します！ご期待を！！

第23話…さくらとのぞみと新たなプリキュアの誕生(前書き)

今回さくらが遂にプリキュアになります！

第23話：さくらとのぞみと新たなプリキュアの誕生

第23話：さくらとのぞみと新たなプリキュアの誕生

その日もさくら達にとつて、いつもと変わらない日常が続くはずであった。だが、変化は突然起こる事になってしまった。

きっかけはナツツハウスでのちょっとしたけんかであった。のぞみがミルクにチョコを食べられたと言って追いかけてこをしていた。その後、2人はさくらに「2人とも！いい加減にきなさい！」と叱られ、一時的に止めたのだが、テーブルに座るとまたしても口論になった。

のぞみが「だってさくらちゃん！今回は本当にミルクが悪いんだよ！人の食べ物を勝手に食べるんだから！」とさくらに文句を言うと、ミルクは開き直ったかのように「早い者勝ちミルク！」と言った。2人の言い分を聞いたさくらは正しい見方からそれぞれに言った。

「のぞみちゃん・・・確かにのぞみちゃんの言ってる事は間違いないよ・・・でも、それで店の中を追い掛けっこしていたら、同レベルだよ」

「ミルクちゃん・・・貴方もレストランのバイキングとかパーティーでなら食べ物の早い者勝ちは許されると思うけど、それ以外では駄目だよ」

のぞみ・ミルクはその言葉の前に何も言い返せず、ただ「はい、申し訳ありませんでした（ミル）」との言葉を発したのみだった。そんな様子を見て、かれん達はさくらの相変わらずの凄さに驚きながらも、のぞみ達には苦笑いしていた。これだけならまだ何ともなかった。

だがその後につららがミルクに「そうだ！ミルクのお世話役見習いの修行の話を知りたいな〜！」と言った事から、ことは始まった。

ミルクが「お世話役は政治・経済・文化・歴史に精通した者で王様と国民の意思を繋ぐ重要な役職ミル。そして見習いは日々勉強し、

激しい

競争に勝ち抜かなければならないミル！」と自慢げに語ると、のぞみ「勝手に人のチョコを食べるような人が見習いだなんて、パルミエ王国も

人手不足なんだね」と皮肉を言った。それを皮切りにパルミエを馬鹿にされたと思ったミルクが「余計なお世話ミル！」と憤慨したが、のぞみに

「じゃあ今のミルクはお世話役にふさわしいの？」と聞かれると何も答えられなかった。が、何も言い返せなかったのはくやしいう思っ

た。ミルクは「うるさいミル！ミルクは日々自分の夢の為に努力しているミル！それを夢の持たないのぞみに偉そうな事を言われたくないミル！」

と言い、のぞみが「それなら、パルミエ王国を復活させる事だよ」と反発すると、「それはパルミエ王国の国民全員の夢であって、のぞみ

個人の夢ではないミル！」と『自分自身』の夢をもたないのぞみの弱点を突いた。さらにその言葉に押し黙ったのぞみにミルクは

「じぶんの夢を持っていない人になんか、王国の未来を託したくないミル！のぞみなんかプリキュアになる資格はないミル！」と言いつ放ち、

「ミルク！それは！」と制止しようとするココの言葉を無視し、「のぞみは！プリキュア失格ミル！」とはつきり言い切った。

そのミルクの言葉にのぞみはショックを受けたのか「プリキュア・・・失格・・・」と震えながら呟いた。変化が起きたのはその時だった。

「そうか・・・じゃあ・・・全然知らない世界からやってきて・・・夢を持たない私は・・・ここにいて資格もないよね・・・」とさくらが言った。

思わず誰もがさくらを見たが、そのさくらの顔は全てを割り切ったような冷ややかな顔であった。さくらは皆の視線を気にせずミルクに聴いた。

「『夢』をもたないのぞみちゃんがプリキュア失格なら、当然夢を持たないよそ者の私もここにいる資格はないと言っ事だよね、ミルクちゃん？」

そのさくらの言葉にミルクは自分の失言に気づき、「ち、違うミルク！ミルクはただのぞみが！」と言い訳しようとしたが、その前にさくらに

「のぞみちゃんに自分の凶星を突かれたから、そのお返しをしただけだと言いたいのか？」と言われてしまい、何も言えなくなった。

その後さくらは怒りに身を任せ、怒鳴り声で叫んだ。「ふざけないで！のぞみちゃんは他人の気持ちを思いやり、一緒に悲しみや喜び・寂しさを

分かち合える事のできる、凄く優しくいい娘だよ！こんな疫病神な私と違って！！のぞみちゃんだっていつかは自分自身の夢を持つ時が来る

かもしれない！なのに！今その夢を持たないだけでプリキュア失格だなんて言うなら、初めからのぞみちゃんを自分達の戦いに巻き込むな！！

それともパルミエ王国の人々は夢を持たない人でも初めは都合のいいように使って、夢がないと分かると必要ないってする卑怯者達なの！？」

誰もさくらに口出しできなかった。特にミルクはこれまでの自分の行動がさくらの言っていた事に該当していた為に返す言葉もなかった。

その後さくらは「やっぱり私は『災い』を呼ぶ存在・・・これ以上ここにいない方がいいみたいですね・・・」と冷静さを取り戻しながら言った。

そして「今からこの町を出ます！皆さん、大変お世話になりました」

とのぞみ達に別れの挨拶をした。それを聞いたかれん達は慌てて止めようと

したが、「かれんさんもりんさん達も本当の事を言ったら、どうですか?」とこれまでにない冷めた視線で言われ、怯んでしまった。

りんが「どういう事よ!それは!？」と聴き返したが、さくらは何も言わなかった。その後思い当たったかれんはさくらに

「まさか、さくら!この間の私達の話を!？」と聴いた。さくらは「ええ・・・あの時のかれんさん達の様子がおかしかったので、一応」と

そっけなく答えた。その答えを聞かされたかれん達は愕然としていた。まさか、当の本人に話を聞かれていたとは思わなかったのである。

その後、「これまでお世話になりました・・・最後のお詫びとして、皆さんの記憶から私の事に関して消去させてあげます。それが私の皆さんに

できる唯一のお詫びです・・・」とさくらは言いながら、杖を出し、『消』^{イレイズ}のカードを使おうと用意した。本気だった。

その時、「待つて!」とのぞみがさくらに声を掛けた。その言葉にさくらは一旦動きを止めた。そのさくらにのぞみは近づくと

「さくらちゃん・・・私達から自分の記憶を消して、どこかへ行っちゃうの?」と悲しい視線で聴いた。その視線にさくらは苦笑しながら

「うん。ごめんね、のぞみちゃん・・・でもそれがのぞみちゃん達の為には一番いいんだよ・・・」とのぞみに優しく言った。

その言葉を聞いた瞬間、のぞみはさくらに抱きつきながら「嫌だ! !さくらちゃんの事を忘れるなんて!!そんなの絶対やだ!!」と泣きながら

叫んだ。そんなのぞみの姿にかつての自分を思い出したさくらは「分かったよ、のぞみちゃん。今夜、私、のぞみちゃんの所に泊まる

よ。

そして明日の朝、結論を出すよ……だから、もう泣かないで……
「とのぞみをあやかしながら言った。そのさくらの言葉にのぞみが
「本当？」と聴くと、「うん！本当だよ！」とさくらは笑顔で答え
た。その後さくらはかれんの許可をもらい、じいやにも話しをする
と、

のぞみの家に泊まりに行った。かれんは心の中で（もしかしたらの
ぞみなら……さくらの力になれるのかもしれない……）と思っ
ていた。

そしてかれんはミルクに自分もはつきりとした夢がない事を教え、
「夢はないかもしれないけれど……一生懸命頑張っている者同士
なら、

分かり合えるはずよ……」とのぞみともつと話し合ってみるべき
だと進言した。ミルクも「分かったミルク」と話してみる事を約束し
た。

翌日早朝、さくらとのぞみはナッツハウスに向かっていた。今日、
さくらが自分の今後について、全員に打ち明ける事になっており、
場合に

よっては本当に記憶消去もありえるために、のぞみはさくらにまだ
何も聴けなかった。怖いんだと、のぞみはじぶんの感情を理解して
いた。

その時だった。アラクネアの気配を感知したさくらが「のぞみちゃ
ん！ナイトメアの気配がナッツハウスのすぐ近くに！」とのぞみに
言い、

その場に急ごうとしたが、「そうは行きませんよ」と言いながらカ
ワリーノとブンビーが大量のコワイナーを引き連れて、さくら達の
前に現れた。

「貴方に勝てないのは百も承知の上ですが……ドリームコレット
を手に入れるまでの時間は稼がせていただきますよ……」と力

ワリーノは

言った。その言葉を聞いたさくらは時間稼ぎが目的と悟り、ならばと、「かの者達の動きを止めよ！」^{タイム}「時」!!!、「^{タイム}時」
のカードを使用して、カワリーノ達の動きを完全に止めた。その間にさくらは「のぞみちゃん！行くよ！」と驚くのぞみを後ろに乗せながら、

「^{フライ}翔」を利用して杖の飛行モードを使って、現場へ急いだ。^{タイム}「時」
のカードを使用している間は魔力の消耗の激しさから

テレポートは使えない為であった。上空飛行中、のぞみはさくらに聞いた。「さくらちゃん・・・やっぱり、いつちゃうの？」

その質問にさくらは「もう少し、この町にいるよ！」と笑顔で答え、その答えを聞いたのぞみは喜びながら、落ちないようにさくらの背中に

しっかりくっついていた。のぞみは心の中で（よかった！）と心底喜んでいた。

それから数分後に、2人は現場に到着した。「そこまでよ!!!」
とさくら達は言った。その声をした方に黒い仮面をつけて怪物化したアラクネアとアクア達は顔を向けた。そこには杖に乗っていたさくらとのぞみがいたのだから、誰もが驚いていた。その後のぞみは落下しながら

変身し、「私は何も出来ないよ！でも、ココ達の夢を叶えると言う事をそしてさくらちゃんの力になるという約束した事は果たしたい！」と

叫んだ。そのドリームの言葉と共にプリキュア達の反撃が始まったが、そこへ^{タイム}「時」の効果も切れてしまったカワリーノ達が現れた。その状況の中でさくらは遂にある覚悟をした。それを行う前に「もしも、私が力を解放しても、皆さんは私に前と同じ様に接してくれますか？」

とドリーム達に聞いた。ドリームは「当たり前だよ！」と迷い無く答え、アクアも「貴方は貴方なのだから！」と言い、ルージユ達も

頷いた。

ココ・ナッツも「さくら、頑張る(ココ)(ナッツ)!!」と激励し、ミルクも「さくら!昨日はごめんミル!」とさくらに謝った。

そんなドリーム達の言葉を受け取ったさくらは遂に自分の力の一部の封印を解いた。そして魔方陣を展開すると、カード達を全て出し、「クロウによつて作られ、今は新たな主である我の下にありしカード達よ・・・今こそ我にプリキュア達と共に戦う為の力を発動させよ!!」

新たな主さくらの下に!!」と詠唱した。次の瞬間全てのカードと杖は3つの光に分かれ、さくらの両手首、胸の中央部に装着した。

それらには星・太陽・月のシンボルがそれぞれ刻まれていた。そしてさくらは両腕を胸のペンダントを中心となるようにクロスさせると、

「プリキュア!スターエボリューション!!」と叫んだ。さくらがそう叫ぶと、眩い光がさくらを包んだ。そしてその光が収まった時には

翼の生えた両耳をガードするヘッドギアとピンク色のマントを装着し、ドリーム達に近い格好をした者が目をつぶりながら立っていた。「何者!?!」とカワリーノが聴くと、その者は目を開けた。それだけで怪物化したアラクネアを含めたナイトメア全員が萎縮していた。そして「邪悪なる漆黒の闇を切り裂く一条の光の星!キュアスター!!」とさくらだった者は名乗った。

「キュアスター!?!」敵・味方関係なく誰もが驚きながらそう叫んだ。何とさくらは自らの力とカード達の間を基に

して、プリキュアに変身したのだ。これは新たな伝説の幕開けであった。その後キュアスターは傷ついているアクア達の傷を一瞬で治し、

ドリーム達とミルクに「貴方方がお互いに自分の気持ちに素直になれば、以前にギリンマを倒したあの力が発動します」と教え、アラクネアの相手を

任せ、自らはカワリーノ達の相手をした。そしてドリーム達が『プリキュアファイブエクスプローション』でアラクネアを倒している間に

大量のコワイナーを『スターブレード』の一撃で消滅させ、ブンビーとカワリーノも必殺技の一つである『フレイムスタースラッシュ』で

完全に命中はしなかったものの、かなりのダメージを負わせる事に成功したのか、退却させる事ができた。

その後、ドリーム達と対峙したが、その途中でさくらに帰り、倒れてしまった。そんなさくらにドリーム達が必死に呼ぶが、反応は無かった。

翌日の5時頃、何とか目を覚ましたさくらから事情を聞いた。「私の場合、自分の魔力を基にして変身したんです。だから物凄いエネルギーを

消耗して、眠ってしまったんです」それを聞くや否やかれんはさくらをひっぱ叩いた。驚くさくらにかれんは涙を流しながら

「どうしてそんな無茶をしたのよ!？」と怒鳴った。「それは」と言いかけたさくらをかれんは抱きしめながら「もう二度と無茶はしないで!」

と言った。のぞみ達も「そうだよ、さくらちゃん!」「もうあんな思いはしたくないよ」「私もです!」「だから無茶をしないで」と言った。

それを聞いたさくらは微笑みながら「分かりました。そして皆、いろいろとごめんそして有難う」と言うと、かれんの腕の中ですやすやと

眠っていた。だがかれんとのぞみ達は起こさなかった。そのさくら

の寝顔は本当に安らいでるように見えたからだ。

ただし、後日目覚めたさくらにキュアスターになる事を絶対禁止と注意する事をかれん達は忘れなかった。

第23話・さくらとのぞみと新たなプリキュアの誕生（後書き）

次回からさくらは本格的にキュアスターとして活躍します。

第24話・さくらとみよ子のミステリー事件（前書き）

今回はココに対し厳しいさくらが見られます。

第24話：さくらとのぞみとココのラブレター事件

第24話：さくらとのぞみとココのラブレター事件

あくる日、さくらはのぞみやりと共に登校中であつた。その日はのぞみは日直であり、さくら・りんは部活の朝練があつた為、早かつた。

本当の所はまだ眠気がかなり残っているさくらをかれんは強制的に休ませようとしたが、最後はさくらの頑固さに負け、のぞみ達に頼んだのだ。

その登校中にのぞみとりんはいつ眠つてもおかしくないさくらを真ん中にして談笑していた。まずのぞみが話し始めた。

「この間、おいしいチョコのお店を見つけちゃった！ミルクに買ってあげようかなー!?」そののぞみの提案にりんは笑いながら「へえー、いいんじゃない？すっかり仲良しだね」と言い、さくらもとろんとしながら「少し前までの2人だったらかながえられないですね」

と言つた。さくら達の言葉にのぞみは照れながらも「へー！シュークリームもあつたから、ココにも、ね・・・」と言いかけた所である方向を

見て話を辞めた。さくら達もその方向を見ると、そこには人気の少ない林でサンクルミエールの女子生徒とココが一緒にいた。

その生徒が持っている物を見て、りんは「あの娘の持っているの、ラブレターじゃない？小々田先生、モテモテ！本当の姿も知らずにねー」と

笑いながら言っていると、さくらに「りんさん」と呼ばれながら肩で突かれた。「何？」とさくらに目を向けたりんはさくらにのぞみを見るように

顔を向けさせられた。そこで見たのはショックを受けたかのように呆然と立っているのぞみの姿。そんな姿にりんが「のぞみ？」と声

をかけたが、

無反応だった。のぞみの中では目の前でその生徒が手紙をココに渡し、ココがそれを受け取るという現実に対する動揺と怒りが渦巻いていた。

そんなのぞみを見て、さくらは眠いながらも（これは少し・・・おかしな事になるかもしれない・・・かな・・・）と思っていた。

放課後、さくら達はかれんがピンキーを捕まえた事もあり、ナッツハウスに集まっていた。そのかれんがピンキーをコレットに入れ終わると、

ナッツが「これで28のピンキーが集まった。後27で55のピンキーが全て揃う」と言った。その言葉を聞いたこまち・うらはは「半分を切ったわね」「やっとここまで来ました！」と現状に喜んでいたが、目の前でとろんとしているさくらを見て、心配になったのか

「さくらさん、大丈夫？」「かなり眠たそうですが？」と聞いた。するとさくらは「大丈夫です」とふにやふにや声で答えた。

そのさくらの話し方にこまちやうららだけでなく、ぼーとしていたのぞみ以外の全員が苦笑していた。そこでうらははぼーとしていたのぞみに

「のぞみさん？」と声を掛けたが、無反応。りんが声を掛けて、ようやく反応したものの、やはりいつもと比べておかしかった。

そんな中でココが帰ってきた。ミルクが「お帰りなさいませ！今日ももらったミル？」と聴くと、ココは苦笑しながら「ああ」と答えた。

「手紙って？」「聴くかれんにミルクが「これミル！」と言いながら箱を持ってきた。その箱の中身は手紙の束であった。しかもラブレターの。

それを見たのぞみは朝の時以上のショックを受けていた。ココのものぞみと目を合わせても、すぐに目を逸らしていた。そんなココ

の態度に

のぞみは更に疑惑を強めていた。その後もミルクがうらら達にココ・ナッツの2人はもてると自慢し、こまちがその事でナッツにラブレターを

もらっているのかと聴いて、その場で断つてると聞いてほっとするなどと言う状況が続いていた。そんな中、のぞみがココに

「手紙・・・いつも受け取っているんだ・・・」と聴くと、ココは「あ、うん」答えた。そしてのぞみが更に「返事は？」と聴くと、ココは

「えと、一応書いているけど」と答えた。その言葉を聞いたかれんが「これだけあると、返事を書くのも大変じゃない？」と質問したのに対し、

ミルクが「ココ様はお優しいミル」と答えた。そのミルクの言葉を聞いたさくらは一瞬、ぴくりと反応した。

「もらった手紙に返事を書くのが一応礼儀だから」とココが言うと、りんは「律儀だね」とからかった。だが次ののぞみの一言でその場の空気が

変わった。「知らなかった・・・」その言葉にさくら以外の誰もが反応した。それに構わずのぞみはしゃべり続けた。

「こんなに手紙をもらって・・・皆に返事を書いているって事・・・私知らなかった・・・」それに対し、ココは目を逸らしながら

「いや！隠し事をしていたわけじゃ！特に言う事じゃないだろう」と言った。それを聞いたのぞみは「私・・・帰る！」と言うや否や

ナッツハウスから出て行った。後を追ったりんものぞみの「ココ・・・隠してた・・・隠してた！！」と怒鳴られ、振り切られてしまった。

ナッツハウスに戻ったりんはその事を皆に伝えると、「隠し事だ何て・・・ちよつとおおげさじゃない？」とかれんが言うと、こまちは

「でも・・・のぞみさんにとっては重要な事だったんじゃないかしら？」と言うと、うららも「いつもののぞみさんと様子が違ってましたよね」と

同意するように言った。そんなりん達にココは「心配いらないよ。のぞみなら話せば分かってくれるだろうからね」と言った。が、その時、

「そんな甘い考えでは決してのぞみちゃんは納得しないと思いますよ」とさくらが言った。その言葉に驚き、さくらに振り向くかれん達。そして

ココが「それはどういう・・・」とさくらに質問しかけたが、その前にさくらからは完全に熟睡状態であり、何度起こしても無反応だったので、

質問は取りやめになった。その後さくらはかれんが帰るまで、ミルクのベッドで寝かしてやる事になった。その間にナッツがかれん達にさくらの事

で話をしていた。かれんが「ナッツ、さくらの事で話して何？」と聞くと、ナッツは「ああ、さくらの事なんだが・・・この間、さくらが変身した

プリキュア『キュアスター』の事についてだ」と切り出した。それを聞いたかれん達はしばらくの間ざわめいていたが、すぐにかれんが「その事なら、もうさくらに絶対変身してはいけないうて伝えたい！」と言い放ったが、ナッツは厳しい顔をしながら

「残念だが・・・今後の戦いでもさくらは変身することになるかもしれない・・・」と酷な可能性を伝えた。それを聞いた途端、かれんは

「どうして！？ナッツはさくらが私達との約束を破る娘だと言いたいのか!?」と問い詰めると、ナッツは首を振りながら「そうじゃない」と言った。

そして「今後の戦いではあのカワリーノって奴や、ナイトメアのトップにして最強の存在、デスパライアとの戦いは避けられない・・・しかも、

デスパライアはあのかくらでも普通の状態では苦戦は避けられない程だ・・・ならばさくらには確実に勝つ為に敢えて、『キュアスター』

に変身

しようとするだろう・・・お前達を守りたいと言う気持ちと共に・・・とかれん達にありえる可能性を言った。しかしかれんはすぐに「そんな事ない・・・そんな事！あるはずないわ！！」と叫ぶと、さくらの所へ行つた。残された一同の間には重い空気が漂っていた。かれんはさくらの所へ来ると、眠っているさくらに「さくら・・・何があつても・・・貴方を変身させる事にはならないようにするから・・・」と呟いた。だが、そんなかれんの想いはもろくもすぐに崩れ去る事になった。

翌日、学校の池でココはナッツにのぞみの事をどう思っているのかについて、問われていた。それに対し、ココも笑顔で落ち着いた態度で対応

していたが、その態度に「いつまで作り笑いをしているんだ！パルミエ王国の国民の為、今は生徒の為、お前はいつ自分の為に行動するんだ！？」

と怒鳴りながら、ナッツはココに問いただした。するとココは真顔になり「国民の為に働くのが王子だ！生徒の力になるのが教師だ！」と言い返した。

その答えにナッツが「それでお前は幸せなのか！？」と問うと、ココは「皆の笑顔が僕の喜びだ！！」と答えた。それに対し、ナッツが何かを言おう

としたその時、「その言葉は現実から逃げ出す為の綺麗事です」との言葉が聞こえた。驚くココ・ナッツの前にその言葉を発したさくらが現れた。

さくらは「御二人とも、少し周りに対する警戒心が薄すぎますよ。一応私が結界を張っておきましたけど」と2人に注意しながら、説明した。

その後、ココが「それより、さっきの言葉はどういう意味だ？」と

真顔でさくらに聴くと、さくらも眠気さを抑えて真顔になりながらはつきり言った。

「ココさんは先程、国民の為に働くのが王子で、生徒の力になるのが教師だと、おっしゃられました。でもそれは私からすれば、最低の考え方です。」

なぜなら、自分の事を本当に気にしている女の子1人の気持ちに対してすら、まともに答えてあげようとしない人になぜ大勢の人の為になどと、言える

資格があるのでしょうか？それに大勢の人々の笑顔の為にと言うならば、まず『作り笑い』ではなく、『本当の笑顔』を見せなければ、話にもならない

と私は思います。「その言葉を聞いたナッツは自分に顔を向けたココに「まさにそうだ」と言いながら頷き、言われたココは愕然としていた。」

その後でさくらがレポートで去ると、その後すぐに話を続けようとしていたココ達の前に、新たな敵ハデーニヤが現れた。

のぞみと話をしていたさくらもその事を感じると、すぐにかれん達とミルクと合流し、レポートでその場へ駆けつけた。だが駆けつけた時には

既にココ・ナッツは元の形態でぼろぼろにされていた。その傷を癒す最中にさくらはハデーニヤこそがココナッツを追い詰め、ピンクを散らばせた

本人である事を知った。治療が終わると、さくらは無言で立ち上がった。そんなさくらにハデーニヤは「お前さんがカードキャプターとか

言う奴かい！？ま、あたしにはかなわないだろうがね！」と笑いながら変身し、新型仮面を池に投げ込んだ。すると泥型コワイナーが現れた。

だがそのコワイナーが変身したドリーム達を攻撃しようとする前にさくらに瞬時に『凍^{フリーズ}』で凍り付けにされた。その光景にハデーニヤは

「ば、馬鹿な!？」と驚いていた。新型仮面はこれまでの仮面よりも強化されていたのを知っていただけにその驚きは大きかった。だがそれでも

「おのれ!ならば!」とさくらを攻撃しようとしたが、さくらは瞬時に杖とカード達を3つのブレスレットに変え、キュアスターに変身した。

アクアが「さくら!どうして変身を!？」と叫んで、更に聴こうとしたが、スターのハデーニヤに対する怒りを感じ取り、その場は不問にした。

ハデーニヤはスターに攻撃したが、そのパンチを片手で軽く受け止められ、すかさず放り投げられると、「貴方のような人は・・・この場から

直ちに去りなさい!」と叫びながらスターが放った必殺技の1つ『シャイニングトルネードキック』を受けると、「うぎゃああゝ!？」と情けない

声を出しながら、吹き飛んでいった。コワイナーもドリーム達によつて、すぐに倒された。

戦いが終わった後、さくらはまた眠ってしまった。この事でかれんに目が覚めた時にお説教を喰らいかけたが、のぞみ・ココ・ナッツが今回は自分達に

責任があるから許して欲しいと頼まれると、とりあえず少し怒るだけで許してやった。最もかれんの機嫌が完全に直るのに数日は要したが。

そしてのぞみとココの方も、さくらに互いに言われた事を参考に、素直な気持ちを語り合い、仲直りした様子であった。

第24話・さくらとのもぞみとLPLのライター事件（後書き）

次回は影でりんをさくらがサポートします。

第25話・さくらとりんのハッピーウェディング(前書き)

今回のさくらはケーキ作りと人助けで大忙しです。

第25話：さくらとりんのハッピーウェディング

第25話：さくらとりんのハッピーウェディング

さくらの眠気が治まったある日の放課後、部活の帰りにさくらはりと共にウェディングドレスが飾ってあるショーウィンドウを覗いていた。

そのドレスの素晴らしさにりん・さくらは「綺麗ー」「本当ですね」と簡単の声を出していった。と、そこへ店の外からまどかが現れた。まどかに挨拶をする2人だったが、りんが状況から「まどかさん、結婚するんですか？」と聴くと、まどかが答える前にさくらが言った。

「違いますよ、りんさん。結婚するのはまどかさんの後ろにいらっしやるご友人さんですよ」そして「そうですね？まどかさん」とまどかに確認を取った。まどかとその後ろにいた友人はしばし驚いていたが、まどかの方はすぐに立ち直り、さくらに軽いヘッドロックを

しながら、「この〜！相変わらず感がいいんだから！驚かしがないよね、あんたは！」と言った。さくらは「ほえ〜！」と叫ぶしかなかった。

その後、友人である未来を紹介され、今日は彼女の結婚式の打ち合わせの為に寄ったのだと説明された。

さくらはその説明を聞きながら、未来の容姿と優しそうな感じに（何て優しくして・・・綺麗な人なんだろう）と心の中で思っていた。

ナッツハウスに着くと、未来はのぞみ達にも紹介され、のぞみ・うららは未来が結婚する事に驚いていた。

そこへまどかが「そっ！未来はもうすぐ幸せな花嫁さんになるの！ね！？」説明しながら、未来に顔を向けると、未来も「うん」と答え

その後で未来はナッツハウスにある商品を見て「わあ〜。このブルスレット、可愛い〜」と、その魅力に惹かれていた。

一緒に見たまどかも「ああ〜、いいねえ。これ、この店の主役品？」とナッツに聴くと、ナッツも誇らしげに「ああ。うちの人気商品だ」と語った。

それを聞いた未来が「素敵なデザインですね」と感想を述べると、ナッツが「後ろにいるよ。そのデザイナーが」と説明した。

そう言われて、後ろを見た未来ともまどかの目にりん姿が映った。そして「ねえ、まどか。結婚式のあれ、まだだったよね？」と未来がまどかに

聴くと、「え？ああ、そうだったね」とまどかが答え、更に未来が「私、あれのデザインを彼女に頼もうと思うの」と言うと、まどかも

「おお〜！それいいね！」と賛同していた。その話についていけなかったのぞみは「あの、何の話です？」と聴くと、さくらが

「間違ってたら、申し訳ないんですが・・・ひよっとして未来さんが結婚式の時につけるティアラではありませんか？」と未来に聴いた。

するとそれを聞いたまどかが「あ〜、もう！本当にあなたは理解がありすぎるから、もう！！このこの！！」と自分の拳をさくらの頭の上で

ぐりぐりと回していた。「ほ、ほえ〜！す、すみませ〜ん！」とさくらは謝ったが、すぐにまどかはさくらを解放し、「ま、その通りなんだけどね。

ね、未来！」と未来に言うと、未来も「ええ、彼女の言う通りなの」と肯定した。それを聞いたりんは「わ、私がですか？」と戸惑っていた。

そんなりんをよそののぞみは「やったね、りんちゃん！大抜擢だよ！」と言い、うららも「凄いです！」と言い、かれんも

「責任重大だけど、その分やりがいがあると思うわ」と言い、こま

ちも「今から出来上がるのが楽しみね」と言った。それでもまだ不安なりんに

のぞみが「平気、平気！りんちゃんなら、何とかなる、なる！」と調子に乗って言うと、さくらが1回ごほんとせきをして、

「のぞみちゃん、うららちゃんの歌手デビューの時の事、もう忘れたの？」と聴くと、それを思い出したのぞみは小さくなりながら「す、すみませんでした。ごめんなさい。もう充分反省しています」と謝っていた。そんなさくらとのぞみの光景に誰もが苦笑いをしていた。

その後、りんが結婚について話し始めると、こまち・うららものりのりになって参加し、こまちは完全に自分の世界の中で妄想してしまい、

うららの方は「結婚式をコンサート会場で行いたいと思いまーす！」などと爆弾発言をし、その内容を聞いたまどか・未来は感心していた。

その後で今度はかれんがどんな結婚式を考えているのか聴かれると、「日本式の結婚式が一番落ち着くと思うの・・・」と答えたが、相手はと

聴かれると、恥ずかしがって誰もいないと答えた。そんなかれん達をまどか・未来は微笑みながら見ていた。

次ののぞみが「はいはい！私はね！いっぱいドレスを着て、それから大きいウェディングケーキを食べるのが夢なの！」と言うと、即座に

かれんに「あれは作り物よ」、りに「そ、ハリボテ」、こまちに「ナイフで切る所だけが本物で後は作り物なのよ」と突っ込まれた。突っ込まれたのぞみが「うえ〜ん！食べられないの！？」と嘆いていると、さくらが「じゃあ、作りましようか？食べられるウェディングケーキを」

と提案した。そのさくらのとんでもない発案に誰もがさくらを見た。代表して、まどかが「ほ、本当にそんな事が可能なの？」と聴くと、

さくらは冷静に「はい。前に一度兄の学友の結婚式があったんですが、その時に皆でケーキを作ろうと言う事になりました、本当に100人分くらい
の凄いのを作りました。その時、私も関係者と言う事で手伝いましたので、その設計図やレシピも良く覚えてます。ちよつと待っててくださいね」

説明し、その後すぐに大きな紙を用意し、その設計図やレシピを描いた。それを見た誰もが驚愕し、「す、凄い!!」と感嘆の声をを出していた。

そして未来とまどかが相談し、まだケーキの予約はしていない事もあったので、実際にさくら達に頼む事にした。無論、味の保証人と
して、

じいやにも手伝ってもらおう事を忘れなかった。そして最後にのぞみが「よし！皆でケーキ作りをする事に決定ー!!」と決定付けた。そんなさくらとのぞみ達に未来は「皆、本当に有難う」と感謝の言葉
を述べていた。

それから数日間、さくら達は協力をしてくれるじいやとまどかと共にケーキの微妙な形状調整や材料集め、調理練習をしていた。ただ
しりんは、

ティアラ作りに専念してもらおう事にした。そのりんは中々良いデザインが浮かばず、苦しんでいた。その苦しみは学校でも昼食を取ら
ずに教室に

引きこもり、実家の花屋でも手伝いながら、デザインを練っていた
ほどだった。だが、それでもいいデザインが浮かばなかった。

そんなりんの様子に危機感を感じたさくらはある人に自分の考えを
りに伝えてもらおうと考えた。その人の方が伝わりやすいからと
確信があった。

そしてその夜こまちを通して、連絡を入れた所、その人も自分に近
い考えを持っていたから、すぐに同意をもらえた。

翌日さくらはその人と共にりんの花屋にやって来た。さくらがデザイン作りに夢中になっているりに「りんさん！」と近くで呼ぶと、りんは

「あっ！さくらー！いらっしやい！それに未来さんも！」と慌てて挨拶をした。そうさくらが頼んだ相手は未来だったのだ。

その後、さくらは店番が自分ができるからと、りに未来と外で話して来たらしいと伝え、戸惑うりに強引にそうさせた。

そして土手で未来が「私が頼んだデザインの事で悩んでいるのですよう？」と聴くと、りんが驚き顔を上げ、「ど、どうして？」と聴き帰すと、

未来は微笑みながら「さくらちゃんが教えてくれたの。そして自分が励ますよりも、私の方が適任だって」と教えてくれた。それを聞いたりんは

「さくらが！？たく、あの娘は！」とさくらに余計な事をと怒りかけていたが、未来に「あの娘を怒らないであげて。彼女なりに貴方を励ましたい

と思ったのよ。」と言われると、「はあ」と言っで一応納得した。

その後で未来から結婚式は友人達の手作りで行うのだと聞き、さくらからの

伝言で『悩み苦しんでいる時は一人で悩まず、相談できる人に相談するのが一番いい』と言う事を聞かされた。それを聞いたりんはまるで目から

鱗が落ちたかのような気持ちだった。そして「私、絶対ティアアラを完成させてみます！」と未来に言い、未来も「頑張つて」と言った。それから3日後、りんは無事ティアアラのデザインを考え付き、完成させた。その後すぐ今度はさくら達のケーキ作りの手伝いに向かった。

ケーキはかれんの屋敷で作られていた。りんがそのまま屋敷に入り、厨房に向かうと、懸命に作業をするさくら・かれん・こまち・まどか・じいやと

裏腹にのぞみ・うらはは使っていた調理具やプレートの皿洗いをしていた。良く見るとココ・ナッツ・ミルクがバケツを持って正座していた。

りんがさくら達に挨拶をし終えた後に、「何か、あつたんですか？」とかれん・こまち・まどかに聴くと、3人は苦笑いをしながら、事情を説明した。

まずかれんが「それがのぞみとうらがこっそり焼けた生地とクリームをつまみ食いをしちゃって」、次にこまちが「その後、さくらさんにばれて

しまつて、しかもその時に材料の一部を床に落としたから、余計に怒らせちゃって」そして最後にまどかが「そんで本来なら正座させる所を時間が

もつたないから、皿洗いに専念してもらつ事になつたんだ。しかも・・・今度やったら、作業後に3時間の正座させるといわれてね」と説明した。

それを聞いたりんは呆れながら苦笑いをしていた。後でココ達もつまみ食いをしていたのだと、かれんに教えてもらった。

それから3時間後ようやくウェディングケーキは完成した。そして後は翌日のお楽しみと言う事で、解散となり、かれん・さくら以外は帰宅した。

翌日の結婚式ではガマオが給仕に化けて、潜入していたが、さくらの機転ですぐに対処できた。この戦いでさくらは再びキュアスターに変身したが、

この時はアクアも結婚式を台無しにしようとしたガマオに対する怒りを同じように持っていたため、何も言わなかった。

そして戦いはガマオをスターが「花嫁の結婚式をぶち壊す不届き者はとつとと帰りなさい！」と叫ぶと同時に放った『パワーリフター』で遙か空に

投げ飛ばされ、コワイナーはルージユの新必殺技『ルージユ・バー

ニング』とドリームの『クリスタルシユート』で倒された。

その後、結婚式は花嫁がお色直しを終え、ティアラを冠され、参加者全員の祝福を受けていた。そして花嫁によるブーケトスが行われた。

そのブーケはさくらが最初に掴んだのだが、すぐにそれをのぞみに手渡し、その場から離れた。疑問に思ったのぞみとかれん達がさくらの後を追い、

近くの森で追いつき、聴くと、「私には・・・それを受け取る資格はないよ・・・だって・・・私が一番好きな人はこの世界にはいないから・・・」

とさくらは悲しそうに語った。その言葉を聞いたのぞみは強引にさくらにブーケを持たせ、「絶対に会えるよ!」と励ました。

かれん達も強く頷いた。それを見たさくらは「有難う・・・」とのぞみ達に礼を言った。

その後、全員で式場に戻った。ちなみにさくら達の作ったウェディングケーキは参加者達に大好評だったと、言われている。

第25話・おくらとじんのハッピーウェディング（後書き）

次回は増子に対して、おくらが怒ります！

第26話・さくらとプリキュア5独占取材(前書き)

今回、さくらは増子に対し、厳しい態度を取りますが、同時に大切な事を教えます。

第26話：さくらとプリキュア5独占取材

第26話：さくらとプリキュア5独占取材

ある日の登校時、さくらとりんがのぞみを除いたかれん達とフットサルのメンバーと共に学園の掲示板を見ていた。

特にさくらとりんは険しい表情をしながら、記事を見ていた。そこへのぞみが「皆！おはよう！！」と挨拶をして現れ、掲示板を見て「あっ！サンクルミエール通信最新号！この間のフットサルでの試合？フットサル部惨敗！！今野キャプテン痛恨のミス、調整不足！？エース夏木孤立、ルーキー木之本のチームプレー無視！？練習不足！？キャプテン辞任か！？これって・・・」と記事を読みかけながら、

さくらとりんの方に顔を向けたが、何も聴けなかった。2人とも、特にさくらの顔からミルクが怒らせた時に匹敵する怒りを感じ取れたからだ。

そこへフットサル部のキャプテンである今野香織が「おはよう」と言っ て現れた。それに対し、さくらとりんは「あっ、キャプテン」「お、おはようございます」と慌てつつも挨拶した。その様子を不審に思った香織は掲示板の記事を見て、納得がいった。

と、そこへ増子が駆けつけ、いつもの口上をやるうとしたが、「増子さん！！」「とさくら・りんに強い口調で呼ばれ、止めた。

そしてさくらとりんは増子に抗議をし始めた。まずりんが「この記事、何なの！？今野さんがキャプテンを辞める訳ないじゃない！」「と言っ と、

増子は「だから辞任か！？って」と説明すると、さくらが「じゃあ、キャプテンが怪我をしていた事は知っていたのですか！？」「と聴くと、

増子は「え、それはどういう事？」と聴き返した。それに対しりんが「キャプテンはね！試合の前日に足を痛めてたの！」「と怒鳴って

教えると、

増子は「え？」としか言えなかった。そんな増子にさくらは構わず「代わりに出る選手がいらないからって、怪我を押し出たんです！」と言った。

それを聞いた増子は「怪我なんて・・・知らなかった・・・」とぼつりと言った。それを聞いたりんが「知らなかったって、どうしてちゃんと」

取材をしてから記事にしてくれなかったの!？」と文句を言い、さくらも「私も同感です！ろくに取材もしないで、勝手に他人に中傷する記事を」

書く事は決して許されない事です！」と増子に言い放った。さすがにさくらの言葉にむっと来たのか、増子は「な、何よ!?!木之本さんだって、」

試合でチームプレーを無視して、全然無意味な場所にいたりしたじやない！」と抗議したが、その抗議はフットサル部のチームメイト達3人に

よってすぐに却下された。まず斉藤美穂が「木之本さんはチームプレーを無視してなんかいないわ！」と言い、次に中沢恵理が

「前半でりんさんとさくらさんのレベルがずば抜けていると見抜いた相手が2人を執拗にマークするようになったから、後半はそれを振り切る為に」

わざとマークされない所へさくらさんが走りこんだのよ！」と説明し、最後に山本亜紀が「そのおかげで敵の攻撃の上がりを前よりも押さえ込む」

事が出来たし、隙をついて、さくらとりんで2点取り返す事ができたのよ！」と説明した。結局試合は4点差の惨敗だったが、それでも最後に

さくらとりんが6点差からそれぞれ点を決め、後もう少し時間があれば何とかなるかもと言う所で試合が終わってしまったのだ。

それを聞いた増子は「し、知らなかった」とまた呟いた。それを聞

いたさくらはさつきまで何とか我慢していた怒りをとうとう爆発させた。

「『知らなかった』！？増子さん！貴方はさつきからご自身の都合が悪い時や取材不足が露見した時に何度その言葉を使っているのですか！？」

念入りでも細心でもないいい加減な取材をして、他人を中傷する記事を書いて、恥ずかしくないのですか！？貴方のこの記事は周りに対して、

誤解を生むという事を考えはしなかったのですか！？この件は正式に生徒会及び学校側に訴えさせていただきます！」とさくらは言い放った。

それまで黙っていた香織が「さくら！もういいから、落ち着いて！」とさくらをいさめた。「でも、キャプテン」と香織に声を掛けられ、少しは

冷静さを取り戻したさくらは不安げに言葉を返すと、香織は「確かに調整不足だったから、怪我はしたのかもしれない。だから次の試合で

頑張るしかないと思っている。だから貴方も頑張ってくださいの！ね」とさくらに対して言うと、「はい、分かりました」とさくらは答えた。

その後、さくらの怒りの前にすっかり怯えていたりん達にも「皆、次の試合に向けて頑張ろう！」と言うと、りん達も「はい」「はい」「はい」

と一応返事はした。だがさくらは「それでも、この件は抗議します。他の部で同じ様な記事がまた書かれたらその部の人達が可愛そうですから」

と言ったのに対し、誰も文句は言わず、生徒会長であるかれんも「そうね、さくらの言う通りだね。とりあえず通信部にはしばらくの間、取材を

控えてもらいます。いいですね、増子さん」と増子に言うと、増子

は「はい・・・分かりました」とショックを受けたのか呆然としながら答えた。

その日の昼休み、さくら達はカフェでお昼を食べていたが、その中で今朝の出来事を話していた。

「いや、それにしても今朝のさくらちゃん、凄い迫力だったね」とのぞみが言うと、りんも「私もそう思った。あんまりにも迫力があつたから

すっかり怒るのを忘れたくらいだったよ」と苦笑いしながら言い、うららも「ミルクに対して怒っていた時に匹敵していましたね」と言い、

こまちも「まるで阿修羅みたいだったわ」と言うと、かれんは「そうね。さくらって普段は大人しい明るい娘だけど、怒ると怖いわね」と言った。

それを聞いたさくらは「今朝の事は私も反省していますから、勘弁してください」と顔を赤くして、詫びた。だがりんはそのさくらの言葉に

「さくらが反省する事なんて、何も無いじゃない！気にしなさんな！」と声を掛けると、さくらは「でも、あの時の試合・・・もつと私が皆との

連携が取れていたらとか、りんさんにパスを出せていたらって思っってしまうんです」と答えた。それを聞いたりんは「いや、それは私も同じだよ。

私もさくらのせつかく出してくれたパスに答えられなかったんだから」と言った。そんな2人の会話におタカさんが入り込んだ。

「2人とも！そんなに落ち込んでいたら、次の試合で力が出せないよ！」と明るい声でおタカさんが声を掛けると少しは元気が出たのか、さくらも

りんも「そうですね・・・次の試合で頑張って、増子さんを見返します！」「うん！そうだね！」と声を掛け合っていた。それを見た

のぞみ達は

少しは安堵した気持ちであった。その後でおタカさんは増子に話していたが、その途中で増子は席を外し、どこかへ去って行った。

その後を追ったのぞみ・さくらは増子から最初は仲間がいたが、自分が一生懸命になりすぎて周りを見なくなつたから1人になつてしまい、それで

取材不足になり、ちゃんとした記事が書けなくなつたと漏らした。そして「私、記事を書くのを辞めようと思う」と告げた。

それに対し、のぞみ達は辞めるべきではないと言葉をかけ、応援するとも言つたが、増子は掲示板の記事を剥がして去って行くこととした。

そんな増子にさくらは「逃げるんですか？」と言葉を掛けた。それを聞いた増子は「仕方ないじゃない」と言葉を返したが、さくらはそれに対し、

「確かに今までは貴方1人でしか、取材ができなかつたのかもかもしれません。でも自分1人での限界を知つた今なら、貴方はどうやって仲間を見つけ、

その仲間に接すればいいのか、分かるはずですよ」と自分の考えを述べた。それを聞いた増子ははつとなつた。そんな増子に背を向け、去ろうとした

さくらは去り際に「今度の試合では貴方にいい記事を書かせるほどの最高の試合を見せてあげますよ。チームメイトの皆の力で」と言つて去つた。

そう言つたさくらに増子は何も答えられず、のぞみ達も呆然としていた。その中でかれんは（さすがね、さくら）とさくらの考えに敬服していた。

その日の放課後、夕暮れ時にまだ部室に残っていた増子をブンビーが襲撃した。それを察知したさくらがレポートでのぞみ達を連れ、学園に

到着した。そしてさくら達が現れた事でブンビーは増子のバッグナンバーをコワイナー化させ、自らも変身した。それに対し、さくらとのぞみ達も

プリキュアに変身した。突然現れたコワイナーに恐怖した増子は逃げ出そうとした所をコワイナーに襲われたが、間一髪でスターに救われた。

自分を助けてくれたスターに増子は「あ、貴方は!?」と驚きの声で聞いた。増子はスターの姿を見たのは今回が初めてだったのだ。それに対し、スターは「私は『キュアスター』。プリキュア5の仲間です。」と自己紹介すると、「ここにいてくださいね」と言い、シールドを

増子の周りに張ると、ドリーム達の加勢に向かった。ドリーム達はコワイナーに苦戦していたが、スターの加勢とスターの言い放った言葉

「1人では、その戦い方に限界があっても！仲間がいればその戦い方の方法が無限になる!!」に激励され、自分達も

「1人でできなくなっていたいいい！1人で悩んで一生懸命やって!」「例えうまく行かなくても、その気持ちは皆に伝わる!」「気持ちは伝わってくれば

、その人の為に何とかしてあげたいと思う!」「例え力が無くても!」「皆で立ち向かえば、何とかできるかもしれない!」と思っていた事を言った。

そのプリキュア達の言葉をブンビーは「そうやって、傷のなめあいをして！隙あり!」と罵倒して、攻撃を仕掛けようとしたが、コワイナーを

ドリーム達の連携攻撃で倒されてしまい、自分もスターに「立ち去りなさい!『フレイルムスターナツクル』!」と凄まじい必殺パンチを喰らい、

「のわああ!?」と情けない声をあげながら、お星様になって吹き飛んで行った。そして戦いは終わった。

その後で増子は自分がいつの間にか写真を取っていた事に驚いていたが、すぐにスター達にお礼を言っていると、立ち去ろうとしたが、ドリームに

「私達を取材しないの？」と言われ、スターやアクア達が取材を許可すると熱心に取材をした。無論プリキュアの秘密やナイトメアの事は極秘扱いで

あったが、「何故皆さんはあの化け物に立ち向かうのですか？」と言う質問には「大切な人のある夢をかなえるために」と素直に答え、「怖くないのですか？」との質問にも「皆で力をあわせれば平気だよ」とドリームが笑顔で答えた。そして増子の最後の質問である「私にも皆さんのような仲間を作れるとも思いますか？」には全員で「……Yes!!!」と答えた。

数日後の朝、さくら達は新しい記事を掲示板で見た。そこには今野キャプテンの抱負やプリキュアの記事が掲載されていた。

それを見たのぞみ・うらははプリキュアの記事が載っている事にはしゃいであり、りん・さくらは一緒に記事を見ていた香織やチームメイト達と共に

次の試合に向けて、頑張る事を改めて決意していた。そんな中でさくらとのぞみは小さくだが新聞部の部員募集の記事を見つけたのであった。

第26話・さくらとプリキュア5独占取材（後書き）

今回はスターとアクアのコンビワークが見られます。ご期待を！

第27話・さくらとかれんの白馬騎士伝（前書き）

今回はさくらの大切な思い出の飲み物が出てきます。

第27話：さくらとかれんの白馬騎士伝

第27話：さくらとかれんの白馬騎士伝

あくる休日の日、さくらは水無月邸の乗馬コースでかれんと共に双子の白馬に乗り、華麗に駆けていた。

その2人の姿を見ていたのぞみ達はあまりの華麗さに「」「」「おお」「」と感嘆の声をあげながら、羨望の目で見ていた。

そしてのぞみが白馬に乗っている王子様をイメージするなど楽しんでいると、かれんとさくらが近くにやって来た。

近くにやって来た2人へのぞみ達は「かれんさんもさくらちゃんも凄いいね!」「いや、乗馬するとは聞いてたけど、これ程とは」

「本当に凄いですね!御二人とも!」「かれんもさくらさんにも本当にいつも驚かされるわ」とそれぞれの感想を言った。

のぞみ達の感想を聞いたかれんは「私は久しぶりだったから、まあまあかな。それにしてもさくらには私も脱帽よ。初めてであそこまで乗れるなんて思わなかったわ」と自分には厳し目の判定を下していたが、さくらについては大変賞賛していた。

それに対し、さくらは照れながら「いいえ、私はかれんさんとチャ―リーの後を着いて行っただけだし、ポニーがいい子だからうまく乗れた

だけですよ」と言った。そんなさくらをかれんは「そんなに謙遜しなくていいのに」と笑いながら言い、のぞみ達も笑っていた。

だがその後、異変が起こった。いつもと比べて大人しいと思われていたミルクが倒れたのだ。慌ててミルクを抱いたかれんはその熱の高さに

驚いた。そしてそれを聞いたさくらは以前エリオルから聞いたやり方で一時的にミルクの熱を抑え、大至急全員でミルクを屋敷に運んだ。

屋敷のベッドで寝かされたミルクはさくらに診察を受けていた。診察を終えたさくらは「どうやら軽い風邪のようです」と皆に説明すると、

のぞみ達はほっとしていたが、対照的にココ・ナッツは「まずいな」「ああ。早く何とかしないと」と言葉を発していた。

さくらが「どうしたのですか？」と聴くと、ココ達が言うにはパルミエ王国の人達の病気は専門のピンキーが治療し、通常的手段では治らないのだという。しかも今まで回収したピンキーの中にはその治療専門のピンキーはいなかった。

「さくらのおかげで今は熱はおさまっているが」「ああ、完全に治すにはそのピンキーを見つければいい」とココ・ナッツは言った。それを聞いたさくらは「分かりました。ココさん・ナッツさん、そのピンキーの姿のイメージを私に見せてください」と2人に頼むと、2人は了承し、さくらにイメージを送った。それを受け取ったさくらは以前に学んだ探査魔法でピンキーの気配を探って見た所、

少し離れた所の公園にピンキーらしき気配がある事を感じた。それをのぞみ達に伝えたさくらは念の為に、自分が感じた気配を『
ミラー
鏡』

に覚えさせ、のぞみ達について行かせた。そしてさくらとかれんはミルクの看病と万が一ナイトメアが攻めてきた時の用心棒として残った。

その後で、ミルクの熱が再びあがったが、かれんがさくらと共に病人に対する看病の仕方を行い、じいやに用意してもらった氷を使用して、

何とか対処していた。その後でかれんはじいや用意してくれたおろしりんごをミルクに食べさせると、少しはミルクも落ち着いていた様子であった。

そんな中でさくらは切り札として、自分が毎年風邪で寝込んでた時に必ず飲んでた特効薬『ハチミツ入りミルク』を用意していた。それを作り終えて部屋に持つてくると、ちょうど起き上がったミル

クに飲ませた。ミルクは「おいしいミル」と答え、その後またすやすやと寝た。

ミルクがすやすや寝ているのを見てほっとしたさくらとかれんは既に日の暮れていた外の夕焼けを見ながら、八チミツ入りミルクを飲んでいた。

かれんは八チミツ入りミルクを飲みながら「おいしいわね」とさくらに感想を述べると、さくらは「有難うございます。これ、最初は私のお母さんが

私が小さい頃、熱を出して寝込んでいる時に作って飲ませてくれたんです。それから毎年私が熱を出すと必ず飲んでいました」と説明した。

その説明を聞いたかれんは「じゃあこれはさくらの『お母さんの味』と言う訳ね」と言うと、さくらも笑顔で「はい！」と答えた。

その後もしばらく談笑していた2人だったが、突然さくらがハデーニヤの気配を感じ取り、「かれんさん！」とかれんに声を掛けると、かれんも外の不穏な雲行きを見て、「ナイトメア!？」とさくらに聴くと、さくらは頷き、その後すぐにさくらとかれんはレポートで移動した。

外に移動したさくら・かれんは庭に侵入してきたハデーニヤと対峙していた。かれんが「何の用!？」と叫び、ハデーニヤが何かを答えようとしたが、

その前にさくらが「コレットならここにはありませんよ」と言うと、ハデーニヤは「ふん！そんな事は関係ないさ！あんた達を倒しさえすればいいん

だからさ！特にその茶髪のお嬢ちゃん！あんたにはこの間の借りを返させてもらうよ！」と、特にさくらを指差しながら言った。

ハデーニヤは以前の戦いでさくらが変身するキュアスターに派手にやられた事を恨んでいたのだ。その後、ハデーニヤは変身し、2つの仮面を

馬具にとりつけ、馬型のコワイナーを2体出現させ、その内の1体
に乗り込んだ。それに対し、さくらかれんも即座にプリキュアに
変身した。

だが変身したスター達はコワイナー達の突進力とハデーニヤの攻撃
の前に特にアクアが苦しめられ、スターもアクアを庇ってた為反撃
できずにいた。

後からミラーの導きでピンキーを見つけ、駆けつけたのぞみ達もプ
リキュアに変身して、援護に回った。しかしハデーニヤが看板とコ
ースの扉を槍と

重装備に変え、槍を自分がそして重装備をもう1体のコワイナーに
装着させた。その威力の前にあつという間に、ドリーム達4人はや
られてしまった。

対処法がないのかとスターが思っていた時に、そこにチャーリーと
ポニーが駆け寄ってきた。スターとアクアはポニーとチャーリーに
乗ると、すぐに

『アクアサーベルモード』と『スターブレード』を装備して、ハデ
ーニヤ達にそれぞれ突進して行った。スターは重装備の方を、アク
アはハデーニヤの

方を相手した。アクアはミルクを守りたいと言う気持ちからハデー
ニヤの執拗な攻撃に耐え、チャーリーをうまく操り、攻撃を仕掛け、
そして遂に

ハデーニヤを力押しで弾き飛ばす事ができた。スターもコワイナー
の重装備の攻撃をポニーをと共にうまくかわし、そして一瞬の隙を
ついて、

必殺技の1つ『ライトニングスラッシュ』を超高速で放ち、その技
の威力でコワイナーを重装備諸共、消滅させた。

その光景にハデーニヤは「ば、馬鹿な！？こんなはずは！！」と現
状を信じられずにいた。そんなハデーニヤをよそにスターとアクア
はポニーと

チャーリーから飛び出し、華麗に着地した。そしてスター・アクア

は同時に『フレイムスラッシュ』と『アクアトルネード』を放ち、残されていた

もう1体のコワイナーを消滅させ、ハデーニヤを「うぎゃああ〜！」と情けない悲鳴を出させながら、遠い星空へと吹き飛ばした。戦いが終わった後、スターとアクアは駆け寄ってくれたポニーとチャリーに「有難う」と言い、撫でてやった。2頭共、うれしそうに鳴いていた。

そしてドリーム達はと言うと、「す、凄い」「さ、流石だね。あの2人は」「素晴らしいコンビネーションです！」「あの2人だからこそ出来る事ね」

と各自のスター・アクアに対する感想を目を点にしながら、述べていた。それを聞いたスター・アクアはドリーム達としばらくの間笑っていた。

それから数十分後、ミルクは治療専門のピンキーである『キャツピ』の力で一瞬で病気が治り、元気を完全に取り戻した。

その後、じいやが「皆様〜！お菓子とお茶の用意ができましたよ〜！」と言ったのを聞くと、のぞみ達はすぐに向かったが、かれんとさくらはミルクと

少しの間だけ残っていた。ミルクはその後で、かれんとさくらに「看病をしてくれて、それにナイトメアから守ってくれて、有難うミルク」とお礼を言った。

更にさくらには「さくら、あのハチミツ入りミルクはおいしかったミル。また飲まして欲しいミル」と礼を言いながら、ちゃっかりおねだりをしていた。

そんなミルクに対し、かれんは「ミルクの笑顔が大好きだからよ！」と笑顔で答え、さくらも「どういたしまして！また今度作ってあげるよ！」と

こちらも笑顔で答えた。それを聞いたミルクは笑顔でかれんの胸へと飛び込んだ。その後3人で、のぞみ達の待っているお茶会に向か

って行った。

第27話：さくらとかれんの白馬騎士伝（後書き）

次回はさくらが新たな敵を相手に変身前と変身後のキュアスターで大活躍！！

さらにクライマックスに再びさくらに異変が発生！？

第28話・さくらとナッツの鍵とこまちの心（前書き）

今回は変身前のさくらと変身後のスターの両方の活躍が見られます。

第28話：さくらとナッツの鍵とこまちの心

第28話：さくらとナッツの鍵とこまちの心

ある日のナッツハウスにて、ナッツによるこまちの書いた小説『海賊ハリケーン』のチエックが行われていた。

今まで7回も駄目出しをされているだけに、書いたこまちだけでなく、のぞみ達やさくらにさえ、緊張が走っていた。

だがナッツが読み終わると、いつもの厳しい目では無い穏やかな目で「面白かった」と感想を述べると、こまちは「え？」と思わず聞き返した。

ナッツが「主人公と仲間達に好感が持てる。主人公が鍵で扉を開け、希望に繋ぐラストも悪くない。いい作品だと思う」と内容を褒めていた。

それを聞いたこまちは笑顔になり、さくらとのぞみ達もこまちに「おめでとう」との祝福の言葉をかけ、すぐにお祝いをする準備に入った。

だがその中でさくらはナッツが自分の首に下げている鍵を握り締め、暗い顔をしているのを見逃さなかったが、その時は訳を聞かなかった。

その夜、ピンキーを休ませていたナッツは突然子供のようにはしゃいだココに鍵を取られたりしたが、投げて返されると、ココが

「昔の事にいつまでもこだわっていても仕方ないココ！大切なのはこれからだココ・・・」と励ましの言葉を受けても、無反応なまま去った。

一方、水無月邸でもさくらはかれんにナッツから感じた違和感を話していた。それを聞いたかれんは「じゃあ、ナッツは昔自分のせいで王国が

滅んだとまだ気にしていると言う事なの？」とさくらに聴くと、さくらは「はい、そう思います。あの時のナッツさんからそう感じま

した」と

答えた。その後2人はこの事をすぐに皆に話さず、とりあえずしばらくはナッツの様子を見てから話す事を決めた。

その頃ナイトメアではさくら（及びキュアスター）に対抗すべく、以前カワリーノの上司であったブラッディーが出陣する事が決まっていた。

数日後、さくらはのぞみ達と共にこまちの原稿投函に付き合っていた。こまちがポストに入れ終わると、のぞみ達は入賞できますようにと

祈っていた。それをナッツは「お願いして入賞する程、世の中甘くないナッツ」と切り捨て、さくら以外に非難を受けたナッツの言葉にこまちも

「そうよね。1つの作品を書き上げたからって、満足していたら駄目だよ。私、次の作品に取り掛かるわ！」と殊勝な様子で答えた。そんなこまちにかれんが「次回作はどんな作品にするの?」と聴くと、こまちは「そうね・・・今度こそさくらさんに協力してもらおうかな」と

思っていたりして」と答え、さくらの方を向いたが、さくらは「あ、あの、どんな風にご作品をお書きになるおつもりですか?」と聴いてきたのに

対し、こまちは「うん、まだ決まっていないのよ」と答えると、さくらはほっとした様子であった。まだ恐れていた内容ではなかったようだ。

その後こまちから刺激を受けたうららが「よし！私もこまちさんのように明日の仕事に向けて頑張ります！」と宣言した。それを聞いたりんは

「お仕事って、確かテレビのトーク番組に出るんだよね?」と聴くと、うららは「はい!」と答え、更に「出演する際の衣装を自分で選んで見たら

どうかって、鷺尾さんに言われて、そうしてみようと思ったんです。だから今日、これから買いに行こうと思います」と説明をした。それを聞いたのぞみは「だから私達もついていく事に決定〜！」と勝手に宣言し、皆に呆れられていたが、全員着いていく事に異論は無かった。

それからデパートに着くと、1時間後にホールのクラシック会場に集合する事を決め、こまち・ナツツは本屋に、さくらとのぞみ達はうららの

衣装探しにと分かれて行動するようになった。この時はまだ何も起こる事はないと、誰もが思っていた。

その後すぐ、さくら・かれん・りん・うらは衣装探しをしていたのだが、りんが「うらら〜！これ、いいんじゃない！絶対似合うって！」と

可愛い服をうららに薦めると、かれんが「こっちの方が似合うわよ！」としゃれた服を持って現れた。その途端、かれんとりんは自分の

好みでまたしても、火花を散らしていた。それを見ていたミルクは「かれんとりんは趣味が合わないミ・・・」と言い掛けた所でうららに口を

塞がれ、更にさくらに一度睨まれると、一瞬で黙り込んだ。その後さくらがうららにテレパシーで（私に任せて）と伝えると、2人の方へ歩んだ。

そして2人が持っていた服を取り上げた。それと同時に「何するのよ!?」「とかれん・りんはさくらの方に顔を向けたが、夏のように

怒っていたさくらの顔の前にすっかり萎縮していた。そしてさくらが「御二人とも、今日はあくまでもうららちゃんの衣装選びに来たんですよ。

御二人のご趣味の口論の為に来た訳ではありません。どちらの服を選ぶかはうららちゃんに実際に試着してもらってから、決めてもお

かしくない

「のでは？」と冷静な口調で言うと、かれん・りんはその穏やかさから感じる恐怖とその言葉の正当性の前に「す、すみませんでした」「としか

言えなかった。そんな光景にうららとミルクは「さ、さすがはさくらさん」「かれんもりんもさくらの前では形無しミル」と目を点にしながら

呟いた。結局試着した結果、どちらも違った意味で似合っていたので、両方買う事が決まった。(代金の半分はさくら達が支払った。)そして買い終わった後、集合場所に向かおうとしたその時、「!」さくらは潜入していたブラッディーの気配を感じ取った。

(この気配は・・・今まで出会ったナイトメアさんの誰とも違うけれど・・・あのカワリーノさんと同等・・・ううん、それ以上かも・・・)

そう感じ取ったさくらは「どうしたの、さくら？」と聴くかれんに「新たなナイトメアの気配を感じました!しかも、そのすぐ近くにこまちさんとナッツさんの気配を感じます!だから私がスリープのカードを使って、他のお客さんを眠らせた後、そちらに先に向かいますので、

かれんさん達はのぞみちゃん達と合流を!」と状況説明しながら指示すると、かれん達も「分かったわ!」「気をつけてください!」「すぐに追いつくよ!」「さくら!ナッツ様を頼むミル!」と各自返答した。その後、さくらは『眠』^{スリープ}を使用すると、すぐにテレポートを使用して、こまち・ナッツの気配がする場所に向かった。その間にかれん達ものぞみ達と合流すべく、急いでいた。

その頃、こまちとナッツはさくらの予想通り、ブラッディーの襲撃を受けていた。ブラッディーはさくらに気づかれないように自分の気配を

可能な限り小さくして、こまち達に近づいた。そして「大事な物は

失って始めて、気づくものだ。全てを失った後に残っているものを『絶望』

と言うのだよ」と言っただけで声を掛け、更に「君が持っているその鍵は自分に対する『戒め』かね？それはパルミエ王国のだろう」とナッツに聞いた。

それを聞いたナッツは「お前は誰だ！」と怒鳴ったが、それに対し、ブラッディーは「これで分かるだろう」と仮面を見せ付け、その仮面を

地面に落とし、会場そのものをコワイナー化させた。そのコワイナーはこまち・ナッツを閉じ込め、四方八方から手を伸ばしていた。こまちは戦うべくミントに変身したが、コワイナーの無数に出てくる手の攻撃の前にととう捕縛され、人質とされてしまった。

ブラッディーはここで更に人間体から元の姿に戻ったナッツに「君のせいで王国は滅び、今度は関係のない世界と人間達を巻き込んでいる。

それでいいのかね、君は？」と精神的に追い込めていた。そして罪悪感に耐えられなくなったナッツはコレットを渡そうとしたが、ミントが

「渡しちゃ駄目！パルミエ王国を蘇らせるんでしょ！それが貴方の夢なんでしょう！」と叫びながら止めた。それを聞いたナッツは一旦は

渡すのを辞めたが、「余計な事を・・・」とブラッディーがミントの拘束を更に強くし、苦しむミントの声を聞いたナッツは今度こそコレットを

渡そうとした。だがその時、「そこまです！！」とのさくらの声が響いた。その声に驚き、周りを見渡すミント・ナッツ・ブラッディー。

次の瞬間、眩い光がコワイナーの中で輝き、その輝きが消える前に

「『剣』！！」とのさくらの声が響き、その後には一閃の光がミントに絡んでいた無数の手を消滅させ、落ちかけたミントを『翔』

を使用していたさくらが救出した。ミントを救出したさくらはすぐにナッツの所に降り立った。ミント・ナッツは思わぬ救援に「さくら（さん）！！」と感嘆の声を上げた。さくらはそんな2人に

一度顔を向け笑顔を見せると、すぐにブラッディーへ真剣な顔つきを向けた。ブラッディーはそんなさくらを見て、一瞬驚愕した後、すぐ冷静さを

取り戻したのか「そうか・・・君が『カードキャプターさくら』として『最強のプリキュア』と噂高い『キュアスター』か・・・」と言った。

そして「まさかこの中までに入られるとはね・・・見くびり過ぎていたよ・・・だが、如何に君と言えども、この結界の中ではそこにいる2人を

守りながら戦う事は難しいだろう」と心理攻撃を仕掛けたが、さくらの方が一枚上手だった。さくらは「何か誤解しているようですが」と一旦

言葉を区切ると「私がこの中に入ったのはミント・ナッツさんの状態を知る為。そして2人が無傷であれば、すぐにでも結界を壊すつもりでした。

それに私は今までナッツさんの様に自分のせいではなくさん罪の無い人々を巻き込んだと思ひ込んで、苦しんでいましたが、そんな私を支えてくれる

大切な友達が仲間がいました。そのおかげで私は例えどんなことがあっても最後まで諦めない心を手に入れました。だから、私に心理攻撃を

仕掛けても無駄です！」と自分の過去を僅かに話しながら、言い切った。その後さくらは変身すると同時にその余波で一気に結界を破壊した。

そのおかげで外にいたドリーム達とも合流した。さすがのブラッディーもさくら（及びスター）の予想以上の力の前に「な、何と!？」

と

驚愕していた。その後、ブラッディーはドリーム達の力を試すべく、コワイナーで再度攻撃し、その力を確かめ終わると、今度はスターに襲い掛かった。しかしキュアスターの攻撃力の前にあっという間に追い詰められ、スターの放った『シャイニングブレイカー』！！の前に

想像以上のダメージを追い、「ぐっ！今日はこれで退散させてもらうよ！」と吐き捨てながら、退散していった。

戦いが終わった翌日、さくらはかれんと共にこまちのいる図書館を訪れた。そこで元気の無いこまちに会い、どうしたのかと聴くと

「私・・・ナッツさんを励ますつもりが何も出来なかった・・・それどころか逆に心配され、励まされてしまったの・・・」と昨夜ナッツハウスに

行った時の出来事を話した。それを聞いたさくらは「こまちさんはちゃんとナッツさんを励ましていましたよ、昨日の戦いの中で。だからこそ、

ナッツさんはその後、訪ねてきたこまちさんに恩返しをしたんですよ」とこまちに話すと、少しはこまちも元気が出た様子であった。

その後、かれんが「新しい小説は何？」と原稿を見ながら聴くと、こまちは「1人の女の子が心惹かれる相手に出会う物語よ」と答えた。

それを聞いたさくら・かれんは微笑んでいた。だがその時、さくらの頭に激痛が走った。「あっ、くっ！」と言いながら膝をついたさくらに

「さくら！？」「どうしたの、さくらさん！？」「とかれん・こまちは顔色を変えて、さくらに近づいた。さくらは必死に頭痛に耐える中、

何らかのヴィジョンを見た。そしてそれを見え終わると、どうにか頭痛が治まった様子であった。その後さくらはかれん・こまちにこ

の事は

のぞみ達にまだ話さない事を条件に「何かが・・・今までに無い何かが起こる・・・そんな予感がするんです」と見た事を伝えた。それを聞いたかれん・こまちはさくらの出した条件を一応受け入れながらも、何が起こっても対処できるようにと心がけていた。

第28話・さくらとナッツの鍵とこまちの心（後書き）

次回はさくら・のぞみ・りんによる特訓と友情を描きます。

第29話・さくらと友情のマラソン大会（前書き）

今回もクライマックスでさくらはまたヴィジョンを見ます。

第29話：さくらと友情のマラソン大会

第29話：さくらと友情のマラソン大会

ある日の放課後のナッツハウスにて、さくらはかれん達（のぞみやりん以外）と一緒にのどかにお茶を飲んでた。

その時間がまだ当分続くと思われたが、のぞみが大きな音を出しながら、ナッツハウスに入ってきた事で終わった。

「嫌だ、嫌だ！嫌だ、嫌だ、嫌だ！絶対嫌だー！！」と叫びながら逃げるように入ってきたのぞみを「こーら、のぞみ！待ちなさい！」と

叫びながら、りんが追いかけるように入ってきた。その後まだ「嫌だー！！」と言っていたのぞみは一旦りに捕まり

「マラソン大会の練習、ちゃんとやるって、約束したでしょ！？」と言われると、捕らえていたりんの腕を振り払いながら

「やっぱり無理だよー！4キロなんてー！」と文句を言った。そんなのぞみにかれんが「駄目よ！マラソン大会は全員参加なんだから！」と

注意し、こまちは「皆で頑張りましょう」と言い、うららも「ファイト！です！」と激励した。しかし当ののぞみは

「嫌だ、嫌だー！頑張れっこないー！！」と無理宣言をし、また逃げ出そうとした。そんなのぞみをりんは再度追いかけてながら

「だから！練習に付き合っただけでいってらっしゃい！」と叫んだ。するとそのぞみは「ああっ！そうだ！りんちゃん、今年優勝したら

2連覇でしょう！私、応援してあげるから！それじゃあ！」りんの応援をする事を言い訳に逃げ出そうとした。しかしりにそんな言い訳が

通じる訳なく、「って！のぞみも走るのー！！」と叫びながら追いかけた。そんな光景に見てなかったさくら以外の誰もが溜息をついて

いた。

「情けないミル・・・」とミルクが漏らした。それから一瞬の出来事が起きた。さくらは持つていたティーカップを下ろすと、誰も気づかない

程の超スピードで2階から1階へ降り、次の瞬間には逃げ出そうとしたのぞみの前に立っていた。突然目の前に現れたさくらにのぞみは驚きの余り、腰を抜かして倒れてしまった。りんや2階にいたかれん達も腰を抜かしはしなかったものの、さくらの素早さに呆然としていた。

当のさくらは腰を抜かして倒れているのぞみに腰を下ろしながら背丈を合わせ、「のぞみちゃん、私がちゃんと無理をしないやり方で完走できる走り方を教えてあげるから、一緒に頑張ろう、ね」と微笑みながら言うと、のぞみは「は、はい。分かりました」と答えた。かれん達はさくらの言っていた走り方は何なのか疑問に思っていたが、さくらのやり方なら大丈夫だろうと思い、何も言わなかった。

そして翌日からさくらによるのぞみのマラソン大会へ向けてのトレーニングが始まるはずだったが、りんがいつもさくらにばかり任せては

いけないからと今回は自分がやると言い、そのまま決定した。それでもさくらは一応トレーニングに付き合う事をりんに了承を得た。その当日の朝早く、さくら・りん・のぞみはナッツハウスの近くを走っていた。しかしへとへとだったのぞみはナッツハウスの前まで来ると、

「もう駄目だ〜！」とダウンし、りんに「まだ2キロも走っていないだよ！」と突っ込まれても「眠いよ〜！疲れたよ〜！」としか言わない。

そんなのぞみにりんは「もうしょうがないでしょ！あたし、朝しか付き合う時間がないんだから！」と言うと、さくらが「だったら私が・・・」

のぞみのトレーニング相手を引き受けると言いかけたが、「駄目だよ、さくら！のぞみはいつつも、あなたに面倒を見てもらってるんだから！」

こういう時くらい、私が見ないと！」とさくらにりんが自分がコーチすると一旦言った後「じゃ、朝練あるし、私はここで、後でね、さくら！」

と言いながら、部の朝練があるので一旦りんは家に戻った。無論、りんはのぞみに「のぞみ！寝ちゃ駄目よ！」と言つ事を忘れなかった。

そんなりんの走り去る後ろ姿を見ながら、ココは「りんも頑張るな」と言い、ナッツは「それに比べて」とりんに対照的にナッツハウスの中で

りに言われたにも関わらず、グーグー寝ているのぞみを見て、呆れながら呟いた。ココ・ナッツは先が思いやられる気分であった。

しかしその2人とは対照的に優しいさくらは寝ているのぞみをおんぶしながら、「じゃあ、私ものぞみちゃんを家に送ってから、朝練に向かいますので、失礼します」とココ・ナッツに挨拶して、走って行った。そんなさくらの姿にココ達は優しい女神を見ている気持ちであった。

その後のぞみは、お優しいさくらのおかげで学校を遅刻せずすみ寝ていた事がりにばれて怒られそうになっても、何とか勘弁してもらった。

下校時、りんはかれんに「顔色が悪いわよ。疲れているんじゃないの？」と聴かれても、「いやいやいや！疲れている暇なんてありませんよ！」

じゃ、私、家の手伝いがあるので！」とりんは本当に顔色が悪いのに明るく振る舞い、家の手伝いをする為に帰って行った。

そんなりんの後ろ姿を見ながら、かれんは「絶対弱音をはかないんだから」と呟き、こまちも「私達にも手伝える事はないかしら？」と呟いた。

そんなかれんとこまちにさくらは「じゃあ、こういうのはどうでしょう?」とある案をかれん達に話すと、3人とも即賛成した。

翌日の休日の朝、りんは相変わらず嫌がるのぞみをトレーニングに引っ張っていた。のぞみが「嫌だ〜! 4キロなんて、走りたくないよ〜!」

とまだ不平不満を言うと、りんは「大丈夫! 一度4キロ走っておけば、気持ちが楽になるって!」とのぞみをなだめていた。その時だった。

「その通りよ!」とかれんの声が響いた。驚いたのぞみ・りんが声のした方に顔を向けると、そこにはさくら・かれん・こまち・うららが

ジャージ姿で立っていた。のぞみが「皆!?」と声を出すと、かれんが「皆で一緒に走りましょう!」と言い、次にこまちが

「私も走るの得意じゃないけれど、頑張るから」と言い、更にうららが「私も! 仕事の体力づくりを兼ねて、頑張ります!」と言い、最後にさくらが「のぞみちゃん、今日は皆で走ろう。それでまだ駄目なら、私のトレーニング法で頑張ってみよう」と言った。

全員が揃った事でのぞみは走る事を辞める訳には行かなくなった。これこそがさくらの提案した考えだったのである。

だがその後でコースのラストの坂道コースでアクシデントが発生した。ばてていたのぞみに手を差し出そうとしたりんがたまっていた疲労から

倒れてしまったのだ。あやうくそのまま転がり落ちそうになったりんをさくらが滑りながら救出し、ナッツハウスに運んだ。

ナッツハウスに着いてからしばらくすると、りんが目覚めた。そのりんにうららが「でも、どうしてそこまでしてのぞみさんに付き合っただけですか?」

と質問すると、りんは昔の事を話した。小学3年生の時に運動会の徒競走で優勝候補だったりんはその徒競走の最中に転んでしまい、一度は

走るのを諦めかけたのだ。そんなりに最後まで走ろうと手を差し伸べたのがのぞみだった。そして2人は最下位とはいえ、二人三脚でちゃんと

完走したのだ。その事をのぞみはすっかり忘れていたが、りんは『諦めずに頑張る』事を意識するようになった出来事だったので覚えていたのだ。

そしてその時の恩返しのためにも、のぞみに諦めずに完走して欲しいと想い、協力しようとしたのだ。それを聞いたさくらからはりに話した。

「りんさんの事情は良く分かりました。でもそれでりんさんが倒れたら、元も子もありません。りんさんはマラソン大会当日までなるべく充分な

睡眠と休息を取ってください。その間、私のがぞみちゃんを必ず完走できるようにコーチします」それを聞いたりんは何か言いかけたが、その前に

「さくらちゃん！よろしくお願いします！」とのぞみがさくらに頼んだ。それを見たりんは「じゃあ、さくら。お願いするわ」と言う他無かった。

それから数日間、朝・夜に分けての練習が始まった。その練習法とはかつてさくらの世界で小狼のいところであるメイリンがマラソンに向けて

行なった『徐々に走る距離を伸ばす』走り方であった。この練習は予想以上に効果があったのか、のぞみだけでなく、こまち・うららも思っていた以上にすいすい走れるようになり、初めは1km、次は1.5km、2km・・・そして最後に目標の4kmを走る事ができた。

そのやり方をかれんから聞いたりんは「やっぱり、さくらは凄いですね」と漏らし、その後にも自分も時間がある時にそのやり方を試していた。

マラソン大会当日、さくら達は互いの健闘を祈りながら、スタートを切った。レースは前評判通り、今年転入してきたさくらが圧倒的な速さで

他の生徒を圧倒していた。その後方をりんは少し疲労がまだ残っていたものの、さくらのやり方で自分のペースを保ちながら、走っていた。

そしてそれに少し遅れる形でかれんが、更にその後方にこまち・うららがそしてのぞみが走っていた。その時はまだ異変は起こらなかった。

だがその後で、さくら以外の5人は、カワリーノから仕事を受けていたガマオの策略で行き先を変えられ、罠にかかってしまった。

既に余裕で2位をぶつちぎってゴールインしていたさくらもガマオの気配を感じ取り、ミラーに場に残ってもらうように頼むと、すぐのぞみ達のいる場へ急いだ。その途中で「そうは行きませんよ」「ここは通さん！」とカワリーノ・ブンビーが立ちはだかったが、さくらは

瞬時に「フライト闘バトル」！！「力パワー」！！と叫びながら、2枚のカードを用すると2人をそれぞれ片手で持ち上げ、

「申し訳ありませんが・・・ご退散願います！！」と叫び、2人を遙か遠くへ投げ飛ばした。突然の事にさすがのカワリーノも対処できなかつた

ようであつた。その後、さくらはさらに加速しながら変身し、『暗黒の仮面』を取り付けてパワーアップしたガマオに追い込まれかけている

ドリーム達の姿を見ると、一気に跳躍し、「シャイニングトルネードキック」！！」をガマオに蹴り込むと、ガマオは吹き飛んだ。その一瞬のチャンスでドリーム達は逃さず、すぐに最大の必殺技である『プリキュアファイブエクスプロージョン』でガマオを倒した。戦いが終わると、既にゴールしていたさくらは一足先に戻り、のぞみ達もマラソンに戻った。結果は最下位だったものの、最後まで走

りきった

のぞみ達の顔は笑顔であった。一方優勝したさくらは表彰された後、押し寄せてくる観衆を避けるべく、急いでその場を離れた。

マラソン大会終了後の帰り道、のぞみ達と別れたさくら・かれん・こまちは一緒に歩いていった。

かれん・こまちが「それにしてもさくらはやっぱり速かったわね」「本当ね」とさくらを賞賛すると、さくらが「そんな」と照れながら話すという

談笑が続いていた。だがその後すぐ、再びさくらに頭痛が走った。

前よりも激しい痛みにはさくらは膝を折り、「さくら（さん）！！」

「かれん・こまちは慌ててさくらに駆け寄った。さくらは痛みが治まるまでの間、再びヴィジョンを見ていた。前回はずつすらであったが、今度は

少しだけはつきり見えた。そこには何処かの神社と対峙する2つの集団が見えた。頭痛が治まったさくらはその事をかれん達に話したが、

「まだ今の段階では、のぞみちゃん達に話さないほうがいいと思うんです」と言い、まだのぞみ達には秘密と言う事を約束してもらった。

だがそのさくらが見たヴィジョンが現実になる時がだんだん近づいているとは、まだ誰も気づいていなかった。

第29話・さくらと友情のマラソン大会（後書き）

次回はさくらのハデーニャに対する取調べが見ものです。

第30話・さくらとココのヘルシー大作戦（前書き）

今回はさくらの持つあるカードが役目を果たします。

第30話：さくらとココのヘルシー大作戦

第30話：さくらとココのヘルシー大作戦

ある休日のナッツハウスにて、さくらはのぞみ達と共に静かに時を過ごしていた。さくらは、初めにのぞみ達と共におやつを食べた後すぐに

かれん・こまちの商品作りの手伝いを始めていた。そんなさくら達とは別にのぞみ達は美味しそうにシュークリームを食べていた。(特にココが)

「うーん！美味しい〜！」「幸せですね〜！」のぞみ・うらははそう言いながら、本当に嬉しそうに食べていた。だがその近くでココは猛烈な勢いでシュークリームを食べており、その凄まじさにこまちが「ココさん。いくら何でも、食べ過ぎじゃないかしら？」と聴くが、

ココは全く無視していた。次にりんが「ねえ、まだかれんさんが持つて来てくれたセレブ堂のシュークリームもあるんだよ？」とココに言つと、

ココは「シュークリームならいくらでも食べられるココ！」と叫びながら、りんの方に駆け出したが、その途中で転んだ。

転んだココにのぞみが「ココ？」と聴くとココは「失敗、失敗ココ！どっこいしょー！」と言いながら立ち上がると、かれん・のぞみが「どっこいしょー!」「ココ！今、どっこいしょつて、言った!」と悲鳴をあげた。ココは何故のぞみ達が叫んだのか、理解していなかった。

今度はりんが「心なしか・・・ふっくらしてない？」とココに聴くと、すぐにココは「そんな事ないココ！」と心外だと言う風に叫んだ。

するとかれんが「試しに！小々田先生の姿になってみてくれる!？」と頼むと、「分かったココ!」と答えながらココは変身した。

変身したココの姿をのぞみ達（さくらとナッツ以外）はじつと見ていたが、特に変わった様子もなく、のぞみ・りんも

「別に普通だよ」「本当だ」と呟いた。しかし「違うよ、のぞみちゃん」と言いながら、さくらは立ち上がった。そしてナッツも

「さくらの言う通りだ。一見普通に見えるが・・・」と言いながら立ち上がった。さくらとナッツはココの後ろと前に立つと、さくらはココのシャツの後ろをそしてナッツが前を掴み、2人は頷きあうと同時にそのシャツを持ち上げた。その事で丸見えになったココのお腹が

見えた瞬間、「……ぎゃあああ……!!?」「……」のぞみ達の悲鳴がナッツハウス全体に響いた。

その悲鳴を聞きつけて駆けつけたミルクは「どうしたミル!?!」と聴くが、誰もすぐには答えなかった。ココとナッツは人間体から元の姿に

戻り、その後でまずりんが「な、何!?今のお腹!?!」と仰天しながら言い、次にうらが「ぽっこりお腹のぼんぼこでした!」と叫び、

こまちも「目の当たりにすると、結構ショックね」と呟いた。ココは自分のお腹の状態とそれに対するりん達の感想にショックを受けていた。

その後でミルクからココがシュークリームばかり食べていた事を聞き、それが原因だと理解した。それに対する策を考えている最中、のぞみ・うらが「まあ別にちよつとくらいいいんじゃない?私だって、いっぱいシュークリームを食べてるよ!」「私もです!」と言うと、

かれんが「シュークリームばかりというのが、問題なのよ」と言った。かれんの言っている事を理解出来ていなかった2人にりんが

「あんだ達はシュークリームだけでなく、ご飯も、お肉も、お魚も、野菜も、果物も、何でも好き嫌いなく食べているでしょう」と説明し、

さらにさくらが「だからシュークリームをたくさん食べてものぞみちゃん達はすぐ太らないけど、ココさんの場合はシュークリームを食べている

割合が異常に高すぎるんだよ。だからこんなにお腹が膨らんでしまっているんだよ」と説明を追加した。そんなさくらとりんの説明に同意する

かのようにこまちが「確かに・・・このまま偏った食生活を続けるのは良くないと思うわ」と言い、かれんも「体を壊してしまうかも」と

付け足した。そのかれんの言葉が効いたのか、のぞみは「そんなの駄目駄目！健康第一だよ！」と言い、ミルクも

「決めたミルク！今日からこのミルクが厳しく指導して、ココ様の偏った食生活を改善するミルク！」と宣言し、それを聞いたのぞみは

「よし！ココをばつちり健康にしてあげる事に決定〜！！」と決定宣言した。その側でココはトホホ状態になっていた。

そしてさくらも（のぞみちゃんもミルクちゃんも張り切るのはいいけど、必要以上にやり過ぎないかしら？）と不安を覚えていた。

そのさくらの予想は後日見事的中してしまうのであった。

その日からミルクによる厳しい指導を始めたが、それはさくらが予想していたように必要以上に厳しいものであった。

バランスのいい食事はともかく、その後の『デザート禁止』と言うブラカードを掲げて、ココにおやつを食べさせなかったのは決してココの為に

はいいとは言えない物であった。しかも、落ち込むココの側でナッツが豆大福をばくばく食べているのも、ナッツにはその気が無くとも、

ココからすれば嫌がらせにしか思えない行為であった。そして深夜に我慢できず、こっそり食べようとしたココは冷蔵庫を見張っていたミルクに

見つかり、さらに翌日こっそり鞆に入れていたシュークリームも鞆の中に同じようにこっそり入っていたミルクによって食べられてしまい、

ココの落ち込み度とストレス・疲労はピークに達しようとしていた。そして学校で元気の無いココを見かねたさくら達はナッツハウスに立ち寄る事にした。そこで一連の出来事を聞いたさくらは徐々にミルク・ナッツに怒りを爆発させ、雷を落とした。

「ミルクちゃん！いくらココさんの健康の為とは言え、いきなりおやつを完全禁止にしたら、返ってそれを食べたいという欲求で余計にストレスが

たまったりして体に良くないでしょう！！それにいくらこっそりココさんが入れていたとは言え、食生活指導者の貴方がそれをつまみ食いしたら、

何の示しもつかないでしょう！！それからナッツさん！おやつを食べられないココさんの目の前で豆大福をバクバク食べるのは単なる嫌がらせ

行為ですよ！罰として！当分の間、2人とも、おやつは禁止させていただきます！いただきます！！いいですね！！」さくらはそう怒鳴りながら、言った。

そんなさくらの言葉にミルク・ナッツは「は、はい。分かりました（ミルク）（ナッツ）」と震えながら答えるしかなかった。

そしてのぞみ達はというと、ぶち切れていたさくらの前に何も言えず、目を点にしながら「こ、こ、怖い」としか呟けなかった。

その後、さくら達も加わって食事作りが行われたが、さくらとりん以外はほぼ全滅。うららはりんごの皮をまともに向けず、かれんは食材の知識は

あっても、料理の知識は全く無く、こまちとのぞみはあるうことがご飯にようかんを入れようとする有様。

結局、さくらが作ったメニューとのぞみ達が作ったメニューに分けられ、それぞれを試食したミルクは「さくらの方は全く問題ないミ

ル。

それに比べてのぞみ達のはひどすぎるミル！」とさくらの認め、のぞみ達には駄目出しをした。(のぞみ達の作ったおかゆは意外といけたようだ)

しかしそのさくら達のメニューを持ってしても、ココの体調はすぐ回復する事はなかった。

数日後、ハデーニヤがシュークリーム禁断症状の出ていたココをシュークリーム屋に化けて、誘い込んだ。その誘いにまんまと引つかかったココ

だったが、食べる事はさくらやのぞみ達の事を考える事で何とか我慢が出来た。するとハデーニヤは本性をあらわし、車をコワイナー化させ、

ココをその中に捕らえた。そしてさくらが気配を察知し、のぞみ達と共にその場へレポートで現れると、「こいつはね、シュークリームの誘惑に

負けて、あんた達の約束を破って食べたんだよ！」と言いながらハデーニヤは心理戦をさくら達に仕掛けた。それに対し、まずのぞみが「嘘つき！」と叫んだ。ココは自分の事と思い、悲痛な顔をしたが、のぞみはココではなくハデーニヤに対して言っていたのだ。

「ココは誘惑に負けたりしないもん！」とのぞみは叫び、かれん達も頷いていた。さくらだけは無言のまままで特に何も示さなかった。

ハデーニヤはのぞみ達の態度が気に入らなかつたのか「じゃあ、証拠を見せてみな！」とけしかけると、今度はさくらが「お見せします」と

きっぱり言った。驚くのぞみ達とハデーニヤを尻目にさくらは星の杖をリリースすると、『秤^{ライブラ}』のカードを使用した。

すると1つの天秤が目の前に現れた。そしてさくらのココ・ハデーニヤに対する質問が始まった。

「ではまずココさんに聴きます。ココさん、貴方は何故ここに来た

のですか？」そのさくらの質問にココは気まずげながらも

「それはシュークリームの匂いに誘われたからココ」と正直に答えた。すると天秤は本当の方へ傾いた。それを見届けたさくらは次に「ではハデーニヤさん。貴方がここでシュークリーム屋さんをしていたのですか？ココさんを誘い出す為に」と聴くと、ハデーニヤは「ああ、そうさ！」と答えた。またしても本当の方に傾いた。だがココが次のさくらの質問「ではココさんは食べようとしたけど、食べるのを

断念したのですか？」に「そうココ。食べそうになっただけど、何とか我慢したココ！」と正直に答えたのに対し、ハデーニヤはさくらの質問

「ではハデーニヤさん。貴方がココさんが食べたと言ったのは嘘なのですか？」に「いいや！こいつは食べたのさ！」と嘘を言った。

するとココの時は本当の方に向いたのが、ハデーニヤの時は嘘の方へ傾いた。これでハデーニヤが嘘を着いていた事は確定した。

それを確認したさくらは「ハデーニヤさん、これが証拠です。この天秤は相手が正直に言えば、本当の方を向きますが、嘘をつけば、嘘の方に

傾きます。ココさんの時には2度とも本当の方を向いたのに対し、貴方のは2度目の時に嘘の方に傾いた。これ以上ない証拠です」と言った。

それを聞いたハデーニヤは「う、うるさい！黙れ黙れ！」と怒りだし、変身した。それに対し、さくら達も瞬時に変身した。

そしてココを救出後、コワイナーはルージユ・ドリームの連携技で倒し、ハデーニヤもスターの使用した『サイクロンキック』により、派手に

空へと飛んでいった。こうして戦いは終わった。その時、スターの脳裏に又してもヴィジョンが映ったが、前回見た2つの集団の内、1組が

ドリーム達であったことが分かった。しかしスターは何故自分がド

リーム達と一緒にでないのかが不思議だった。

戦いが終わった後、ココはのぞみ達5人が作った野菜を中心とした特性シュークリームを食べる許可をもらったが、1つ食べるとミルクに

「これ以上食べたなら、また太るミルク。残りはミルクが管理するミルク」と言われ落ち込んでいた。そんなココにさくらは

「大丈夫だよ、ココさん。今日からダイエット仲間が1人増えるから」と言った。ココものぞみ達も一瞬その言葉の意味が分からなかったが、

次にさくらが発した「ね、ミルクちゃん！」との言葉で一斉にミルクを見た。ミルクは「な、何をいうミルク！」と言いながら、皿を持ち

あげようとしたが、その時「どっこいしょ！」と言ってしまったのがまずかった。「どっこいしょ!?!」「」「」

のぞみ達に聞かれてしまったのである。そしてかれんが「ミルク、こっちに向けてくれる?」と言い、ミルクがそうすると、さくらの言った

言葉の意味がのぞみ達全員に理解できた。そう、ミルクはココのためと、いつつもとくさん食べてしまい、運動をあまりしていなかった為に

太ってしまったのだ。その後でのぞみ「ミルク!食べたら、運動もするんだよ!決定!」と言われると、「ミルク!」と悲鳴をあげていた。

第30話・さくらとココのヘルシー大作戦（後書き）

今回はさくらが遂にのぞみ達にもヴィジョンについて話します。

第31話・おくらとプリキユマ5のシンデレラ物語（前書き）

今回は中編に近い形になります。

第31話：さくらとプリキュア5のシンデレラ物語

第31話：さくらとプリキュア5のシンデレラ物語

休日にはさくら達はまたナッツハウスに集まっていた。そんな中でこまちがミルクにシンデレラの絵本を渡していた。

それを見ていたのぞみがミルクに「ミルク！私が読んであげようか？」と尋ねると、ミルクは完全に馬鹿にした表情で嘲笑いながら

「はああく！？何で読書が苦手なのぞみに読んで貰わなくちゃいけないミルク？」と言った。それをミルクの横で聞いていたココ・ナッツは

焦り出していた。そして予想通り、のぞみは「人が親切で言っただけでるのにー！！」と怒鳴ると、ミルクは

「ミルクは読む為に借りたんじゃないミルク！小説を書くために借りたミルク！」と答えた。その言葉を聞いたのぞみやりん達は驚いていた。

(さくら・こまちは驚いていなかった)そしてうららが「どうして物語を書くのに絵本がいるのですか？」と聴くと、ミルクは

「絵本の内容を書き写すミルク」と答えた。そのミルクの言葉をサポトするかのようにつまこが説明し始めた。

「本の内容を書き写す事で物語の構成や文章表現が分かるようになるのよ」その説明にかれんも「小説を書く為にはいい勉強かもね」と言った。

それを聞いたミルクは「頑張るミルク！」と笑顔で言った。だがさくらは(それだけならいいんだけど、何か悪い予感がするな)と思っていた。

それからおやつの時間となり、さくらとのぞみ達は豆大福を食べていたが、ミルクはその場にいなかった。自分の部屋で書き写しをしていたのだ。

だがミルクは途中で単に書き写す事に飽きたのか「単に書き写すだけと言うのはつまらないミル。ちよつと内容を変えるミル」と言いながら、

内容をいじり始め、のぞみ達5人やココ・ナッツをモデルとして扱い始めた。ただしさくらだけは、ばれたらどんな目に合うか分からないだけに

モデルとして扱わなかった。しかしそんな程度で勝手にのぞみ達をモデルにした事がさくらにばれた時の怒りを治められるはずがないとはミルクは

まだ分かってなかった。かくしてミルクによるのぞみ達5人のプリキュアのシンデレラ物語が書き始められた。

しかしその内容は余りにもミルクの独創性が強すぎた物であった。何しろ、シンデレラ役にのぞみを選んだが、そののぞみのドジ度を必要以上に

表わし、もしのぞみが今ミルクの書いている側にいれば、確実に切れていただろうと言える程の物だった。他にも意地悪なお母さんや姉達の役に

こまち・かれん・りんを選んだが、こちらも当事者達がいれば、確実に怒るであろう内容であった。そしてうらはは魔法使いの役に選ばれていたが、

こちらも半人前扱いとされており、シンデレラにドレスを与える際に桃太郎の姿や怪獣のぬいぐるみの姿にさせてしまうように描いていた。

ココ・ナッツは王子役と普通に扱われていたが、シンデレラはそのココ王子とのダンスで踊っては転び、踊っては転び、というあまりにも

ひどい扱いをされていた。もはやミルクののぞみに対する陰湿的ないじめは誰かが止めない限り、止めようが無いほどであった。

そこへのぞみが「ミルク〜！差し入れたよ〜！」と言いなながら、部屋の中に入って来た。りん達も一緒であった。

その状況にミルクは慌てて原稿を隠し、適当に誤魔化すと、「気分転換に外へ出てくるミルク!」と言って原稿を持ちながら外へ出て行った。

だが店を出てしばらくするとミルクはブンビーに捕まってしまった。そしてミルクの原稿を見たブンビーは「これは使えるな」と笑いながら言った。

しばらくして、ブンビーの気配を察したさくらは「ナイトメアの気配がする!ミルクちゃん危ない!」と叫び、それを聞いたのぞみ達と共に

ナッツハウスを出たが、外一帯は黒い空間が広がっていた。それを見てさくらは「これは!」とある事に気づき、のぞみ達に

「皆!手を繋いで互いに離れないで!」と叫んだが、時既に遅く、さくらとのぞみ達はばらばらのまま、謎の光に取り込まれた。

のぞみ達が目を開けると、そこはお城の中であった。のぞみ達はドレスを着ており、ココ達も王子の衣装を着ていた。しかもものぞみの足には

シンデレラのお話のメインの1つである『ガラスの靴』がはかれていた。「ここは一体?」と呟くナッツ。そしてかれんがさくらがない事に気づき、

「さくらは!?!どこにいるの!?!」と周りを見回しながら、言った。そのかれんの言葉を聞いて、のぞみ達も探していたが、見つからなかった。

だがそこへ「ワハハハ!」とブンビーが馬鹿笑いしながら現れた。その片方の手にはミルクがぐるぐる巻きで掴まれていた。

「ココココミルク!」「」「」「」のぞみ達はミルクを助けようとしたが、その前に「そうはさせん!やれー!」とブンビーが指示したどこからか

現れた鎧の兵隊達に襲われてしまった。ココ・ナッツは体当たりされただけで元の姿に戻ってしまい、ミルク同様ぐるぐる巻きにされ

た。

そしてのもみ達も変身する間もなく、あっという間に縛られてしまい、捕らえられてしまった。それを見てブンビーはますます上機嫌であった。

「わははは！さすがの君達も、これでは手も足も出まい！」と言うと、兵隊達に「そいつらを地下牢に放り込んで！」と命令した。兵隊達はその命令に従い、縛られて身動きの出来ないのもみ達を抱えて連れて行くとした。のもみ達は必死でもがくが、無駄な抵抗だった。

その時だった。一陣の風と共にひ1人の仮面をつけた騎士が現れ、次の瞬間にはのもみ達を捕らえていた兵隊達を一瞬で撃破し、さらにブンビーの

手からココ・ナッツ・ミルクを救助した。そしてその後に見えない剣さばきでのぞみ達を傷つけることなく、縄を切った。

「おのれ〜！何者だ！貴様は！」と仮面の騎士に怒鳴るブンビー。それに対し、仮面の騎士は仮面を外しながら「言わずと知れた」と言い、

仮面を完全に外すと「カードキャプターさくら！！」と名乗った。そう仮面の騎士はさくらが『クリエイト創』のカードを利用して、変身していた姿だったのだ。形勢不利と見たブンビーはシャンデリアをコワイナにしたが、全員変身したプリキュア達の前には無力に等しかった。結局、コワイナーはスター・ドリームの連携攻撃で倒され、ブンビーも逃げ去った。そしてのもみ達はさくらの力で元の世界に戻った。

元の世界に戻った後、ミルクはのもみ・うらら・かれん・りん・こまちに役の事やその扱い方について文句を言われた後、今度はさくらから直々に

お説教を喰らっていた。しかしそのお説教の最中にさくらは再び激しい頭痛を受け、倒れてしまった。そしてまたしてもヴィジョンを見た。

そしてもう1つの集団の正体を知る事になったさくらは、何が起きているのかはつきり解した。だがさくらはその全てを話してはならない事も知っていた為、

のぞみ達には「プリキュア5にはナイトメア本部での時以上の『試練』が待ち構えていると思われませう。そして今度のは今までは比べ物にならない

くらい厳しい物だといえるでしょう」としか言わなかった。その言葉を聞いたのぞみ達は不安を抱えながらも、試練に立ち向かう事を決意していた。

いよいよプリキュア5に最大の試練が迫ろうとしていた。

第31話・おくらとプリキュア5のシンデレラ物語（後書き）

次回、いよいよおくらが懐かしい仲間達と再会します。ご期待ください！

第32話：さくらと感動の再会（前書き）

いよいよお待ちかね！カードキャプターサイドの人物達が登場します！

第32話：さくらと感動の再会

第32話：さくらと感動の再会

さくらはその日の朝から高熱にうなされ続けていた。1年に1度、必ずさくらがかかる唯一の病気であった。

かれん・じいやは医者を呼んだが、あまりの高熱に医者も「解熱剤をお渡ししますが、それでもどのくらい効果があるかわかりません。とにかく絶対安静にさせてください」としか言えなかった。かれん達はその言葉に従い、解熱剤を飲ませる以外はさくらを寝かせていた。

そしてその日の夕方、かれんから学校でさくらの事を聞いたのぞみ達は超特急で見舞いの品を持ってきながら、駆けつけた。

「さくらちゃん、大丈夫？」「かなり具合が悪そうだけど」のぞみ・りんが心配そうに聴くと、さくらは「だ、大丈夫だよ」と弱々しく答えた。

そのさくらの答え方がいつもと比べても余りにも弱々しかったので、うららら・こまちが「さくらさん、本当に大丈夫なんですか？」

「かなりつらそうに見えるんだけど」と心配して聞くと、さくらは「私は大丈夫です。明日にはよくなると思いますから」と答えた。

その後で、さくらは「それよりも、皆さん・・・気をつけて・・・前に話した試練の時がだんだん迫ってくるように感じるの・・・」と言った。

それを聞いたかれんは「大丈夫よ、さくら。私達は例えどんな事があっても、絶対その試練に負けない！だから安心して休んで」とさくらに心配ないと言いながら、ゆっくり休みように言った。だが、翌日になっても、さくらの熱が下がる事は無かった。

その事にかれんは「まさか！キュアスターに変身していた時の負荷が今になって！」と考え、その原因を作ったのは自分達だと自分を責めていた。

その3日後、相変わらずさくらの熱は下がらない状態が続いていた。当のさくらはベッドで水枕をしながら、寝かされていた。

その中でのもみ達はデスパライアの襲撃を受けていた。一度は最強の必殺技である『プリキュアファイブエクスプロージョン』で倒したかに

見えたが、実際に倒せたのはコワイナーのみであった。そしてデスパライアは一瞬だけ勝ったと思いついていたドリーム達の間をついて、

「これでもくええ！！」と叫びながら、強力な攻撃を仕掛けた。だがその時、『シャイニングブレイカー』！！』との叫び声が響いた。

そしてその声と共に放たれたであろう攻撃がデスパライアの攻撃を相殺した。その事に驚き、ドリーム達はその声がした方を向くと、そこには

キュアスターが顔が赤く、ふらふらに近い状態でありながら、立っていた。「さくら！？どうして！？」と叫びながら、アクアはスターが

ここにいる事を理解できずにいたが、すぐにそれが自分達が危ないから、助けに来たのだと理解し、また自分の不甲斐無さを責めていた。

デスパライアはスターの姿を確認すると、共にいたカワリーノ・ブラッティーに目配せをし、その後スターに攻撃を開始した。

『最強のプリキュア』であるキュアスター！！お前の力を我が物に！！』そう叫びながら、デスパライアはスターに襲い掛かった。

スターは3対1という不利な状況と高熱による体調不良状態でありながら、全くそれを感じさせない互角以上の戦いをしていた。

だが、カワリーノ・ブラッティーには『フレイムスタースラッシュ』でデスパライアには『シャイニングノヴァ』で大ダメージを負わせたと同時に

スターは遂に倒れてしまった。そんなスターにドリーム達は「「「スター！」「」「」」と叫びながら駆け寄ったが、意識は朦朧としていた。

それを好機と見たデスパライア達は深手を追っていたにもかかわらず、「これで終わりだ！！くらえ！！」と叫びながら攻撃を繰り返した。

その攻撃の威力は凄まじく、ドリーム達は自分達には耐えられないと分かっていたものの、せめてスターだけでも、と全員で立ち塞がった。

その時であった。「申し訳ないけど・・・終わりにさせないわ・・・」との女性の声が聞こえた。その声の主はドリーム達の前に一瞬で現れ、

持っていた鈴を振りかざした。するとその鈴の鳴った音と共に発せられた光の前にデスパライア達の攻撃はかき消された。

その光景を「ば、馬鹿な！？」と信じられずにおり、「き、貴様は一体！？」と鈴を持っていた女性が何者なのか、問おうとした。

それに対し、その女性は「私はさくらちゃんの友達よ。ついでに言うとうと、私もさくらちゃんと同じで魔力を持つ者で、さくらちゃんには及ばないけれど・・・貴方達の攻撃を無効にする事くらいは容易にできるわ。だからここはお引取りしてもらおうかしら？」と答えた。それを聞いたデスパライア達は状況は完全に自分達に不利だと理解し、渋々ながらも退却していった。これで戦いは何とか終わった。

その後でその女性はある建物の陰の方を向くと、「もう出てきてもいいわよ、知世ちゃん」と優しく言った。「「「知世ちゃん！？」「」」

その女性の言っていた人間の名前にアクア・ドリーム・レモネードはもしかやと考えた。そして案の定、建物の陰からひょっこり現れたのは

さくらの大親友にして幼馴染である大道寺知世であった。「お疲れ

様でした。観月先生」知世はそう微笑みながら、観月という女性に答えた。

その後2人はドリーム達の方に向いた。一瞬構えるドリーム達に2人は「初めまして、プリキュア5の皆さん。私は『観月歌帆』、さくらちゃんの

小学生時代の先生でさくらちゃんの友達よ」「初めまして、皆さん。私はさくらちゃんのお友達『大道寺知世』と申します」と笑顔で挨拶した。

その挨拶を聞いたドリーム達は啞然としていた。まさか自分達を助けてくれた人間がさくらの世界の人間だとは思いましなかつたのだ。そんなドリーム達をよそに歌帆と知世はスターに近づき、抱きかかえた。スターが薄れ行く意識の中で「観月先生？知世ちゃん？」と2人に聞くと、

2人は笑顔で「ええ、そうよ」「はい、お久しぶりですわ。さくらちゃん」と答えた。それを聞き、安堵したスターは涙を流しながら「また・・・会えて・・・良かった・・・」と呟くと、意識を失い、同時に変身が解けてしまい、さくらの姿に戻ってしまった。

さくらが意識を失った事に慌てふためくのぞみ達であつたが、歌帆がそんなのぞみ達に「大丈夫よ、今は安心して、寝ているだけだから」と

優しく語りかけた。歌帆の言葉を聞いたのぞみ達はそれで一応は落ち着いた様子であつた。その後、歌帆はさくらをおんぶし、

「さくらちゃんを寝かせてあげたいんだけど、いい場所を知っているかしら？」とのぞみ達に聞くと、かれんが「さくらは普段は私の家で生活

しています！だからそこなら！」と答えた。その答えを聞いた歌帆は「有難う」と答えると、じつとのぞみとかれんを覗いていた。

歌帆に顔を見られていたのぞみ・かれんは「あ、あの〜」「私達の顔に何か？」と聞くと、歌帆は「ううん。ただ、貴方達2人がさくらちゃんが

この世界で最も心を開いた相手なんだな、と思ったの」と答えた。その言葉の意味を理解できなかったのぞみ・かれんに知世が教えてあげた。

「つまり、御二人はさくらちゃんにとってこの世界で『大切な存在』と言う事ですわ」それを聞いたのぞみ・かれんは顔を赤くしていた。そしてその後すぐに、全員でかれんの屋敷に戻っていった。

だが、この時まだのぞみ達はさくらの言っていた『試練』がもう間近に迫っているという事にはまだ気づいていなかった。

そしてそれは歌帆や知世とは違って、のぞみ達には姿を見せず、去っていくのぞみ達を冷たい目で見ている2つの影がその試練をのぞみ達に

差し向ける者達であるという事をのぞみ達が知るのは、時間の問題であった。

第32話：さくらと感動の再会（後書き）

次回、遂にのぞみ達に最大の試練が立ちはだかります！そしてクラ
イマックスにプリキュア5に新たな力が！

第33話・さくらとプリキュア5最大の試練そして新たな力の覚醒（前書き）

今回、プリキュア5はパワーアップします。

第33話：さくらとプリキュア5最大の試練そして新たな力の覚醒

第33話：さくらとプリキュア5最大の試練そして新たな力の覚醒
戦いから2時間後、さくらは水無月家の借りている部屋のベッドで寝かされていた。そして歌帆・知世はのぞみ達と共にさくらの眠りを妨げないように別の部屋で話をしていた。そこで歌帆・知世はのぞみ達に事情を説明していた。

「私達はさくらちゃんがなくなった後に御神木を通して、さくらちゃんが何処へ行ったのか探していたの・・・そしてようやくこの世界に

いる事が分かったの・・・」ですがさくらちゃんを狙う不届き者達も多くいたのでその者達に気づかれないようにするために遠回りをして

やってきたので、少し時間がかかってしまいましたの・・・」その説明でのぞみ達は納得をした。しかしその後すぐにかれんは不安そうな顔を

しながら「あの・・・貴方方がこの世界へやって来たのはさくらを元の世界へ連れ帰る為ですか？」と質問した。その質問にのぞみ達も顔色を変え、歌帆達に顔を向けた。そんなのぞみ達に歌帆・知世は笑顔で答えた。「大丈夫よ。さくらちゃんを連れ戻しに来た訳じゃないから」

「あくまでもさくらちゃんの様子を見に来た、それだけですわ」それを聞いてのぞみやかれん達はほっとしていた。だが、次に歌帆達の話し始めた事に困惑していた。まず歌帆が「でもね・・・サクラカードの守護者であるケルベロスとユエが相当貴方達に怒っているの

・
・
力になってあげると言いながら、足を引っ張っているだけじゃないか、って」と言うと、のぞみ達はもちろんだがかれんはその中でも特に

つらい表情になり、顔を伏していた。かれんはこれまでの自分の不甲斐無さから、ケルベロス達の怒りは最もだと思っていた。

そして歌帆の後に知世が「それで皆さんが本当にさくらちゃんに協力するのにふさわしいかどうか、テストさせると言ってますの」と言った。

「……テスト!?」「……」のぞみ達はその言葉の意味が理解できなかった。それを歌帆達が説明しようとしたその時、

突然のぞみ達の足元に魔方阵が現れ、次の瞬間にはのぞみ達の姿は消えていた。魔方阵が誰によるものか理解していた歌帆・知世は急いで

その者達のいるであろう場所に急ごうとした。その時だった。(待つて……)寝ているはずのさくらのテレパシーが2人に伝わったのは。

かれんの屋敷で突然現れた魔方阵はのぞみ達の町の近くにある神社に再び現れた。その魔方阵の光の中から、のぞみ達のはじき出された。

「あいたた……あれ、ここは?」とのぞみは地面にぶつかつた腰をさすりながら周りを見て、他の皆に聞いた。そののぞみの問いにこまちが

「ここは私達の町の近くにある神社みたいね」と答えた。すると「そうだ」との声が響いた。その声に慌てて周りを警戒しながら見渡すのぞみ達。

その声の主はのぞみ達の上空に現れた。現れた2つの者達の内の一人が「お前達がプリキュアか……」と呟いた。その呟きを聞いたココ達は

「お前達はまさか!」「ナイトメアかナッツ!?」「ドリームコレットは渡さないミル!」と叫んだが、もう一人の獣らしき者が

「はっ!わいらはナイトメアとかいう下衆どもとは違っわ!それにそんなもんになんか、興味もあらへん!」とココ達を一蹴した。

そこでかれんはもしやと思い、「もしかして・・・貴方達はサクラカードの守護者であるユエとケルベロスなの？」と2人に質問すると、

2人は少し感心したのか「ほう・・・さすがは『知性』のプリキユアだな」「その3馬鹿トリオよりも遙かにましな頭をしてるな、姉ちゃん！」

とかれんを誉めていた。ココ達は「」「誰が3馬鹿トリオ(ココ)(ナッツ)(ミル)!!」「」と文句を言ったが、ケルベロスに一睨みされると

すぐに静まった。その後、ケルベロスとユエはのぞみ達の所へ降り立った。そしてユエはのぞみとかれんを自分の方へ2人の顔を手で掴んで

近づけると「なるほど・・・確かにお前達2人は我が主がこの世界で最も心を開かせる存在なのかもしれない」と言った。2人は戸惑っていた。

するとユエは2人を放し、「しかし・・・それだけでは我が主の友と・・・仲間と認めるわけにはいかぬな・・・」と言い、飛翔した。ケルベロスも飛翔すると「さあ、変身せい！そしてわいらと戦え！」「とのぞみ達に吠えた。その言葉の意味が理解できなかったのぞみ達は

「どうして？私達には貴方達と戦う理由は・・・」と言い掛けた時、「じゃあ、こうすればいいのかしら？」との女性の声が後ろから聞こえた。

慌ててそちらを振り向くと、蝶のハネをした女性と獣がココ・ナッツ・ミルクを掴んでいた。「これで少しはやる気になったかしら？」と女性は

のぞみ達を嘲り笑うように言った。その挑発と思われる言葉にのぞみ達はまんまと乗せられ、変身して、ケルベロス達に戦いを挑んだ。だが、実力の差は歴然だった。パワー・スピード・防御力・技の威力や切れ、全てにおいてケルベロス・ユエはドリーム達を圧倒して

いた。

ルージュの『ルージュバーニング』もケルベロスの火炎攻撃に軽く押し返され、カバーしようとしたアクアの『アクアトルネード』も焼け石に水で

あり、レモネードの『レモネードシャイニング』もユエの氷の刃の攻撃の前に一瞬でかき消され、レモネードを助けようと、『ミントシールド』を

張ったミントの努力も簡単に氷の刃に貫かれ、無駄に終わった。そしてドリームの『クリスタルシュート』も簡単に弾き返されてしまったのだ。

そして「じゃあ、最後の希望を打ち砕きましょうか」とルビー・ムーンがミルクをドリーム達に投げた。そしてココ・ナッツも放した。ドリームは「こうなったら、あれしかない！皆！行くよ！！」とアクア達に最後の『切り札』を使う事を言うと、「……Yes!!」「……と

アクア達は答えた。そして遂に放たれる最強の必殺技「……プリキュアファイブエクスプロージョン」！！！！「……ドリーム達は

ケルベロスとユエに突っ込んで行った。だが「くだらぬ技だ……」「全くや」と2人は呟きながら、技を一時受け止めると、弾き返してしまつた。

「そ、そんな!？」ドリーム達は最後の切り札まで破られてしまい、愕然としていた。そんなドリーム達にユエは

「これまでだな……これでこの世界に『災い』がおこるな……」と呟くと、ケルベロスも「そうやな」と答えた。それを聞いたアクアは

「災いって、何!?何が起こるの!？」と叫びながら聴くと、2人は答えた。「『忘れる事』だ」「わいらカードの守護者達が主さくらの仲間に

なるのにふさわしくないと判断した時」「それまで主に関わってい

た全ての人間から主の事と最も大切な『想い』を忘れさせる事だ」それを聞いたドリーム・アクアはこれこそがさくらの言っていた最大の試練なのだと理解した。だからこそ2人は互いに頷きあうと「そんな事は・・・」「絶対に・・・」「させない！！」「と叫びながら、ケルベロス達に立ち向かって行つた。そしてルージユ達も「そうだよ！」「そんな事になんか！」「絶対にさせないわ！」と叫びながら、ドリーム・アクアに続いて行つた。

それからわずか5分後、ドリーム達は完全に敗北状態であつた。それでもまだあきらめずに立ち上がろうとするドリーム・アクアをユエは

氷の十字架で捕らえ、助けようとしたルージユ・ミント・レモネーもケルベロスの放つた火炎地獄の中に閉じ込められてしまった。「我々は」「わいらは」「主さくらの為にも何者にも負けるわけにはいかないのだ(や)！！」「ユエ・ケルベロスは言い放つた。それを聞いたドリーム・アクアは心の中で(この2人は)(さくらの事を本当に)と思つていた。その後、「これで最後だ(や)！！」と

叫びながら、ケルベロス・ユエは止めをさそうとした。だがその時だつた。眩い光が現れ、ドリーム達を全員救助したのだ。

光が収まると、その正体はサクラカード達であつた。「カード達が」「あいつらを」と呟くユエ達に「そう、それがカード達のそしてさくらの

意思だよ」と言いながら、エリオルが現れた。その後ろには車椅子に乗つたさくらとそれをひいている知世そして歌帆がいた。

歌帆はさくらに「じゃあ、彼女達にあれを渡すわね」と言つと、さくらも「お願いします」と頷いた。その後、歌帆はドリーム達に歩み寄つた。

そして「プリキュアの皆さん」と声を掛けた。ドリーム達は「」「」「は、はいー！！」「」「」と慌てて答えた。そんなドリーム達に

歌帆は

持っていた鞆から「さくらちゃんから・・・貴方達への贈り物よ」と5つの星・月・太陽のシンボルの入ったプレスレットを取り出した。

「さくらが!？」「どういうことだ!？」と叫ぶケルベロス達に歌帆は全てを語った。

「さくらちゃんはね・・・この世界に来る前の夜に予知夢を見たの。その夢はさくらちゃんが5人の女の子達と一緒に戦い、学校に通い、一緒に

遊んだりするというさくらちゃんが望んでいた生活そのものだった。・・そしてその少女達は明るくて可愛らしい元気な赤髪の女の子、スポーツ万能な熱い茶髪な女の子そしてアイドルをやっている黄色い髪の毛の子、いつも笑顔を決やさないお姉さんみたいな子、そして自分を妹のようにみているお姉さんみたいな青い髪の毛の女の子だと言う事もね」それを聞いていたドリーム達は顔を赤くしていた。

「でも、守護者達が彼女達を自分の仲間として認めてくれる事がどれほど難しい事が、さくらちゃんは分かっていた。だからこそ、これらを

用意したのよ。これにはさくらちゃんの魔力が秘められているわ。そしてこれを装着する事で貴方達5人は魔力を持ち、魔法を使えるようになるわ」

その歌帆の説明にドリーム達は驚いていた。「ただし、一度魔力を持てば、今までのようには行かないわ。貴方達も争いに巻き込まれるかも

しれない。それに耐える覚悟はある?」と真剣に聞かれると、さくらを一度見て、その後、ドリーム達は全員で「「「「はい!」「」」」と答えた。

そのドリーム達の言葉と顔を見て、歌帆は理解した。そしてプレスレットを着けさせると、共に詠唱させた。

「クロウの意思を継ぎしさくらの力を持つ物よ！我等にサクラカードの主であるさくらと共に戦う力を与えよ！『レリーズ』！！！」次の瞬間、ドリーム達は眩い光の中で新たな力の鼓動を感じながら、変身して行った。そして光が収まるとそこには『新生プリキュア5』がいた。

各自マントをしており、ヘッドギアもしていた、新たな自分達の姿に戸惑うドリーム達に歌帆は「先に言っとくけれど、貴方達は一度彼らに

負けているわ。これはさくらちゃんが与えてくれたやり直し。でもやり直しは一度だけ。それを忘れないで」と注意した。

それを聞いたドリーム達は気を引き締め、ルピー・ムーンとスピネル・サンが加わったケルベロス達に挑んでいった。

今度はそう簡単にはやられなかった。その戦いは「そこまで！」とエリオルが宣言した事で終わった。ケルベロス達もドリーム達を認め始めていた事を

エリオルは知っていたのだ。こうしてドリーム達は最大の試練を乗り越える事ができた。

その翌日、歌帆達は帰っていった。そしてその翌日にはさくらの風邪は完全に治った。その日の午後、さくらはじいやからもらった紅茶を遊びに

来ていたのぞみ達がいる部屋に運ぼうとした時、中から笑い声が聞こえた。そつと入ると、のぞみ達が知世からもらったビデオで昔のさくらを見て

いたのだ。「キャハハハ！さくらちゃん、面白い！」「いや、ほんと！」「おかしいです！」「傑作ミル！」「そうだココ！」「おかしいなッツ！」

一方あまり笑わなかったかれん・こまちはさくらの怒りを感じ取ったので、のぞみ達に「もうやめた方がいいんじゃない？」「そうよ、皆」

と忠告したが、効果無しだった。そして遂に「へえー。そんなに昔の私がおかしいのですか、み・な・さ・ん？」とさくらは切り出した。

その声にびくつとしながら、後ろを振り向いたのぞみ達はあまりのさくらの怒り顔の前に青ざめていた、しかし気づいたのは遅かった。それから1時間、悲鳴が部屋の中に響きわたり、数日間の間、かれん・こまちを除いた誰もが、さくらに会うと必ず敬礼をしていた。

第33話・さくらとプリキュア5最大の試練そして新たな力の覚醒（後書き）

後日、新生プリキュア5とキュアスターのデータを紹介します。

資料設定2（前書き）

今回は新生プリキュア5及びキュアスターのデータを出します。

資料設定2

カードキャプタープリキュア 《設定資料2》

《新プリキュア》

『キュアスター』

：さくらが自分の『魔力』と53枚の『サクラカード』を融合させた事により、生まれた『最強無敵のプリキュア』。

その実力は旧プリキュア5全員の合計の数千倍以上（新では合計の数百倍）であり、この状態でも魔法を自由自在に

使えることができる。

唯一の弱点は他のプリキュア達と違い、自分の力のみで変身している為、エネルギー消耗が激しく、当初は変身を解くと、

すぐに眠ってしまうほどであった。（しかし、戦う内にさくらの魔力が更に高まり、この弱点は実質上皆無になった。）

技も多彩であるが、その中で最も使用する技は『シャイニン グトルネードキック』・『フレイムスタースラッシュ』である。

通常は実力の1〜10%で戦い、エネルギーの消耗を抑えている。（元々の実力が高い為、苦戦する事は少ない。）

基本能力値 AT（攻撃力）190000 DF（防御力）

190000 MB（機動力）190000

ジャンプ力3500m 最高走行速度マツハ

9 最高飛行速度マツハ57

個人武器 スターブレード・スターボウ・スターシューター

更に『魔力完全解放』を行うと、『真の姿』である『キュアギャラクシー』に変身できる。ただし、これを行うには、

ドリーム達5人の力も借りなければいけない。（第43話・

最終回到登場）

『キュアドリーム』（新）

：のぞみがさくらの魔力の一部を授かり、自らの魔力を開花させ、新たなる力を得て変身したキュアドリーム。

以前のドリームよりも、パワー・スピードが数倍に跳ね上がった。基本的に、『星』・『太陽』・『月』の魔力を使用する。

さくらには劣るものの、魔力のバランスの良さはさくら並みである。又、魔法も使用可能となり、主に『光』・『風』の魔法を使う。

必殺技は『ドリームコスモノヴァ』であり、『プリキュアクリスタルシユート』の10倍の威力に匹敵する。

基本能力値 AT(攻撃力) 4900 DF(防御力) 3500 MB(機動力) 4100

ジャンプ力100m 最高走行速度100
m1.3秒 最高飛行速度マツハ3.5

個人武器 ドリームスナイパー

『キュアルージュ』(新)

：りんがさくらの魔力の一部を授かり、自らの魔力を開花させ、新たな力を得て変身したキュアルージュ。

以前のルージュの数倍のパワー・スピードを得た。基本的に『星』・『太陽』・『月』の魔力を使用できるが、

通常は『太陽』の魔力を主体としている。魔法も使用可能で、『炎』系を得意とし、必殺技は『ルージュフレイムバスター』で、

『ルージュバーニング』の10倍の威力に匹敵する。他にも格闘技に抜きん出ている。

基本能力値 AT(攻撃力) 5500 DF(防御力) 3900 MB(機動力) 5100

ジャンプ力120m 最高走行速度100
m0.9秒 最高飛行速度マツハ5.9

個人武器 ファイアーセイバー

『キュアレモネード』（新）

・うららがさくらの魔力の一部を授かり、自らの魔力を開花させ、新たな力を得て変身したキュアレモネード。

以前のレモネードの数倍のパワー・スピードを得た。基本点に『星』・『太陽』・『月』の魔力を使用できるが、

通常は『太陽』の魔力を主体としている。魔法の使用も可能で、『光』系を得意とし、必殺技は

『レモネードフォトンシャイニング』で、『レモネードシャイニング』の10倍の威力に匹敵する。5人の中では一番戦闘能力が低い。

基本能力値 AT（攻撃力） 3500 DF（防御力）

3300 MB（機動力） 3700

ジャンプ力70m 最高走行速度100m

1.7秒 最高飛行速度マツハ2.8

個人武器 シャイニングコンパクト

『キュアミント』（新）

・こまちがさくらの魔力の一部を授かり、自らの魔力を開花させ、新たな力を得て変身したキュアミント。

以前のミントの数倍のパワー・スピード・防御能力を得た。基本的に『星』・『太陽』・『月』の魔力を使用できるが、

通常は『月』の魔力を主体としている。魔法の使用も可能で、『地』系を得意とし、必殺技は攻撃・防御にも使える

『ミントアースシールド』で『ミントシールド』の10倍の防御力を誇る。5人の中で最高の防御力を誇る。

基本能力値 AT（攻撃力） 3900 DF（防御力）

5100 MB（機動力） 3900

ジャンプ力80m 最高走行速度100m

1.5秒 最高飛行速度マツハ3.2

個人武器 ガイアブレスレット

『キュアアクア』（新）

：かれんがさくらの魔力の一部を授かり、自らの魔力を開花させ、新たな力を得て、変身したキュアアクア。

以前のアクアよりも、パワー・スピードが数倍に跳ね上がった。基本的には『星』・『太陽』・『月』の魔力を使用できるが、

通常は『月』の魔力を主体としている。意外な事にさくら・のぞみの次に魔力のバランスが良い。魔法も使用可能で、主に『水』・『氷』系を得意とし、主な必殺技は『アクアエクスキューション』で、『アクアトルネード』の10倍にも匹敵する威力を持つ。

ルージュとほぼ互角の戦闘能力を持つ。

基本能力値 AT（攻撃力） 5400 DF（防御力）

4100 SP5000

スピード

ジャンプ力130m 最高走行速度100

m1.1秒 最高飛行速度マツハ7

個人武器 アクアセイバー

資料設定2（後書き）

次回はさくらが理事長の正体をのぞみ達と共に明かします。

追記（8月31日）：魔法先生ネギまのネギ・スプリングフィールドの実力データを見て、

修正いたしました。（プリキュア達はネギの『闇の魔法』使用時よりも強
いという考えからそう
させていただきます。）ご了承ください。

第34話・さくらと理事長の正体（前書き）

今回、のぞみ達の変身する時の新しい掛け声があります。

第34話：さくらと理事長の正体

第34話：さくらと理事長の正体

ある日の登校中、さくらはのぞみ達と共に増子の書いた新しいサンクルミエール通信の記事を見ていた。そしてそのトップニュースにあげられていたのは『学園の七不思議』とまで言われている『理事長の正体』であった。その事について増子が更なる説明をしていた。「うちの理事長は正体不明！その姿を見た生徒は1人もない！」その増子の説明の通り、さくらもかれんも正式には一度も会った事になかった。

最もさくらはその正体が誰なのかうすうす感づいてはいた。（第7話で）しかしそうでないかれんは増子に取材の協力を頼まれると、それを

受け入れた。その理由を「私は生徒の代表として、理事長とお会いして、一度きちんとお話がしたいと言ったの・・・」

学園の事で色々相談したいし、皆の考えを直接伝えたいと思って」と説明した。さくらはそれを聞いて（かれんさんらしいな）と思っていた。

そこへおタカさんが「気持ち分かるけどねー！きつと理事長にも何か事情があるんじゃないの？」と言ってきたが、かれんは

「でもやっぱり、顔をちゃんと見てお話がしたいんです」と率直に言った。りんも「確かに誰も会った事が無いというのも、変ですよね」

と同意見であった。こまちも「普通は理事長の写真とか肖像画とか、どこかに飾ってあるものだけど、何処にもないし」と言い、うららも「私が芸能活動について、相談に行った時も相手は教頭先生でした！」と言った。それを聞いたのぞみは「へえ、理事長って、どんな人

なんだろう？知りたい！知りたい！」と騒ぎ始めた。それを観

ていたおタカさんは「困ったね」と漏らしていた。

さくらはそのおタカさんの様子から、理事長の正体が誰なのか、確信したが、それでもまだ言う時ではないと判断し、何も言わなかった。

昼食時、紛失していた運動部の靴やタオルが旧校舎近くの裏庭で見つかったと聞いたさくら達は放課後、小々田と共にその裏庭を捜索していた。

そこでやはり紛失していたタオルなどを見つけると、突然不審な物音が響いた。誰もが機敏に反応したが、さくらだけは冷静でいた。そんなさくらの様子に「さくら？」とかれんが聴くと、さくらは笑顔で「大丈夫ですよ、かれんさん。教頭先生が子犬を抱いてるだけですから」

と説明した。その後すぐにさくらの言う通り、教頭先生が子犬を抱きながら現れた。その子犬の可愛さにのぞみ・うららは撫で回していた。

翌日にはその子犬が入ってきたと思われる旧校舎のぼろぼろになっていたレンガの修理を業者が来て、既に行われていた。

かれんは工事の様子を見に来た教頭先生に「理事長の指示で、さっそく工事に取り掛かることになったのですよ」と説明を受けた。

その後教頭先生は更に「理事長は細かい所にも本当によくお気づきになる方なんですよ」と説明した。その説明にさくらが

「本当にそうですね。理事長はいつも学園を良く見ておられますしね」と付け加えた。そのさくらの言葉に教頭先生は思わずさくらの顔を見たが、

さくらが「大丈夫です。理事長の正体は分かっていますが、誰にも喋っていませんのでご安心ください」と言うと、ほっとした様子であった。

その後で教頭先生はこっそりさくらに（いつ、理事長の正体を？）と聴くと、さくらに（以前の予算騒動の後にです）と説明され、納

得していた。

しかしかれんはそんなさくらと教頭先生のひそひそ話をしている様子を見て、何としても理事長にお会いしたいという気持ちがふくらんでいた。

そして放課後、ナッツハウスでさくらやのぞみ達が団欒している中で、かれんだけは神妙な顔をしていた。そんなかれんの様子にココが「どうしたんだ、かれん？元氣無いな」と聴くと、かれんは「私・・・やっぱり、理事長に会わなきゃ！」と答えた。

そのかれんの言葉にのぞみは一瞬訳が分からず「え？どうして？」と聴くと、かれんは「ここまで、私達生徒に気を配っていてくれたなんて・・・」

どうしても、直接会って、お礼を言いたいのだ！」と答えた。その後「それに」と呟いた。こまちが「それに？」と聴くと、かれんは「私・・・理事長が姿を見せない事に少し不満を感じていたの、そうしたら・・・取材にもあんな風に答えてしまったし、きちんと謝りたいわ」

と理事長に対して申し訳ない気持ちで一杯と言う感じに答えた。その後、のぞみがココに「ココは理事長に会った事はあるの？」と質問すると

ココは苦笑いしながら「僕も教頭先生にしか、会った事がないんだ。それに連絡はいつも教頭先生から受けていたしね」と答えた。

そこココの答えにのぞみは「ええ！？どうして！？」と疑問を口にし、りんも「どうして、姿を見せないんだろう？」と疑問を言った。そのりんの疑問にミルクも「確かにおかしいミル！パルミエ王国ではココ様もナッツ様もちゃんと皆の前に出てきて話をしてくれたミル！」と

言いながら、同意していた。そんな中でナッツが「かれん！気になるんだったら、直接会いに行けばいい。ここで考えていても、物事は進まないぞ」

とアドバイスした。そのアドバイスにかれんも「そうよね」と答え

た。その後、のぞみが強引に「皆で理事長に会いに行く事に決定！
！！」と

決定付けた。しかし、そこへさくらが「駄目だよ！！」とストップを掛けた。そのさくらの言葉にのぞみが「何で〜!?」と文句を言う

と、さくらは冷静に言葉を返した。「のぞみちゃんもかれんさんも皆も理事長に会っちゃ駄目です。理事長が頑なに正体を隠し、教頭先生以外には

お会いしないのには、ちゃんとした『理由』があります。その理由を私は知っている以上、会わせる訳には行きません」

そのさくらの毅然とした態度に怯みながらも「け、けど、ココ様やナッツ様だって・・・」とミルクが反論しかけたが、それに対しさくらは

「駄目です」ときっぱり言われ、沈んだ。その後ナッツが「だが、かれんがこんなに！」と反論したが、「それでも駄目です」と跳ねつけられた。

だが、かれんが「さくら、私はどうしても理事長にお会いして、お礼を言いたいし、お詫びをしたいの！でないと、自分が許せないの！！」

とさくらに必死に訴えると、さくらは一瞬考え込んだ後、溜息をつきながら「分かりました・・・明日、何とか御本人と教頭先生に頼んでみます。

ただし1つだけ約束して欲しい事があります」と言った。その後でかれん達はさくらの約束の内容を聞いた後、納得できなかったが、一応了承した。

まさか、その約束を後で本当に果たす事になるとは誰もこの時は思ってもいなかったのだ。

その夜、帰宅したかれんはさくらに「さくら、本当に貴方は理事長が誰なのかを知っているの？」と聴くと、さくらは

「はい、知っていますよ。理事長は本当にいつも私達生徒を近くで

見守っていてくれるんですよ」と答えた。そのさくらの言葉に
かれんは

（一体・・・誰なのかしら？）と心の中で思っていたが、明日にな
れば分かると信じて、眠る事にした。

翌日、さくら達は理事長に会うべく、まず教頭室に向かった。そこ
でさくら達（のぞみ達は魔力を得た事により）は邪悪な気配を感じ
取った。

さくらが教頭室にいる2人は外傷がなく、あくまでも意識を失って
いるだけだと、のぞみ達に説明した後、全員で理事長室に向かった。
そして勢い良く入ってみると、そこには理事長の椅子に座っていた
ハデーニヤがいた。ハデーニヤはその後すぐに変身すると、

「今日こそ、お前達を葬ってやるよ！！」と豪語しながら、ムカデ
型のコワイナーを召喚した。しかしハデーニヤはすぐに思い知る事
になった。

さくらだけでなく、のぞみ達も今までとは違うのだと言う事を。さ
くら達は全員顔を見合わせて頷くと、一斉に変身した。

「プリキュア！スターエボリューション！！」「プリキュ
ア！シャイニングメタモルフォーゼ！！」「」

のぞみ達は新たな掛け声と共に変身した。『新生プリキュア5』の
姿を見たハデーニヤは「な、なんだい！その姿は！？」と驚いてい
た。

その後は、あつという間に戦いにけりがついた。スターは新たなる
パンチ技『フレームスターマグナム』でハデーニヤを吹き飛ばし、
ドリーム達も

レベルアップした実力と連携でコワイナーを追い詰めると、ドリー
ムの新必殺技『ドリームコスモノヴァ』とアクアの新必殺技

『アクアエクスキューション』により倒された。その後で、さくら
達は意識を失っている2人を介抱しに教頭室に向かった。

そこで遂に理事長の正体が明かされた。どう見てもおタカさんだっ

たのだが、教頭先生が思わず「理事長！」と叫んでしまい、確定したのだ。

その後で観念した理事長はさくら達を理事長室に案内し、真相を話す事を決めた。最ものもぞみ・うらはは理事長の正体がお夕力さんだった事に

相当驚いていたのか「ええ〜!? うそ〜!?」と叫んでいた。そんな2人にりんは「勘弁してよ」と呆れていた。

その後、かれんがさくらに「さくらが言っていた『理事長はいつも私達生徒を見守ってくれている』というのはこういう意味だったのね?」と聴くと、

さくらは「はい、そうです」と答えた。その後、こまちが理事長に「でも、どうして、理事長が売店で?」と質問した。

その質問に理事長が答える前にさくらが「それは『私達生徒の気持ちや悩み・意見を少しでも間近で聞けるように』だからではないのでしょうか?」

と理事長に聞いた。そのさくらの言葉をのぞみ達は理解できないでいたが、理事長は「やはり、さくらさんにはばれていましたか」と苦笑いしながら

答えた。その後、理事長は語り始めた。理事長は理事長になる前からこのサンクルミエールで先生として生徒達と毎日楽しい日々を送っていたが、

理事長になつた途端に生徒達との距離が出来てしまい、誰も相談にきたり、話しかけて来る事はなくなつたのだ。それを打開する為に理事長である

事を隠し、売店の店員をしていたのだ。それを聞いたかれんは「理事長! 理事長の深い考えも知らずに、不満めいた事を言ったり、無理に会いに

来たりして、すみませんでした。でも! お会いできて、本当に良かったです!」と最後は笑顔で答えた。そんなかれんに理事長は

「あたしも会えてよかったです。あなたのようなしつかりした生徒

会長がいてくれて、本当に嬉しいわ。それにとってもいい仲間に恵まれて。

本当に素晴らしい！」とかれんだけでなく、さくら達を褒め称えていた。その後、「でも、これからも今まで通りでいたいから、この事は他の生徒には

内緒にね」と理事長が言うと、（さくら以外）のぞみ達は苦笑いをしていた。「どうしたの？」と理事長が聴くと、実は昨日さくらからもそういう

約束をさせられたのだとのぞみ達は話した。それを聞いた理事長はさくらに「本当に貴方は不思議な生徒ですね。でも、色々と有難う」と礼を言った。

それに対し、さくらは「いいえ、こちらこそ、いろいろと有難うございます」と礼を言った。もちろん約束の件はのぞみ達の全員が守った。

それから数日後、理事長ことおタカさんはいつもと変わらず明るい様子で生徒達と話をしたり、していた。そんな様子をさくらは微笑ましく見ていた。

第34話・さくらと理事長の正体（後書き）

次回はさくらがこまち・つららの関係を取り持ちます。

第3話…と…(前巻の)

今回の…は…の間をよく取り持たます。

第35話：さくらとこまちとうらの伝わる気持ち

第35話：さくらとこまちとうらの伝わる気持ち

理事長騒動から数日経ったある日の放課後、こまちはサンクルミエール学園の図書館において、新しい小説の執筆をしていた。

しかし「駄目だわ・・・セリフが出て来ない・・・」「こまちはそう呟きながら、セリフが出てこない事に悩んでいた。結局、今日の所はこままでと決めて、下校する事にした。その帰り道にこまちはうららを見つめ、声を掛けようとしたが、その前に（こまちゃん、今は駄目です）

とさくらにテレパシーで止められた。その後でよく見ると、うららは台本に集中していた事が分かり、こまちも納得した。

そんなこまちに（納得が行った？こまち？）と今度はかれんがテレパシーを送った。さすがのこまちも今度は驚かされたのか、2人が何処に

いるのか、気配を頼りに探そうとした。最も、「こまちゃん」、「後ろよ」とさくら達に声を掛けられ、慌てて後ろを振り向くと、そこに

本当にさくらとかれんが立っていた。こまちはさくら達に「もう！驚かさないでよ！」と顔を少し膨らませながら文句を言うと、2人は「えへへ、ごめんなさい」「ごめんね、こまち」と詫びた。その後、こまちはさくらから今日はかれんと共に一緒に帰る事になっていて、せっかくだから、テレパシーや気配の消し方の練習もしようと言う事になったそうだ。その途中でうらの事も知り、こまちも見つけたのだ。

それを聞いたこまちは「私も練習に加えてくれる？」と聴くと、さくらとかれんは快く了承した。

その後別れるまで、さくら・かれん・こまちは互いにテレパシーで、気配の消し方や魔力の使い方について、話し合っていた。

翌日の放課後のナッツハウスにて、うららはさくら達に「あ、あの。実は今度、ドラマのオーディションを受ける事になったんです」と話した。それを聞いたさくら達は凄いと賞賛し、その後のうららの演技を見て欲しいと言う気持ちを察したさくら・りんが承諾すると、

のぞみ達も承諾した。ドラマのタイトルは『恋のスカツシユ』、内容はラブストーリー。そして最後の言葉は自分で考えなければならぬ。

そのシーンとは少女がずっと好きだった男の子と離れ離れになってしまい、その別れ際に自分の気持ちを伝えると言うものであった。それをうららから聞いた途端、さくらとこまちはハツとなる。こまちは自分が書いている小説の部分で悩んでいた所と全く同じだった事に

そしてさくらは小学生時のあの時の事を思い出していた。うららがそんな2人に「どうしたんですか？」と聴くが、2人とも

「いい、いいえ！何でも」と声を揃えて言った。そんな2人（特にさくら）にかれんは心配そうな視線を向けていた。

その頃、ナイトメア本部ではカワリーノが目的がうまく行かない事に少し苛立っていた。

「どうもあの少女『カードキャプターさくら』が現れて以来、予定がうまく進んでいませんねー。ブンビーさんならいざ知らず、

ハデーニヤさんまでもがドリームコレットを手に入れられないとは

・・・どう思います？ブラッディーさん？」

カワリーノは当て付けのように座っていたブラッディーに言った。しかしブラッディーは冷静に淡々と答えた。

「お前の言う通り、あの少女は我々にとって、非常に厄介な存在だ。・・・だが、彼女を倒す方法が全く無い訳ではない・・・」

その言葉にカワリーノは「ほう・・・それはどういう意味ですか？」と聴くと、ブラッディーは立ちながら、淡々と答えた。

「今回は私が行く・・・そして彼女と新たなる力を手に入れたプリキュア5の力を徹底的に調べ、その間にある欠陥を見つける・・・」そしてブラッディーはカワリーノに近づくと、「解析の結果しだいだが、場合によっては・・・『あれ』を使用する事になるやもしれぬ」

と呟いた。それを聞いたカワリーノは一瞬目を見開いた。「無論、あくまでもだがな」とブラッディーは付け加えながら、去って行った。

一方ナッツハウスでは、うららとさくらが芝居の練習をしていた。初めはナッツが男の子役だったのだが、あまりにも演技力が無さ過ぎた為に

降板、代わってココにとりかけたが、そこでかれんがさくらを指名した。驚くのぞみ達にかれんは以前、知世がかれんの屋敷に一晚だけ

泊まった時にさくらの小学生のお芝居を見させてもらい、その中で小学4年生の時にさくらが王子役をやっているのを見て、とても上手だと

思ったと説明した。そのテープは知世によってもう1本保存されており、かれんが特別にもらったと言った。

それを聞いたのぞみ達4人が「ええ、いいないいな！私も観たい！」、「私もです！」、「面白そうかも！」、「ぜひ見たいわ！」と目を輝かせ

ながら、かれんに詰め寄っていた。そんなかれんをさくらは我関せずのように知らん振りをしており、かれんは困っていた。

結局その後、かれんはさくらに必死に謝る事で何とか許してもらい、さくらも渋々ながらも男の子役をする事を受け入れた。

ちなみにテープを見るのは、例の芝居だけで他はうららのオーディションが終わってからと言う事に決まった。

そして実際にさくらの演技は素晴らしく、うららが「凄いです！さ

くらさん！！思い切って芸能界にデビューしてみませんか！？」と本気でさくらを誘ったほどであった。無論さくらは「あはは・・・」と苦笑いしながら、丁重に断った。

そして問題であった最後の言葉をうらはは「私・・・サヨナラは言えません」と表現した。それに対し、のぞみ・りん・かれんは賞賛したが、

さくら・こまちは少し考え込んでいた。そんな2人にうらがが声を掛けると、こまちは「ええ、良かったわ。りんさんの言う通り、とても

素直な言葉で・・・」とやや曖昧に答えた。そのこまちの答えにうらはは期待が外れたのか「そうですね・・・」と少し暗めに言った。そんなうららの言葉と態度にこまちも俯いていた。そんな重い空気の中、さくらがその空気を断ち切るかのようにうららに話しかけた。

「ねえ、うららちゃん。私はあの言葉だと『悲しい終わり方』になつてしまうと思うの・・・」そのさくらの言葉にうらがが

「え？どうしてですか？」とさくらに聞いた。「ちよっと、さくら！」「何がいけないの！？」とりん・のぞみがさくらに文句を言い掛けるが、

うららが「構いません。どこが良くないのか教えて欲しいんです」と言つたのと、かれんが「うららもこう言ってるし、さくらにはさくらの

考えがあるのだから、聞いてあげるべきだと思つた」と言われ、押し黙った。こまちもさくらの考えを聞くとうと真剣だった。

そしてさくらは語った。「うららちゃんの『サヨナラは言えません』は男の子と別れたくないという気持ちが入っているけれど、そのままだと

その時は良くても、男の子と女の子のそれから先はどうする事もできないままになつてしまふと思つんだ。だから私ならこう言つと思つ。

『今は離れ離れになつてしまふけれど・・・また会えますよね・・・

私はそう信じてます・・・』って」

その言葉を聞いたのぞみ達は凄く感動していた。特にうららとこまちは「本当に凄いです！さくらさん！」「素晴らしいわ！」「と賞賛していた。

かれんも「本当ね。特にさくらは実際にそういった経験を踏まえているから、その言葉に強い説得力があるわ」とさくらの過去に少し触れながら、褒めた。そのかれんの言葉にさくらは「かれんさん！ま、まさか、知世ちゃんから全てを！？」と顔を赤くしながら聴くと、

「ええ、ばつちり聞いちゃったわ」といたずら顔をしながら、かれんは答えた。その後でまたもごたごたが起きたのは言うまでもない。

それから数日後、のぞみ・りん・こまち・かれんは景気づけにと大量の昼食をうらら・さくらに用意した。

なぜさくらにも用意したのかというと、あの後、さくらにさくらの想い人である小狼の事についてあれこれ聞いたり、勝手に妄想したりして、

完全にさくらを怒らせてしまい、さくらはうらら・こまち以外とはまともに口を聞こうともしない程であったからだ。

さすがにこれではのぞみ達が可愛そうだと思つたうららが仲介を果たし、とりあえず今日のお昼をおごると言う事で許す事にした。

しかしその昼食時にうららとこまちの間でわずかながら気まずい事態が生じてしまった。うららがこの前のこまちの答えに納得がいかず、

こまちにもう一度確認しようとしたが、こまちもまともに返事を返せない状況であった。そうしてうららは失礼な事をしたと思い、その場を

去ってしまったのだ。その状況をみたさくらはのぞみ達に（うららちゃんとこまちさんの事は私に任せてください。）とテレパシーで伝え、

のぞみ達もさくらに任せる事にした。その後、さくらはつららとこまちに2人が一緒じゃない場所では話があるから、ある場に来て欲しいと

伝え、うらら・こまちもそれを了承した。そして放課後、その場であるサンクルミエール大講堂にうららとこまちが別々にやってきた。互いがここにいる事に驚く2人の前にさくらが舞台の上にスポットライトを当てながら、現れた。どういう事だと、聴く2人にさくらは「2人が想っている事を素直に言える場を用意し、それを行えるように2人を呼んだんです。ここで心置きなくお話ください。」

貴方達が心の中で想っている事を・・・本当に伝えたい事を・・・」
そう言いながら、さくらはその場を去った。

途中、のぞみの姿を見かけたが、見つからないようにうまく隠れた。のぞみならあの2人の邪魔はしないでだろうとさくらは理解していたのだ。

だが、その後にかれんとりんと合流した後、さくらはブラッディーの気配を感知した。

そしてその事をかれん・りんに伝えるとすぐに3人で変身しながら、レポートでその場へと急いだ。

ブラッディーはまたしてもさくらに気づかれぬように最小限に自分の力を制御し、力を全開させた後も、さくらが来る前にのぞみ達を倒す

事ができると踏んでいた。だが、互いの気持ちを理解しあい、心と心がつながったこまちとうららそしてのぞみはそう簡単に倒せる相手では

なかった。そうこうしている内にさくら達も駆けつけ、全員集合した。そこでブラッディーは最後のあがきとばかりに6人をばらばらにして閉じ込めようとしたが、スターの放った『シャイニングノヴァ』により、その企みは阻止され、ミント・レモネードの放った新たな必殺技『ミントアースシールド』・『レモネードフォトンシャイニング』により、コワイナーは消滅させられてしまった。

それでもスターとプリキュア5の間のわずかながらの欠陥を見つけたブラッディーは僅かに微笑みながら去って行った。戦いが終わった後、レモネード・ミントはドリーム達と談笑しているスターを見ながら、ある事に気づき、答えを出した。

その後、うららは無事オーディションに受かる事ができ、さくら達もその事を祝福した。結局最後の言葉はうららとこまちが考えた結果、

さくらの言葉を参考にし、『サヨナラは言いません・・・だってまた会えると私は信じてますから！』と言うものだった。

未来を信じ、自分の気持ちを素直に伝える事、これが2人がさくらから得た事であった。

余談として、うららがこまちの小説にモデルがいるのかと聞いて、こまちは顔を真っ赤にしながら「ち、違うわよ！絶対！！」と強く否定

したが、まだうららにはその事が分かっていない様子なのか「違うって・・・何がですか？」と聴かれ、「な、何でもないので」と言いながら

逃げていき、その後をうららが追いかけていた。またさくらの芝居のビデオを見た時に起こった出来事はそれはまた凄まじいものだった。

第35話・おくらとじまむとじむらの伝わる気持ち（後書き）

次回はおくらとじむらの間で悪戦苦闘するおくらが見られるかもしれません。

第35・5話・さくらとりんのフットサル大会(前書き)

今回はプリキュアとしての戦闘は行われません。

第35・5話：さくらとりんのフットサル大会

第35・5話：さくらとりんのフットサル大会編

理事長絡みの事件から数日経ったある日の事、さくらとりんは近々開かれるフットサルの大会に向けて猛練習をしていた。

無論、前回の惨敗の雪辱を晴らそうとキャプテンである今野香織も他のメンバーもさくらやりんに負けじと練習に励んでいた。

そして日がかなり暮れたため、「よーし！今日はここまで！全員集合！！」と香織が練習終了を告げると、全員集合した。

その後香織は「いよいよ来週、大会が始まります！今回は前回の雪辱を晴らす為にも、精一杯頑張ろう！！」と叫ぶと、

さくら達も「「「「はい！！」「「「と答えた。そして解散となり、全員それぞれの帰り道を行った。

ただし、さくらとりんは帰宅する前にのぞみやかれん達が待っているナッツハウスへと向かった。そして2人がナッツハウスに

「「お待たせ（しました）ー！！」「と言いながら入ると、「「「「お疲れ様ー！！」「とのぞみ達が出迎えてくれた。

それからしばらくの間、さくら達は今度の大会に向けて、談笑していた。

「調子はどう？さくらちゃん、りんちゃん」のぞみが聴くと、2人は一端顔を見合わせ、互いににこつとなる

「「問題なし！！絶好調！！」「と声を揃えて答えた。そんな2人にうららは「御二人とも息が合ってますね」と感心し、

こまり・かれんも「本当ね」「これなら心配いらないわね」と安堵していた。ココ達も「楽しみにしているココ」

「頑張るナッツ」「ミルクも応援に行くミルク！」と声援を送っていた。そうしている内に帰った方がいい時間となった為、全員帰宅した。

それからあつという間に大会前日となった。その日、フットサル部は試合前日と言う事もあり、最低限度の練習とチェックのみ行い解散した。さくらとりんは帰宅し、夕食をとると、明日が早い事もあり、早めに眠る事にした。

寝る前にりんは母親の和代と双子の兄妹であるゆうとあいから「りん、明日は思いっきり頑張りなさいよ!」「お姉ちゃん、頑張りな!」

「明日、絶対応援にいくからね!」と激励されていた。もちろんりんは「うん!明日は頑張るよ!」と笑顔で答えた。

一方さくらもじいやから「さくら様・・・明日は頑張ってくださいませ・・・」と激励を受け、かれんにも「さくら、明日は頑張りな!」と激励を受けた。

貴方とりん達が力を合わせれば、絶対に大丈夫よ!」と励ましの言葉をもらった。さくらはそんな2人に

「はい!ありがとうございます!私、絶対明日頑張ります!」と笑顔で答えた。そうして大会の日がやってきた。

そして大会当日、開会式後すぐの第1試合にさくら達の出番が回ってきた。

「よし!皆、行くよ!」「」「」「はい!」「」「」香織の掛け声にさくら達は元気よく答え、フィールドへ向かって行った。

そして一回戦は前・後半終始に渡って、さくら達が圧倒的にリードし、試合も10・0で圧勝であった。

ちなみにさくらは4ゴール・5アシスト、りんも4ゴール・2アシスト、香織は2ゴール、3アシストであった。

この試合の途中、さくらとりんはのぞみの『さくらちゃん、りんちゃんフアイト!』が大きく書かれた旗が派手にふられているのを見て、あやうくこけそうになった。ちなみにそんな2人の心情も知らず、旗をふっていたのぞみとうららの側でかれんとかまちも

恥ずかしかつたのか、少し顔を赤面しながら、顔をうつむけていた。

その後、2回戦、3回戦も7-0、8-0で突破し、ベスト16へとサンクルミエール学園は名乗りを上げていた。

この事を予想もしていなかった誰もが注目し始めていた。特にさくらに対しては「あの娘、とんでもない選手だわ!!!」、

「ああ！ 今大会に出てる選手の中でも実力は間違いなくトップクラスだ!!!」、「あの足の速さは何!? どう考えても中学生レベルじゃないわ!!!」、「間違いなく100m11秒・いや10秒台を出している!!!」、「それにあの見事なドリブル・ボールさばき・パス・シュート!!!男子も顔負けなんじゃない!!!」と誰もが高評価をしていた。そしてりんに対しても

「あの娘も中々だね!」、「ああ！ あの木之本さくらって娘程じゃないけど、トップクラスの選手だ!!!」、「しかも互いに息の合った

プレーが出来ている!!!」とさくらほどではないにせよ、評価は高かった。そしてお昼休み後、トーナメントが再開された。

4回戦も6-0で難なく突破し、準々決勝にてもさくらとりんが激しい反則すれすれのマークを受けながらも5-0で圧勝した。

そして準決勝も4-1と初失点しながらも、堂々の決勝進出を果たした。この事にのぞみやかれん達も大喜びであった。

「やった〜! ついに決勝進出だよ!!!」、「本当にすごいです!!!」
「本当にそうね」のぞみ・うらら・こまちは大変称賛していた。

しかしそんな中でかれんだけは難しい顔をしていた。その事に気づいたココ・ナッツが「どうかしたのか、かれん?」

「何か気になる事でもあるのか?」と聴いた。その2人の質問により、のぞみ達もかれんの様子がおかしい事に気づいた。

2人の質問にかれんは「ええ。気のせいだといけれど・・・さくら以外の他のメンバーがかなり疲れ始めているような気がするの・・・

りんも含めて・・・」と答えた。そのかれんの言葉を聞き、のぞみ達はサンクルミエールのメンバーを見た。

そして確かにかれんの言っていたようにさくら以外の誰もが疲れ始めているように見えた。特にフル出場しているりん・香織は尚更だった。

「確かにかれんの言う通りね・・・」こまちは神妙な顔で答えた。ナッツもその言葉に頷きながら「決勝・・・苦しい戦いになるかもしれないな・・・」と呟いた。そしてその言葉通り、さくら達は今までの試合とは比べ物にならない程の苦戦を強いられる事となった。

決勝の相手は交代選手をフルに使用し、スタミナは充分であった。

しかもサンクルミエールのキーともいえるさくらに対しては2人マーク、

りんにも1人だったが、執拗なマークで迫ってきた。それまでのパスを使えなくなった香織は他の選手にパスを出してもすぐに奪われ、攻撃を許してしまい、前半が終了した時には2-0しかも後半さらに1点を追加され、ピンチに追い込まれてしまった。

だがサンクルミエールの誰もが諦めかけたその時、「もしも・・・もしもここから逆転勝利を収めたら、私達は本当の意味での『雪辱』を

果たせる事になりますね」と笑顔で言った。その言葉に一瞬だれもがぼかんとしたが、夏の時の事をすぐに思い出し、全員に活力が戻った。

それを見ていたかれんは心の中で（皆の顔が変わった・・・さくら・・・やはり貴方は凄いわ・・・）とさくらを称賛していた。

その後、反撃が始まり、後半終了ホイッスルが吹く5秒前にさくらの高度な高速パスをりんが決めて、同点に追いつく事に成功した。

しかし延長で決着がつかず、PK戦にて4-3で惜しくも敗北を喫してしまった。最後に外して泣いていた美穂をさくら達が慰めてい

た。

こうして大会は終了し、サンクルミエールは準優勝に終わった。しかし誰もがさくら達を称賛し、大会にてさくらはMVP・得点王・アシスト王のトリプルを成し遂げた。その光景にのぞみ・うらら・こまちはもちろんかれんも泣きながら拍手をしていた。

そして優勝した相手チームの選手の1人で得点ランキングがさくらりに次いで高かったブラジル出身のレナもさくらに対し

「ワタシハキョウ、アナタニカッタトハオモツテイナイワ。アナタガハイスクールニアガツタラ、モウイチドヤリマシヨウ!」と

高校でもう一度、戦いあう事を約束し、握手した。さくらがこの約束を守れたかどうかは今後いずれ明かされる事になる。

第35・5話・さくらとりんのフットサル大会（後書き）

この大会の後のエピソードから次回の話が始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9596e/>

カードキャプタープリキュア

2011年6月2日16時48分発行